

Symantec Enterprise Vault™

ユーティリティ

11.0

Symantec Enterprise Vault: ユーティリティ

本書で説明するソフトウェアは、使用許諾契約に基づいて提供され、その内容に同意する場合にのみ使用することができます。

最終更新日: 2014-03-14

法的通知と登録商標

Copyright © 2014 Symantec Corporation. All rights reserved.

Symantec、Symantec ロゴ、チェックマークロゴ、Enterprise Vault、Compliance Accelerator、および Discovery Accelerator は、Symantec Corporation またはその関連会社の米国およびその他の国々における商標または登録商標です。その他の会社名、製品名は各社の登録商標または商標です。

Symantec 社のこの製品には、Symantec 社が他社への帰属を示す必要がある他社ソフトウェア（「他社プログラム」）が含まれる場合があります。一部の他社プログラムはオープンソースまたは無償ソフトウェアライセンスの下で利用できます。ソフトウェアに付属している使用許諾契約は、それらのオープンソースまたは無償ソフトウェアライセンスで規定されている権利または義務を変更するものではありません。他社プログラムについて詳しくは Symantec 社の製品に付属している Third Party Software ファイルを参照してください。

本書に記載する製品は、使用、コピー、頒布、逆コンパイルおよびリバース・エンジニアリングを制限するライセンスに基づいて頒布されています。Symantec Corporation からの書面による許可なく本書を複製することはできません。

Symantec Corporation が提供する技術文書は Symantec Corporation の著作物であり、Symantec Corporation が保有するものです。保証の免責: 技術文書は現状有姿で提供され、Symantec Corporation はその正確性や使用について何ら保証いたしません。技術文書またはこれに記載される情報はお客様の責任にてご使用ください。本書には、技術的な誤りやその他不正確点を含んでいる可能性があります。Symantec は事前の通知なく本書を変更する権利を留保します。

本ソフトウェアは、FAR 12.212 の規定によって商業用コンピュータソフトウェアと見なされ、FAR 52.227-19「Commercial Computer Software - Restricted Rights」、DFARS 227.7202「Rights in Commercial Computer Software or Commercial Computer Software Documentation」、その他の後継規制の規定により制限された権利の対象となります。米国政府による本ソフトウェアの使用、修正、複製のリリース、実演、表示または開示は、本使用許諾契約の条項に従ってのみ行われるものとなります。

弊社製品に関して、当資料で明示的に禁止、あるいは否定されていない利用形態およびシステム構成などについて、これを包括的かつ暗黙的に保証するものではありません。また、弊社製品が稼動するシステムの整合性や処理性能に関しても、これを暗黙的に保証するものではありません。

これらの保証がない状況で、弊社製品の導入、稼動、展開した結果として直接的、あるいは間接的に発生した損害等についてこれが補償されることはありません。製品の導入、稼動、展開にあたっては、お客様の利用目的に合致することを事前に十分に検証および確認いただく前提で、計画および準備をお願いします。

Symantec Corporation
350 Ellis Street, Mountain View, CA 94043

<http://www.symantec.com>

目次

第 1 章	本書について	11
	Enterprise Vault ユーティリティについて	11
	管理者権限での Enterprise Vault コマンドラインユーティリティの実 行	13
	Enterprise Vault についての詳しい情報の入手先	14
	Symantec Enterprise サポート Web サイトの [How To] 記事	15
	Enterprise Vault トレーニングモジュール	16
	本書へのご意見	16
第 2 章	ArchivePoints	17
	ArchivePoints について	17
	ArchivePoints の構文	17
	ArchivePoints の例	21
第 3 章	Audit Viewer	22
	Audit Viewer について	22
	Audit Viewer による監査データのレポートの実行	22
	Audit Viewer の検索結果のコピー	24
	Audit Viewer の設定の変更	24
第 4 章	Backtrace	25
	Backtrace について	25
	バックトレースのデフォルト設定	26
	バックトレースのレジストリ値	26
	バックトレースのファイル名の形式	28
	バックトレースの例	28
第 5 章	CenteraPing	31
	CenteraPing について	31
	CenteraPing の構文	31

第 6 章	Domino Archive Exporter	33
	Domino Archive Exporter について	33
	Domino Archive Exporter の構文	33
	Domino Archive Exporter の例	35
第 7 章	Domino Profile Document Tool	36
	Domino Profile Document Tool について	36
	Domino Profile Document Tool の構文	36
	Domino Profile Document Tool の例	37
第 8 章	Domino の保持計画ツール	38
	Domino の保持計画について	38
	Domino の保持計画ツールの権限	39
	Domino の保持計画の定義	39
	EVDominoRetentionPlans.exe の構文	42
第 9 章	DTrace	44
	DTrace について	44
	コマンドラインからの DTrace の実行	45
	管理コンソールからの DTrace の実行	48
	DTrace ログについて	49
	DTrace のトラブルシューティング	49
第 10 章	EVDominoExchangeMigration ツール	51
	EVDominoExchangeMigration ツールについて	51
	EVDominoExchangeMigration ツールでのクライアントの必要条件	52
	Windows Server ファイアウォールの例外リストへの EVDominoExchangeMigration ツールの追加	52
	EVDominoExchangeMigration ツールと Binary Tree	53
	Quest Notes Migrator for Exchange と EVDominoExchangeMigration ツールの使用	53
	EVDominoExchangeMigration ツールでの他の移行ソフトウェアの必要 条件	54
	EVDominoExchangeMigration ツールの実行	55
	EVDominoExchangeMigration ツールの構文	55
	EVDominoExchangeMigration ツールのログファイル	56
	EVDominoExchangeMigration ツールの制限事項	57

第 11 章	EVDuplicateCleaner	58
	EVDuplicateCleaner について	58
	EVDuplicateCleaner の設定	58
	EVDuplicateCleaner の実行	60
	EVDuplicateCleaner を実行した後の破損したショートカットの修正	61
第 12 章	EVEARemovalUtility	63
	EVEARemovalUtility について	63
	EVEARemovalUtility の前提条件	64
	EVEARemovalUtility の実行	65
	EVEARemovalUtility の構文	65
	EVEARemovalUtility の出力とログファイルの形式	66
	EVEARemovalUtility の使い方の例	68
	EVEARemovalUtility の例: 単一ファイルの処理	68
	EVEARemovalUtility の例: フォルダとそのサブフォルダの処理	68
第 13 章	EVFSASetRightsAndPermissions	70
	EVFSASetRightsAndPermissions について	70
	EVFSASetRightsAndPermissions の実行	71
第 14 章	EVrights	72
	EVrights について	72
	EVrights の構文	72
第 15 章	EVservice	75
	EVservice について	75
	EVservice の前提条件	76
	EVservice のインストール	76
	EVservice の構文	76
	EVservice の一覧ファイルの形式	77
第 16 章	EVSPShortcutManager	79
	EVSPShortcutManager について	79
	EVSPShortcutManager を実行するために必要な権限	80
	EVSPShortcutManager の構文	80
	EVSPShortcutManager の例	82

第 17 章	EVSVR	83
	EVSVR について	83
	EVSVR のチェックポイント機能について	85
	CIFS パーティションと NTF パーティションでの EVSVR 操作の実行 に関する注意事項	86
	EVSVR の起動	87
	EVSVR コマンド	87
	EVSVR アプリケーションの状態	89
	EVSVR 操作ファイルの作成	89
	チェックポイントを有効にした EVSVR 操作ファイルの編集	95
	EVSVR 操作の実行	96
	EVSVR 操作の設定について	96
	EVSVR でのレポート操作	97
	EVSVR での確認操作	104
	EVSVR での修復操作	110
	EVSVR 出力ログファイルの表示	123
	EVSVR ログファイルのチェックポイント情報について	124
	EVSVR による特定の修復操作実行時のログファイルの追加情 報	125
	対話モードでの EVSVR の実行	126
	DumpSaveset コマンド	127
	DumpSISPart コマンド	131
	ExtractSavesets コマンド	133
	ListSavesetLocations コマンド	136
	EVSVR ログファイルのメッセージの確認に関する注意事項	137
	CAB コレクションを処理する場合の EVSVR パフォーマンスの向上	137
第 18 章	FSARunNow	140
	FSARunNow について	140
	FSARunNow の実行	141
	FSARunNow の構文	141
	FSARunNow の例	144
第 19 章	FSAUndelete	145
	FSAUndelete について	145
	FSAUndelete の実行	146
	FSAUndelete の構文	147
	FSAUndelete の例	148

第 20 章	FSAUtility	149
	FSAUtility について	149
	FSAUtility の実行	150
	EMC Celerra/VNX プレースホルダと FSAUtility の使用について	151
	Celerra/VNX のプレースホルダを識別するために FSAUtility が使用 する API 呼び出しの設定	152
	FSAUtility.exe.config ファイル設定の例	153
	FSAUtility オプション	156
	アーカイブポイントの再作成	156
	プレースホルダの再作成	157
	プレースホルダと対応するファイルの移動	159
	プレースホルダの移行	161
	孤立したプレースホルダの削除	166
	アーカイブファイルの復元	167
	プレースホルダに対応するファイルの呼び戻し	169
第 21 章	NTFS to Centera Migration	172
	NTFS to Centera Migration について	172
	NTFS to Centera Migration を使った移行ジョブの管理	172
	NTFS to Centera Migration を使った移行ジョブの作成	174
	NTFS to Centera Migration を使ったアクティブなジョブの削除	176
	NTFS to Centera Migration を使った移行後の移行元のファイルの削 除	177
	NTFS to Centera Migration のログファイル	177
第 22 章	OWA 2003 Control Files Tool	179
	OWA 2003 Control Files Tool について	179
	OWA 2003 Control Files Tool の実行	180
	OWA 2003 Control Files Tool の構文	180
	OWA 2003 Control Files Tool の例	180
第 23 章	Permission Browser	182
	Permission Browser について	182
	Permission Browser の実行	182
第 24 章	Policy Manager (EVPM)	183
	Policy Manager について	183
	Policy Manager の構文	184
	Policy Manager 初期設定ファイルの Unicode ファイルとしての保存	185
	Policy Manager 初期設定ファイルの構文	185

Policy Manager 初期設定ファイルのセクションとキー名	186
Policy Manager 初期設定ファイルの [Directory] セクション	187
Policy Manager 初期設定ファイルの [Archive] セクション	188
Policy Manager 初期設定ファイルの [ArchivePermissions] セクシヨ ン	190
Policy Manager 初期設定ファイルの [Filter] セクション	191
Policy Manager 初期設定ファイルの [Mailbox] セクション	197
Policy Manager 初期設定ファイルの [Folder] セクション	200
Policy Manager 初期設定ファイルの [PublicFolder] セクション	205
Policy Manager 初期設定ファイルの [PSTdefaults] セクション	207
Policy Manager 初期設定ファイルの [PST] セクション	212
Policy Manager 初期設定ファイルの [PSTcheckpoint] セクシヨ ン	218
Policy Manager 初期設定ファイルの [NSFDefaults] セクション	219
Policy Manager 初期設定ファイルの [NSF] セクション	224
Policy Manager 初期設定ファイルの [NSFCheckPoint] セクシヨ ン	229
Policy Manager 初期設定ファイルの例	231
Policy Manager 初期設定ファイルの例 1	231
Policy Manager 初期設定ファイルの例 2	231
Policy Manager 初期設定ファイルの例 3	232
Policy Manager 初期設定ファイルの例 4: PST 移行	233
Policy Manager 初期設定ファイルの例 5: NSF 移行	234
Policy Manager 初期設定ファイルの例 6: フォルダの権限	235
プロビジョニング API による Policy Manager スクリプトの実行につい て	237
Policy Manager スクリプト用のプロビジョニング API のスクリプトのプ ロパティ	237
Policy Manager スクリプト用のプロビジョニング API の詳細設定 2 3 9	
Policy Manager スクリプト用のプロビジョニング API のインターフェー スメソッド	240
Policy Manager スクリプト用のプロビジョニング API のエラー処 理	242
第 25 章 ResetEVClient	245
ResetEVClient について	245
ResetEVClient の構文	246
第 26 章 Vault Store Usage Reporter	247
Vault Store Usage Reporter について	247
Vault Store Usage Reporter の起動	247

Vault Store Usage Reporter のショートカットリンクの設定	248
Vault Store Usage Reporter によって表示される使用状況の概略について	249
IIS 認証方法が Vault Store Usage Reporter のために正しく設定されていることの確認	250
索引	251

本書について

この章では以下の項目について説明しています。

- [Enterprise Vault ユーティリティについて](#)
- 管理者権限での [Enterprise Vault コマンドラインユーティリティの実行](#)
- [Enterprise Vault についての詳しい情報の入手先](#)
- [本書へのご意見](#)

Enterprise Vault ユーティリティについて

Enterprise Vault は、Enterprise Vault のパフォーマンスのテストとログ記録や、スクリプトによる共通タスクの実行などの機能を持つさまざまなユーティリティを提供します。

[表 1-1](#) には、Enterprise Vault をインストールすることによって利用可能となるユーティリティの一覧を示します。

表 1-1 利用可能な Enterprise Vault ユーティリティ

ユーティリティ	説明
ArchivePoints	「アーカイブポイント」(ファイルシステムアーカイブによって単一のアーカイブに格納される各フォルダ構造の最上位をマーク付けするポイント)を作成、管理します。
Audit Viewer	Enterprise Vault の監査データベースに記録されているデータの表示とフィルタ処理を行います。
Backtrace	Enterprise Vault プロセスからトレース情報を取得します。トレースは、問題が発生する直前に自動的に開始します。
CenteraPing	EMC Centera クラスタへの接続をテストします。

ユーティリティ	説明
Domino Archive Exporter	Enterprise Vault Domino アーカイブから Notes データベースにアイテムをエクスポートします。
Domino Profile Document Tool	Enterprise Vault により Domino メールボックスに追加されるプロファイル文書の内容を表示します。
Domino の保持計画ツール	Enterprise Vault に、作成する新しい保持計画をアップロードします。
DTrace	Enterprise Vault をデバッグモードで実行し、プロセスが実行している内容をコードレベルでログに記録します。
EVDominoExchangeMigration	Domino から Exchange Server に移行された Exchange Server メールボックスのショートカットを修正します。
EVDuplicateCleaner	重複する保存セットを検索して、削除します。
EVEARemovalUtility	ファイルから拡張属性を削除し、FSA がそのファイルのプレースホルダショートカットを作成できるようにします。
EVFSASetRightsAndPermissions	FSA エージェントがインストールされているファイルサーバー上の変更されたボルトサービスアカウントに必要なアクセス許可および権限を設定してください。
EVrights	コマンドラインまたはバッチファイルからユーザーとグループにユーザー権限を付与します。
EVservice	ローカルコンピュータまたはリモートコンピュータ上の Windows サービスと Enterprise Vault タスクの開始、停止を行います。
EVSVR	Enterprise Vault ストレージのレポート、確認、修復を行います。また、アーカイブ済みアイテムの保存セットの取得、EMC Centera データの Blob からの保存セットの抽出などの多数の特殊な処理も実行できます。
FSARunNow	指定されたファイルサーバーからのアーカイブの開始、権限の同期、以前のバージョンのアーカイブファイルの削除を行います。
FSAUndelete	指定のプレースホルダ、または指定のフォルダにあるすべてのプレースホルダのアーカイブファイルの永続的な削除をキャンセルします。

ユーティリティ	説明
FSAUtility	アーカイブポイントとプレースホルダの再作成、プレースホルダの移動や削除、アーカイブファイルの復元を行います。
NTFS to Centera Migration	コピー元の NTFS パーティションからコピー先の EMC Centera パーティションに Enterprise Vault 保存セットをコピーします。
OWA 2003 Control Files Tool	サポートする Exchange Server 2003 用 Microsoft Hotfix に Enterprise Vault の変更を適用します。
Permission Browser	Enterprise Vault ディレクトリデータベースにあるアーカイブとアーカイブフォルダのセキュリティ識別子 (SID) とアクセス権を表示します。
Policy Manager	使っている Enterprise Vault アーカイブポリシーに適合するように、スクリプトを使ってメールボックスとアーカイブの修正と制御を行います。また、Policy Manager を使って、PST ファイルの内容を Enterprise Vault に移行することもできます。
ResetEVClient	Microsoft Outlook への Enterprise Vault アドインで起きるさまざまな問題を解決します。
Vault Store Usage Reporter	現在のボルトストアの使用状況に関するレポートを取得します。

管理者権限での Enterprise Vault コマンドラインユーティリティの実行

このマニュアルで説明するユーティリティの多くは、コマンドラインユーティリティです。ユーザーアカウント制御 (UAC) が有効になっているコンピュータでは、常に管理者権限でこれらのユーティリティを実行する必要があります。Enterprise Vault ユーティリティはこのシステム特権を使わないと正しく実行されない場合があります。

管理者権限で Enterprise Vault コマンドラインユーティリティを実行する方法

- 1 コマンドプロンプトのショートカットを右クリックし、次に[管理者として実行]をクリックしてください。
- 2 実行するユーティリティを含むフォルダに移動します(たとえば、C:\¥Program Files (x86)\¥Enterprise Vault)。
- 3 コマンドを入力してユーティリティを起動します。

Enterprise Vault についての詳しい情報の入手先

表 1-2 に、Enterprise Vault に付属のマニュアルの一覧を示します。

表 1-2 Enterprise Vault マニュアルセット

マニュアル	コメント
Symantec Enterprise Vault ドキュメントライブラリ	<p>横断検索の可能な Windows のヘルプ (.chm) 形式の次のドキュメントがすべて含まれています。Acrobat (.pdf) 形式のマニュアルへのリンクも含まれています。</p> <p>このライブラリには、次を含む複数の操作でアクセスできます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Windows の [スタート] メニューで、[スタート]、[プログラム]、[Enterprise Vault]、[Documentation] の順にクリックします。 ■ Windows エクスプローラで Enterprise Vault インストール先フォルダ Documentation¥language のサブフォルダを参照し、EV_Help.chm ファイルを開きます。 ■ 管理コンソールの [ヘルプ] メニューで [Enterprise Vault のヘルプ] をクリックします。
導入/計画	Enterprise Vault の機能の概要を説明します。
Deployment Scanner	Enterprise Vault をインストールする前に前提条件ソフトウェアと設定を確認する方法を説明します。
インストール/設定	Enterprise Vault の設定に関する詳細な情報を提供します。
アップグレードの手順	既存の Enterprise Vault インストールを最新バージョンにアップグレードする方法を説明します。
Exchange Server アーカイブの設定	Microsoft Exchange ユーザーメールボックス、ジャーナルメールボックス、パブリックフォルダからアイテムをアーカイブする方法を説明します。
Domino サーバーアーカイブの設定	Domino メールファイルとジャーナルデータベースからアイテムをアーカイブする方法を説明します。
Symantec Enterprise Vault ファイルシステムアーカイブ (FSA) の設定	ネットワークファイルサーバーに保持されているファイルをアーカイブする方法を説明します。
IMAP の設定	Exchange アーカイブとインターネットメールアーカイブへの IMAP クライアントアクセスを設定する方法を説明します。
SharePoint Server アーカイブの設定	Microsoft SharePoint サーバーの内容をアーカイブする方法を説明します。

マニュアル	コメント
SMTP アーカイブの設定	他のメッセージングサーバーから SMTP メッセージをアーカイブする方法を説明します。
Symantec Enterprise Vault 管理者ガイド	日常的な管理、バックアップ、回復の手順を実行する方法を説明します。
レポート	Enterprise Vault サーバー、アーカイブ、アーカイブ済みアイテムの状態に関するレポートを提供する、Enterprise Vault Reporting の実装方法を説明します。FSA レポートを設定すると、ファイルサーバーとそのボリューム用の追加レポートを利用できます。
ユーティリティ	Enterprise Vault のツールとユーティリティについて説明します。
レジストリ値	レジストリ値を一覧表示している参照用の文書で、さまざまな側面から Enterprise Vault の動作を修正する場合に使うことができます。
管理コンソールのヘルプ	Enterprise Vault 管理コンソールのヘルプ。
Enterprise Vault Operations Manager のヘルプ	Enterprise Vault Operations Manager のヘルプ。

サポートされているデバイスとソフトウェアのバージョンの最新情報については、次のアドレスから利用可能な『Enterprise Vault Compatibility Charts』を参照してください。

<http://www.symantec.com/docs/TECH38537>

Symantec Enterprise サポート Web サイトの [How To] 記事

Enterprise Vault の管理マニュアルの情報のほとんどは、Symantec Enterprise サポート Web サイトの記事としてオンラインで入手できるようになりました。Google などの任意の一般的な検索エンジンを搭載するインターネットを検索することによって、または次の手順を実行することによってこれらの記事にアクセスできます。

Symantec Enterprise サポート Web サイトの [How To] 記事にアクセスする方法

- 1 Web ブラウザのアドレスバーに次を入力してから Enter キーを押します。
http://www.symantec.com/business/support/all_products.jsp
- 2 [Supported Products A-Z] ページで、[Enterprise Vault for Microsoft Exchange] など、目的の製品を選択します。
- 3 右の [Product Support] フィールドで、[How To] をクリックします。
- 4 [Knowledge Base Search] の使用によって語句を検索するか、または [Most Popular Subjects] のリストを参照します。

Enterprise Vault トレーニングモジュール

Enterprise Vault Tech Center (http://go.symantec.com/education_evtc) では、一般にご利用いただける無料の Enterprise Vault のトレーニングが提供されています。モジュールは定期的に追加され、現在次のモジュールが含まれています。

- インストール
- 設定
- 開始ウィザード
- Exchange 2010 アーカイブの準備
- Enterprise Vault に対する Exchange 2007 および Exchange 2010 権限の割り当て
- Enterprise Vault ファイルシステムアーカイブ

より高度なインストラクタ主導のトレーニング、仮想トレーニング、オンデマンドのクラスも利用できます。詳しくは次を参照してください。

http://go.symantec.com/education_enterprisevault

本書へのご意見

本書に関するご意見をお聞かせください。必要な情報は簡単に見つけられたでしょうか。また、わかりやすく書かれていたでしょうか。誤りや見落とし、または、マニュアルやヘルプの今後の改訂に役立つ点がありましたら、お知らせください。

ご意見をお送りいただく際は、次の情報を添えてください。

- マニュアルのタイトルとバージョン
- 対象となる項目 (該当する場合)
- お名前

ご意見は、evdocs@symantec.com 宛てに、またはご購入先にお送りください。このアドレスは製品マニュアルへのご意見のみを対象としています。

お客様のご意見をお待ちしております。

ArchivePoints

この章では以下の項目について説明しています。

- [ArchivePoints](#) について
- [ArchivePoints](#) の構文
- [ArchivePoints](#) の例

ArchivePoints について

ArchivePoints ユーティリティは、管理コンソールの代わりにの方法として、アーカイブポイントを作成および管理するための便利な方法です。アーカイブポイントは、ファイルシステムアーカイブが1つのアーカイブ内に保存するフォルダ構造の最上部にマーク付けします。**ArchivePoints** を使用して、アーカイブポイントを作成、一覧表示、削除し、それらの属性値を更新することができます。

ArchivePoints には自動有効化フォルダを作成するための `autoenable` オプションが含まれています。自動有効化フォルダを作成すると、アーカイブタスクは直下にある各サブフォルダのアーカイブポイントを作成します。自動有効化フォルダは、たとえば複数のユーザーのそれぞれに対して1つのサブフォルダを保持するフォルダがあるときに便利です。

メモ: アーカイブポイントを作成するときは、既存のアーカイブポイントを上書きしないよう注意してください。上書きされたアーカイブポイントがあると、アーカイブ済みのデータが複数のアーカイブにわたって分割されることがあります。

ArchivePoints の構文

次の形式の1つを使います。

- アーカイブポイントを作成する方法

```
ArchivePoints create archive_point_path_share_name
subfolders|nosubfolders [XML_template_file_path_name]
```

- アーカイブポイントの属性を更新する方法


```
ArchivePoints update archive_point_path_share_name
subfolders|nosubfolders XML_template_file_path_name
```
- 指定したネットワーク共有の下のすべてのアーカイブポイントを一覧表示する方法


```
ArchivePoints find archive_point_path_share_name
```
- アーカイブポイントの内容を表示する方法


```
ArchivePoints read archive_point_path_share_name
```
- アーカイブポイントを削除する方法


```
ArchivePoints delete archive_point_path_share_name
```
- 自動有効化フォルダを作成する方法


```
ArchivePoints autoenable autoenabling _folder_path on
```
- フォルダの自動有効化プロパティを無効にする方法


```
ArchivePoints autoenable autoenabling _folder_path off
[subfolderdelete]
```

パラメータについて次に説明します。

<code>archive_point_path_share_name</code>	コマンドを適用するネットワーク共有への UNC パスを指定します。パスに英数字以外の文字が含まれている場合はそのパスを引用符で囲みます。
<code>subfolders nosubfolders</code>	直下の各サブフォルダに対してアーカイブポイントを作成するかどうかを指定します。
<code>XML_template_file_path_name</code>	デフォルト値または既存の値を上書きするアーカイブポイント属性値の XML テンプレートファイルの絶対パスを指定します。
<code>autoenabling _folder_path</code>	自動有効化プロパティを有効または無効にしたいフォルダの絶対パス。
<code>subfolderdelete</code>	フォルダの自動有効化プロパティを無効にするときに直下の各サブフォルダからアーカイブポイントを削除します。

XML テンプレートファイルを指定する場合は、次の形式にする必要があります。

```
<archivePoint xmlns="urn:kvsplc-com:FileSystemFolderArchivePoint">
  <attribute>value</attribute>
  <attribute>value</attribute>
  <attribute>value</attribute>
```

```
...
</archivePoint>
```

各属性の行がアーカイブポイント属性と値を指定します。

次の点に注意してください。

- コンピュータでユーザーアカウント制御 (UAC) が有効である場合は、管理者権限でこのユーティリティを実行してください。
p.13 の「[管理者権限での Enterprise Vault コマンドラインユーティリティの実行](#)」を参照してください。
- アーカイブポイントを作成するときに属性が XML テンプレートファイルに含まれていない場合、ファイルシステムアーカイブタスクはその属性のデフォルト値を使います。
- アーカイブポイントを更新するときに属性が XML テンプレートファイルに含まれていない場合、ファイルシステムアーカイブタスクは既存の値を変更しません。
- 自動有効化フォルダを作成する場合、XML テンプレートファイルを使うことはできません。自動有効化フォルダに関連付けられたアーカイブポイントはデフォルトの属性値を使用して作成する必要があります。

表 2-1 は XML テンプレートファイルに含めることができる属性を一覧表示します。

表 2-1 ArchivePoints テンプレートファイルの属性

属性	説明	新しいアーカイブポイントのデフォルト値
name	このアーカイブポイントに関連付けられたアーカイブの名前を、指定された prefix がある場合はそれも含めて、指定します。	アーカイブポイントが存在するフォルダの名前。
description	必要な場合は、アーカイブの説明を提供します。説明は管理コンソールの[アーカイブ]>[ファイルシステム]のファイルシステムのアーカイブの一覧に表示されます。	なし。
owner	アーカイブ使用量に課金する場合に使うアカウントを指定します。	なし。
indexDisabled	アーカイブのファイルのインデックス付けを無効 (True) にするか、有効 (False) にするかどうかを指定します。	false

属性	説明	新しいアーカイブポイントのデフォルト値
indexingLevel	<p>brief または full のいずれかのインデックスレベルを指定します。</p> <p>brief は、ファイル名やアイテムの日付のようなアーカイブ済みアイテムのメタデータをインデックス付けしますが、内容はインデックス付けしません。[簡略]インデックスは[完全]インデックスよりも小さいですが、ユーザーはアーカイブ済みアイテムの内容を検索できません。</p> <p>[完全]は、アーカイブ済みアイテムのメタデータおよび内容をインデックス付けします。ユーザーはアイテムの内容を検索できます。</p>	管理コンソールの[サイトプロパティ]の[インデックス]タブの設定。
indexSnippetLength	プレビューの長さを文字で指定します。プレビューの長さは、インデックスレベルが [完全] のとき、Enterprise Vault が検索結果リストに示すテキストの量です。プレビューの長さは 128 または 1000 のいずれかです。プレビューの長さを増やすとインデックスのサイズが増加します。	管理コンソールの[サイトプロパティ]の[インデックス]タブの設定。
indexAttachmentSnippet	インデックスレベルが [完全] のとき Enterprise Vault が添付ファイルの内容のプレビューを作成するかどうかを指定します。値は true (はい) または false (いいえ) のいずれかとなります。これらのプレビューは Enterprise Vault のこのリリースでは表示できません。このオプションを有効にするとインデックスのサイズは増加します。	管理コンソールの[サイトプロパティ]の[インデックス]タブの設定。
deleteExpiredItems	保持期間の期限切れ後に、Enterprise Vault がアーカイブからアイテムを自動的に削除するかどうかを指定します。値は true (期限切れアイテムを削除する) または false (期限切れアイテムを削除しない) のいずれかとなります。	false
prefix	アーカイブ名を作成するために Enterprise Vault が name に付加する接頭辞を指定します。接頭辞は、[名前] を指定せず、[サブフォルダ] オプションを使って対象フォルダの直下にある各サブフォルダのアーカイブポイントを作成するのに役に立ちます。	なし。

たとえば、次のファイルはアーカイブポイントの属性値を設定します。

```
<archivePoint xmlns="urn:kvspic-com:FileSystemFolderArchivePoint">
  <name>Newton archive</name>
  <description>Isaac Newton's User Archive</description>
  <owner>astronomy¥newtoni</owner>
  <indexDisabled>>false</indexDisabled>
  <indexingLevel>full</indexingLevel>
  <indexSnippetLength>1000</indexSnippetLength>
```

```
<indexAttachmentSnippet>false</indexAttachmentSnippet>  
<deleteExpiredItems>false</deleteExpiredItems>  
<prefix>User</prefix>  
</archivePoint>
```

ArchivePoints の例

次は ArchivePoints コマンドの例です。

- フォルダ `¥¥myserver¥users¥jones` にアーカイブポイントを作成する方法
`ArchivePoints create ¥¥myserver¥users¥jones nosubfolders`
- アーカイブポイントを、`¥¥myserver¥users¥` の各々の直下のサブフォルダに作成し、`archiveptfile.xml` という XML テンプレートファイルを使用してアーカイブポイント属性のデフォルト値を上書きする方法
`ArchivePoints create ¥¥myserver¥users subfolders "c:¥Program Files (x86)¥Enterprise Vault¥archiveptfile.xml"`
- 共有 `¥¥myserver¥users` のすべてのアーカイブポイントを一覧表示する方法
`ArchivePoints find ¥¥myserver¥users`
- フォルダ `¥¥myserver¥development` の直下にあるすべてのサブフォルダに対してアーカイブポイントを自動有効化する方法
`ArchivePoints autoenable ¥¥myserver¥development on`
- フォルダ `¥¥myserver¥development` の自動有効化プロパティを無効にして、直下にあるすべてのサブフォルダからアーカイブポイントを削除する方法
`ArchivePoints autoenable ¥¥myserver¥development off subfolderdelete`

Audit Viewer

この章では以下の項目について説明しています。

- [Audit Viewer](#) について
- [Audit Viewer](#) による監査データのレポートの実行
- [Audit Viewer](#) の検索結果のコピー
- [Audit Viewer](#) の設定の変更

Audit Viewer について

[Audit Viewer](#) を使うと、[Enterprise Vault](#) の監査データベースに記録されているデータを表示したり、フィルタ処理したりすることができます。このデータベースでは、アイテムをアーカイブしたり、アーカイブ済みアイテムを表示、復元したりする [Enterprise Vault](#) のアクティビティのレコードを保持できます。表示するデータを指定したり、データをソートしたり、データを [Windows](#) のクリップボードにコピーしたりすることもできます。

Audit Viewer による監査データのレポートの実行

このセクションの次の手順に従って [Audit Viewer](#) を開き、監査データベースにあるデータのレポートを生成します。

メモ: コンピュータでユーザーアカウント制御 (UAC) が有効である場合は、管理者権限でこのユーティリティを実行してください。

p.13 の「[管理者権限での Enterprise Vault コマンドラインユーティリティの実行](#)」を参照してください。

Audit Viewer を使って監査データを実行する方法

- 1 **Windows** エクスプローラで、**Enterprise Vault** プログラムフォルダ (たとえば、C:\Program Files (x86)\Enterprise Vault) を参照します。
- 2 **AuditViewer.exe** をダブルクリックします。
- 3 **Audit Viewer** ウィンドウで、表示するレコードの検索基準を入力するか、選択します。

次の表に検索条件について説明します。

User Name	必要なユーザーを domain\username の形式で指定します。
Archive	Enterprise Vault 管理コンソールを使ってアーカイブの ID を指定できます。必要なアーカイブを右クリックして、[プロパティ]をクリックします。[プロパティ]シートの[詳細]タブにアーカイブ ID が表示されます。
Category	検索する監査エントリのカテゴリを一覧から選択します。 Audit Viewer では、キャプチャしたデータに存在するカテゴリのみが一覧表示されます。
Subcategory	カテゴリを選択した後、一覧からサブカテゴリを選択します。 <ul style="list-style-type: none">■ [アイテム]を選択すると、カテゴリの概略情報が返されます■ カテゴリに[詳細]を選択すると、情報レコードに追加情報が保持されます■ [すべて]を選択すると、選択したカテゴリの概略と詳細レコードの両方が返されます
Date (From), Date (To)	監査レコードの検索を行う日付範囲と時間範囲を定義します。
Information contains	監査レコードを検索するためのキーワードを入力します。
Status	表示するレコードの状態を一覧から選択します。
Server	この検索の対象となる Enterprise Vault サーバーを選択します。
Audit ID	表示する監査レコードを表す数字の範囲を入力します。
Order By	Audit Viewer の結果の表示基準に使う属性と、昇順で一覧表示するか、降順で一覧表示するかを選択します。
Maximum Results	検索で見つかったすべての結果を表示するか、結果の一部を表示するかを選択します。

- 4 [検索]をクリックしてレポートを生成します。

Audit Viewer の検索結果のコピー

Audit Viewer によって、検索基準に一致するレコードが[Search Results]ウィンドウに表示されます。

列のエントリに従ってレコードをソートするには、その列見出しをクリックします。

このウィンドウの内容を表計算アプリケーションなどの他のアプリケーションにコピーできます。

Audit Viewer の検索結果をコピーする方法

- 1 [Search Results]ウィンドウで、コピーするレコードをハイライトします。
- 2 レコードを右クリックして、[コピー]をクリックします。
Ctrl+AとCtrl+Cを押して、すべての検索結果をクリップボードにコピーすることもできます。
- 3 コピー先の文書にレコードを貼り付けます。

Audit Viewer の設定の変更

検索する監査データベースを変更できます。また、Audit Viewer には[Search Results]ウィンドウで選択したフィールドを表示または非表示にするオプションがあります。

Audit Viewer の設定を変更する方法

- 1 Audit Viewer のメインウィンドウで、[設定値]をクリックします。
- 2 [設定値]ウィンドウで、検索する監査データベースを変更します。また、戻り値フィールドのチェックマークを付けたりはずしたりして、表示または非表示を指定できます。

Backtrace

この章では以下の項目について説明しています。

- [Backtrace](#) について
- バックトレースのデフォルト設定
- バックトレースのレジストリ値
- バックトレースのファイル名の形式
- バックトレースの例

Backtrace について

注意: **Backtrace** ユーティリティは、使うと **Enterprise Vault** のパフォーマンスに影響する可能性があるため、必要な場合にのみ有効化する必要があります。

Backtrace を使って、**Enterprise Vault** プロセスからトレース情報のログファイルを取得することができます。DTrace ユーティリティとは異なり、**Backtrace** は次を行います。

- 問題が発生する前の期間からのトレース情報を提供します。
- 単一プロセスからのトレース情報を含むログファイルを生成します。

Backtrace は、以前に定義済みのトリガイベントが起きるまで、メモリにトレース情報を保持します。その後、**Backtrace** は一定限度の DTrace 情報をログファイルに書き込みます。ログファイルには、トリガイベントが起きる前後の DTrace 情報が含まれます。

Backtrace を有効にすると、デフォルトで **Enterprise Vault** のすべてのエラーと警告のログが作成されます。必要に応じてこの動作を変更できます。**Backtrace** をトリガする特定のイベントを指定できます。また、明示的に除外したものを除くすべてのイベントについて、**Backtrace** のログファイルを作成することもできます。

メモ: Backtrace は、ディスクの空き領域が 100 MB 未満の場合はログファイルを作成できません。この設定は変更できません。

Backtrace のレジストリ値を編集することによって Backtrace を制御します。

DTrace を実行した場合、DTrace の実行中は Backtrace は自動的に無効になります。

バックトレースのデフォルト設定

バックトレースのデフォルト設定は次のとおりです。

- バックトレースは無効です。
- バックトレースは、Enterprise Vault Reports フォルダの Backtrace サブフォルダのフォルダにログファイルを書き込みます。
バックトレースは新しいサブフォルダを毎日作成します。たとえば、2012 年 11 月 16 日には、デフォルトのフォルダのパスは次のようになります。
C:\Program Files (x86)\Enterprise Vault\Reports\Backtrace\20121116\
- バックトレースは、Enterprise Vault プロセスごとに、毎日、同一イベントのログファイルを最大で 5 つ作成します。プロセスが再起動されるとカウンタはリセットされます。
- 1 日に生成できるすべてのバックトレースログファイルの最大合計サイズは 200 MB です。
- バックトレースは 7 日間ログファイルを保持した後、自動的に削除します。
- バックトレースを有効にすると、すべての警告とエラーがバックトレースによるログファイルの作成をトリガします。

バックトレースのレジストリ値

Enterprise Vault は自動的に各 Enterprise Vault サーバーにバックトレースのレジストリ値を作成します。デフォルトでは、バックトレースは無効になっています。バックトレースを有効にする場合は、トレースが必要なサーバーのレジストリを編集する必要があります。

バックトレースのレジストリ値は、各 Enterprise Vault サーバーの次の場所にあります。

```
HKEY_LOCAL_MACHINE
  SOFTWARE
    Wow6432Node
      KVS
        Enterprise Vault
          Backtrace
```

表 4-1 では、バックトレースのレジストリ値について説明します。

表 4-1 バックトレースのレジストリ値

レジストリ値	説明
有効化	バックトレースが有効化(1)、または無効化(0、デフォルト設定)されるかどうかを制御します。バックトレースは有効化するとパフォーマンスに影響する可能性があるため、Enterprise Vault に関する問題が発生した場合にのみ有効化する必要があります。 サーバーの各 Enterprise Vault プロセスは、バックトレースの情報をメモリに保持します。トリガイベントが起きると、バックトレースはログファイルにトレース情報を書き込みます。
Exclude	バックトレースをトリガしてはならないイベントのセミコロン区切りのリストを提供します。例: 3310;3230;2776。このリストを有効にするには、[RuleType]を Exclude に設定します。
Include	バックトレースをトリガする必要があるイベントのセミコロン区切りのリストを提供します。例: 3310;3230;2776。このリストを有効にするには、[RuleType]を Include に設定します。
LogFileKeepDays	バックトレースのログファイルを保持する日数を指定します。 Enterprise Vault は自動的に古いバックトレースのログファイルを削除します。バックトレースは、管理サービスの開始時とその後の毎正時に、削除するログファイルを調べます。
LogFolderPath	バックトレースのログファイルの場所を指定します。 [LogFolderPath]に値を指定しないと、バックトレースは Enterprise Vault の[Reports]フォルダの[Backtrace]サブフォルダにログファイルを格納します。[LogFolderPath]を編集して別のパスを設定できます。
MaxEventsOfEachTypePerDay	各イベントに対して毎日作成するログファイルの最大数を指定します。デフォルトは 5 です。
MaxEventsOfEachTypePerDayAcrossProcesses	すべての処理の各イベントのために毎日作成するログファイルの最大数を指定します。デフォルトは 40 です。
MaxSizeOfAllLogsPerDayMB	1日に生成できるすべてのバックトレースのログファイルの最大合計サイズを指定します。デフォルトは 200 (MB) です。
RuleType	バックトレースのトリガ方法を制御します。 [RuleType]が Exclude (デフォルト設定)に設定されている場合は、Exclude レジストリ値に列記されているものを除き、すべてのエラーイベントと警告イベントがバックトレースをトリガします。 [RuleType]が Include に設定されている場合は、Include レジストリ値で指定されているすべてのイベントがバックトレースをトリガします。他のイベントはバックトレースをトリガしません。

バックトレースのレジストリ値について詳しくは、『レジストリ値』の「バックトレース」の章を参照してください。

バックトレースのファイル名の形式

バックトレースのログファイルの名前は、下線文字で区切られた以下の項目で構成されません。

- 名前は「EV」で始まります。
- `YYYYMMDD_HHMMSSmmm` の形式のローカル日時
- サーバー名。プロセスが実行しているサーバーの名前。
- プロセス名。トレースされるプロセスの名前。
- プロセス ID。トレースされるプロセスの ID。
- イベント ID。名前には、ファイルに含まれる最大 5 個の最新イベントの ID が含まれます。

次の例では、管理サービスからのエラーイベント **8938** によってサーバー「MYSERVER」でバックトレースがトリガされたときのログファイルの名前を示します。トリガイイベント **8938** の後にエラーイベント **8942** があります。

```
EV20110908_095919784_MYSERVER_AdminService(2872)_8938E_8942E.log
```

バックトレースは、デフォルトでは、Enterprise Vault の [Reports] フォルダの [Backtrace] サブフォルダにログファイルを格納します。[LogFolderPath] レジストリ値を編集し、別の場所を指定できます。

バックトレースの例

表 4-2 では、[RuleType] がデフォルトの「Exclude」に設定されているときのバックトレースのレジストリ値の例を示します。

表 4-2 [RuleType] が「Exclude」に設定されているときのサンプル値

レジストリ値	設定	コメント
Enabled	1	バックトレースは有効です。バックトレースは [RuleType] の設定に従ってトリガされます。
RuleType	Exclude	[RuleType] に対する「Exclude」のデフォルトです。[Exclude] 値の一覧で示されているものを除くすべての警告とエラーがバックトレースをトリガします。

レジストリ値	設定	コメント
Exclude	None	デフォルトでは[Exclude]の値はありません。すべてのエラーと警告がバックトレースをトリガします。
Include	3310;3230;2776	[RuleType]が「Include」に設定されているので、バックトレースは[Include]の設定を無視します。
LogFileKeepDays	7	デフォルトではログファイルは 7 日間保持されます。
LogFolderPath	None	[LogFolderPath]のデフォルトは値なしです。バックトレースは、デフォルトでは、[Enterprise Vault Reports]フォルダの[Backtrace]サブフォルダにログファイルを書き込みます。
MaxEventsOfEachTypePerDay	5	[MaxEventsOfEachTypePerDay]のデフォルトは 5 です。バックトレースは、プロセスごとに、毎日、同一イベントのログファイルを最大で 5 つ作成します。プロセスが再起動されるとカウンタはリセットされます。

表 4-3 では、[RuleType]が「Include」に設定されているときのバックトレースのレジストリ値の例を示します。

表 4-3 [RuleType]が「Include」に設定されているときのサンプル値

レジストリ値	設定	コメント
Enabled	1	バックトレースは有効です。バックトレースは [RuleType]の設定に従ってトリガされます。
RuleType	Include	[Include]の一覧で示されている各イベントがバックトレースをトリガします。
Exclude	None	[RuleType]が「Include」に設定されているので、バックトレースは[Exclude]の設定を無視します。すべてのエラーと警告がバックトレースをトリガします。
Include	3310;3230;2776	[RuleType]が「Include」に設定されているときにバックトレースをトリガするイベントのセミコロン区切りの一覧です。他のイベントはバックトレースをトリガしません。
LogFileKeepDays	7	デフォルトではログファイルは 7 日間保持されます。

レジストリ値	設定	コメント
LogFolderPath	None	[LogFolderPath]のデフォルトは値なしです。バックトレースは、デフォルトでは、[Enterprise Vault Reports]フォルダの[Backtrace]サブフォルダにログファイルを書き込みます。
MaxEventsOfEachTypePerDay	5	[MaxEventsOfEachTypePerDay]のデフォルトは5です。バックトレースは、プロセスごとに、毎日、同一イベントのログファイルを最大で5つ作成します。プロセスが再起動されるとカウンタはリセットされます。

CenteraPing

この章では以下の項目について説明しています。

- [CenteraPing について](#)
- [CenteraPing の構文](#)

CenteraPing について

CenteraPing を使うと、EMC Centera™ クラスタへの接続をテストできます。

CenteraPing の構文

```
CenteraPing -address IP_address [-version|-help]
```

IP_address は診断するクラスタ内にあるアクセスノードのいずれかのアドレスです。

CenteraPing は指定された IP アドレスへの接続を試行します。接続が成功すると、CenteraPing は次のメッセージを返します。

```
IP_address is accessible
```

失敗した場合、次のメッセージを返します。

```
IP_address Open Error: -10020 No connection with pool
```

-help オプションを指定すると、これらの情報に加えて、ユーティリティのバージョン番号と書式が返されます。-version オプションを使うと、書式に加えてバージョン番号が返されます。

メモ: コンピュータでユーザーアカウント制御 (UAC) が有効である場合は、管理者権限でこのユーティリティを実行してください。

p.13 の「[管理者権限での Enterprise Vault コマンドラインユーティリティの実行](#)」を参照してください。

Domino Archive Exporter

この章では以下の項目について説明しています。

- [Domino Archive Exporter](#) について
- [Domino Archive Exporter](#) の構文
- [Domino Archive Exporter](#) の例

Domino Archive Exporter について

Domino Archive Exporter は Enterprise Vault Domino アーカイブから Notes データベースにアイテムをエクスポートできるコマンドラインユーティリティです。

アイテムのエクスポートでは次の内容を選択できます。

- 指定したローカルまたはリモートの Notes データベースへのエクスポート
- 指定した保持カテゴリを使ったエクスポート
- 指定した日付範囲内にアーカイブされたアイテムのエクスポート

エクスポート処理は **Ctrl+C** を押すといつでも停止できます。

Domino Archive Exporter の構文

```
EVDominoExporter.exe /A archive /O destination database/I ID file /P  
ID file password [/T database template] [/R retention category] [/SD  
start date] [/ED end date]
```

表 6-1 に、利用可能なパラメータを示します。

表 6-1 EVDominoExporter.exe のパラメータ

パラメータ	説明
/A	アイテムのエクスポート元である Enterprise Vault Domino アーカイブを識別します。
/ED	アーカイブするアイテムの範囲の終了日付と時刻を指定します。形式は、 <i>dd /mm /yyyyhh :mm :ss</i> です。時刻を省略した場合、使われるデフォルトの時刻は 00:00:00 です。
/I	Notes の認証 ID ファイルへの絶対パスを指定します。
/O	<p>開くまたは作成する Notes データベースを指定します。ローカルのデータベースを開いたり作成したりする場合は、次の例のように指定します。</p> <pre data-bbox="561 652 1223 678">/O "c:\Program Files (x86)\Enterprise Vault\dest.nsf"</pre> <p>データベースファイルへのパスを省略すると、Domino Archive Exporter は Notes クライアントの <i>\Data</i> フォルダにファイルを格納します。指定したディレクトリが存在しない場合は、このユーティリティによって作成されます。</p> <p>Domino サーバーでリモートデータベースを開いたり作成したりするには、次の例のように指定します。</p> <pre data-bbox="561 887 1223 913">/O Server1/Sales/ACME!!Restore\dest.nsf</pre> <p>このパラメータは、サーバー <i>Server1/Sales/ACME</i> の <i>\Data\Restore</i> フォルダにあるデータベース <i>dest.nsf</i> にアイテムをエクスポートするように Domino Archive Exporter に指示しています。</p>
/P	Notes の認証 ID ファイルに関連付けられたパスワードを指定します。
/R	保持カテゴリごとにアーカイブの内容をフィルタ処理します。
/SD	アーカイブするアイテムの範囲の開始日付と時刻を指定します。形式は、 <i>dd /mm /yyyyhh :mm :ss</i> です。時刻を省略した場合、使われるデフォルトの時刻は 00:00:00 です。
/T	<p>Notes データベースを作成する場合に使うメールのテンプレートを指定します。たとえば、ローカルのテンプレートファイルを使うには次のように入力します。</p> <pre data-bbox="561 1373 1223 1399">/T mailbox.ntf</pre> <p>Domino サーバーでテンプレートファイルを使うには、次の例のように指定します。</p> <pre data-bbox="561 1486 1223 1512">/T Server1/Sales/ACME!!mailjrn.ntf</pre> <p>/T パラメータを省略した場合、Domino Archive Exporter はルーターのメールテンプレート (<i>mailbox.ntf</i>) を使います。</p>

メモ: コンピュータでユーザーアカウント制御 (UAC) が有効である場合は、管理者権限でこのユーティリティを実行してください。

p.13 の「[管理者権限での Enterprise Vault コマンドラインユーティリティの実行](#)」を参照してください。

Domino Archive Exporter の例

別の例については、FrameMaker のソースを参照してください。次のコマンドでは Notes 認証 ID ファイル local_admin.id と関連付けされたパスワード W3lcome を使って、アーカイブ L14 をデータベース sample.nsf にエクスポートします。保持カテゴリが Business としてマーク付けされており、2005 年 12 月 16 日午前 10 時から 2005 年 12 月 17 日午後 4 時 56 分までにアーカイブされたアイテムのみがエクスポートされます。

```
EVDominoExporter.exe /A L14 /O sample.nsf  
/I "d:¥local_admin.id" /P W3lcome /R Business  
/SD "16/12/2005 10:00:00" /ED "17/12/2005 16:56:00"
```

Domino Profile Document Tool

この章では以下の項目について説明しています。

- [Domino Profile Document Tool について](#)
- [Domino Profile Document Tool の構文](#)
- [Domino Profile Document Tool の例](#)

Domino Profile Document Tool について

このツールを使うと、Enterprise Vault により Domino メールボックスに追加されるプロフィール文書の内容を表示できます。破損している可能性があるプロフィール文書は、このツールを使って削除することもできます。

Domino Profile Document Tool の構文

```
EvLotusDominoProfileDocTool.exe serverdatabaseidpassword  
<zap|view|clearlist>
```

パラメータについては次のとおりです。

<i>server</i>	適切な Notes データベースが存在するサーバーを指定します。
<i>database</i>	目的のメールボックス用の Notes データベースを指定します。
<i>id</i>	Notes の認証 ID ファイルの場所を、¥Data フォルダへの相対パスで指定します。
<i>password</i>	Notes の認証 ID ファイルに関連付けされたパスワードを指定します。

zap	指定したプロファイル文書を削除します。
view	指定したプロファイル文書の内容を表示します。
clearblacklist	Enterprise Vault によってブラックリストに入れられたアイテムのリストを消去します。これらのアイテムはアーカイブされていますが、そのメモの概略バッファがいっぱいのため、アーカイブタスクで元のメモは修正できません。このリストを消去すると、アーカイブタスクで再度アイテムがアーカイブされます。この時点で修正できないアイテムは再度ブラックリストに入れられます。

メモ: コンピュータでユーザーアカウント制御 (UAC) が有効である場合は、管理者権限でこのユーティリティを実行してください。

p.13 の「[管理者権限での Enterprise Vault コマンドラインユーティリティの実行](#)」を参照してください。

Domino Profile Document Tool の例

Domino Profile Document Tool の実行例を次に示します。

- 次のコマンドは、データベース mdavis.nsf のプロファイル文書の内容を表示します。**Notes** の認証 ID ファイルは admin.id であり、関連付けられたパスワードは W3lcome です。

```
EvLotusDominoProfileDocTool.exe DomServer1/EU/Symantec  
mail¥mdavis.nsf admin.id W3lcome view
```

- 次のコマンドは、データベース mdavis.nsf からプロファイル文書を削除します。

```
EvLotusDominoProfileDocTool.exe DomServer1/EU/Symantec  
mail¥mdavis.nsf admin.id W3lcome zap
```

Domino の保持計画ツール

この章では以下の項目について説明しています。

- [Domino の保持計画について](#)
- [Domino の保持計画ツールの権限](#)
- [Domino の保持計画の定義](#)
- [EVDominoRetentionPlans.exe の構文](#)

Domino の保持計画について

保持フォルダ機能を使うと、単一のフォルダまたはフォルダの階層をユーザーのメールファイルに自動的に作成できます。**Enterprise Vault** は、割り当てられたポリシーに従ってこれらのフォルダをアーカイブします。ユーザーが保持フォルダ階層内のフォルダを削除した場合、**Enterprise Vault** はそれらを自動的に再作成します。

保持フォルダとその保持カテゴリを保持計画に指定します。必要な数の保持計画を作成することができます。

Enterprise Vault プロビジョニンググループを使って保持計画をメールファイルに適用します。したがって、各ユーザーは、適切な保持カテゴリを含む異なる保持フォルダを持つことができます。また、特定の計画が定義されていないすべてのユーザーに対して **Enterprise Vault** によって適用されるデフォルトの保持計画を定義することもできます。

保持計画を定義する XML ファイルを作成し、保持計画をプロビジョニンググループに割り当てます。その後、EVDominoRetentionPlans.exe コマンドラインツールを使ってこの XML ファイルを **Enterprise Vault** にアップロードします。

保持計画を作成し、適用する手順

- 1 既存の保持計画がある場合は、EVDominoRetentionPlans.exe コマンドラインツールを使って **Enterprise Vault** から既存の計画の定義を抽出できます。計画は、単一の XML ファイルとして抽出します。
- 2 必要に応じて既存の XML ファイルを編集するか、新しい XML ファイルを作成して新しい保持計画を作成します。
- 3 EVDominoRetentionPlans.exe を使って XML ファイルを **Enterprise Vault** にロードします。**Enterprise Vault** は自動的に XML の有効性を確認し、無効なファイルは受け入れません。
- 4 **Enterprise Vault** はプロビジョニングタスクまたはメールボックスアーカイブタスクの次の実行時にこの計画を適用します。

Domino の保持計画ツールの権限

Domino のプロビジョニングタスクまたはメールボックスアーカイブタスクによって、ユーザーのメールファイルに保持フォルダが作成されます。

プロビジョニングタスクまたはメールボックスアーカイブタスクで使用される ID では、すべてのユーザーのコンピュータの実行制御リストに権限 [Access to current Database] が必要です。

EVDominoRetentionPlans.exe を実行するために使うアカウントには、ロールベースの **Enterprise Vault** 管理権限 [Domino 管理者] が必要です。

ロールベースの管理については『Symantec Enterprise Vault 管理者ガイド』を参照してください。

Domino の保持計画の定義

以前に保持計画 XML ファイルを作成した場合は、そのファイルを修正できます。必要に応じて、EVDominoRetentionPlans.exe ツールを使って既存の保持計画を **Enterprise Vault** から編集可能なファイルに抽出できます。

既存の保持計画を **Enterprise Vault** から抽出してファイル MyPlans.xml に保存するには、次のコマンドを実行します。

```
EVDominoRetentionPlans.exe -save MyPlans.xml
```

Enterprise Vault プログラムフォルダには、必要に応じてコピーして修正できるサンプル保持計画 XML ファイルがあります。ファイルは Example RetentionPlans.xml です。

このサンプルファイルでは、保持計画「All Users」と「Projects」が定義されています。

「All Users」保持計画では次が実行されます。

- 次のサブフォルダを含む保持フォルダ「Retention Folders」の作成
 - 保持カテゴリが「Business」の「Business Records」。
 - 保持カテゴリが「Customers」の「Customer Mails」。

「Projects」保持計画では次が実行されます。

- 次のサブフォルダを含む「Retention Folders」という保持フォルダの作成
 - 保持カテゴリが「Business」の「Business Records」。
 - 保持カテゴリが「Customers」の「Customer Mails」。
- ARCHIVENOW="true" が設定された「Retention Folders」の「Projects」。この計画では、「Projects」の下に次のフォルダも作成されます。
 - 'Project X'
 - 'Project Y'
- 保持フォルダ「Test」の削除

XML ファイルによって保持計画がプロビジョニンググループに次のように割り当てられます。

- 「Projects」保持計画はプロビジョニンググループ「Project members」に割り当てられます。

```
<?xml version="1.0"?>
<RETENTIONPLANCONFIG>

  <!-- Start of defining retention plans -->
  <RETENTIONPLANS>

    <!-- Start of 'All Users' retention plan -->
    <RETENTIONPLAN NAME="All Users">
      <FOLDER NAME="Retention Folders">
        <FOLDER NAME="Business Records" RETCAT="Business"/>
        <FOLDER NAME="Customer Mails" RETCAT="Customers"/>
      </FOLDER>
    </RETENTIONPLAN>
    <!-- End of 'All users' retention plan -->

    <!-- Start of 'Projects' retention plan -->
    <RETENTIONPLAN NAME="Projects">
      <FOLDER NAME="Retention Folders">
        <FOLDER NAME="Business Records" RETCAT="Business"/>
```

```
<FOLDER NAME="Customer Mails" RETCAT="Customers"/>
<FOLDER NAME="Projects" ARCHIVENOW="true">
  <FOLDER NAME="Project X" RETCAT="Project X"/>
  <FOLDER NAME="Project Y" RETCAT="Project Y"/>
</FOLDER>

<!-- Delete temporary folder 'Test' -->
<FOLDER NAME="Test" DELETE="true"/>
</FOLDER>
</RETENTIONPLAN>
<!-- End of 'Projects' retention plan -->

</RETENTIONPLANS>
<!-- End of defining retention plans -->

<!-- Assign retention plans to provisioning groups -->
<PROVISIONINGGROUPS>
  <DOMAIN NAME="ACME">
    <GROUP NAME="Project members" RETENTIONPLAN="Projects"/>
    <DEFAULT RETENTIONPLAN="All Users"/>
  </DOMAIN>
</PROVISIONINGGROUPS>
<!-- End of assigning retention plans to provisioning groups -->

</RETENTIONPLANCONFIG>
```

次の点に注意してください。

- 標準のフォルダまたはビューを指定するには、表示名ではなく、実際の名前を使います。次に例を示します。
 - **Inbox** フォルダを指定するには、(**\$Inbox**) を使います。
 - **Tasks** ビューを指定するには、(**\$ToDo**) を使います。
 - **Calendar** を指定するには、(**\$Calendar**) を使います。
- フォルダとビューの両方を定義するには、**FOLDER** 要素を使います。
- **FOLDER** 要素には、他の **FOLDER** 要素を含めることができます。この機能によって、フォルダまたはビューの階層を定義できます。
- 親フォルダの保持カテゴリは、特定のフォルダに対して明示的に上書きされない限り、そのすべてのサブフォルダに適用されます。

- ARCHIVENOW 属性が **true** に設定されている場合、フォルダ内に存在する文書は次のアーカイブタスクの実行時にアーカイブされます。
- ARCHIVENOW 属性が親フォルダに指定されている場合は、サブフォルダレベルで上書きされない限り、すべてのサブフォルダに自動的に適用されます。
- DELETE 属性が **True** に設定されている場合、Enterprise Vault は Enterprise Vault が最初に作成したフォルダとそのすべてのサブフォルダを削除します。DELETE 属性を指定すると、ユーザーが作成したサブフォルダを含むすべてのサブフォルダが削除されます。DELETE によってメモは削除されません。フォルダの内容は[All Documents]ビューで引き続き参照できます。
- 必要に応じて、ドメインごとにデフォルトの計画を指定できます。デフォルトの計画は、プロビジョニンググループに対する計画がない場合に適用されます。
- 保持計画では、同じフォルダまたはビューに対して複数のエントリを含めることはできません。
- プロビジョニンググループに含めることができる保持計画は 1 つのみです。
- DOMAIN セクションでは、プロビジョニンググループ名に重複がないようにする必要があります。
- 保持カテゴリが割り当てられていないフォルダ階層を定義できます。

EVDominoRetentionPlans.exe の構文

EVDominoRetentionPlans.exe は次のように使うことができます。

- 保持計画定義ファイルを Enterprise Vault にロードするには、次のように入力します。
`EVDominoRetentionPlans.exe -set pathToUploadXmlFile`
`pathToUploadXmlFile` は、Enterprise Vault にロードする保持計画定義が含まれているファイルのパスです。
この処理によって、現在の Enterprise Vault サイトにある既存のすべての保持計画が上書きされます。
新しい保持計画への変更は、イベント ID 41238、イベントカテゴリ「Domino Retention Plan Tool」で Enterprise Vault イベントログに表示されます。
- 現在の保持計画定義をファイルに保存するには、次のように入力します。
`EVDominoRetentionPlans.exe -save pathToDownloadXmlFile`
`pathToDownloadXmlFile` は、EVDominoRetentionPlans.exe で現在の保持計画のコピーを保存するファイルのパスです。
- Enterprise Vault からすべての保持計画を削除するには、次のように入力します。
`EVDominoRetentionPlans.exe -clear`

この処理によって、現在の **Enterprise Vault** サイトにあるすべての保持計画が削除されますが、保持フォルダに影響はありません。保持フォルダを削除する場合は、DELETE 属性が指定された保持計画を作成する必要があります。

メモ: コンピュータでユーザーアカウント制御 (UAC) が有効である場合は、管理者権限でこのユーティリティを実行してください。

p.13 の「[管理者権限での Enterprise Vault コマンドラインユーティリティの実行](#)」を参照してください。

DTrace

この章では以下の項目について説明しています。

- [DTrace](#) について
- [コマンドラインからの DTrace の実行](#)
- [管理コンソールからの DTrace の実行](#)
- [DTrace ログ](#) について
- [DTrace のトラブルシューティング](#)

DTrace について

Enterprise Vault のサービス、タスク、またはプロセスが失敗したときは、問題の原因を診断することが重要です。DTrace ユーティリティはプロセスの処理をコードレベルでログに記録するため、Enterprise Vault をデバッグモードで実行できます。DTrace を使うと、複数のサービスの同時監視、ファイルへのトレースの書き込み、特定の語句のフィルタ処理、フィルタに基づくトレースのトリガを実行できます。Symantec サポートコールに電話をすると、問題を診断するために痕跡を実行するように要求される場合があります。

コマンドラインまたは管理コンソールから DTrace を実行できます。

メモ: DTrace とは違って、Backtrace ユーティリティは問題が発生する前からのトレースを提供します。したがって、DTrace ではなく Backtrace によるトレースを実装してもかまいません。

p.25 の「[Backtrace について](#)」を参照してください。

コマンドラインからの DTrace の実行

コマンドラインから DTrace を実行することによって、管理コンソールから作成できるものよりも細かくカスタマイズされたトレースを作成できます。

コマンドラインから DTrace を実行する方法

- 1 ボルトサービスアカウントとして **Enterprise Vault** サーバーにログオンします。
- 2 DTrace ショートカットをクリックします。
DTrace のプロンプト (DT>) が表示されます。これは DTrace がロードされたことを表します。一部のコマンドではプロンプトが変わります。たとえば、「filter」と入力すると、プロンプトは DT FILTER> に変わります。DT> プロンプトに戻るには「Quit」または「Exit」と入力します。
- 3 必須コマンドを入力します。
詳しくは下記の「[Dtrace コマンド](#)」を参照してください。
- 4 DTrace を停止使用とする場合は、**Ctrl+C** を押して監視を停止し、Quit または Exit を入力します。

Dtrace コマンド

表 9-1 に、DTrace プロンプトで入力できるコマンドを示します。

表 9-1 Dtrace コマンド

コマンド	説明
cls	コンソールをクリアします。
comment	トレースの出力に追加するコメントを入力します。
display	選択したトレースのエントリを表示します。範囲の開始エントリと終了エントリを指定でき、これらのエントリにフィルタを適用するかどうかを選択できます。

コマンド	説明														
filter	<p>エントリに必ず含める (インクルード) 文字列または含めない (エクスクルード) 文字列を指定し、トレースの内容をフィルタ処理します。DT Filter> プロンプトでは次のコマンドを入力できます。</p> <table border="1"> <tr> <td>+ <i>string</i> [<i>;</i><i>string</i>] または Include <i>string</i> [<i>;</i><i>string</i>]</td> <td>インクルード一覧にフィルタ処理の対象とする文字列を追加します。この文字列では大文字と小文字が区別されます。</td> </tr> <tr> <td>- <i>string</i> [<i>;</i><i>string</i>] または exclude <i>string</i> [<i>;</i><i>string</i>]</td> <td>エクスクルード一覧にフィルタ処理の対象とする文字列を追加します。この文字列では大文字と小文字が区別されます。</td> </tr> <tr> <td>clear [Includes Excludes Both]</td> <td>すべてのインクルード文字列、すべてのエクスクルード文字列、またはその両方をフィルタから削除します。</td> </tr> <tr> <td>delete <i>string</i></td> <td>フィルタから処理の対象とする文字列を削除します。</td> </tr> <tr> <td>exit または quit</td> <td>フィルタの管理を終了します。</td> </tr> <tr> <td>reset</td> <td>フィルタをデフォルト設定にリセットします。</td> </tr> <tr> <td>view</td> <td>現在のフィルタ設定を表示します。</td> </tr> </table>	+ <i>string</i> [<i>;</i> <i>string</i>] または Include <i>string</i> [<i>;</i> <i>string</i>]	インクルード一覧にフィルタ処理の対象とする文字列を追加します。この文字列では大文字と小文字が区別されます。	- <i>string</i> [<i>;</i> <i>string</i>] または exclude <i>string</i> [<i>;</i> <i>string</i>]	エクスクルード一覧にフィルタ処理の対象とする文字列を追加します。この文字列では大文字と小文字が区別されます。	clear [Includes Excludes Both]	すべてのインクルード文字列、すべてのエクスクルード文字列、またはその両方をフィルタから削除します。	delete <i>string</i>	フィルタから処理の対象とする文字列を削除します。	exit または quit	フィルタの管理を終了します。	reset	フィルタをデフォルト設定にリセットします。	view	現在のフィルタ設定を表示します。
+ <i>string</i> [<i>;</i> <i>string</i>] または Include <i>string</i> [<i>;</i> <i>string</i>]	インクルード一覧にフィルタ処理の対象とする文字列を追加します。この文字列では大文字と小文字が区別されます。														
- <i>string</i> [<i>;</i> <i>string</i>] または exclude <i>string</i> [<i>;</i> <i>string</i>]	エクスクルード一覧にフィルタ処理の対象とする文字列を追加します。この文字列では大文字と小文字が区別されます。														
clear [Includes Excludes Both]	すべてのインクルード文字列、すべてのエクスクルード文字列、またはその両方をフィルタから削除します。														
delete <i>string</i>	フィルタから処理の対象とする文字列を削除します。														
exit または quit	フィルタの管理を終了します。														
reset	フィルタをデフォルト設定にリセットします。														
view	現在のフィルタ設定を表示します。														
log	<p>ログファイルの名前 (および省略可能なオプションとして、絶対パス) を指定します。ログファイルのデフォルトの場所は、Enterprise Vault の Reports フォルダ (たとえば、C:\Program Files (x86)\Enterprise Vault\Reports) になります。</p>														
monitor	<p>トレースをライブでコンソールに表示するが、ディスクには書き込まれません。コンソールへの出力を停止するには、Ctrl+C を押します。</p>														
open	<p>利用可能なログファイルを一覧表示し、そのファイルをテキストエディタで開きます。</p>														
pause	<p>指定した期間または現在の watch コマンドが完了するまでトレースを一時停止します。</p>														
registry	<p>Windows のレジストリで次のキーの下にあるエントリを表示します。</p> <pre>HKEY_LOCAL_MACHINE SOFTWARE Wow6432Node KVS Enterprise Vault</pre>														

コマンド	説明														
reset	トレースのオプションをリセットします。														
rollover	<p>DTrace ログファイルのロールオーバー設定を表示し、編集できます。デフォルトでは、DTrace は現在のログファイルのサイズが 100 MB に達したときに自動的に新しいログファイルを作成します。ファイルロールオーバーを有効にしたり無効にしたり、ログファイルの必須サイズを指定したり、ロールオーバー設定をデフォルト設定にリセットすることができます。</p> <p>DT Rollover> プロンプトで次のコマンドを入力します。</p> <table border="1"> <tr> <td>disable または off</td> <td>ファイルロールオーバーを無効にします。</td> </tr> <tr> <td>enable または on</td> <td>ファイルロールオーバーを有効にします。</td> </tr> <tr> <td>exit または quit</td> <td>ファイルロールオーバー管理を終了します。</td> </tr> <tr> <td>help または ?</td> <td>ロールオーバーコマンドのヘルプを表示します。</td> </tr> <tr> <td>reset</td> <td>ロールオーバー設定をデフォルト設定にリセットします。</td> </tr> <tr> <td>size number</td> <td>各ログファイルの最大サイズを MB 単位で指定します。</td> </tr> <tr> <td>view</td> <td>現在のロールオーバー設定を表示します。</td> </tr> </table>	disable または off	ファイルロールオーバーを無効にします。	enable または on	ファイルロールオーバーを有効にします。	exit または quit	ファイルロールオーバー管理を終了します。	help または ?	ロールオーバーコマンドのヘルプを表示します。	reset	ロールオーバー設定をデフォルト設定にリセットします。	size number	各ログファイルの最大サイズを MB 単位で指定します。	view	現在のロールオーバー設定を表示します。
disable または off	ファイルロールオーバーを無効にします。														
enable または on	ファイルロールオーバーを有効にします。														
exit または quit	ファイルロールオーバー管理を終了します。														
help または ?	ロールオーバーコマンドのヘルプを表示します。														
reset	ロールオーバー設定をデフォルト設定にリセットします。														
size number	各ログファイルの最大サイズを MB 単位で指定します。														
view	現在のロールオーバー設定を表示します。														
save	選択したトレースエントリを Dtrace が保存するファイル名 (および省略可能なオプションとして、絶対パス) を指定します。範囲の開始エントリと終了エントリを指定でき、これらのエントリにフィルタを適用するかどうかを選択できます。														
set	<p>サービスまたはコンポーネントの監視レベルを設定します。利用可能なレベルはオフ (o)、簡略 (b)、標準 (m)、詳細 (v) です。監視レベルは次のように指定します。</p> <pre>set servicename_or_ID level</pre> <p>次に例を示します。</p> <pre>set ArchiveTask v set 59 m</pre> <p>すべてのコード行は最小限の監視レベルに設定されており、DTrace のログファイル内で確認できます。たとえば、ログレベルを標準に設定している場合は、簡略と標準のレベルで記録するようにマーク付けされたコード行のみがログファイルに表示されます。</p>														
trigger	トレースに特定の文字列が現れたらログの記録を開始します。 triggers はフィルタと同じ構文で設定します。														

コマンド	説明
version	Enterprise Vault のプログラムフォルダ (たとえば、C:\Program Files (x86)\Enterprise Vault) の実行可能ファイルのバージョンを表示します。
view	DTrace を実行できる利用可能なプロセスとサービスのすべてを一覧表示します。 この一覧はロードまたはインストールされた内容によって多少異なる場合があります。最初に view コマンドを使ってプロセスと ID の現在の一覧を参照することが推奨されます。これは、プロセス名ではなく ID を使って監視レベルを設定する場合は特に重要です。
watch	trigger コマンドで定義したトリガのフィルタを有効にした後で、指定した数のトレースエントリをログに記録します。

管理コンソールからの DTrace の実行

管理コンソールでは、トレース情報を収集するいくつかの DTrace スクリプトが供給され、それらを選択して使用できます。

管理コンソールから DTrace を実行する方法

- 1 管理コンソールで、[Enterprise Vault サーバー] コンテナが表示されるまで Enterprise Vault サイトを展開します。
- 2 [Enterprise Vault サーバー] コンテナを展開します。
- 3 トレースを実行する Enterprise Vault サーバーを展開します。
- 4 [ツール] メニューで、[拡張機能] をクリックします。
この設定は記憶されないことに注意してください。この内容は管理コンソールの現在のセッションのみに適用されます。
- 5 F5 を押して表示を更新します。サーバーの下に、[トレース] コンテナが表示されません。
- 6 [トレース] コンテナを右クリックし、次に [新規] > [トレース] をクリックします。
- 7 新規トレースウィザードで、次の情報を入力してください。
 - トレースが必要な Enterprise Vault サブシステムに最も近いトレースカテゴリ。たとえば、「Search and Indexing issues」または「Restoring and Retrieval issues(Exchange)」などを選択できます。
 - トレースのタイトルおよび説明。Symantec サポートへのコールを記録する場合、トレースのタイトルに受付番号を含めると便利です。タイトルは管理コンソールのトレースリストとトレースログファイルの冒頭に表示されます。
 - トレースを実行する時間の長さ。トレースファイルのサイズはすぐに大きくなるため、通常は数分で十分です。

- ログファイルの最大サイズ。ログファイルがこの最大サイズに達するとトレースは停止します。
- ログファイルを保存するフォルダ。

トレースを開始した後、管理コンソールでトレースのタイトルをダブルクリックするとプロパティを表示できます。[トレースプロパティ]ダイアログボックスではログファイルを開いたりコピーしたりできるオプションが提供されますが、トレースが完了するまでは利用できません。

DTrace ログについて

表 9-2 に、ログの列を示します。

表 9-2 DTrace ログの列

列の内容	説明
シーケンス番号	エントリが不足しているかどうかを判断します。
Time	遅いプロセスを特定します。
プロセス ID	プロセスを識別します。
プロセス名	プロセスを識別します。
スレッド ID	アーカイブタスクなどの複数のプロセスを追跡します。
ログレベルの最高値	ログレベルが正しいかどうかを判断します。
関数名	関数名と、その関数の結果を判断します。

DTrace のトラブルシューティング

Dtrace 実行中に問題が起きた場合、その解決方法については表 9-3 を参照してください。

表 9-3 DTrace で発生する可能性がある問題

問題	手順の内容
<p>行がスキップされる。</p>	<p>各トレース行の最初の数字はキャプチャされたときのシーケンス番号です。エントリを処理してログファイルに書き込むための CPU 時間が不足している場合、DTrace は一部の行をスキップする場合があります。エージェントタスクをトレースしている場合は、タスクのスレッド数を減らし、シングルスレッドのみを監視するようにしてください。</p> <p>同じ種類の複数のタスク (アーカイブなど) が存在する場合は、1 つを除いたすべてのタスクを停止してください。DTrace ではサービスの違いを区別しません。</p>
<p>監視コマンドを実行しても画面に何も出力されない、またはログファイルにトレースが出力されない。</p>	<p>DTrace の対象として適切なプロセスが選択されていることを確認します。ターミナルサービスや、プライマリオペレーティングシステムのコンソールを使わないその他のリモートコントロールアプリケーションで DTrace を実行している場合、DTrace のイベントはプライマリコンソールに書き込まれるため、ターミナルサービスを使っているときには DTrace のイベントは表示されない点に注意してください。Enterprise Vault では、ターミナルサービスが使われていたというメッセージがログファイルに記録されます。</p>
<p>ログファイルの情報が多すぎる。</p>	<p>DTrace の内容を特定の単語やイベントに基づいてフィルタ処理したりトリガしたりすることができます。問題の根本的な原因を絞り込む必要がある場合は、監視するプロセス数とスレッドに上限を設定することもできます。</p>

EVDominoExchangeMigration ツール

この章では以下の項目について説明しています。

- [EVDominoExchangeMigration ツールについて](#)
- [EVDominoExchangeMigration ツールでのクライアントの必要条件](#)
- [Windows Server ファイアウォールの例外リストへの EVDominoExchangeMigration ツールの追加](#)
- [EVDominoExchangeMigration ツールと Binary Tree](#)
- [Quest Notes Migrator for Exchange と EVDominoExchangeMigration ツールの使用](#)
- [EVDominoExchangeMigration ツールでの他の移行ソフトウェアの必要条件](#)
- [EVDominoExchangeMigration ツールの実行](#)

EVDominoExchangeMigration ツールについて

Enterprise Vault EVDominoExchangeMigration ツールは、Domino から Exchange Server に移行された Exchange Server メールボックスのショートカットを修正します。

EVDominoExchangeMigration では次の処理が実行されます。

- Exchange Server メールボックスから Domino アーカイブに明示的なメールボックス権限をコピーします。通常、これらはメールボックス所有者の権限のみです。継承された権限はコピーされません。また、Exchange 2007 のメールボックスの場合、Active Directory 権限は Domino アーカイブにコピーされません。
- ショートカットのメッセージクラスを IPM.Note.EnterpriseVault.Shortcut に変更します。

- ショートカットに含まれる **Domino** アーカイブ内のアイテムへのリンクを修正します。
- アーカイブ済みアイテムに添付ファイルが含まれる場合、**Outlook** のクリップのアイコンをショートカットに追加します。

EVDominoExchangeMigration は、次によって移行された Enterprise Vault ショートカットを使ってテストされています。

- Binary Tree CMT Universal ™ 2.7 (CMT for Exchange ™ ; とも呼ばれます)。
- Quest Software 社の Quest Notes Migrator for Exchange。

別の移行ツールを使うことも可能ですが、そのツールが Enterprise Vault Notes 文書プロパティに対応する Enterprise Vault Exchange 名前付きプロパティに正しくマップすることを確認する必要があります。

メモ: Domino から Exchange Server にアイテムを移行するとき、アーカイブ保留状態にあるショートカットを移行しないでください。移行中に Domino アーカイブを無効にすると、Enterprise Vault はアーカイブ保留中のショートカットを新たに作成しません。

p.54 の「[EVDominoExchangeMigration ツールでの他の移行ソフトウェアの必要条件](#)」を参照してください。

EVDominoExchangeMigration ツールでのクライアントの必要条件

Outlook を使って Enterprise Vault Domino アーカイブ内のアイテムにアクセスするすべてのクライアントコンピュータには、Enterprise Vault 2007 SP2 以降の Outlook アドインがインストールされている必要があります。Outlook アドインのインストールは、EVDominoExchangeMigration の実行前または実行後のいずれでも行えますが、以前のバージョンの Outlook アドインを使っている場合、Domino アーカイブから取り込まれたアイテムが正常に表示されないことがあります。

Windows Server ファイアウォールの例外リストへの EVDominoExchangeMigration ツールの追加

デフォルトでは、EVDominoExchangeMigration ツールは Windows ファイアウォールによって遮断されます。このツールを Windows ファイアウォールで許可するには、例外リストに追加する必要があります。

Windows Server ファイアウォールの例外リストに EVDominoExchangeMigration ツールを追加する方法

- 1 コントロールパネルで[システムとセキュリティ]をクリックし、次に[Windows ファイアウォール]をクリックします。
- 2 [Windows ファイアウォールを介したプログラムまたは機能を許可する]をクリックします。
- 3 [設定の変更]をクリックし、次に[別のプログラムの許可]をクリックします。
- 4 [参照]をクリックし、次に Enterprise Vault のプログラムフォルダ (通常は C:\Program Files (x86)\Enterprise Vault) を参照します。
- 5 EVDominoExchangeMigration.exe をクリックし、次に[開く]をクリックします。
- 6 [追加]をクリックしてから、[OK]をクリックします。

EVDominoExchangeMigration ツールと Binary Tree

Enterprise Vault ショートカットのサポートは、Binary Tree CMT Universal 2.7 以降に含まれます。

Enterprise Vault ショートカットは CMT Universal で自動的に認識されるため、CMT Universal の使用時に追加の設定は必要ありません。

Quest Notes Migrator for Exchange と EVDominoExchangeMigration ツールの使用

Domino から Exchange Server に移行する前に、提供されているカスタム属性の定義を Quest のプログラムフォルダに追加する必要があります。このファイルの設定により、Quest で Enterprise Vault ショートカット属性を Exchange Server メールボックスに移行することが可能になります。

Quest カスタム属性を定義する方法

- 1 提供されている example_customattrs.tsv ファイルを Enterprise Vault のプログラムフォルダから Quest Notes Migrator for Exchange のプログラムフォルダ (たとえば、C:\Program Files (x86)\Quest Software Notes Migrator for Exchange) にコピーします。
- 2 新しくコピーした example_customattrs.tsv の名前を customattrs.tsv に変更します。

これで、Quest Notes Migrator でメールボックスを Exchange Server に移行可能となりました。処理の詳細については、Quest Notes Migrator のマニュアルを参照してください。

警告: 新規に移行したメールボックスで Enterprise Vault メールボックスのアーカイブタスクを実行しないでください。EVDominoExchangeMigration で修正が必要なショートカットがアーカイブされてしまう可能性があります。EVDominoExchangeMigration でのショートカットの修正が完了するまで、メールボックスのアーカイブタスクを無効にすることを検討してください。

EVDominoExchangeMigration ツールでの他の移行ソフトウェアの必要条件

EVDominoExchangeMigration は、Binary Tree Universal と Quest Notes Migrator for Exchange で移行されたアイテムを使ってテストされています。別のメールボックス移行ツールを使う場合は、該当する Enterprise Vault メッセージ属性が対応する MAPI 属性にマップされていることを確認する必要があります。

表 10-1 に、メッセージ属性に必要なマップを一覧表示します。

Exchange の名前付きプロパティの GUID はすべて D0F41A15-9E91-D111-84E6-0000F877D428 の GUID で、種類は MNID_STRING です。

表 10-1 Enterprise Vault メッセージ属性

Enterprise Vault Notes 文書プロパティ	Enterprise Vault Exchange 文書の名前付きプロパティ	名前付きプロパティの種類
EV26C5E2CCF2B9267C.Archived	アーカイブ ID	PT_STRING8
EV26C5E2CCF2B9267C.ArchivedDate	アーカイブした日付	次のいずれかです。 <ul style="list-style-type: none"> PT_SYSTIME PT_STRING8 (yyyymmhhmmss 形式)。たとえば、20071910141249 は 2007 年 10 月 19 日 14 時 12 分 49 秒を表します。
EV26C5E2CCF2B9267C.SaveSetId	保存セット ID	PT_STRING8
EV26C5E2CCF2B9267C.RetentionCategory	保持カテゴリ	PT_STRING8
EV26C5E2CCF2B9267C.HasAttachments	EVLotus_HasAttachments	PT_STRING8

EVDominoExchangeMigration ツールの実行

このセクションでは、EVDominoExchangeMigration の実行方法について説明します。

EVDominoExchangeMigration は 1 つのメールボックスでショートカットを処理します。複数のメールボックスでショートカットを処理する場合は、メールボックスごとに 1 回ずつ EVDominoExchangeMigration を実行する必要があります。処理するメールボックスが多数ある場合は、EVDominoExchangeMigration をスクリプトまたはバッチファイルから実行する方法が最も簡単です。

EVDominoExchangeMigration ツールの構文

```
EVDominoExchangeMigration [-?] -ex ExchangeServer -sm SystemMailbox  
-eu ExchangeSMTPAddress -du DominoUserName -po ExchangeMailboxPolicy  
-lf LogFileFolder
```

パラメータについて次に説明します。

- ex 処理対象のメールボックスをホストする Exchange メールボックスサーバーの名前。
- eu 処理対象のメールボックスを所有するユーザーのプライマリ Exchange Server SMTP アドレス。
- du 移行ユーザーの Domino ユーザー名 (たとえば、User1/MyOrgName など) または Domino ユーザーに関する Enterprise Vault アーカイブのアーカイブ ID (たとえば、1C5D73ABD3B80474396FD566AB2A894031110000myServer.myCorp.com など)。
- po 適用する Enterprise Vault Exchange メールボックスポリシー。「Default」、ポリシーの名前、「None」のいずれか 1 つを指定する必要があります。
 - **Default:** ショートカットを更新するときに適用する Exchange メールボックスポリシー。ユーザーのプロビジョニングが完了している場合、これは、プロビジョニンググループで指定されたメールボックスポリシーとなります。ユーザーがプロビジョニングされていない場合には、これは、デフォルトの Exchange メールボックスポリシーとなります。
 - **ポリシー名:** 使用する Exchange メールボックスポリシーの名前。
 - **なし:** ポリシーは適用されません。このオプションはショートカット内のリンクを修正するものではありませんが、パフォーマンスを向上します。ショートカットにアーカイブ済みアイテムへのリンクが含まれる場合には、このオプションを使わないでください。
- lf ログファイルを格納するフォルダの絶対パス。このフォルダは、存在しない場合は作成されます。たとえば、C:\¥Migration¥Logs のように作成されます。ただし、自動的に作成されるフォルダは 1 つだけであることに注意してください。この例では、C:¥Migration が存在しない場合、Logs フォルダは作成されません。

例として、以下の設定で EVDominoExchangeMigration を実行するコマンドを示します。

Exchange Server のプロビジョニング済み User12
メールボックス

Exchange Server myExchange

User12 のプライマリ SMTP アドレス User12@myCorp.com

Exchange メールボックスポリシー ユーザーのプロビジョニンググループのメールボックスポリシー

Domino ユーザー名 User12/myCorp

ログファイルフォルダ C:¥log files

```
EVDominoExchangeMigration -ex myExchange -eu User12@myCorp.com -po default -du User12/myCorp -lf "C:¥log files"
```

メモ: コンピュータでユーザーアカウント制御 (UAC) が有効である場合は、管理者権限でこのユーティリティを実行してください。

p.13 の「[管理者権限での Enterprise Vault コマンドラインユーティリティの実行](#)」を参照してください。

EVDominoExchangeMigration ツールのログファイル

EVDominoExchangeMigration では次のログファイルが作成されます。

- 処理されるメールボックスごとのログファイル。ファイル名は、ユーザーの SMTP アドレス、日付、時刻の組み合わせで構成されます。たとえば、user1@mycorp.com 2007-09-27 09-17-08.log のようになります。
- EVDominoExchangeMigrationSummary.log という名前のログファイル。このファイルには、すべての移行の概略が記録されます。EVDominoExchangeMigration で処理されるメールボックスごとに 1 行の概略がこのファイルに書き込まれます。ファイル内の情報はタブで区切られているため、内容を表計算プログラムで簡単に開くことができます。

EVDominoExchangeMigration はこのログファイルを上書きしないため、EVDominoExchangeMigration を複数回実行しても同じ概略ログファイルを使うことができます。

EVDominoExchangeMigration ツールの制限事項

表 10-2 に、EVDominoExchangeMigration ツールで注意する必要がある既知の制限事項を示します。

表 10-2 EVDominoExchangeMigration ツールの制限事項

制限事項	説明
Domino メールボックス名に US-ASCII 以外の文字があると、スクリプト化された移行が中断されることがあります。	<p>処理するメールボックスが多数ある場合には、EVDominoExchangeMigration をスクリプトで実行する方法が便利です。ただし、Domino メールボックス名に US-ASCII 文字セット以外の文字が含まれる場合、これらの文字が正しく解釈されないため、メールボックス名を Windows テキストエディタに貼り付ける際にエラーが発生する可能性があります。</p> <p>この問題には、次のようなさまざまな解決策があります。</p> <ul style="list-style-type: none">■ メールボックス名の一覧を処理する Windows PowerShell スクリプトを作成します。■ MS-DOS エディタを使ってバッチファイルを作成します。このエディタは、US-ASCII 以外のテキストの貼り付けが可能です。操作手順は次のとおりです。<ul style="list-style-type: none">■ コマンドプロンプトウィンドウを開きます。■ 「edit」と入力して Enter キーを押します。■ コマンドプロンプトウィンドウのタイトルバーを右クリックし、ショートカットメニューで[編集] > [貼り付け]の順に選択します。
Domino カレンダーアイテムや To Do アイテムへのショートカットの外観	<p>これらのアイテムは、カレンダー (IPM.Appointment) や To Do アイテム (IPM.Task) としてではなく、通常のメールメッセージ (IPM.Note) として取り込まれます。</p> <p>可能であれば、Domino メールボックスから Domino カレンダーアイテムや To Do アイテムをアーカイブせず、これらが Microsoft Exchange に移行されるまで待機して、Microsoft Exchange アーカイブタスクを使ってアーカイブすることを推奨します。そうすると、これらが正しく取り込まれます。</p>
メッセージクラスの制限事項	<p>EVDominoExchangeMigration では、以下のいずれかの Exchange Server メッセージクラスを含むメッセージは処理されません。</p> <ul style="list-style-type: none">■ IPM.Appointment■ IPM.Contact■ IPM.Task■ IPM.Stickynote

EVDuplicateCleaner

この章では以下の項目について説明しています。

- [EVDuplicateCleaner](#) について
- [EVDuplicateCleaner](#) の設定
- [EVDuplicateCleaner](#) の実行
- [EVDuplicateCleaner](#) を実行した後の破損したショートカットの修正

EVDuplicateCleaner について

まれな状況において、アーカイブタスクで発生した 1 つのエラーが、Enterprise Vault のメールボックスのアーカイブに重複する保存セットが作成される原因になる場合があります。この問題が発生した場合、EVDuplicateCleaner コマンドラインユーティリティを実行して重複を検出し、削除することができます。このユーティリティを実行すると、重複したセットのうち最後にアーカイブされたインスタンスだけが残るようになります。

重複した保存セットがリーガルホールドの状態である場合や、その他の理由で削除が禁止されている場合（たとえば、保持カテゴリが設定されているなど）、EVDuplicateCleaner はこれらを削除しません。

重複を識別するために、EVDuplicateCleaner は次の処理を行います。

- 各保存セットの複数の属性 (ArchivePointIdentity、IdDateTime、IdUniqueNo、SisPartCount、および VaultIdentity) を調べます。
- 各保存セットの内容のフィンガープリントを検査します。

EVDuplicateCleaner の設定

EVDuplicateCleaner を実行する前に、これに伴う設定ファイルの編集が必要です。

EVDuplicateCleaner を設定するには

- 1 **Windows** エクスプローラで、**Enterprise Vault** のプログラムフォルダ(通常は、`C:\Program Files\Enterprise Vault`)に移動します。
- 2 **Windows** のメモ帳などのプレーンテキストエディタで `EVDuplicateCleaner.exe.config` ファイルを開きます。
- 3 次の設定値を設定します。

DirDBSQLServer	必須。 Enterprise Vault のディレクトリデータベースをホストする SQL Server のコンピュータ名を指定します。
MaxAllowedFailures	省略可能。 EVDuplicateCleaner の処理を止めるまでに発生することができるエラーの最大数を指定します。デフォルトでは、エラーの数は無制限に設定されています。
SavesetChunkSize	省略可能。 EVDuplicateCleaner が Enterprise Vault ディレクトリデータベースへの呼び出しごとにフェッチする必要がある潜在的な重複の数を指定します。デフォルトは 10000 です。 この値を増加すると、 EVDuplicateCleaner が行うディレクトリデータベースへの呼び出しの数を減らすことができ、これにより処理時間が高速化されます。その一方で、フェッチされた項目のために、より大きいチャンクサイズ、より多くのメモリが必要になります。
ErrorToLogFile	省略可能。ログファイルにエラーを記録するかどうかを指定します。デフォルトでは、 EVDuplicateCleaner はエラーをログに記録します。
MaxDuplicateSavesetsToReport	省略可能。 EVDuplicateCleaner がレポートモードで動作する場合に処理できる重複保存セットの最大数を指定します。デフォルトは 100000 です。
TryToOverrideDumpster	省略可能。重複した保存セットをただちに削除するか、 Enterprise Vault の「ダンプスター」に一時的に保存するかどうかを指定します(有効にした場合)。デフォルトでは、 EVDuplicateCleaner は重複した保存セットをただちに削除を試みます。 ダンプスターは Enterprise Vault で「ごみ箱」のように動作します。つまり、削除された項目を完全に削除するまで一定期間保持します。ダンプスターを有効にするには、管理コンソールの[サイトプロパティ:アーカイブの設定]タブの[ユーザーが削除したアイテムの回復を有効にする]にチェックマークを付けます。

SkipLegacySavesets

省略可能。Enterprise Vault 2007 またはこれ以前のバージョンで作成したレガシーの保存セットを無視するかどうかを指定します。デフォルトでは、EVDuplicateCleaner はこれらの保存セットを無視しません。

レガシーの保存セットが存在しないことがわかっている場合は、これらは無視するように選択することにより、処理時間を高速化できます。

- 4 ファイルを保存して閉じます。

EVDuplicateCleaner の実行

まだ完了していない場合は、EVDuplicateCleaner.exe.config ファイルに必要な値を設定することにより、EVDuplicateCleaner の設定を行います。

EVDuplicateCleaner の実行

- 1 ボルトサービスアカウントとして Enterprise Vault サーバーにログオンします。
- 2 Exchange ジャーナルタスクと Domino ジャーナルタスクを停止させます。
- 3 管理者権限でコマンドプロンプトウィンドウを開きます。
- 4 Enterprise Vault のプログラムフォルダ (通常は、C:\Program Files\Enterprise Vault) に移動します。
- 5 次のいずれかのコマンドを入力します。
 - EVDuplicateCleaner Execute vault_store_name [archive_entry_ID]
このコマンドは EVDuplicateCleaner に、検出されたすべての重複保存セットを削除するように指示します。
 - EVDuplicateCleaner Report vault_store_name [archive_entry_ID]
このコマンドは、重複した保存セットをリストするログファイルを生成しますが、それらを削除しません。
 - EVDuplicateCleaner Summary vault_store_name [archive_entry_ID]
このコマンドは、各アーカイブの重複した保存セットの推定される数を提供します。

vault_store_name パラメータは必須です。archive_entry_ID パラメータは省略可能で、指名したアーカイブのみを処理することができます。このパラメータを省略した場合、EVDuplicateCleaner は指名されたボルトストアのすべてのアーカイブを処理します。

EVDuplicateCleaner はそれぞれの処理を実行し、2 つのログファイルを生成します。

- EVDuplicateCleaner_timestamp.log (レガシー(8.0 以前)の保存セット用)
- EVDuplicateCleanerv2_timestamp.log (8.0 以降の保存セット用)

各ログファイルで、「Estimated duplicate item counts」は重複があるかもしれない保存セットの数を示します。「Estimated duplicate item counts」は潜在的な重複の数を示します。たとえば、3 つの保存セットにそれぞれ 4 つの重複があるとき、「推定される重複した保存セットの数」は 3 であり、「推定される重複した項目の数」は 12 です。

- 6 Exchange ジャーナルタスクと Domino ジャーナルタスクを再起動します。

EVDuplicateCleaner を実行した後の破損したショートカットの修正

EVDuplicateCleaner を実行した後、Exchange のユーザーはメールボックスのアーカイブから特定の項目を取り込むことが一時的にできなくなる場合があります。この問題は、メールボックスのショートカットがたった今削除された重複した保存セットのインスタンスと関連付けられていたときに発生します。この問題は通常、Domino のメールボックスには影響しません。

Enterprise Vault サーバーのレジストリで FixOrphanedShortcut エントリを追加することにより、破損したショートカットを修正できます。エントリが追加されると、Enterprise Vault はそれぞれの破損したショートカットと重複する保存セットの存続しているインスタンスとを関連付けることにより、これらを修復します。Enterprise Vault がこのインスタンスを見つけない場合は、ショートカットを削除します。

EVDuplicateCleaner を実行した後で破損したショートカットを修正するには

- 1 レジストリエディタを開きます。
- 2 レジストリにある次のキーを見つけ、クリックします。

```
HKEY_LOCAL_MACHINE
  ¥Software
    ¥Wow6432Node
      ¥KVS
        ¥Enterprise Vault
          ¥Agents
```

- 3 FixOrphanedShortcut という名前の DWORD エントリを作成し、これに 1 という値を与えます。

- 4 ショートカットを処理するために、**Exchange** メールボックスのアーカイブタスクを実行します。

通常、タスクは設定したスケジュールに従って実行されます。ただし、このスケジュールに設定していないタスクを実行する必要がある場合には、管理コンソールの[今すぐ実行]機能を使うと、すぐに実行することができます。操作については、『管理者ガイド』を参照してください。

- 5 ショートカットを修正した後、**FixOrphanedShortcut** レジストリエントリを削除します。このエントリをそのままにしておくと、アーカイブパフォーマンスに対する悪影響をもたらす場合があります。

EVEARemovalUtility

この章では以下の項目について説明しています。

- [EVEARemovalUtility](#) について
- [EVEARemovalUtility](#) の前提条件
- [EVEARemovalUtility](#) の実行
- [EVEARemovalUtility](#) の構文
- [EVEARemovalUtility](#) の出力とログファイルの形式
- [EVEARemovalUtility](#) の使い方の例

EVEARemovalUtility について

EVEARemovalUtility はファイルから拡張属性を削除するコマンドラインユーティリティです。

Enterprise Vault は、拡張属性を持つファイル (**Novell** ファイルシステムから移行されたファイルや **EMC DiskXtender** のようなアプリケーションで以前にアーカイブされたファイルなど) のプレースホルダショートカットを **NTFS** ファイルシステムで作成できません。この制限事項は **Microsoft** 社の制限が原因です。プレースホルダでは再解析ポイントを使用しますが、これに拡張属性を含めることができません。

Enterprise Vault は拡張属性を持つファイルをアーカイブできますが、プレースホルダの作成は失敗します。**Enterprise Vault** はファイルシステムアーカイブタスクのレポートに次に類似したメッセージを含めます。

```
Failed to write a placeholder file because it has extended attributes.  
Use EVEARemovalUtility to remove the extended attributes.  
File Name: %1
```

メモ: タスクのレポートでこのメッセージを入手するには、**Windows** ファイルサーバーに **Enterprise Vault 10.0** 以降の **FSA** エージェントがインストールされていなければなりません。

EVEARemovalUtility を使って、ファイルから拡張属性を削除できます。プレースホルダの作成が以前に失敗した場合は、拡張属性を削除することによって、**Enterprise Vault** は次のアーカイブの実行時にプレースホルダを作成できます。

EVEARemovalUtility の前提条件

EVEARemovalUtility を実行するユーザーアカウントは次のいずれかを必要とします。

- ファイルサーバーに対するローカル管理者権限。
- 共有に対するフルアクセス権と、ファイルとフォルダに対する拡張属性の読み取り権限と拡張属性の書き込み権限。

コンピュータでユーザーアカウント制御 (UAC) が有効である場合は、管理者権限でこのユーティリティを実行してください。

p.13 の「[管理者権限での Enterprise Vault コマンドラインユーティリティの実行](#)」を参照してください。

Enterprise Vault サーバーか、処理するファイルを含んでいる **Windows** ファイルサーバーのような別の **Windows** コンピュータでユーティリティを実行できます。コンピュータには次のソフトウェアがインストールされていなければなりません。

- **NET Framework 2.0** 以降
- **Microsoft Visual C++ 2008 SP1 x86** の再頒布可能パッケージ

Enterprise Vault サーバー以外の **Windows** コンピュータでユーティリティを実行するには、**Enterprise Vault** サーバーの **Enterprise Vault** インストールフォルダから **Windows** コンピュータ上の適切なフォルダに、次のファイルをコピーします。既存のファイルを上書きしないでください。

- `EVEARemovalUtility.exe`
- `EVManagedLibrary.dll`
- `KVS.EnterpriseVault.Common.dll`
- `KVS.EnterpriseVault.FileServerArchiveCommon.dll`
- `KVS.EnterpriseVault.Runtime.dll`
- `EVRT.dll`

EVEARemovalUtility の実行

Enterprise Vault サーバーか、処理するファイルを保持する Windows ファイルサーバーのような別の Windows コンピュータから EVEARemovalUtility を実行できます。

p.64 の「[EVEARemovalUtility の前提条件](#)」を参照してください。

メモ: ユーティリティは処理するファイルからすべての拡張属性を完全に削除します。EVEARemovalUtility を実行する前に、処理するファイルの完全バックアップを取ることを推奨します。

EVEARemovalUtility を実行する方法

- 1 コマンドプロンプトウィンドウを開き、EVEARemovalUtility ファイルが含まれるフォルダに移動します。Enterprise Vault サーバーでは、ファイルは Enterprise Vault インストールフォルダにあります。
- 2 必要なパラメータを指定して EVEARemovalUtility を実行します。
-r パラメータを指定してユーティリティを実行する前に、ユーティリティが削除する属性をリストするログファイルを作成するために -l パラメータと -d パラメータを指定してユーティリティを実行することを推奨します。

p.65 の「[EVEARemovalUtility の構文](#)」を参照してください。

EVEARemovalUtility の構文

EVEARemovalUtility コマンドの構文は次のとおりです。

```
EVEARemovalUtility.exe path [-s | -f] [-l] [-d] [-r [-q]]
```

表 12-1 に、利用可能なパラメータを示します。

表 12-1 EVEARemovalUtility パラメータ

パラメータ	説明
<code>path</code>	次のいずれかです。 <ul style="list-style-type: none">■ 処理する単一ファイルの UNC パス (たとえば ¥¥fileserver1¥share¥file.txt)。■ 処理するフォルダの UNC パス (たとえば ¥¥fileserver1¥share)。■ EVEARemovalUtility が以前に生成したログファイルのローカルパスまたは UNC パス。この場合、-f オプションを使う必要があります。
<code>-s</code>	<code>path</code> で指定されているフォルダを再帰的に処理します。

パラメータ	説明
-f	<i>path</i> で指定されている EVEARemovalUtility のログファイルのファイルリストを処理します。
-l	ログファイルにユーティリティの出力をリダイレクトします。EVEARemovalUtility はユーティリティが存在するフォルダにログファイルを作成します。 -l を指定しなければ、EVEARemovalUtility はコマンドプロンプトウィンドウに出力を表示します。
-d	詳細な出力を生成します。これには、各ファイルの拡張属性の名前と値が含まれます。 このパラメータは -r パラメータを指定すれば無効となります。
-r	拡張属性を削除します。 このパラメータを省略すれば、EVEARemovalUtility は拡張属性についての情報の一覧表示のみを行います。
-q	出力抑制モードで実行します。出力は、処理されたファイルの数を示す概略のみで構成されます。 このパラメータは、-r パラメータを指定しない場合は無効となります。

EVEARemovalUtility の出力とログファイルの形式

EVEARemovalUtility の出力は、ログファイルに出力をリダイレクトするために -l パラメータを指定しなければ、コマンドプロンプトウィンドウに表示されます。

ログファイル名の形式は EVEARemovalUtility--*timestamp*.log です。ここで *timestamp* はログファイルがいつ作成されたかを示します。*timestamp* の形式は *yyyymmddmmsscc* で、*cc* は 100分の 1 秒を示します。たとえば、ログファイル EVEARemovalUtility--20100907142304.log は 2010 年 9 月 7 日の 14 分 23.04 秒に作成されました。

次のコマンドはフォルダとそのサブフォルダのファイルの拡張属性の詳細をリストするログファイルを生成します。

```
EVEARemovalUtility.exe %server1% %folder1% -d -s -l
```

このコマンドの出力の例を次に示します。

```
Extended Attribute Removal Utility.  
Symantec Enterprise Vault.  
Copyright (c) 2010. Symantec Corporation.
```

```
List extended attributes from %server1% %folder1%
```

```
-----
Filename  ExtAttrSTATE  Details
-----
##
YYserver1¥e$¥folder1¥file1.txt  PRESENT  <EA1-Value>, <EA2-Value2>
YYserver1¥e$¥folder1¥file2.txt  NOT PRESENT
YYserver1¥e$¥folder1¥file3.txt  PRESENT  <EA1-Value3>
YYserver1¥e$¥folder1¥file4.txt  PRESENT  <EA1-Value>
YYserver1¥e$¥folder1¥file5.txt  NOT PRESENT
YYserver1¥e$¥folder1¥file6.doc  NOT PRESENT
YYserver1¥e$¥folder1¥file7.txt  NOT PRESENT
YYserver1¥e$¥folder1¥file8.doc  NOT PRESENT
YYserver1¥e$¥folder1¥subfolder¥file9.doc  PRESENT  <CS-12>, <AUTHOR-P1>
YYserver1¥e$¥folder1¥subfolder¥file91.doc  NOT PRESENT
##
```

Summary

```
-----
Present  Not present  Start time  End time
-----
4  6  6-10-2010 At 20:51:22.137  6-10-2010 At 20:51:22.387
```

Total elapsed time : 0 hours 0 mins 0 seconds 249 msec

-d パラメータを省略すれば、出力では拡張属性の名前と値が省略されます。

必要であれば、-f パラメータで処理するためにログファイルを提出する前にログファイルの内容を編集できます。たとえば、ログファイル例にリストされているファイルで、file4.txt を除くすべてのファイルから拡張属性を削除するとします。ログファイルを編集して file4.txt の行を削除し、次に、処理するためにログファイルを提出できます。

メモ: ## の文字によって区切られた行の形式を変更しないでください。変更すると、ユーティリティはファイルリストを正しく読み込まないことがあります。

-r パラメータを使用して拡張属性を削除し、-q パラメータも指定すると、コマンドは出力を「抑制」します。その後の出力は、処理されたファイルの数についての概略情報のみを含みます。

EVEARemovalUtility の使い方の例

これらの使用例はどのように EVEARemovalUtility を使って拡張属性を削除できるかを説明します。

- p.68 の「EVEARemovalUtility の例: 単一ファイルの処理」を参照してください。
- p.68 の「EVEARemovalUtility の例: フォルダとそのサブフォルダの処理」を参照してください。

EVEARemovalUtility の例: 単一ファイルの処理

ファイルサーバー fs1、共有 e\$、フォルダ folder1 の filex.txt という名前の単一ファイルに拡張属性が含まれることが原因でこのファイルのプレースホルダの作成に失敗したことを Enterprise Vault が報告するとします。

- Enterprise Vault サーバーからの次のコマンドを実行します。

```
EVEARemovalUtility.exe %fs1%e$%folder1%filex.txt -d
```

コマンドプロンプトウィンドウへの出力は filex.txt の拡張属性をリストします。
- 拡張属性を削除することを決定します。filex.txt から拡張属性を削除する次のコマンドを実行します。

```
EVEARemovalUtility.exe %fs1%e$%folder1%filex.txt -r
```

コマンドプロンプトウィンドウへの出力は filex.txt の拡張属性が削除されたことを示します。

EVEARemovalUtility の例: フォルダとそのサブフォルダの処理

次のどちらかに該当すると仮定します。

- ファイルサーバー fs1、共有 e\$ のフォルダ folder1 とそのサブフォルダの複数のファイルに拡張属性が含まれるのでこれらのファイルのプレースホルダの作成に失敗したことを Enterprise Vault が報告します。
- または、UNIX システムから Windows ファイルサーバーにフォルダ構造を移行し、移行したファイルを Enterprise Vault でアーカイブする前にそれらのファイルから拡張属性を削除します。

次のとおり EVEARemovalUtility を使ってファイルを処理できます。

- Enterprise Vault サーバーで次のコマンドを入力し、サブフォルダを含む関連パスのすべてのファイルの拡張属性の詳細をリストするログファイルを作成します。

```
EVEARemovalUtility.exe %fs1%e$%folder1 -s -l -d
```
- ログファイル EVEARemovalUtility--timestamp.log を調べ、リストにあり、拡張属性を含んでいるファイルすべてから拡張属性を削除することを決定します。
- 拡張属性を削除する次のコマンドを入力します。

```
EVEARemovalUtility.exe EVEARemovalUtility--timestamp.log -f -r  
-l
```

-l パラメータが指定されていないので、削除の結果はコマンドプロンプトウィンドウに表示されます。

または、folder1 とそのサブフォルダのファイルすべてから拡張属性を削除する次のコマンドを実行できます。このコマンドは新しいログファイルに出力を送ります。

```
EVEARemovalUtility.exe %fs1%e$%folder1 -s -l -r
```

次のコマンドは同じ効果がありますが、出力抑制モードで実行します。コマンドはログファイルに、処理されたファイルの数についての概要情報のみを出力します。

```
EVEARemovalUtility.exe %fs1%e$%folder1 -s -l -r -q
```

p.66 の「[EVEARemovalUtility の出力とログファイルの形式](#)」を参照してください。

EVFSASetRightsAndPermissions

この章では以下の項目について説明しています。

- [EVFSASetRightsAndPermissions](#) について
- [EVFSASetRightsAndPermissions](#) の実行

EVFSASetRightsAndPermissions について

Windows ファイルサーバーでは、ボルトサービスアカウントがローカル管理者グループのメンバーでない限り、ファイルシステムアーカイブにはいくつかの最小限のアクセス権および権限が必要です。『Symantic Enterprise Vault ファイルシステムアーカイブ (FSA) の設定』の付録、「Windows ファイルサーバー上のボルトサービスアカウントに必要なアクセス権および権限」を参照してください。

ボルトサービスアカウントを変更する場合は、新しいアカウントに必要なアクセス許可および権限が付与されていることを確認してください。新しいアカウントのアクセス権および権限の設定には、**EVFSARightsAndPermissions** ユーティリティを使用できます。

EVFSARightsAndPermissions ユーティリティは、FSA エージェントをインストールするときに、ファイルサーバー上にインストールされます。

ユーティリティは、Enterprise Vault プログラムフォルダの

`EVFSASetRightsAndPermissions.log` というファイルにログファイルを作成します。ログファイルには、指定したアカウントに付与した権限およびアクセス権がすべて表記されています。また、設定の各段階について成功またはエラーの表示が記されています。

メモ: グループポリシーのパーミッションが、ボルトサービスアカウントに必要なローカルなアクセス権より優先されていないこと確認してください。

EVFSASetRightsAndPermissions の実行

ファイルサーバーのローカル管理者グループのメンバーであるアカウントを使用して、EVFSASetRightsAndPermissions を実行する必要があります。

EVFSASetRightsAndPermissions を実行するには、次の手順に従います。

- 1 ファイルサーバーで、ローカル管理者グループのメンバーであるユーザーとしてログオンします。
- 2 コマンドプロンプトウィンドウを開きます。
- 3 Enterprise Vault プログラムフォルダ (たとえば、C:\Program Files (x86)\Enterprise Vault) に移動します。
- 4 次のコマンドを入力します。

```
EVFSASetRightsAndPermissions username
```

ここで、**username** はボルトサービスアカウントの名前を表します。

- 5 コンソールには、ユーティリティの処理状況が表示されます。必要に応じて、Enterprise Vault プログラムフォルダの出力ログファイル EVFSASetRightsAndPermissions.log を調べてください。

EVrights

この章では以下の項目について説明しています。

- [EVrights](#) について
- [EVrights](#) の構文

EVrights について

EVrights を使ってコマンドラインまたはバッチファイルからユーザーとグループに権利を付与します。ユーザー権利を設定するには、管理者権限が必要です。

EVrights の構文

EVrights *name right*

name は、その権利を修正するユーザーまたはグループを識別します。名前にスペースが含まれる場合は引用符で囲みます。

[表 14-1](#) で、付与できる権利について説明します。これらの権利では大文字と小文字が区別されるため、次のとおりに正確に入力する必要があります。

表 14-1 使用可能な権利

権利	説明
SeAssignPrimaryTokenPrivilege	プロセスレベルトークンの置き換え。
SeAuditPrivilege	セキュリティ監査を生成します。
SeBackupPrivilege	ファイルとディレクトリをバックアップします。
SeBatchLogonRight	バッチジョブとしてログオンします。
SeChangeNotifyPrivilege	走査チェックをバイパスします。

権利	説明
SeCreatePagefilePrivilege	ページファイルを作成します。
SeCreatePermanentPrivilege	永続的な共有オブジェクトを作成します。
SeCreateTokenPrivilege	トークンオブジェクトを作成します。
SeDebugPrivilege	プログラムをデバッグします。
SeIncreaseBasePriorityPrivilege	スケジュールの優先度を上げます。
SeIncreaseQuotaPrivilege	クォータを増やします。
SeInteractiveLogonRight	ローカルでログオンします。
SeLoadDriverPrivilege	デバイスドライバのロードとロード解除を行います。
SeLockMemoryPrivilege	メモリでページをロックします。
SeMachineAccountPrivilege	ドメインにワークステーションを追加します。
SeNetworkLogonRight	ネットワーク経由でコンピュータにアクセスします。
SeProfileSingleProcessPrivilege	単一プロセスのプロファイルを実行します。
SeRemoteShutdownPrivilege	リモートシステムから強制的にシャットダウンします。
SeRestorePrivilege	ファイルおよびディレクトリを復元します。
SeSecurityPrivilege	監査ログとセキュリティログを管理します。
SeServiceLogonRight	サービスとしてログオンします。
SeShutdownPrivilege	システムを無効にします。
SeSystemEnvironmentPrivilege	ファームウェアの環境の値を修正します。
SeSystemProfilePrivilege	システムパフォーマンスのプロファイルを実行します。
SeSystemtimePrivilege	システム時刻を変更します。
SeTakeOwnershipPrivilege	ファイルまたは他のオブジェクトの所有権を取得します。
SeUnsolicitedInputPrivilege	ターミナルデバイスから要求されていない入力を読み込みます。

メモ: コンピュータでユーザーアカウント制御 (UAC) が有効である場合は、管理者権限でこのユーティリティを実行してください。

p.13 の「[管理者権限での Enterprise Vault コマンドラインユーティリティの実行](#)」を参照してください。

EVservice

この章では以下の項目について説明しています。

- [EVservice](#) について
- [EVservice](#) の前提条件
- [EVservice](#) のインストール
- [EVservice](#) の構文
- [EVservice](#) の一覧ファイルの形式

EVservice について

EVservice は、ローカルコンピュータまたはリモートコンピュータで **Windows** サービスと **Enterprise Vault** タスクの起動と停止が可能なコマンドラインユーティリティです。**EVservice** は、一時停止と再開の要求を受け入れるサービスや **Enterprise Vault** タスクの一時停止と再開もできます。

EVservice は、バックアップ手順を自動化する場合に便利です。**Enterprise Vault** システムのバックアップを作成する前に、**Enterprise Vault** のサービスとタスクをシャットダウンする必要があります。バックアップが完了したら、サービスとタスクを再起動できます。

ほとんどのバックアップパッケージではバックアップジョブの前後でプログラムファイルやバッチファイルを実行できます。バックアップパッケージにこの機能が用意されている場合は、必要に応じて **EVservice** を使って **Enterprise Vault** の起動と停止を行うことができます。

次の点に注意してください。

- クラスタ環境で **Enterprise Vault** を実行している場合は、**EVservice** でタスクを制御できますが、サービスは制御できません。**VCS** クラスタでサービスを制御するには、『**Veritas Cluster Server 管理者ガイド**』で説明されている `hares` コマンドを使います。

- コンピュータでユーザーアカウント制御 (UAC) が有効である場合は、管理者権限でこのユーティリティを実行してください。
p.13 の「管理者権限での Enterprise Vault コマンドラインユーティリティの実行」を参照してください。

EVservice の前提条件

EVservice を使ってリモートコンピュータで Enterprise Vault タスクを管理する場合は、EVservice と同じコンピュータに Enterprise Vault 管理コンソールをインストールします。

リモートコンピュータのサービスまたは Enterprise Vault タスクを起動または停止する場合は、EVservice の実行に使うアカウントをサービスやタスクと同じコンピュータの Local Administrators グループのメンバーにする必要があります。リモートコンピュータの Local Administrators グループにアカウントを追加した場合、EVservice を使う前にコンピュータの再起動が必要になる場合があります。

EVservice のインストール

次のファイルを Enterprise Vault プログラムフォルダ (通常は C:\Program Files\Enterprise Vault) から、パスに定義したフォルダ (C:\WINDOWS\SYSTEM32 など) にコピーします。

- EVservice.exe
- EVRT.dll
- msvcp71.dll、msvcr71.dll

EVservice の構文

```
EVservice start|stop|pause|resume computer service  
[service...]
```

名前を指定したコンピュータで指定したサービスを起動、停止、一時停止、再開します。サービス名にスペースが含まれる場合は引用符 (") で囲みます。たとえば、次のコマンドはコンピュータ GAMMA で Enterprise Vault Shopping Service を起動します。

```
EVService start GAMMA "Enterprise Vault Shopping  
Service"
```

```
EVservice start|stop|pause|resume computer task [task...]
```

指定した Enterprise Vault タスクを名前を指定したディレクトリサービスコンピュータで起動、停止、一時停止、再開します。タスク名にスペースが含まれる場合は引用符 (") で囲

みます。たとえば、次のコマンドは OMEGA という名前のディレクトリサービスコンピュータで「Public Folder task for GAMMA」を起動します。

```
EVservice start OMEGA "Public Folder task for GAMMA"
```

```
EVservice start|stop|pause|resume computer listfile
```

ローカルまたはリモートの、名前を指定したテキストファイルに一覧表示されるサービスと Enterprise Vault タスクを起動、停止、一時停止、再開します。たとえば、次のコマンドは evservices_and_tasks.txt ファイルに一覧表示されるサービスとタスクを起動します。

```
EVservice start GAMMA evservices_and_tasks.txt
```

複数のコンピュータのエントリをファイルに記述できます。ただし、コマンドライン上で指定したコンピュータで動作するサービスに従ってコマンドが処理します。

p.77 の「EVservice の一覧ファイルの形式」を参照してください。

```
EVservice start|stop|pause|resume listfile
```

名前を指定したテキストファイルに一覧表示されるすべてのサービスと Enterprise Vault タスクを起動、停止、一時停止、再開します。

EVservice は一覧ファイルでの表示順でサービスとタスクを起動し、逆順で停止します。

EVservice の一覧ファイルの形式

一覧ファイルの形式は次のとおりです。

```
computer:service
```

EVservice ではコロン (:) を含まない行が無視されるので、必要に応じてコメントを追加できます。次に例を示します。

```
Enterprise Vault Service Startup List (comment line)
```

```
GAMMA:Enterprise Vault Directory Service
```

```
GAMMA:Enterprise Vault Indexing Service
```

```
GAMMA:Enterprise Vault Shopping Service
```

```
GAMMA:Enterprise Vault Storage Service
```

```
GAMMA:Mailbox Archiving Task for EXCH1
```

```
DELTA:Mailbox Archiving Task for EXCH2
```

次の点に注意してください。

- すべてのタスクを停止する最も簡単な方法は、タスク制御サービスを停止することです。各タスクのプロパティを編集し、起動の種類を「自動」に設定できます。これによって、タスク制御サービスを再起動すると、自動的にタスクが起動されます。詳しくは『Symantec Enterprise Vault 管理者ガイド』を参照してください。

- 前述のサンプルファイルを次のコマンドで使う場合は、コンピュータ DELTA のサービスには機能しません (コマンドラインに GAMMA を指定したため)。

```
EVservice start GAMMA evservices_and_tasks.txt
```

EVSPShortcutManager

この章では以下の項目について説明しています。

- [EVSPShortcutManager](#) について
- [EVSPShortcutManager](#) を実行するために必要な権限
- [EVSPShortcutManager](#) の構文
- [EVSPShortcutManager](#) の例

EVSPShortcutManager について

コマンドラインユーティリティである [EVSPShortcutManager](#) によって、SharePoint 内の Enterprise Vault ショートカットを管理できます。

[EVSPShortcutManager](#) を使って、次の操作を実行できます。

- HTML ショートカットを **SharePoint** 文書とまったく同様に動作する新しいショートカットに置き換えます。新しいショートカットでは、対応する元の文書と同じアイコンが使われます。
- アーカイブ済みアイテムを呼び戻し、対応する元の文書があるサイト全体、コレクション、またはライブラリのすべてのショートカットを置換します。

Enterprise Vault 8.0 SP3 より前の Enterprise Vault は HTML ショートカットを **SharePoint** に作成しました。Enterprise Vault 8.0 SP3 には新しい **SharePoint** ショートカットが導入され、シームレスなユーザー操作が可能になっています。

- ショートカットを編集することができ、変更内容は **SharePoint** に保存されます。
- ショートカットによって **SharePoint** ワークフローが壊れません。以前は、Enterprise Vault でワークフローアイテムがショートカットに置き換えられませんでした。
- 文書のアーカイブ時に文書への既存のリンクが壊れません。
- ショートカットで、アーカイブ済み文書の元のアイコンが使われます。

EVSPShortcutManager を実行するために必要な権限

EVSPShortcutManager の実行に使うアカウントには、次のロールが必要です。

- SharePoint サーバーに対するローカル管理者ロール。
- SharePoint 設定データベースに対する sysadmin サーバーロール。

アカウントには次のいずれかのロールも必要です。

- サイトコレクション管理者。このロールにより、EVSPShortcutManager はサイトコレクション内のすべてのサイトを処理できます。
- Web アプリケーション管理者。このロールにより、EVSPShortcutManager は Web アプリケーション内のすべてのサイトを処理できます。Web アプリケーションのポリシーを使ってフルコントロール権限を授与されます。
- サイト管理者。サイトに対するフルコントロール権限を授与されます。この場合、アカウントには、EVSPShortcutManager が処理するサイトのドキュメントライブラリに対するフルコントロール権限も必要です。

さらに、-server オプションを使う場合、アカウントには SharePoint_Config 設定データベースへのアクセス権が必要です。

EVSPShortcutManager の構文

```
EVSPShortcutManager operationlocation -url "url" [options]
```

表 16-1 に EVSPShortcutManager.exe で使うことができるパラメータの説明を示します。

表 16-1 EVSPShortcutManager.exe のパラメータ

引数	説明
<i>operation</i>	実行する処理を指定します。 指定できる <i>operation</i> は次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> ■ -convert。このオプションを使って、HTML ショートカットを SharePoint 文書とまったく同様に動作する新しいショートカットに置き換えます。 ■ -recall。このオプションを使って、ショートカットを対応するアーカイブ済み SharePoint 文書に置き換えます。このオプションを使う前に、-convert オプションを指定して EVSPShortcutManager を実行し、すべての HTML ショートカットを新しいショートカットで確実に置き換えます。

引数	説明
<i>location</i>	<ul style="list-style-type: none"> ■ <code>-server</code>。SharePoint サーバー全体を処理します。 <code>-server</code> を指定した場合は、URL を入力する必要はありません。 ■ <code>-site</code> ■ <code>-library</code>
<i>url</i>	<p>処理する SharePoint サイト、コレクション、ライブラリの URL。URL に空白文字が含まれる場合は、URL を引用符で囲むか、<code>%20</code> を使って各空白文字を表す必要があります。</p> <p><code>-server</code> を指定した場合は、URL を入力する必要はありません。</p>
<i>options</i>	<ul style="list-style-type: none"> ■ <code>-report</code>。EVSPShortcutManager をレポートモードで実行します。レポートモードでは EVSPShortcutManager はショートカットを処理しませんが、EVSPShortcutManager が通常どおりに実行された場合に行われる処理を示すログファイルを作成します。 ■ <code>-silent</code>。このオプションを使って、EVSPShortcutManager が確認メッセージを表示しないようにします。スクリプトで EVSPShortcutManager を使う場合は <code>-silent</code> を使います。 ■ <code>-log</code>。このオプションはフォルダパスとともに指定し、EVSPShortcutManager がそのフォルダにログファイルを作成するようにします。このオプションを省略した場合、EVSPShortcutManager は Enterprise Vault インストール先フォルダの SharePoint Logs\EVSPSShortcutManager サブフォルダにログファイルを作成します。 ログファイル名は EVSPShortcutManageryyyyMMddHHmmss.xml です。 yyyymmddHHmmss はログファイルが作成された日時を示します。 ■ <code>-norecurse</code>。このオプションを <code>-site</code> とともに使って、サブサイトの処理を回避します。このオプションを指定しないかぎり、EVSPShortcutManager はデフォルトでサブサイトを処理します。 <p>必要に応じてオプションを組み合わせたことができます。たとえば、<code>-report</code> と <code>-log</code> の両方を使って、EVSPShortcutManager をレポートモードで実行し、ログファイルの場所を指定できます。</p>

メモ: コンピュータでユーザーアカウント制御 (UAC) が有効である場合は、管理者権限でこのユーティリティを実行してください。

p.13 の「[管理者権限での Enterprise Vault コマンドラインユーティリティの実行](#)」を参照してください。

EVSPShortcutManager の例

- SharePoint Server をスキャンして HTML ショートカットを検索し (ショートカットの変換なし)、ログファイルをデフォルトのフォルダに配置する場合:

```
EVSPShortcutManager -convert -server -report
```
- SharePoint Server をスキャンして HTML ショートカットを検索し、ログファイルを C:¥MyLogs という名前のフォルダに配置する場合:

```
EVSPShortcutManager -convert -server -report -log C:¥MyLogs
```
- 「Financial Documents」という名前のサイトライブラリで HTML ショートカットを新しいショートカットに変換する場合:

```
EVSPShortcutManager -convert -library -url "http://mySite/Financial Documents"
```
- ショートカットを mySite という名前のサイトの対応するアーカイブ済み文書に置き換え、サブサイトを処理しない場合:

```
EVSPShortcutManager -recall -site -norecurse -url http://mySite
```

EVSVR

この章では以下の項目について説明しています。

- [EVSVR について](#)
- [EVSVR の起動](#)
- [EVSVR コマンド](#)
- [EVSVR アプリケーションの状態](#)
- [EVSVR 操作ファイルの作成](#)
- [チェックポイントを有効にした EVSVR 操作ファイルの編集](#)
- [EVSVR 操作の実行](#)
- [EVSVR 操作の設定について](#)
- [EVSVR 出力ログファイルの表示](#)
- [対話モードでの EVSVR の実行](#)
- [CAB コレクションを処理する場合の EVSVR パフォーマンスの向上](#)

EVSVR について

EVSVR は、Enterprise Vault ストレージのレポート、確認、修復を行うことができるコマンドラインユーティリティです。

表 17-1 に、EVSVR によって実行できる操作の種類の大略を示します。

表 17-1 EVSVR 操作の種類

操作の種類	説明
レポート	<p>この操作は、以下をカウントまたは一覧表示します。</p> <ul style="list-style-type: none">■ ボルトストアパーティションのアイテム。■ ボルトストアデータベースとフィンガープリントデータベースのレコード。■ Enterprise Vault ディレクトリデータベースの特定のレコード。 <p>たとえば、レポート操作では次の情報を表示することができます。</p> <ul style="list-style-type: none">■ 過去 2 日以内にアーカイブされた、サイトのボルトストア内のすべてのファイル数。■ ボルトストアデータベース内の各保存セットレコードの詳細。■ ディレクトリデータベースのアーカイブとアーカイブフォルダの情報。
確認	<p>この操作では、次の 1 つ以上が実行されます。</p> <ul style="list-style-type: none">■ 参照するボルトストアオブジェクトに対して、ボルトストアデータベースとフィンガープリントデータベースのレコードが確認されます。■ ボルトストアオブジェクトの有効なレコードがボルトストアデータベースとフィンガープリントデータベースに存在することが確認されます。■ ボルトストアデータベースのレコードが、それに相当するフィンガープリントデータベースのレコードに対して確認されます。■ ボルトストアデータベースのレコードが、それに相当するディレクトリデータベースレコードに対して確認されます。■ ボルトストアデータベースの作成日がないコレクションレコードの数を判断します。

操作の種類	説明
修復	<p>この操作では、次の 1 つ以上が実行されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ボルトストアオブジェクトを使って、ボルトストアデータベース内、およびボルトストアデータベースとフィンガープリントデータベース間でレコードが修復されます。 ■ 正しく確認されない SIS パーツがブラックリストに登録されます。SIS パーツをブラックリストに登録した後で、同じ SIS パーツの新しいアイテムをアーカイブすると、Enterprise Vault によって新しい SIS パーツファイルがディスクに作成されます。 ■ 消失したアイテムに関連付けられたボルトストアデータベースのレコードとフィンガープリントデータベースのレコードが削除されます。 ■ ボルトストアデータベースとフィンガープリントデータベース内の消失した保存セットと SIS パーツのレコードが再作成されます。 ■ ボルトストアデータベースの作成日がないコレクションレコードの作成日を設定します。 ■ ディレクトリデータベース内に対応する情報が存在するときに、ボルトストアデータベース内の消失したアーカイブとアーカイブフォルダ情報が再作成されます。 ■ Exchange メールボックスアーカイブとファイルシステムアーカイブの場合、ボルトストアデータベース内に対応する情報が存在するときは、ディレクトリデータベース内の消失したアーカイブとアーカイブフォルダ情報が再作成されます。 ■ Exchange メールボックスアーカイブとファイルシステムアーカイブの場合、ディレクトリデータベースとボルトストアデータベースの両方から情報が消失しているときは、消失したアーカイブとアーカイブフォルダ情報が再作成されます。また、EVSVR は、必要な情報を対象の Exchange システムボリュームまたはファイルシステムボリュームから取得できます。

EVSVR 操作は、CIFS、NTFS、Centera パーティション、ストリーマストレージデバイスのパーティションで実行できます。また、収集済みのアイテムと未収集のアイテムの両方で実行できます。EVSVR 操作は、実行前に操作ファイルで定義する必要があります。

p.89 の「EVSVR 操作ファイルの作成」を参照してください。

EVSVR のチェックポイント機能について

あらゆる EVSVR 操作でチェックポイント機能を任意に有効にできます。この機能により、EVSVR は操作の進行に伴う、現在の状態のスナップショットを作成することになります。そして、何らかの理由により操作が停止したり失敗した場合、その操作を初めからやり直す必要がなくなり、最新のチェックポイントから続行することができます。最初から再実行すると非常に時間がかかると思われる大規模なデータに対して操作を実行しなくてはならない場合に、この機能は便利です。

EVSVR のチェックポイントは次の操作をサポートします。

操作	いくつかの EVSVR 操作は複数または単一の操作を結合します。チェックポイント操作は、それが停止したときに EVSVR が実行していた操作から続行します。
コンテナ	EVSVR は、1 つの Enterprise Vault と 1 つ以上のボルトストアグループ、ボルトストアおよびパーティション (コンテナとして参照される) 上で操作を実行します。チェックポイント操作は、EVSVR が停止したときに処理していたコンテナから操作を続行します。
ステップ	いくつかの EVSVR 操作プロセスには複数のステップが含まれます。チェックポイント操作は、それが停止したときに EVSVR が実行していたステップから続行します。
フェーズおよびサブステップ	EVSVR は複数のフェーズまたはサブステップのある操作のステップを実行します。チェックポイント操作は、それが停止したときに EVSVR が実行していたフェーズまたはサブステップから続行します。

EVSVR は Enterprise Vault パーティションおよびデータベースのスキャン内の位置のチェックポイントを作成しません。したがって、単一の、単一コンテナのワンステップ操作のためにチェックポイントを有効にすることができますが、それは効果をもたらしません。

CIFS パーティションと NTF パーティションでの EVSVR 操作の実行に関する注意事項

Enterprise Vault Migrator 以外の移行を使ってアーカイブされたデータをセカンダリストレージに移行する場合は、EVSVR を実行すると移行した多数の CAB ファイルが一時的に呼び戻されることがあります。呼び戻されたファイルが多くのパーティション領域を占有し、パーティションに空きがない原因になる可能性があります。この問題は Enterprise Vault Migrator を使う場合には発生しません。Enterprise Vault は、パーティションの [呼び戻されたファイルのキャッシュ期間] プロパティの設定方法に従ってこれらの一時ファイルを削除します。この設定のデフォルト値は 7 日です。

EVSVR を実行する前に、関連する Enterprise Vault パーティションが存在するデバイスに十分な空き容量があることを確認します。[呼び戻されたファイルのキャッシュ期間] プロパティの値を小さくすると、呼び戻されたファイルを Enterprise Vault が維持する期間を短縮できます。

キャッシュ期間が経過すると、呼び戻されたファイルはコレクション処理によって削除されます。パーティションプロパティの [コレクション] ページにある [今すぐ実行] オプションを使って収集処理を手動でトリガできます。

EVSVR の起動

EVSVR は、Enterprise Vault サーバーでボルトサービスアカウントとして実行する必要があります。サーバーは、処理を行うデータが含まれる Enterprise Vault サイトに存在する必要があります。

メモ: コンピュータでユーザーアカウント制御 (UAC) が有効である場合は、管理者権限でこのユーティリティを実行してください。

p.13 の「[管理者権限での Enterprise Vault コマンドラインユーティリティの実行](#)」を参照してください。

EVSVR を起動する方法

- 1 ボルトサービスアカウントとして Enterprise Vault サーバーにログオンします。
- 2 次のいずれかの操作を行います。
 - Windows エクスプローラで Enterprise Vault プログラムフォルダ (たとえば、C:\Program Files (x86)\Enterprise Vault) にナビゲートして、evsvr.exe をダブルクリックします。
 - コマンドプロンプトウィンドウを開き、Enterprise Vault プログラムフォルダにフォルダを変更します。次のコマンドを入力します。

```
EVSVR
```

EVSVR によって表示される起動情報には、次の内容が含まれます。

- MAPI (Exchange) と Domino のランタイムコンポーネントが利用できない場合は、その状況に関する情報。保存セットの取り込みが必要な EVSVR 操作を実行する場合は、適切なランタイムコンポーネントがインストールされていることを確認する必要があります。
 - EVSVR の実行に使っているユーザーアカウント名 (ボルトサービスアカウント)。
 - Enterprise Vault サイトの名前。
 - EVSVR のバージョン番号。
- 3 EVSVR> プロンプトでコマンドを入力します。

EVSVR コマンド

表 17-2 は EVSVR> プロンプトで入力できるコマンドをリストします。

表 17-2 EVSVR コマンド

コマンド	効果
continue	<p>利用可能な場合は、最新のチェックポイントから現在の操作ファイルの実行を継続します。このコマンドは操作のチェックポイントを有効にした場合のみ効果があります。</p> <p>continue コマンドは、チェックポイントを初めて有効にして操作を開始する場合は start コマンドに相当します。</p>
edit	<p>現在ロードされている操作ファイルの編集、または新しい操作ファイルの作成を行うことができるように[EVSVR Operations]ダイアログボックスを開きます。</p> <p>p.89 の「EVSVR 操作ファイルの作成」を参照してください。</p>
load [<i>file</i>]	<p>操作ファイルをロードします。ファイルを指定しないと、EVSVR によってファイルの選択を求めるメッセージが表示されます。実行前に操作ファイルをロードする必要があります。</p> <p>すでに操作ファイルがロードされている場合、そのファイルは EVSVR によってロード解除され、指定したファイルがロードされます。</p>
unload	<p>現在の操作ファイルをロード解除し、他の処理は実行しません。</p>
start	<p>現在の操作ファイルの実行を最初から開始します。操作のチェックポイントを有効にした場合は、このコマンドはチェックポイント情報をリセットし、最初から操作を開始します。</p>
stop	<p>現在の操作ファイルの実行を停止します。実行中の処理は、EVSVR によって停止前に完了され、実行した処理のレポートファイルが生成されます。</p>
pause	<p>現在の操作ファイルの実行を一時停止します。</p>
resume	<p>現在の操作ファイルの実行を再開します。</p>
restart	<p>現在の操作ファイルの実行を停止し、再度最初から開始します。</p>
status	<p>アプリケーションの状態など、EVSVR の現在の状態を表示します。</p> <p>p.89 の「EVSVR アプリケーションの状態」を参照してください。</p>
cls	<p>EVSVR ウィンドウをクリアします。</p>
exit または quit	<p>EVSVR を中止します。</p>

コマンド	効果
interactive	<p>EVSVR を対話モードで実行します。このモードでは、次のような多数の特殊な処理を実行できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 指定したアーカイブ済みアイテムの保存セットと、関連付けされた SIS パーツの取得。 ■ 指定した SIS パーツの取得。 ■ EMC Centera データ Blob から複数の保存セットを抽出します。 ■ 指定した保存セットのすべての部分が Enterprise Vault によって格納されている場所を一覧表示します。 <p>p.126 の「対話モードでの EVSVR の実行」を参照してください。</p>
help または ?	EVSVR コマンドに関するヘルプを画面に表示します。

EVSVR アプリケーションの状態

表 17-3 に、EVSVR を実行できるアプリケーションの状態を示します。

表 17-3 EVSVR アプリケーションの状態

状態	説明
アクティブ	EVSVR は操作ファイルを実行しています。
DialogueRunning	EVSVR は[EVSVR Operations]ダイアログボックスを表示しています。
未準備	操作ファイルがロードされていません。この状態は、引数一覧なしで EVSVR を起動した場合の初期状態です。
一時停止	EVSVR は操作ファイル実行中に一時停止しています。
準備完了	操作ファイルがロードされています。

アプリケーションの状態によって、入力できる EVSVR コマンドが決まります。たとえば、stop コマンドは EVSVR の状態が[アクティブ]または[一時停止]であるときにのみ有効です。現在の状態に対して無効なコマンドを入力すると、そのことを通知するエラーメッセージが EVSVR によって表示されます。

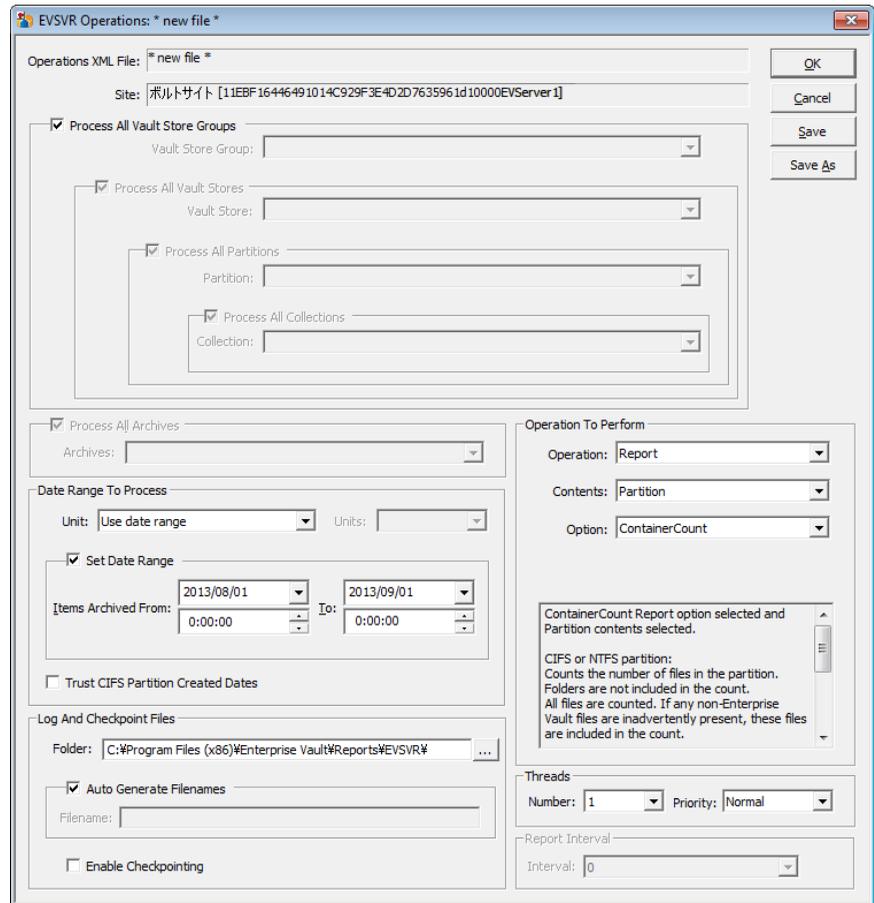
EVSVR の現在の状態を判断するには、EVSVR> プロンプトで status を入力します。

EVSVR 操作ファイルの作成

EVSVR 操作を実行する前に、操作ファイルを作成する必要があります。操作ファイルは、EVSVR が実行する処理と処理対象のデータセットを定義する XML ファイルです。

操作ファイルは、[EVSVR Operations]ダイアログボックスから必要なオプションを選択して作成します。

図 17-1 [EVSVR Operations]ダイアログボックス



このダイアログボックスでは次を定義することができます。

- 処理対象のストレージデータとディレクトリデータ。次のいずれかに関連付けされたデータが EVSVR によって処理されます。
 - Enterprise Vault サイトのすべてのポルトストアグループにある、すべてのポルトストアのすべてのパーティション。
 - 1 つのポルトストアグループ内にある、すべてのポルトストアのすべてのパーティション。
 - 1 つのポルトストア内のすべてのパーティション。

- 1 つのパーティション。
- 処理する特定のアーカイブ。これは、EVSVR がボルトストアデータベースまたはディレクトリデータベース内のアーカイブ情報を処理するときのみ適用されます。
- 処理するアーカイブ済みアイテムの日付範囲。
- 実行する操作。
- 出力ログファイルの場所。ログファイルには操作の結果が含まれます。
- 使用するスレッドの数と優先度。

メモ: 実行するように選択した操作に応じて、以下のオプションのいくつかは使用不可になることがあります。

操作ファイルを作成する方法

- 1 EVSVR> プロンプトで、edit を入力して[EVSVR Operations]ダイアログボックスを開きます。
次の点に注意してください。
 - [Operations XML File]には、現在の操作ファイルの名前が表示されます。
 - [Site]には、データを処理する対象の Enterprise Vault サイトの名前が表示されます。これは、Enterprise Vault サーバーが属するサイトです。サイトは変更できません。
- 2 処理するストレージデータを指定します。デフォルトでは、操作ファイルは、Enterprise Vault サイトのすべてのボルトストアグループにある、すべてのボルトストアのすべてのパーティションのデータを EVSVR によって処理するように指定します。ただし、次のようにして、処理するデータの量を最小限に抑えることができます。
 - 1 つのボルトストアグループを処理する場合は、[Process All Vault Store Groups]のチェックマークをはずしてから、目的のグループを選択します。
 - 1 つのボルトストアを処理する場合は、[Process All Vault Stores]のチェックマークをはずしてから、目的のボルトストアを選択します。
 - 1 つのパーティションを処理する場合は、[Process All Partitions]のチェックマークをはずしてから、目的のパーティションを選択します。
- 3 その他の設定に必要な値を次のように選択します。

**Process All
Archives**

デフォルトでは、選択したストレージデータセット内のすべてのアーカイブが EVSVR によって処理されます。個々のアーカイブを選択するには、[Process All archives]のチェックマークをはずしてから、アーカイブを選択します。

多数のアーカイブが存在する場合は、ダイアログボックスにフォームが表示され、アーカイブ名によってフィルタ処理することができます。

Date Range To Process

次のいずれかの操作を行います。

- 日付範囲を指定しないデフォルト設定を使います。
- [Unit]フィールドの時間単位を選択し、次に[Units]フィールドで単位の数を指定します。たとえば、[Hour]と[2]を選択すると、EVSVR 操作の開始前 2 時間以内にアーカイブされたアイテムが EVSVR によって処理されます。
- [Unit]フィールドで[Use date range]を選択してから、[Set Date Range]にチェックマークを付け、[Items Archived From]フィールドで日付範囲を指定します。

日付範囲を設定すると、[Trust CIFS Partition Created Dates]オプションが利用可能になります。CIFS パーティションをスキャンする操作では、このオプションを使うと EVSVR がパーティションをスキャンする速度を上げることができます。ただし、スキャンするすべてのフォルダとファイルの作成日が正確であることを確認している必要があります。これらの日付は、EVSVR が特定の古いファイルをスキャンするタイミングを決定する上で重要なロールを果たします。

- **Enterprise Vault 2007** またはそれ以前で作成された各保存セット(.dvs)ファイルについて、EVSVR は作成日を使って、ファイル内最初のアーカイブ済みアイテムの日付を決定します。この保存セットファイルの最終更新日が、Enterprise Vault が共有先としてファイルに追加した最後のアーカイブ済みアイテムの日付になります。

バックアップからのパーティションの復元中に保存セットファイルをコピーまたは移動した場合、保存セットファイルの作成日に変更されている可能性があります。一方、作成日が信頼できるときに、その作成日が EVSVR で指定する日付範囲の外にある場合、スキャンからそれらのファイルを除外しても構わず、またそれで実行速度を上げることができます。

- **Enterprise Vault 8.0** 以上で作成された各保存セットファイルについて、EVSVR はファイルの最終更新日とフォルダパス内の日付の両方を参照して、アーカイブ日を決定します。これらの日付はバックアップと復元操作の間保持されるため、各アイテムのアーカイブ日を決定するためのより堅牢な方法となります。

一部の EVSVR 操作では、ボルトストアパーティション内のファイルの代わりにデータベースレコードをスキャンします。たとえば、これは[ArchiveObjects]確認操作と[DatabaseLinkages]確認操作に当てはまります。これらの操作は、[Trust CIFS Partition Created Dates]設定を無視します。

日付範囲を選択するかどうかは、対処する問題の重大度によって異なります。回復手順の一環として大量の数のアイテムを修復する場合は、日付範囲を設定しないことが重要です。これによって EVSVR で可能な限り多くのアイテムを修復できます。一方で、少数のアイテムまたは範囲を把握しているアイテムを処理する場合は、日付範囲を設定することを推奨します。

たとえば、修復操作が多数のアイテムの修復に失敗したとします。失敗したすべてのアイテムを含む日付範囲に対して操作を繰り返すと、問題の原因を早く特定できる可能性があります。日付範囲を指定せずに操作を繰り返すと、完了までに何日もかかる場合があります。

通常、重要でない操作 (特に、多数のアーカイブ済みアイテムを含むデータセットを選択する場合には、短い日付範囲を選択することを推奨します。たとえば、先週のアーカイブ済みアイテムのみを確認するために、毎日の確認操作を実行する場合などです。

Operation To Perform

操作の種類 ([Report]、[Verify]、[Repair]) を選択し、次に必要なオプションを設定します。

p.96 の「EVSVR 操作の設定について」を参照してください。

ログファイルとチェックポイントファイル

次を指定します。

- 出力ログファイルを保存するフォルダ。デフォルトでは、EVSVR は Enterprise Vault プログラムフォルダの Reports\EVSVR サブフォルダにファイルを保存します。ログファイルがすでに存在する場合、EVSVR は新しい情報をそのログファイルに追記します。
- ログファイルの名前と、チェックポイントファイルの名前 (チェックポイントが有効な場合)。[Auto Generate Filename] にチェックマークを付けると、EVSVR は次のデフォルトのファイル名を使います。
 EVSVR_yyyymmddhhmmss.Log
 yyyymmddhhmmss は、EVSVR がログファイルを作成した日時を示します。

チェックポイント操作を有効化すると、EVSVR はログファイルと同じフォルダ内の XML ファイルにチェックポイント情報を格納します。チェックポイントファイルの名前は、ログファイルの名前と一致しますが、サフィックス _Checkpoint を含みます。たとえば、ログファイルの名前を EVSVR_Logfile.log に設定した場合は、対応するチェックポイントファイルは EVSVR_Logfile_Checkpoint.xml という名前になります。

スレッド

EVSVR 操作に使うスレッドの数を指定します。最大数は 16 です。

すべての検証操作と修復操作において複数のスレッドを使える点は利点ですが、**DatabaseReferences** 修復操作の場合は特に有用です。ほとんどのレポート操作は、複数のスレッドを要求した場合でも、必ず 1 つのスレッドを使って実行されます。

スレッドの優先度は [Normal]、[Low]、[High] で指定します。

[DatabaseReferences] 修復操作に対してスレッドの優先度を [High] に設定した場合には、EVSVR は自動的に優先度レベルを [Normal] にリセットします。これは、リソースのスケジュールとスレッドの競合の問題が発生する可能性を阻止するために設計されています。これらの問題は、断続的であっても、EVSVR で特定のデータベース参照の修復が試行されるときにエラーにつながる場合があります。

- 4 次のいずれかをクリックして、指定した値を操作ファイルに保存します。
 - [Save]。選択した設定と値を操作ファイルに保存します。以前にファイルを保存した場合は、そのファイルが EVSVR によって上書きされます。それ以外の場合、ファイル名を求めるメッセージが EVSVR によって表示されます。
 - [Save As]。選択したパラメータと値を操作ファイルに保存します。ファイル名を求めるメッセージが EVSVR によって表示されます。
- 5 操作を定義したら、次のいずれかをクリックして編集モードを終了し、EVSVR> プロンプトに戻ります。
 - [OK]。最後に保存した操作ファイルを終了してロードします。最後に保存した後で加えた変更は、すべて失われます。
 - [Cancel]。操作ファイルをロードせずに終了します。最後に保存した後で加えた変更は、すべて失われます。

チェックポイントを有効にした EVSVR 操作ファイルの編集

チェックポイントを有効にした操作が停止した場合、操作ファイルの設定を編集できます。ただし、選択した操作の種類 (レポート、確認、または修復) またはオプションを変更した場合、最新のチェックポイントからの操作ファイルの実行を続行できなくなります。この場合、操作を最初から開始する必要があります。EVSVR の出力ログファイルには、次のように報告されます。

```
Operation and Option mismatch:
Operation file: Operation: Repair, Option: Database Linkages
Checkpoint file: Operation: Repair, Option: Repair Fingerprint and Vault Store Database References
The operation will not be performed
```

ただし、日付範囲やスレッド数のような他の操作プロパティを変更することは可能で、最新のチェックポイントからの操作を続行できます。

EVSVR 操作の実行

操作ファイルは、作成後、次のいずれかの方法で実行できます。

- EVSVR> プロンプトで、load と入力し、ロードする操作ファイルを選択します。
start と入力して処理を開始します。
- [EVSVR Operations] ダイアログボックスで、[OK] をクリックします。EVSVR によって、[EVSVR Operations] ダイアログボックスが閉じられ、現在保存されている操作ファイルがロードされて実行できる状態になります。
start と入力して処理を開始します。
- MS-DOS コマンドプロンプトで、次のコマンドを入力します。
evsvr {-c|-r} operation_file_path
パラメータについて次に説明します。

-c	指定された操作ファイルをロードして最新のチェックポイントからの実行を(利用可能な場合)継続し、EVSVR を中止します。次に例を示します。 evsvr -c C:¥op1.xml
-r	指定された操作ファイルをロードし、実行を最初から開始し、次に EVSVR を中止します。次に例を示します。 evsvr -r C:¥op2.xml
operation_file_path	操作ファイルに絶対パスを指定します。パスにスペースが含まれる場合は引用符 ("") で囲みます。次に例を示します。 evsvr -r "C:¥Operation Files¥op3.xml"

必要な場合、バッチファイルに EVSVR コマンドを追加できます。

特定の操作では、データセットのサイズ、日付範囲、操作の種類などの要因によって、完了に時間がかかることがあります。必要に応じて、stop、pause、resume、restart コマンドを使用して操作の実行を制御できます。処理が中断されない限り、EVSVR は操作が終了するまで処理を続行します。

EVSVR 操作の設定について

レポート、確認、修復操作を選択できます。すべての種類の操作で、操作の結果を含むログファイルが生成されます。

EVSVR でのレポート操作

EVSVR レポート操作によって、次の件数または一覧を表示できます。

- ボルトストアパーティションのアイテム。
- ボルトストアデータベースとフィンガープリントデータベースのレコード。
- Enterprise Vault ディレクトリデータベースの特定のレコード。

オプション設定によって、アイテム数またはアイテムの一覧をレポートに含めるかどうかが決まります。また、内容設定として[パーティション]を選択した場合は、EVSVR が集計または表示するデータの種類も決まります。

内容設定によって、EVSVR がレポートするデータの種類が決まります。表 17-4 に、選択可能な設定を示します。

表 17-4 レポート操作の内容設定

内容設定	処理
Directory	ディレクトリデータベースのアーカイブレコードとアーカイブフォルダレコードについてレポートします。
Directory and VaultStore	ディレクトリデータベースのアーカイブレコードとアーカイブフォルダレコード、およびボルトストアデータベースの ArchivePoint レコードと Vault レコードについてレポートします。
Fingerprint	フィンガープリントデータベースのレコード (SIS パーツのレコード) についてレポートします。
Partition	パーティションデータ (保存セット、SIS パーツ、Centera Clip) についてレポートします。 次の点に注意してください。 <ul style="list-style-type: none"> ■ Enterprise Vault Migrator 以外の移行を使って、セカンダリストレージへの収集処理と移行の両方を有効にした場合には、この操作は CIFS と NTFS のパーティションでサポートされません。これは Enterprise Vault 以外の移行は移行されたデータをスキャンする方法を提供しないためです。 ■ EMC Centera パーティションでこの操作を実行する場合は、Centera に接続する Centera プロファイルでクエリー機能が有効になっていることを確認する必要があります。EVSVR ではこの機能が有効かどうかを確認し、有効でない場合はその事実を EVSVR ログファイルでレポートします。 クエリー機能が無効になっている場合は、Centera CLI または Centera Viewer を使用して Show Profile コマンドを実行します。このコマンドでは、Centera プロファイルの現在の機能を一覧表示します。その後 Update Profile コマンドを実行して有効または無効にできます。

内容設定	処理
StorageQueue	設定すると、Enterprise Vault ストレージキューのファイルについてレポートします。ボルトストアのプロパティでは、Exchange サーバーアイテムのセーフコピーを元の場所に保持せず、ストレージキューに登録します。
VaultStore	ボルトストアデータベースレコード (Enterprise Vault ストレージキューの保存セット情報、ArchivePoint レコード、ボルトレコード、セーフコピー) についてレポートします。

EVSVR ディレクトリレポートオプション

ディレクトリデータベース内の Archive レコードと ArchiveFolder レコードのレポートを取得するには、[内容]設定として[ディレクトリ]を選択します。

「表 17-5」に、[内容]設定として[ディレクトリ]を選択したときに使うことができる[オプション]設定を一覧で示します。

表 17-5 [ディレクトリ]レポートの[オプション]設定

オプション設定	処理
ArchiveCount	選択したボルトストアについて、アーカイブレコードとアーカイブフォルダレコードの件数をカウントします。
Archives	選択したボルトストアについて、アーカイブレコードとアーカイブフォルダレコードを示します。

EVSVR のディレクトリとボルトストアレポートオプション

ディレクトリデータベースとボルトストアデータベースの両方に含まれているアーカイブレコードのレポートを取得するには、[内容]設定として[ディレクトリとボルトストア]を選択します。

「表 17-6」に、[内容]設定として[ディレクトリとボルトストア]を選択したときに使うことができる[オプション]設定を一覧で示します。

表 17-6 [ディレクトリとボルトストア]レポートの[オプション]設定

オプション設定	処理
ArchiveCount	<p>選択したボルトストアについて、次をカウントします。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ディレクトリデータベースのアーカイブレコードとアーカイブフォルダレコードの数。 ■ ボルトストアデータベースの ArchivePoint レコードと Vault レコードの数。 <p>これらのレコードはボルトストアのすべてのアーカイブとアーカイブフォルダを一覧表示します。それらはまた各アーカイブフォルダの親のアーカイブの情報を提供します。</p>
Archives	<p>選択したボルトストアについて、次の情報を示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ディレクトリデータベースのアーカイブレコードとアーカイブフォルダレコード。 ■ ボルトストアデータベースの ArchivePoint レコードと Vault レコード。 ■ 各アーカイブとアーカイブフォルダの保存セットの数。

EVSVR フィンガープリントレポートオプション

フィンガープリントデータベースのレコードのレポートを取得するには、[内容]設定として[フィンガープリント]を選択します。

「表 17-7」に、[内容]設定として[フィンガープリント]を選択したときに使うことができる[オプション]設定を一覧で示します。

表 17-7 [フィンガープリント]レポートの[オプション]設定

オプション設定	処理
EVObjectCount	<p>すべてのメンバー表で、非参照、非共有、共有の SIS パーツの数が集計されます。</p>

オプション設定	処理
EVOjects	<p>すべてのメンバー表の SIS パーツの各レコードについて、次のような情報が表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ SIS パーツ ID ■ アーカイブした日付 ■ コレクション ID ■ 元のサイズ (バイト) ■ 格納サイズ (バイト) ■ 参照数 (Enterprise Vault がこの SIS パーツを共有する回数) ■ 変換された内容の格納サイズ (バイト) ■ 変換された内容の処置 (バイト) ■ ブラックリストに登録された理由 (該当する場合)

EVSVR パーティションレポートオプション

選択したデータサイロのボルトストアパーティションのレポートを取得するには、[内容]設定として[パーティション]を選択します。

「表 17-8」に、[内容]設定として[パーティション]を選択したときに使うことができる[オプション]設定を一覧で示します。

表 17-8 [パーティション]レポートの[オプション]設定

オプション設定	CIFS または NTFS パーティション	ストリーマパーティション	EMC Centera パーティション
ContainerCount	<p>パーティション内のファイル数が集計されます。この数にフォルダは含まれません。</p> <p>すべてのファイルが集計されます。Enterprise Vault 以外のファイルが間違えて存在する場合、そのファイルは数に含まれます。</p>	<p>コンテンツストリーム数が集計されます。これには Enterprise Vault 以外のアプリケーションによって作成されたものも含まれます。</p>	<p>クリップ数が集計されます。これには Enterprise Vault 以外のアプリケーションによって作成されたものも含まれます。</p>

オプション設定	CIFS または NTFS パーティション	ストリーマパーティション	EMC Centera パーティション
<p>EVContainerCount</p>	<p>パーティション内の Enterprise Vault ファイルの数が集計されます。</p> <p>Enterprise Vault 以外のファイルが間違えて存在する場合、そのファイルは数に含まれません。</p> <p>この数に含まれるファイルの拡張子は次のとおりです。</p> <p>.ARCHCAB、.ARCHDVF、 .ARCHDVFCC、.ARCHDVFSP、 .ARCHDVS、.ARCHDVSCC、 .ARCHDVSSP、.CAB、.DVF、 .DVFCC、.DVFSP、.DVS、 .DVSCC、.DVSSP</p>	<p>Enterprise Vault によって作成されたコンテンツストリームの数が集計されます。</p>	<p>Enterprise Vault によって作成されたクリップの数が集計されます。</p>
<p>EVObjectCount</p>	<p>Enterprise Vault 保存セットと SIS パーツの数が集計されます。これらのファイルの拡張子は次のとおりです。</p> <p>.CAB、.DVF、.DVFCC、.DVFSP、 .DVS、.DVSCC、.DVSSP</p>	<p>現在のパーティションのために Enterprise Vault によって作成されたコンテンツストリームの数が集計されます。</p>	
<p>Containers</p>	<p>パーティション内のすべてのファイルの絶対パスが表示されません。フォルダは表示されません。</p> <p>すべてのファイルが表示されます。これには、.CAB ファイル内のファイルと、保存セットファイル内の保存セットも含まれます。</p> <p>Enterprise Vault 以外のファイルが間違えて存在する場合、そのファイルは含まれます。</p>	<p>すべてのアプリケーションによって作成されたコンテンツストリームに関する情報が表示されません。</p> <p>レポートには、Enterprise Vault によって作成されたコンテンツストリームに関する追加情報が表示されます。</p>	<p>すべてのアプリケーションによって作成されたクリップに関する情報が表示されます。</p> <p>レポートには、Enterprise Vault によって作成されたクリップに関する追加情報が表示されます。</p>

オプション設定	CIFS または NTFS パーティション	ストリーマパーティション	EMC Centera パーティション
EVContainers	<p>パーティション内の各 Enterprise Vault ファイルの絶対パスが表示されます。フォルダは表示されません。</p> <p>.CAB ファイル内のファイルと、保存セットファイル内の保存セットが含まれます。</p> <p>Enterprise Vault 以外のファイルが間違えて存在する場合、そのファイルは含まれません。</p> <p>この一覧に含まれるファイルの拡張子は次のとおりです。</p> <p>.ARCHCAB、.ARCHDVF、 .ARCHDVFCC、.ARCHDVFSP、 .ARCHDVS、.ARCHDVSCC、 .ARCHDVSSP、.CAB、.DVF、 .DVFCC、.DVFSP、.DVS、 .DVSCC、.DVSSP</p>	Enterprise Vault によって作成されたコンテンツストリームに関する情報が表示されます。	Enterprise Vault によって作成されたクリップに関する情報が表示されます。
EVObjects	Enterprise Vault 保存セットと SIS パーツの絶対パスが表示されます。これらのファイルの拡張子は次のとおりです。		
EVBVaultStoreObjects	<p>.CAB、.DVF、.DVFCC、 .DVFSP、.DVS、.DVSCC、.DVSSP</p>	Enterprise Vault が現在のパーティションのために作成したコンテンツストリームについての情報をリストします。	<p>Enterprise Vault によって作成されたクリップに関する情報が表示されます。</p> <p>レポートに複数のボルトストアが含まれる場合、EVSVR はクリップをボルトストア別に表示します。</p> <p>コレクションのクリップの場合、レポートにはクリップの保存セットに関する情報が含まれます。</p>

メモ: レポートには、指定した基準に一致するアイテムのみの数または一覧が表示されます。たとえば、CIFS ボルトストアに関する [ContainerCount] レポートには、選択した各パーティションに対して、指定した日付範囲内にアーカイブされたファイルの数が表示されます。

EVSVR StorageQueue レポートオプション

Exchange サーバー項目のセーフコピーを、それらの元の場所ではなく指定したストレージキューに格納するようにボルトストアを設定した場合、[内容]設定として[StorageQueue]を選択することにより、ストレージキューファイルに関するレポートを取得できます。

表 17-10 に、[内容]設定として[StorageQueue]を選択したときに使うことができる[オプション]設定の一覧を示します。

表 17-9 StorageQueue レポートのオプション設定

オプション設定	処理
QueuedItemCount	各ストレージキューファイル内のストレージキュー(.EVSQ)ファイル、大きいファイル(.DVF)ファイル、および保存セットを数えます。
QueuedItems	各ストレージキューファイル内のストレージキュー(.EVSQ)ファイル、大きいファイル(.DVF)ファイル、および保存セットをリストに示します。

EVSVR ボルトストアレポートオプション

ボルトストアデータベースのレコードのレポートを取得するには、[内容]設定として[ボルトストア]を選択します。

「表 17-10」に、[内容]設定として[ボルトストア]を選択したときに使うことができる[オプション]設定を一覧で示します。

表 17-10 [ボルトストア]レポートの[オプション]設定

オプション設定	処理
ArchiveCount	各ボルトストアについて、ボルトストアデータベースの ArchivePoint (アーカイブ) レコードと Vault (アーカイブフォルダ) レコードの件数をカウントします。
アーカイブ	ボルトストアデータベースの ArchivePoint レコードと Vault レコードに関する次の情報を提供します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 各 ArchivePoint に属する Vault レコード。 ■ 各アーカイブとアーカイブフォルダにアーカイブされた保存セットの数。 ■ 各ボルトストアに割り当て済みである Vault レコードと ArchivePoint レコードの合計数。
EVObjectCount	保存セットのレコード数が集計されます。

オプション設定	処理
EVObjects	保存セットの各レコードについて、次の情報が表示されます。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 保存セット ID ■ アーカイブ ID ■ アーカイブの日付 ■ アイテムのサイズ (KB)
QueuedItemsCount	以下の一覧に示されているストレージキュー関連のレコード数を数えます。
QueuedItems	元の場所ではなく指定したストレージキューに Exchange サーバーアイテムのセーフコピーを保持するボルトストアでは、ボルトストアデータベースに次のレコードを一覧表示します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ StorageQueueBatch ■ StorageQueueSaveset ■ StorageQueueSavesetReingestLog

EVSVR での確認操作

EVSVR 確認操作では、ボルトストアパーティション、ボルトストアデータベース、フィンガープリントデータベース、Directory データベースの情報の一貫性を確認できます。

確認操作には、選択可能な複数の [オプション] 設定があります。この設定によって、EVSVR が確認するデータが決まります。

表 17-11 に使用できる [オプション] の設定の一覧を示します。

表 17-11 確認操作のオプションの設定

オプション設定	処理
ArchiveObjects	ボルトストアデータベースのレコードとフィンガープリントデータベースのレコードがパーティション内の保存セットと SIS パーツを指すことが確認されます。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 保存セットの各レコードが有効な保存セットを指すことが確認されます。 ■ SIS パーツの各レコードが有効な SIS パーツを指すことが確認されます。 <p>このオプションには、必要な確認レベルを選択する必要があります。</p> <p>p.107 の「EVSVR ArchiveObjects 確認操作の確認レベル」を参照してください。</p>

オプション設定	処理
アーカイブ	確認操作[ArchivesDirectory]の実行後に、確認操作[ArchivesVaultStore]が実行されます。
ArchivesDirectory	ボルトストアデータベースレコードに対応するレコードがディレクトリデータベースにあること検証します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ ボルトストアデータベースの各 ArchivePoint レコードに対応するアーカイブレコードがディレクトリデータベースにあること検証します。 ■ ボルトストアデータベースの各 Vault レコードに対応するアーカイブフォルダレコードがディレクトリデータベースにあること検証します。
ArchivesVaultStore	ディレクトリデータベースレコードに対応するレコードがボルトストアデータベースにあること検証します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ ディレクトリデータベースの各アーカイブレコードに対応する ArchivePoint レコードがボルトストアデータベースにあること検証します。 ■ ディレクトリデータベースの各アーカイブフォルダレコードに対応する Vault レコードがボルトストアデータベースにあること検証します。
完了	確認操作[DatabaseLinkages]の実行後に、確認操作[ArchiveObjects]が実行されます。 EVSVR は、最も詳細なレベル ([SavesetValid]) で確認操作[ArchiveObjects]を実行します。
DatabaseLinkages	ボルトストアデータベースとフィンガープリントデータベース間の関連が確認されます。 <ul style="list-style-type: none"> ■ ボルトストアデータベースのアーカイブ済みアイテムの各レコードに対して、フィンガープリントデータベースに SIS パーツのレコードが存在することが確認されます。アーカイブと日付範囲で選択できます。 ■ フィンガープリントデータベースの SIS パーツの各レコードの参照数が、ボルトストアデータベースの参照の合計数と一致することが確認されます。日付範囲で選択できますが、アーカイブでは選択できません。 ■ コレクションの各レコードに対して、クリップ内の CAB ファイルまたは保存セットで参照されるファイルの数が、次を合計した数に一致することが確認されます。 <ul style="list-style-type: none"> ■ ボルトストアデータベースに記録されるコレクションの保存セットの数 ■ フィンガープリントデータベースに記録されるコレクションの SIS パーツの数 日付範囲で選択できますが、アーカイブでは選択できません。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 非参照、非共有、共有の SIS パーツの数についてレポートします。

オプション設定	処理
DatabaseReferences	<p>データベースのレコードがパーティション内の保存セットと SIS パーツを参照することが確認されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ボルトストアデータベースの保存セットのレコードが、パーティションに存在する各保存セットを指すことが確認されます。 保存セットが収集される場合は、コレクションのレコードが完全であることも確認されます。 ■ フィンガープリントデータベースのレコードが、パーティションに存在する各 SIS パーツを指すことが確認されます。 SIS パーツが収集される場合は、コレクションのレコードが完全であることも確認されます。 <p>次の点に注意してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Enterprise Vault 移行以外の移行を使用して、セカンダリストレージへの収集処理および移行の両方を有効にした場合、この操作は CIFS および NTFS パーティションではサポートされません。原因は、Enterprise Vault 以外の移行の場合、移行済みデータをスキャンできないためです。 ■ EMC Centera パーティションでこの操作を実行する場合は、Centera に接続する Centera プロファイルでクエリー機能が有効になっていることを確認する必要があります。クエリー機能が無効になっている場合は、Centera CLI または Centera Viewer を使用して Show Profile コマンドを実行します。このコマンドでは、Centera プロファイルの現在の機能を一覧表示します。その後 Update Profile コマンドを実行して有効または無効にできます。 ■ まれに、アイテムが同じボルトストア内の複数の Centera パーティションにアーカイブされると、この操作によって間違った結果がレポートされることがあります。
DetectCABCollectionIdMismatch	<p>ボルトストアデータベースに、関連付けられた CAB ファイルのファイル名に一致するコレクション ID を持つ CAB ファイルのコレクションレコードが含まれていることを確認します。たとえば、この操作では、コレクションレコードのコレクション ID が 1234 である場合に、関連する CAB ファイルの名前が Collection1234.cab であることが確認されます。</p> <p>ボルトストアデータベース内の特定のパーティションで、コレクション ID と CAB ファイル名が一致しない場合は、そのパーティションに対して修復操作[DatabaseReferences]を実行します。</p> <p>p.110 の「EVSVR での修復操作」を参照してください。</p>
ItemCounts	<p>ボルトストアデータベースの Vault レコードと ArchivePoint レコードを確認し、間違っているアーカイブアイテム数を報告する</p>
QueuedItems	<p>ストレージキューの場所にあるストレージキューファイルが、ボルトストアデータベースレコードで参照されていることを検証します。</p>

オプション設定	処理
StorageQueue	ストレージキューの場所に格納されているファイルに、ファイルサイズが 0 バイトであるような明白なエラーがないことを検証します。
UndatedCollections	<p>ボルトストアデータベースの特定の作成日がないコレクションレコードの数を判断します。Enterprise Vault 8.0 またはそれ以降では、すべての新しいコレクションレコードに自動的に特定の作成日が設定されます。ただし、これは Enterprise Vault の以前のバージョンが作成したコレクションレコードには該当しません。作成日がどのコレクションレコードにも見つからないとき、確認操作[DatabaseLinkages]は指定された日付範囲を無視し、これらのコレクションレコードすべてを処理します。</p> <p>作成日がない任意のコレクションレコードに作成日を割り当てるには、修復操作[UndatedCollections]を実行します。</p>

EVSVR ArchiveObjects 確認操作の確認レベル

確認操作で[ArchiveObjects]オプションを選択する場合は、[レベル]設定も選択する必要があります。この設定によって、EVSVR が実行する確認レベルが決まります。

次の表に、[レベル]設定とその作用を示します。この表の最初の 3 つの確認レベルは、最もレベルが低いものから順に示されています。たとえば、レベル

ObjectExtractsFromContainer を選択した場合、確認にはレベル ObjectContainerExists とレベル ObjectInContainer も含まれます。確認のレベルが高くなると、確認の実行時間も長くなります。

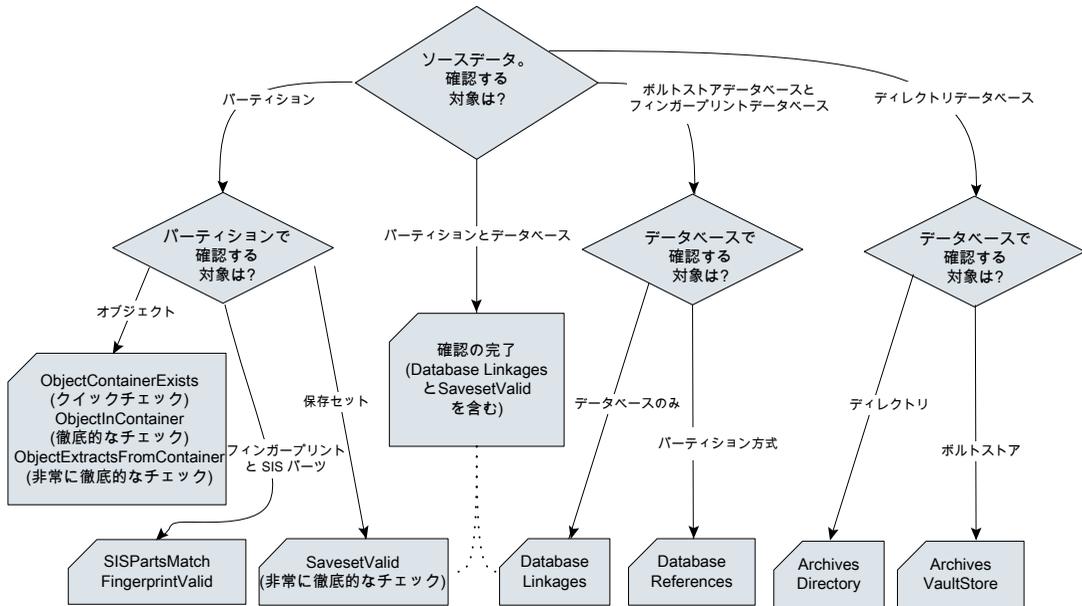
表 17-12 確認操作 [ArchiveObjects] でのレベル設定の作用

レベル設定	コレクションを使わない CIFS パーティション	コレクションを使う CIFS パーティション	ストリーマパーティション	EMC Centera パーティション
ObjectContainerExists	保存セットまたは SIS パーツファイルが存在し、それらのファイルに明らかなエラー (ファイルのサイズが 0 バイトなど) がないことが確認されます。 必要に応じて、変換された内容ファイルがあるかどうかを確認されます。	CAB ファイルが存在し、明らかなエラー (ファイルのサイズが 0 バイトなど) がないことが確認されます。	保存セットと SIS パーツを含んでいるコンテンツストリームが存在することが確認されます。	保存セットを含むクリップが存在することが確認されます。
ObjectInContainer		CAB ファイルが、CAB インデックスで定義されているように、保存セットまたは SIS パーツファイルを含むことが確認されます。		
ObjectExtracts FromContainer		CAB ファイルから保存セットまたは SIS パーツファイルを抽出できることが確認されます。		
SISPartsMatch	ボルトストアデータベースの SIS パーツの参照とフィンガープリントデータベースの SIS パーツのフィンガープリントが、保存セットファイルの SIS パーツマップに一致することが確認されます。			適用なし。
FingerprintValid	各 SIS パーツで、フィンガープリントが再計算され、フィンガープリントデータベースの値と一致することが確認されます。 圧縮された SIS パーツと変換された内容ファイルは圧縮解除されます (該当する場合)。			
SavesetValid	すべての SIS パーツを含む保存セットが Enterprise Vault 11.0 保存セットに取り込まれ、完全な確認が実行されます。			個別に格納されているすべての添付ファイルとストリームを含む保存セットが Enterprise Vault 11.0 保存セットに取り込まれ、完全な確認が実行されます。

適切な EVSVR 確認操作の選択

図 17-2 を使うと、パーティションとデータベースを確認するときの適切な操作を選択できます。

図 17-2 適切な確認操作を選択する方法



例: EVSVR によるボルトストアデータベース内の保存セットの確認

EVSVR で実行する一般的な操作の 1 つは、ボルトストアデータベース内の保存セットの確認です。

EVSVR を使ってボルトストアデータベース内の保存セットを確認する方法

- 1 EVSVR> プロンプトで、edit を入力して [EVSVR Operations] ダイアログボックスを開きます。
- 2 処理するボルトストアグループ、ボルトストア、パーティションを選択します。
ほとんどの場合、すべてのボルトストアを処理します。
- 3 [Operation To Perform] リストで、[Verify] を選択します。
[Option] リストで、[Complete] を選択します。
- 4 [Date Range To Process] フィールドで、処理するアイテムのアーカイブの日付を指定します。または、すべてのアイテムを処理するには、日付範囲を空白のままにします。
- 5 [Threads] フィールドでは、デフォルトのスレッド数である 1 のままにします。
- 6 [Save] をクリックして、操作ファイルの設定を保存します。

- 7 [OK] をクリックして [EVSVR Operations] ダイアログボックスを閉じ、新しい操作ファイルを読み込みます。
- 8 EVSVR> プロンプトで、start を入力して処理を開始します。
- 9 EVSVR で処理が完了したら、出力ログファイルの内容を確認します。

EVSVR での修復操作

EVSVR を使って修復操作を実行する前に次の重要な点に注意してください。

- 修復操作の実行は、確認操作の実行時にエラーが発生した場合にのみ検討します。
- **警告:** 以下で説明する修復操作の多くは、状況によってはデータ損失を引き起こすことがあります。データ損失を引き起こす可能性がない操作は、ArchivesVaultStore、BlacklistBadSISParts、UndatedCollections だけです。
p.116 の「特定の EVSVR 修復操作実行時のデータ損失リスク」を参照してください。
データ損失を引き起こすことがある操作を実行する前に、Symantec のテクニカルサポートに問い合わせることを強く推奨します。
- 修復操作を実行する前にデータベースのバックアップコピーを作成し、修復するボルトストアをバックアップモードにします。これは関連付けされたストレージサービスを停止した場合でも該当します。

注意: 損傷したシステムでストレージサービスを起動すると、さらに損傷する場合があります。ストレージサービスは、問題があるボルトストアをバックアップモードにしてから起動してください。その場合でも、ストレージサービスは、実行の必要がある場合のみ起動してください。

確認操作の実行時に EVSVR によってエラーが報告された場合は、修復操作を実行してエラーを修正できます。修復操作の機能によって、ボルトストアデータベースとフィンガープリントデータベース内の消失したレコードが再作成されます。まれにですが、何度も共有されているアイテムの場合、修復操作によって新しい SIS パーツがディスクに作成されます。

修復操作には、選択可能なオプション設定がいくつかあります。表 17-13 に、利用可能な設定を示します。

表 17-13 修復操作のオプションの設定

オプション設定	処理
アーカイブ	<p>[ArchivesDirectory]と[DatabaseReferences]の 2 つの修復操作の機能を組み合わせます。アーカイブ操作の概略は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 無効なコレクションレコードがボルトストアデータベースから削除され、消失したコレクションレコードが再作成されます。 ■ フィンガープリントデータベース内の消失した SIS パーツレコードが再作成されます。 ■ ボルトストアデータベース内の消失した保存セットレコードと関連するレコードが再作成されます。 ■ ディレクトリデータベース内の消失したアーカイブレコードとアーカイブフォルダレコードが再作成されます。 <p>必要な情報をディレクトリデータベース、ボルトストアデータベース、保存セット、対象の Exchange システム (Exchange メールボックスアーカイブ用)、対象のファイルシステムボリューム (ファイルシステムアーカイブ用) から取得できない場合、この操作ではレコードを再作成できないことがあります。</p> <p>この操作を実行する前に、修復するアーカイブの種類として Exchange メールボックスまたはファイルシステムのいずれかを選択しておく必要があります。この操作で、選択した種類に一致しないアイテムがアーカイブ内に見つかった場合は、エラーが報告され、処理が停止します。</p>
ArchivesDirectory	<p>ボルトストアデータベースとの整合性を維持するように、ディレクトリデータベース内の消失したアーカイブレコードとアーカイブフォルダレコードが再作成されます。このために、[ArchivesDirectory]操作では次の処理が行われます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ボルトストアデータベースの各 ArchivePoint レコードに対応するアーカイブレコードがディレクトリデータベースにあることを検証します。アーカイブレコードが消失している場合は、この操作によって再作成されます。 ■ ボルトストアデータベースの各 Vault レコードに対応するアーカイブフォルダレコードがディレクトリデータベースにあることを検証します。ArchiveFolder レコードが消失している場合は、この操作によって再作成されます。 <p>この操作を実行する前に、修復するアーカイブの種類として Exchange メールボックスまたはファイルシステムのいずれかを選択しておく必要があります。この操作で、選択した種類に一致しないアイテムがアーカイブ内に見つかった場合は、エラーが報告され、処理が停止します。</p>

オプション設定	処理
ArchivesVaultStore	<p>ディレクトリデータベースとの整合性を維持するため、ボルトストアデータベース内の消失した ArchivePoint レコードと Vault レコードが再作成されます。このために、[ArchivesVaultStore]操作では次の処理が行われます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ディレクトリデータベースの各アーカイブレコードに対応する ArchivePoint レコードがボルトストアデータベースにあることを検証します。 ArchivePoint レコードが消失している場合は、この操作によって再作成されます。 ■ ディレクトリデータベースの各アーカイブフォルダレコードに対応する Vault レコードがボルトストアデータベースにあることを検証します。 Vault レコードが消失している場合は、この操作によって再作成されます。 <p>[DatabaseReferences]修復操作を実行することで、ボルトストアデータベース内の消失した ArchivePoint レコードと Vault レコードを再作成することもできます。ただし、[DatabaseReferences]操作を実行しても、保存セットを含まないアーカイブとアーカイブフォルダの ArchivePoint レコードと Vault レコードは消失したままです。このような状況では、[ArchivesVaultStore]修復操作を実行し、消失したレコードを再作成する必要があります。また、次の操作を実行できます。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 [ArchivesVaultStore]修復操作を実行し、消失した ArchivePoint レコードと Vault レコードを再作成します。 2 [DatabaseReferences]修復操作を実行して、消失した保存セットレコードを再作成し、再作成した ArchivePoint レコードと Vault レコードを更新します。
BlacklistBadSISParts	<p>存在しない、サイズが間違っている、フィンガープリントデータベースの値に一致しないなどの理由で正しく確認されない SIS パーツは、ブラックリストに登録されます。 SIS パーツをブラックリストに登録した後で、同じ SIS パーツの新しいアイテムをアーカイブすると、Enterprise Vault によって新しい SIS パーツファイルがディスクに作成されます。</p>
DatabaseLinkages	<p>次の処理が実行されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ボルトストアデータベース内のコレクションのレコードの保存セットと SIS パーツの参照数が確認、修正されます。 ■ ボルトストアデータベースの保存セットによって使われる SIS パーツに関する情報が消失している場合は、再作成されます。 ■ ボルトストアグループ内のすべてのボルトストアデータベースの参照数に対して、フィンガープリントデータベースの SIS パーツへの参照数が確認され、間違っている場合は修正されます。 ■ 修復操作完了後に、非参照、非共有、共有の SIS パーツの数についてレポートします。

オプション設定	処理
DatabaseReferences	<p>フィンガープリントデータベースとボルトストアデータベース内の消失したレコードが再作成されます。また、このオプションはパーティションの視点から不正であると確認されたレコードを更新します。</p> <p>次の点に注意してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Enterprise Vault 移行以外の移行を使用して、セカンダリストレージへの収集処理および移行の両方を有効にした場合、この操作は CIFS および NTFS パーティションではサポートされません。原因は、Enterprise Vault 以外の移行の場合、移行済みデータをスキャンできないためです。 ■ EMC Centera パーティションでこの操作を実行する場合は、Centera に接続する Centera プロファイルでクエリー機能が有効になっていることを確認する必要があります。クエリー機能が無効になっている場合は、Centera CLI または Centera Viewer を使用して Show Profile コマンドを実行します。このコマンドでは、Centera プロファイルの現在の機能を一覧表示します。その後 Update Profile コマンドを実行して有効または無効にできません。 <p>次の追加設定は DatabaseReferences 操作を実行することを選択するとき利用可能です。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ [Check Collection Counts]。選択されると、EVSVR は各 CAB ファイルと EMC Centera Clip 内の参照されたアイテムと非参照アイテムの数を確認します。非参照アイテムの数が、アイテムの合計数から参照されたアイテムの数を引いたものに等しければ (非参照の数 = 合計数 - 参照された数)、EVSVR は、それらの非参照アイテムが削除されたことを想定するので、その非参照アイテムのデータベースレコードを再作成しません。ただし、[Check Collection Counts] を選択しなければ、EVSVR は消失したすべてのデータベースレコードが再作成に適していると考えます。 ■ [Require Index Entries]。この設定を選択すると、EVSVR は対応するインデックスエントリが存在する消失した保存セットレコードを再作成しますが、インデックスエントリがないレコードを再作成しません。 <p>DatabaseReferences 修復操作を実行したら、ログファイルを再確認し、DatabaseReferences 検証操作を実行して、正常であることを確認します。EVSVR が期待どおりに修復されていた場合は、同じデータセットに対して DatabaseLinkages 修復操作を実行します。</p>

オプション設定	処理
	<p>DatabaseReferences 操作は何か他のものを処理する前にすべての SIS パーツを処理します。これはこの操作が CAB ファイルで見つかる未使用の SIS パーツを作成し直す状況の原因となります場合があります。操作が完了した後、次のとおりこの問題を解決できます。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 操作で発生したエラーの DatabaseReferences 修復ログファイルを確認します。次にすべきことのガイドとして問題の重大度を使います。たとえば、パーティションで消失または破損したファイルをバックアップコピーからリストアし、次に修復操作 [DatabaseReferences] を再実行する必要がある場合もあります。 2 手順 1 を完了し、修復が正常であると判断した後、 [DatabaseLinkages] 修復操作を実行します。 3 手順 2 を完了し、修復が正常であると判断した後、これを確認するために [完了] 確認操作を実行します。 4 手順 3 を完了した後、環境に整合性があることと、修復可能なものがすべて EVSVR によって修復されていることを確認します。最後の手段として [DeleteSurplusReferences] 修復操作を実行し、修復不可能なアイテムと未使用の SIS パーツを削除します。

オプション設定	処理
DeleteSurplusReferences	<p>最後の手段として、消失した復元不可能なアイテムに関連付けされたボルトストアデータベースのレコードとフィンガープリントデータベースのレコードが削除されます。消失したアイテムが複数のパーツで構成される場合、アイテムに関連付けされた残りのパーツもこのオプションによってディスクから削除されます。</p> <p>また、この操作を使って未使用の SIS パーツを削除することもできますが、環境に整合性がある場合しか実行してはなりません。</p> <p>操作[DeleteSurplusReferences]を開始すると、まず内部の確認操作[DatabaseLinkages]が実行されます。操作[DeleteSurplusReferences]が処理を開始するのは、確認操作[DatabaseLinkages]によって環境に整合性がありエラーがないと報告された場合のみです。</p> <p>操作[DeleteSurplusReferences]を実行する前に、修復操作[DatabaseReferences]を使って、消失したデータベース参照を再作成し、環境に整合性があることを確認することを推奨します。</p> <p>次の点に注意してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 操作[DeleteSurplusReferences]は、問題になっているアイテムが消失していると確実に判断できなければ処理を行いません。たとえば、Symantec NetBackup など、Enterprise Vault Migrator 以外を使って、アーカイブされたデータをセカンダリストレージに移行したとします。移行によって E_FAIL、E_UNEXPECTED などの一般的なエラーが戻された場合、EVSVR はエラーを報告する以外の処理は行いません。 ■ 操作[DeleteSurplusReferences]は CAB ファイルか EMC Centera clip を見つけた場合、CAB ファイルか Clip 内に存在するはずのすべてのアイテムが存在していると想定します。
ItemCounts	<p>アーカイブされたアイテムの数が正しくないボルトストアデータベース内のボルトレコードおよび ArchivePoint レコードを修復します。</p>
QueuedItems	<p>ストレージキューの場所にあるファイルをスキャンし、ボルトストアデータベースで想定されるレコードを再作成または修正します。</p>
StorageQueue	<p>ボルトストアデータベースレコードをキューに登録済みのアイテムに対してスキャンし、想定されるファイルがストレージキューの場所にあること検証します。いずれかのファイルが欠落している場合は、EVSVR はボルトストアデータベースレコードを削除し、元のアイテムをアーカイブし直すように要求します。</p>

オプション設定	処理
UndatedCollections	ボルトストアデータベースの作成日がないコレクションレコードに作成日を割り当てます。Enterprise Vault 8.0 またはそれ以降では、すべての新しいコレクションレコードに自動的に特定の作成日が設定されます。ただし、これは Enterprise Vault の以前のバージョンで作成したコレクションレコードには該当しません。コレクションレコードの作成日が見つからないとき、EVSVR は関連付けられた CAB ファイルか Centera Clip の作成日をそれに割り当てます。

修復操作[DatabaseReferences]と[DeleteSurplusReferences]は、セカンダリストレージに移行した保存セットと SIS パーツには利用できません。これは、ボルトストアデータベースとフィンガープリントデータベースから移行したファイルの場所を各操作で特定する必要があります。これらのデータベースの情報は不正である可能性があるため、操作を効率的に続行することはできません。

移行したファイルで修復操作を実行する場合は、最初にそれらのファイルを元の格納場所に戻すことを推奨します。

特定の EVSVR 修復操作実行時のデータ損失リスク

次のいずれかの修復操作を実行すると、状況によってはデータ損失が発生することがあります。

- アーカイブ
- ArchivesDirectory
- DatabaseLinkages
- DatabaseReferences
- DeleteSurplusReferences

上記のいずれかの操作を実行する前に Symantec のテクニカルサポートに問い合わせることを強く推奨します。

データ損失が発生する状況として、次のような場合が考えられます。

- [DatabaseReferences]操作またはアーカイブ操作で、フィンガープリントデータベースとボルトストアデータベース内において、消失したレコードをすべて再作成できませんでした。この問題は通常、ディレクトリデータベースのアーカイブレコードとアーカイブフォルダレコードの一部が消失している場合に発生します。
- [DatabaseReferences]操作またはアーカイブ操作に対して、不適切な日付範囲を指定しました。これは、修復すべき一部の保存セットと SIS パーツが処理されない状況の原因となる場合があります。

- [DatabaseReferences]操作またはアーカイブ操作で、オプション[Require Index Entries]を選択しました。しかし、次の条件の 1 つ以上が当てはまるため、一部の保存セットにインデックス情報が含まれていませんでした。
 - インデックスの移行を選択した場合 (つまり、Enterprise Vault はファイルがアーカイブされると同時にインデックス付けしません)。
 - インデックス操作のバックログがある場合。
 - インデックスの再構築を実行中の場合。
- [DatabaseReferences]操作またはアーカイブ操作で修復可能なすべてのアイテムの修復に失敗した後に、[DatabaseLinkages]操作を実行しました。
- [DatabaseReferences]操作またはアーカイブ操作で修復可能なすべてのアイテムの修復に失敗した後に、[DeleteSurplusReferences]操作を実行しました。
- DatabaseReferences]操作またはアーカイブ操作が正常に完了した後に、[DatabaseLinkages]操作を実行していません。

以上の理由から、[DatabaseReferences]操作またはアーカイブ操作が修復可能なすべてのアイテムを修復したことを確認してから、その他の修復操作に進むことが重要です。

たとえば、[DatabaseReferences]操作の後に[DeleteSurplusReferences]操作を実行すると、データ損失のおそれがあります。この状況は、[DatabaseReferences]操作が、何らかの理由によってボルトストアデータベース内の保存セットレコードをすべて修復できなかった場合に発生することがあります。その後、[DeleteSurplusReferences]操作を実行すると、関連付けられている保存セットレコードのうち特定の SIS パーツを参照するものが修復されなかったため、それらの SIS パーツが誤って未使用として表示されることがあります。次に、[DeleteSurplusReferences]操作はこれらの SIS パーツに対して、フィンガープリントデータベース上の対応するレコードと、ディスク上にあるすべての未収集 SIS パーツファイルの両方を削除します。このため、環境に整合性があり、修復不可能な消失アイテムがあることがわかっている場合は、[DeleteSurplusReferences]操作のみを実行することを推奨します。

適切な EVSVR 修復操作の選択

表 17-14 に、確認操作時に特定のエラーが発生した場合に従う修復手順を示します。各手順の実行方法について詳しくは「EVSVR 修復手順」を参照してください。

表 17-14 適切な修復手順を選択する方法

実行した確認操作	ログファイルの報告内容	使用する修復手順
ArchiveObjects > ObjectContainerExists	[Verify failed count]	「手順 1」
ArchiveObjects > ObjectInContainer		「手順 1」
ArchiveObjects > ObjectExtractsFromContainer		「手順 1」
ArchiveObjects > SISPartsMatch		「手順 2」
ArchiveObjects > FingerprintValid		「手順 2」
ArchiveObjects > SavesetValid		「手順 2」
DatabaseReferences	[Savesets Unreferenced]と、次のメッセージのいずれか 1 つ。 <ul style="list-style-type: none"> ■ [Converted Content files unreferenced] ■ [Large files unreferenced] ■ [SISPart files unreferenced] 	「手順 2」
	[SISPart files unreferenced]、[Converted Content files unreferenced]、[Large files unreferenced]のいずれかのみ。	「手順 2」
	[Savesets Unreferenced]のみ。	「手順 2」
DetectCABCollectionIdMismatch	[CAB Collection records with a Collection Identity mismatch: <i>number</i>]。	「手順 2」
DatabaseLinkages	任意のエラー。	「手順 3」
UndatedCollections	[Undated Collection records: <i>number</i>]。	修復操作 [UndatedCollections] を実行します。
ArchivesDirectory	消失したレコード。	修復操作 [ArchivesDirectory] を実行します。
ArchivesVaultStore	消失したレコード。	修復操作 [ArchivesVaultStore] を実行します。

表 17-15 に、ボルトストアデータベース、フィンガープリントデータベース、パーティションの不整合がわかっている場合に使う修復手順を示します。

表 17-15 データベースまたはパーティションの既知の不整合に適切な修復手順

ボルトストアデータベース	フィンガープリントデータベース	パーティション	使用する修復手順
整合性がある	整合性がある	SIS パーツファイルが消失	「手順 1」
整合性がない	整合性がない	整合性がある	「手順 2」
整合性がある	整合性がない	整合性がある	「手順 2」
整合性がない	整合性がある	整合性がある	「手順 2」
整合性がない	整合性がない	適用なし	「手順 3」

EVSVR 修復手順

注意: 次のいずれかの手順を実行する場合、その手順が問題を解決したことを確認するまでは、ご使用の Enterprise Vault システムのバックアップモードを解除しないでください。そうしないと、システムが破損する可能性があります。

手順 1

- 1 確認ログファイルの情報を使って、消失または破損した各ファイルの回復を試行します。
- 2 すべてのエラーが解決されるまで、以前に実行した確認操作を再実行します。
- 3 回復できない SIS パーツがある場合は、修復操作[BlacklistBadSISParts]を実行して、消失したファイルのフィンガープリントデータベースのレコードをブラックリストに登録します。

メモ: これは、SavesetValid の確認レベルで確認操作[ArchiveObjects]を以前に実行した場合は必要ありません。消失した SIS パーツのデータベースのレコードは、この操作によりすでにブラックリストに登録されています。

手順 2

- 1 修復するボルトストアグループをバックアップモードにします。

その時点で **Enterprise Vault** サービスが何も実行されていない場合、ボルトストアグループをバックアップモードにするには、管理サービスとディレクトリサービスのみを起動する必要があります。ストレージサービスは起動しないでください。

- 2 各 **Enterprise Vault** サーバーで、すべての **Enterprise Vault** サービスと関連プロセスを停止します。StorageServer.exe や StorageFileWatch.exe のようなストレージ関連のプロセスを確実に停止してください。
- 3 次の **Enterprise Vault** サービスのみを再起動します。
 - Enterprise Vault Admin Service
 - Enterprise Vault Directory Service
 - Enterprise Vault Indexing Service (および修復するボルトストアに関連付けられているすべてのインデックスサービス)
 - Enterprise Vault Storage Service (必要な場合のみ)。このサービスを起動する必要がある場合は、そのことが EVSVR ログファイルの [initial database and partition checks] セクションで報告されます。
- 4 修復操作 [DatabaseReferences] を実行します。

注意: SIS パーツは単一のボルトストアの異なるパーティション間や異なるボルトストアのパーティション間で共有できます。共有をどのように設定したかによって、1つのボルトストアパーティションの保存セットの再作成が別のボルトストアのパーティションに属する SIS パーツに依存するようになります。これらの SIS パーツのレコードは、保存セットを作成し直す前に利用可能である必要があります。そのため、フィンガープリントデータベースでまだ再作成していない SIS パーツのレコードに保存セットレコードが依存しているために EVSVR がボルトストアデータベースに保存セットレコードを再作成できない状況が起こる可能性があります。

この問題を避けるには、何を修復するかについてのガイドとしてボルトストアグループに設定した共有レベルを使います。共有レベルが[グループ内で共有する]のとき、ボルトストアとパーティションを 1 つずつ修復する代わりにボルトストアグループ全体を修復する必要があります。共有レベルが[ボルトストア内で共有する]のとき、パーティションを 1 つずつ修復する代わりにボルトストア全体を修復する必要があります。共有レベルが[共有しない]か、またはパーティションが 8.0 以前の保存セットのみを含んでいるとき、パーティションを個別に修復できます。

さらに、修復する必要があるデータベースについて考慮します。このデータベースがボルトストアデータベースの場合、そのボルトストアに属するすべてのパーティションが影響され、修復を必要とします。ただし、フィンガープリントデータベースを修復する必要がある場合、選択した共有レベルに関係なく、ボルトストアグループ全体が影響され、修復を必要とします。

次のいずれかの条件に該当する場合は、EVSVR 操作設定の[Require Index Entries]のチェックマークをはずすと便利です。

- 遅延インデックスを使う場合 (FSA)。
- アーカイブに未処理のインデックス操作のバックログがある場合。
- インデックスの再構築を実行中の場合。

[Require Index Entries]操作設定では、アイテムのインデックスエントリの存在に基づいて EVSVR でデータベースレコードを修復するかどうかを制御します。

- 5 ディレクトリデータベース内で消失した情報が原因で保存セットレコードを再作成できないことが[DatabaseReferences]修復操作で報告された場合や、アーカイブの種類が Exchange メールボックスまたはファイルシステムの場合は、アーカイブ修復操作を実行します。この操作では、必要な情報を対象の Exchange システムボリュームまたはファイルシステムボリュームから取得することで、消失した保存セットレコードを再作成できます。
- 6 EVSVR を使って[完了]確認操作を実行してエラーを調べます。

エラーの性質によっては、続行する前に Enterprise Vault のサポートに連絡する必要があります。

- 7 関連するボルトストアデータベースの **WatchFile** テーブルと **WatchSISPartFile** テーブルから、一部またはすべてのレコードを削除することを検討します。

レコードを削除するかどうかは、ボルトストアデータベースの復元したコピーがどの程度古いか、またはコレクションや移行を有効にしたかどうかによって決まります。復元された **WatchFile** テーブルの一部のレコードがその後収集された場合は、その **WatchFile** レコードと **WatchSISPartFile** レコードを削除することを推奨します。詳しくは **Enterprise Vault** のサポートにお問い合わせください。
- 8 メールボックスにあるアーカイブ保留中のアイテムをすべて取り消し、通常の状態に戻します。
- 9 データベースが有効な状態のときに、残りの **Enterprise Vault** サービスを起動してシステムをバックアップモードから解除します。

手順 3

- 1 修復するボルトストアグループをバックアップモードにします。

その時点で **Enterprise Vault** サービスが何も実行されていない場合、ボルトストアグループをバックアップモードにするには、管理サービスとディレクトリサービスのみを起動する必要があります。ストレージサービスは起動しないでください。
- 2 各 **Enterprise Vault** サーバーで、すべての **Enterprise Vault** サービスと関連プロセスを停止します。StorageServer.exe や StorageFileWatch.exe のようなストレージ関連のプロセスを確実に停止してください。
- 3 次の **Enterprise Vault** サービスのみを再起動します。
 - **Enterprise Vault Admin Service**
 - **Enterprise Vault Directory Service**
 - **Enterprise Vault Indexing Service** (および修復するボルトストアに関連付けられているすべてのインデックスサービス)
 - **Enterprise Vault Storage Service** (必要な場合のみ)。このサービスを起動する必要がある場合は、そのことが **EVSVR** ログファイルの [initial database and partition checks] セクションで報告されます。
- 4 修復操作 [DatabaseLinkages] を実行します。
- 5 [完了] 確認操作を実行してエラーを調べます。

エラーの性質によっては、続行する前に **Enterprise Vault** のサポートに連絡する必要があります。
- 6 ボルトストアデータベースとフィンガープリントデータベース相互の、または影響を受けるパーティションのストレージデータとの間で整合性がない場合は、[DatabaseReferences] 修復操作を実行します。

- 7 メールボックスにあるアーカイブ保留中のアイテムをすべて取り消し、通常の状態に戻します。
- 8 データベースが有効な状態のときに、残りの Enterprise Vault サービスを起動してシステムをバックアップモードから解除します。

EVSVR 出力ログファイルの表示

EVSVR が処理を完了すると、テキストエディタを使ってログファイルの内容を表示できます。または、Enterprise Vault のサポート担当者にログファイルを送信します。

ログファイルでは、ボルトストアグループ、ボルトストア、パーティションごとに情報がグループ化されます。EVSVR がボルトストアグループ、ボルトストア、パーティションを検出できない場合は、そのことが報告されます。この状況は、操作ファイルの作成後にボルトストアグループ、ボルトストア、パーティションを削除した場合に発生する可能性があります。

☒ 17-3 に、ログファイルの例の最初と最後の部分を示します。

図 17-3 確認操作のログファイル例の抜粋

```

2009-12-09 18:05:56 Log file 'C:\EVSVRTest\EVSVR_20091209180556.Log' created/opened
2009-12-09 18:05:56 EVSVR Version (1.0.0.1)
2009-12-09 18:05:56
2009-12-09 18:05:56 Operation: Verify
2009-12-09 18:05:56 Option: Verify complete - Level Not Applicable
2009-12-09 18:05:56 Data silo:
2009-12-09 18:05:56 Site: Vaultsite01
2009-12-09 18:05:56 16C25EAB12F4D514EACF7F56ED25C1AA61d10000xxxxsrv1.domain.local
2009-12-09 18:05:56 Vault Store Group: Default Upgrade Group
2009-12-09 18:05:56 1476FAB3235BE544AA48448508A7A53721013300xxxxsrv1.domain.local
2009-12-09 18:05:56 Vault Store: VS0002
2009-12-09 18:05:56 13A1EEC7B4D67164DB031287156CF7571210000xxxxsrv1.domain.local
2009-12-09 18:05:56 Partition: <All>
2009-12-09 18:05:56 Date range: Start: <None>, End: <None>
2009-12-09 18:05:56 Archive: <All>
2009-12-09 18:05:56 Threads: 3, Priority: Normal
2009-12-09 18:05:56 Log file: C:\Program Files\Enterprise Vault\Reports\EVSVR\
2009-12-09 18:05:56
2009-12-09 18:05:56 Performing initial database and partition checks
2009-12-09 18:05:57
2009-12-09 18:05:57 All checks were completed successfully
2009-12-09 18:05:57
2009-12-09 18:05:57 Operation started
2009-12-09 18:05:57 site: vaultsite01
2009-12-09 18:05:57
2009-12-09 18:05:57 Vault Store Group: Default Upgrade Group
2009-12-09 18:05:57
2009-12-09 18:05:57 Vault Store: VS0002
2009-12-09 18:05:57
2009-12-09 18:05:57 Partition: VS0002 Ptn2, DeviceType: CIF5, Collection Enabled
2009-12-09 18:05:57
2009-12-09 18:05:57 Verify that Saveset SISPart entries exist in the Fingerprint Database
2009-12-09 18:05:57 -----
2009-12-09 18:05:57 Saveset records: 2479
2009-12-09 18:05:57
2009-12-09 18:05:57 Savesets processed: 2479
2009-12-09 18:05:57 Savesets with missing SIS Parts: 0
2009-12-09 18:06:04
2009-12-09 18:06:04 Savesets without SIS Parts: 2479 (100.0%)
2009-12-09 18:06:04 Savesets with SIS Parts: 0 (0.0%)
2009-12-09 18:06:04
2009-12-09 18:06:04 Verify that Fingerprint Database and vault Store SIS Part reference counts match
2009-12-09 18:06:04 -----
2009-12-09 18:06:04 .
2009-12-09 18:06:04 .
2009-12-09 18:06:04 (data not shown)
2009-12-09 18:06:04 .
2009-12-09 18:06:04 .
2009-12-09 18:07:55
2009-12-09 18:07:55 Items Processed in Site 'Vaultsite01': 5043
2009-12-09 18:07:55
2009-12-09 18:07:55 Vault Store Groups: 1
2009-12-09 18:07:55 Vault Stores: 1
2009-12-09 18:07:55 Partitions: 1
2009-12-09 18:07:55
2009-12-09 18:07:55 Processing rate: 153854 Items/hour
2009-12-09 18:07:55 Elapsed time: 0 days, 0 hours, 1 minutes, 58 seconds
2009-12-09 18:07:55
2009-12-09 18:07:55 Operation completed
2009-12-09 18:07:55
2009-12-09 18:07:55 Log file closed
2009-12-09 18:07:55
2009-12-09 18:07:55
    
```

EVSVR ログファイルのチェックポイント情報について

チェックポイント操作を初めて開始すると、ログファイルは EVSVR が新しいチェックポイントファイルを作成したことを報告します。次に例を示します。

```
Created new checkpoint file 'C:\EVSVRTest\EVSVR_20130604131904_Checkpoint.xml'
```

最新のチェックポイントから操作を続行することを選択した場合、EVSVR は既存のログファイルに新しいログ情報を追記し、最新のチェックポイントについての情報を提供しません。次に例を示します。

```

opened existing Checkpoint file 'C:\EVSVRTest\EVSVR_20130604152430_Checkpoint.xml'
File:
  Created: 2013-06-04 15:25:09
  Opened: 2013-06-04 15:26:01
  Updated: 2013-06-04 15:25:22
  Closed: 2013-06-04 15:25:22

Continuing the operation from the last checkpoint
Control Step:
  Number: 1, Name: Remove invalid Collection records from the Vault Store database, Completed: 2013-06-04 15:25:22
Container:
  Site:          VaultSite01
                16C25EAB12F4D514EACF7F56ED25C1AA61d10000xxxxsrv1.domain.local
  Vault Store Group: Default Upgrade Group
                1476FAB3235BE544AA48448508A7A53721013300xxxxsrv1.domain.local
  Vault Store:    vS0002
                13A1EEC7B4D67164DB031287156CFA7571210000xxxxsrv1.domain.local
  Partition:     <All>

```

EVSVR がチェックポイント操作を完了するとき、ログファイルはこのことを報告します。次に例を示します。

```
The Checkpointed operation has completed
```

すでに完了したチェックポイント操作に対して `continue` コマンドを発行した場合、ログファイルは次の情報を提供します。

```

The checkpointed operation completed at 2013-06-04 15:26:02
The operation can be performed again by issuing a 'start' command
The operation will not be performed

```

EVSVR による特定の修復操作実行時のログファイルの追加情報

修復操作を実行し、ボルトストアデータベースまたはフィンガープリントデータベース内の消失した参照を再作成する場合、ログファイルの最後にある概略には、EVSVR で再作成できなかった参照の数が表示されます。

ボルトストアデータベース内の保存セットの参照を再作成しようとした場合、ログファイルには次の追加情報が表示されます。

Saveset records not recreated	これは次の 5 つの数の合計です。
No Directory Entry	保存セットのアーカイブ元のアーカイブの場合、アーカイブとアーカイブフォルダのレコードが Enterprise Vault ディレクトリに存在しなかったため、保存セットの参照が再作成されませんでした。
No Index Entry	[Require Index Entries] オプションを選択してもインデックスエントリが見つからなかったため、保存セットの参照が再作成されませんでした。
Missing SIS Parts	必要な SIS パーツ情報が入手できなかったため、保存セットの参照が再作成されませんでした。

No open CIFS partition	SIS パーツを複製する必要があり、それを行うためのオープンパーティションが存在しなかったため、保存セットの参照が再作成されませんでした。ボルトストア内の 1 つのパーティションをオープンし、修復操作を繰り返します。
Errors	他のディレクトリまたはデータベースのエラーのため、保存セットの参照が再作成されませんでした。

フィンガープリントデータベース内の SIS パーツの参照を再作成しようとした場合、ログファイルには次の追加情報が表示されます。

SIS Part records not recreated	これは次の 4 つの数の合計です。
Saveset SIS Part not available	SIS パーツを再作成するために EVSVR がボルトストアデータベースから取得する必要があった情報が入手できませんでした。
Error getting SIS Part information	SIS パーツの参照を再作成するために必要な値の再作成時にエラーが発生しました。
Error creating Collection record	.CAB コレクションファイルに存在する SIS パーツファイルのコレクションのレコードをボルトストアデータベースに再作成するときにデータベースエラーが発生しました。
Error creating SIS Part record	フィンガープリントデータベース内の SIS パーツの参照再作成時にデータベースエラーが発生しました。

特定の保存セットと SIS パーツ、および発生した可能性のあるエラーについて詳しくはログファイルを参照してください。

対話モードでの EVSVR の実行

操作を作成して実行することによって EVSVR の処理を実行するのみでなく、対話型モードで多数の処理を実行することができます。

表 17-16 に、対話モードで入力できるコマンドを示します。

表 17-16 対話モードのコマンド

コマンド	効果
DumpSaveset または DS	指定したアーカイブ済みアイテムの保存セットと、関連付けられた SIS パーツを取得します。
DumpSISPart または DP	指定した SIS パーツを取得します。

コマンド	効果
ExtractSavesets または ES	EMC Centera データ BLOB ファイルまたは Enterprise Vault ストレージキュー (.EVSQ) ファイルから複数の保存セットを抽出します。
ListSavesetLocations または LS	指定した保存セットのすべての部分が Enterprise Vault によって格納されている場所を一覧表示します。
CLS	EVSVR ウィンドウをクリアします。
Help または ?	EVSVR コマンドに関するヘルプを画面に表示します。
Exit または Quit	EVSVR の対話モードを中止します。
? [command_name]	指定したコマンドに関する詳細なヘルプを画面に表示します。

EVSVR を対話モードにするには、ユーティリティを起動し、EVSVR プロンプトで `interactive` と入力します。

次のセクションでは、コマンドの構文について詳しく説明します。

DumpSaveset コマンド

`DumpSaveset` コマンドは、指定したアーカイブ済みアイテムの保存セットと、関連付けされた SIS パーツを取得します。

構文

```
DumpSaveset EntryId SavesetId [-o OutputFolder]
```

パラメータについて次に説明します。

<i>EntryId</i>	必須のボルトストアエントリ、アーカイブエントリ、またはアーカイブフォルダエントリを識別します。EVSVR は保存セットの場所を判断するためにこれを使います。
<i>SavesetId</i>	必須の保存セット ID またはトランザクション ID を指定します。
<i>OutputFolder</i>	取り込まれたファイルとログファイルを格納するフォルダのパスを指定します。デフォルトでは、これは Enterprise Vault プログラムフォルダ (たとえば、C:\Program Files (x86)\Enterprise Vault) の Reports\EVSVR サブフォルダです。

例

次の例では、2 つのパラメータは必須の保存セットのボルトストアのエントリ ID と保存セットのトランザクション ID を指定します。

```
ds 1995C3ACBB9472646AB0F3A0FDC7066B91210000testsrv1.domain.local
713C88D67D80E8046FFF279AE27D46B1
```

このコマンドは `-o` パラメータで出力フォルダを指定しないため、**DumpSaveset** はファイルをデフォルトの場所へ出力します。その場所は、たとえば `C:\Program Files (x86)\Enterprise Vault\Reports\EVSVR` です。**DumpSaveset** のすべてのファイルは、`EVSVR_DumpSaveset_20100714181917` のような、この出力フォルダの下のタイムスタンプ付きのフォルダへ出力されます。したがって、この例では、出力の絶対パスは次のとおりです。

```
C:\Program Files
(x86)\Enterprise Vault\Reports\EVSVR\EVSVR_DumpSaveset_20100714181917Enterprise
Vault
```

想定される出力

注記されている場合を除き、**DumpSaveset** は下記のすべてのファイルとフォルダを出力します。

表 17-17 出力の絶対パスの直下にあるファイルとフォルダ

出力	説明
Log	これはログファイルです。上述の例では、ファイル名は <code>EVSVR_DumpSaveset_20100714181917.Log</code> です。 操作がどのように成功したか判断するために常時ログファイルを見直します。ファイルは発生したエラーを示します。 p.137 の「EVSVR ログファイルのメッセージの確認に関する注意事項」 を参照してください。
VSDDBRecords.xml	この XML ファイルは DumpSaveset が取り込んだ保存セットのボルトストアデータベースレコードを含んでいます。
Recombined フォルダ	このフォルダは保存セット全体が取り込まれた後 Enterprise Vault が再構築するファイルを含んでいます。詳しくは 表 17-18 を参照してください。
Parts フォルダ	このフォルダは取り込まれた保存セットから成り立つファイルを含んでいます。詳しくは 表 17-19 を参照してください。

表 17-18 Recombined フォルダの内容

出力	説明
DVS	<p>このファイルは、大きいファイル保存セットの場合を除き、取り込まれた保存セットと関連しているすべてのデータを含んでいます。DumpSaveset は大きいファイルデータを DVF または DVFSF ファイルの形式で Parts フォルダに出力し、また、データをネイティブアイテムとして出力します(下記参照)。サンプルファイル名は次のとおりです。</p> <p>DS_201007078497509~201007071011490000~Z~611F6F215A2134E015849E23A4D6D601.DVS</p>
DocFile	<p>このファイルは上記の組み変えられた DVS ファイルの圧縮解除された構造化ストレージバージョンです。Structured Storage Viewer で内容を調べることができます。サンプルファイル名は次のとおりです。</p> <p>DS_201007078497509~201007071011490000~Z~611F6F215A2134E015849E23A4D6D601.DocFile</p>
ネイティブアイテム	<p>これは Enterprise Vault が取り込んだ元のアイテムです。Exchange メッセージの場合、DumpSaveset は MSG ファイルを生成します。Domino メッセージの場合、DumpSaveset は DVNS ファイルを生成します。大きいファイルの場合、DumpSaveset は元の大きいファイルを生成します。サンプルファイル名は次のとおりです。</p> <p>My Exchange message.msg MyVeryLargeDocFile.doc</p>

表 17-19 Parts フォルダの内容

出力	説明
DVS/ARCHDVS (CAB が収集されたか、または移行された場合)	<p>このファイルは、保存セット全体か、または共有が有効になっている場合は、複数パーツの保存セットの一部です。サンプルファイル名は次のとおりです。</p> <p>DS_713C88D67D80E8046FFF279AE27D46B1.DVS</p>
DocFile	<p>このファイルは上記の DVS ファイルの圧縮解除された構造化ストレージバージョンです。Structured Storage Viewer で内容を調べることができます。サンプルファイル名は次のとおりです。</p> <p>DS_713C88D67D80E8046FFF279AE27D46B1.DocFile</p>

出力	説明
DVSSP/ARCHDVSSP (CAB が収集されたか、または移行された場合)	共有が有効になっている場合、複数パーツの保存セットの出力のみ。ファイルは Centera デバイスに格納される保存セットに対しては生成されません。サンプルファイル名は次のとおりです。 DS_713C88D67D80E8046FFF279AE27D46B1~2B~34D8CA20~00~1.DVSSP
DVSCC/ARCHDVSCC (CAB が収集されたか、または移行された場合)	共有が有効で、変換された内容が生成されている場合、複数パーツの保存セットの出力のみ。ファイルは Centera デバイスに格納される保存セットに対しては生成されません。サンプルファイル名は次のとおりです。 DS_713C88D67D80E8046FFF279AE27D46B1~2B~34D8CA20~00~1.DVSCC
DVFSP/ARCHDVFSP (移行された場合)	共有が有効になっている場合、大きいファイルの複数パーツの保存セットの出力のみ。ファイルは Centera デバイスに格納される保存セットに対しては生成されません。サンプルファイル名は次のとおりです。 DS_9111FB9F5230E0D6AB99C2014DC51611~CE~6E068DCC~00~1.DVFSP
DVF/ARCHDVF (移行された場合)	共有が有効になっていない場合、大きいファイルの保存セットの出力のみ。また、ファイルは Centera デバイスに格納される保存セットに対しても生成されます。サンプルファイル名は次のとおりです。 DS_713C88D67D80E8046FFF279AE27D46B1.DVF
DVFCC/ARCHDVFCC (移行された場合)	共有が有効ではなく、変換された内容が生成されている場合、大きいファイルの保存セットの出力のみ。ファイルは Centera デバイスに格納される保存セットに対しては生成されません。サンプルファイル名は次のとおりです。 DS_713C88D67D80E8046FFF279AE27D46B1.DVFCC
CAB/ARCHCAB (移行された場合)	取り込まれた保存セットの一部が、 CAB ファイルを使うコレクションのために設定された CIFS パーティションに格納される場合の出力のみ。 DumpSaveset は保存セットの収集されたパーツごとに CAB ファイルを出力します。 CAB ファイルの名前の形式は <code>DS_VaultStoreIdentity_CABfileName</code> です。次に例を示します。 DS_VS8_Collection100.CAB

出力	説明
CDF.xml	<p>Centera デバイスに格納される保存セットの出力のみ。XML ファイルは、取り込まれた保存セットと関連している Clip の ID をファイル名として使います。次に例を示します。</p> <pre>DS_8058S6H8CJLGLeDF3SPTVDEKITTG4156M190N G0Q98CDMO8MC3SPT.CDF.xml</pre>
MetaData.xml	<p>ストリーマデバイスに格納されるパーツがある保存セットの出力のみ。DumpSaveset は保存セットのパーツごとに XML ファイルを出力します。サンプルファイル名は次のとおりです。</p> <pre>DS_9111FB9F5230E0D6AB99C2014DC51611~CE~ 6E068DCC~00~1.DVSSP.MetaData.xml</pre>

DumpSISPart コマンド

DumpSISPart コマンドは指定済みの SIS パーツを取り込みます。

構文

```
DumpSISPart EntryId SisPartId [-o OutputFolder]
```

パラメータについて次に説明します。

<i>EntryId</i>	必須のボルトストアエントリ、アーカイブエントリ、またはアーカイブフォルダエントリを識別します。EVSVR は SIS パーツの場所を判断するためにこれを使います。
<i>SisPartId</i>	SIS パーツを指定します。
<i>OutputFolder</i>	取り込まれたファイルとログファイルを格納するフォルダのパスを指定します。デフォルトでは、これは Enterprise Vault プログラムフォルダ (たとえば、C:\Program Files (x86)\Enterprise Vault) の Reports\EVSVR サブフォルダです。

例

次の例では、2 つのパラメータは必須の SIS パーツのボルトストアのエントリ ID と SIS パーツ ID を指定します。

```
dp 1995C3ACBB9472646AB0F3A0FDC7066B91210000testsrv1.domain.local
714003019523969A1D9431D0592CCE41~91~BAC3E35A~00~1
```

このコマンドは -o パラメータで出力フォルダを指定しないため、DumpSISPart はファイルをデフォルトの場所へ出力します。その場所は通常 C:\Program Files (x86)\Enterprise Vault\Reports\EVSVR です。DumpSISPart のすべてのファイルは、EVSVR_DumpSISPart_20100715114342 のような、この出力フォルダの下のタイ

ムスタンプ付きのフォルダに出力されます。したがって、この例では、出力の絶対パスは次のとおりです。

```
C:\Program Files
(x86)\¥Reports¥EVSVR¥EVSVR_DumpSISPart_20100715114342Enterprise
Vault
```

想定される出力

注記されている場合を除き、DumpSISPart は下記のすべてのファイルを出力します。

表 17-20 出力の絶対パスの直下にあるファイルとフォルダ

出力	説明
Log	<p>これはログファイルです。上述の例では、ファイル名は EVSVR_DumpSISPart_20100715114342.Log です。</p> <p>操作がどのように成功したか判断するために常時ログファイルを見直します。ファイルは発生したエラーを示します。</p> <p>p.137 の「EVSVR ログファイルのメッセージの確認に関する注意事項」を参照してください。</p>
xml	<p>XML ファイルは SIS パーツを参照するボルトストアのボルトストアデータベースレコードを含んでいます。DumpSISPart は SIS パーツが存在するボルトストアグループのボルトストアごとに 1 つの XML ファイルを生成します。SIS パーツを参照するボルトストアの XML ファイルのみ情報を含んでいます。他は空の EnterpriseVault XML 要素を含んでいます。サンプルファイル名は次のとおりです。</p> <p>VSDBRecords - VS0101.xml VSDBRecords - VS0102Collected.xml</p>
DVSSP/ARCHDVSSP (CAB が収集されたか、または移行された場合)	<p>大きくないファイルの SIS パーツの出力のみ。サンプルファイル名は次のとおりです。</p> <p>DP_714003019523969A1D9431D0592CCE41~91~BAC3E35A~00~1.DVSSP</p>
DVSCC/ARCHDVSCC (CAB が収集されたか、または移行された場合)	<p>変換された内容が生成された大きくないファイルの SIS パーツの出力のみ。サンプルファイル名は次のとおりです。</p> <p>DP_714003019523969A1D9431D0592CCE41~91~BAC3E35A~00~1.DVSCC</p>

出力	説明
DVFSP/ARCHDVFSP (移行された場合)	<p>大きいファイルの SIS パーツの出力のみ。サンプルファイル名は次のとおりです。</p> <pre>DP_714003019523969A1D9431D0592CCE41~91~BAC3E35A~00~1.DVFSP</pre>
DVFCC/ARCHDVFCC (移行された場合)	<p>変換された内容が生成された大きいファイルの SIS パーツの出力のみ。サンプルファイル名は次のとおりです。</p> <pre>DP_714003019523969A1D9431D0592CCE41~91~BAC3E35A~00~1.DVFCC</pre>
decompressed	<p>SIS パーツか、または DumpSISPart が生成した SIS パーツが変換されたコンテンツファイルが圧縮された場合、コマンドは圧縮解除されたバージョンも生成します。サンプルファイル名は次のとおりです。</p> <pre>DP_714003019523969A1D9431D0592CCE41~91~BAC3E35A~00~1.DVSSP.decompressed</pre> <pre>DP_714003019523969A1D9431D0592CCE41~91~BAC3E35A~00~1.DVSCC.decompressed</pre>
CAB/ARCHCAB (移行された場合)	<p>SIS パーツが、CAB ファイルを使うコレクションのために設定された CIFS パーティションに格納される場合の出力のみ。CAB ファイルは SIS パーツが収集された場合に想定されます。CAB ファイルの名前の形式は DP_CABfileName です。次に例を示します。</p> <pre>DP_Collection1.CAB</pre>
MetaData.xml	<p>ストリーマデバイスに格納される SIS パーツの出力のみ。DumpSISPart は SIS パーツに 1 つの XML ファイル、ストリーマデバイスに格納される SIS パーツが変換されたコンテンツに別のファイルを生成します。サンプルファイル名は次のとおりです。</p> <pre>DP_9111FB9F5230E0D6AB99C2014DC51611~CE~6E068DCC~00~1.DVSSP.MetaData.xml</pre> <pre>DP_9111FB9F5230E0D6AB99C2014DC51611~CE~6E068DCC~00~1.DVSCC.MetaData.xml</pre>

ExtractSavesets コマンド

ExtractSavesets コマンドは、次の種類のファイルから 1 つ以上の保存セットを抽出します。

- EMC Centera データ BLOB ファイル

■ Enterprise Vault ストレージキュー (.EVSQ) ファイル

これらの種類のファイルは、一緒に追加された複数の圧縮保存セットを含むので **appended savesets** ファイルと呼ばれます。

構文

```
ExtractSavesets AppendedSavesetsFile [-o OutputFolder] [-n  
FileNameTemplate] [-f Offset -s Size]
```

パラメータについて次に説明します。

<i>AppendedSavesets File</i>	保存セットが含まれているファイルの絶対パスを指定します。
<i>OutputFolder</i>	取り込まれたファイルとログファイルを格納するフォルダのパスを指定します。デフォルトでは、これは Enterprise Vault プログラムフォルダ (たとえば、C:¥Program Files (x86)¥Enterprise Vault) の Reports¥EVSQR サブフォルダです。
<i>FileNameTemplate</i>	抽出した保存セットに対して使うファイル命名規則を指定します。ファイル名テンプレートを指定しなかった場合、 EVSQR によって入力ファイルの名前が保存セットに適用されますが、パスまたは拡張子は含まれません。 オフセットとサイズを指定しなかった場合は、 EVSQR によってすべての保存セットが抽出され、順次 <i>FileNameTemplate_nnn.DVS</i> 形式で名前が付けられます。サイズとオフセットを指定した場合、 EVSQR によって offset からの size バイトが <i>FileNameTemplate.DVS</i> という名前の 1 つの保存セットに抽出されます。
<i>Offset</i>	必要な保存セットの抽出を開始する入力ファイルの先頭からのオフセットをバイト単位で指定します。オフセットパラメータを指定した場合、サイズパラメータも指定する必要があります。
<i>Size</i>	入力ファイルから抽出するデータのサイズをバイト単位で指定します。サイズパラメータを指定した場合、オフセットパラメータも指定する必要があります。

例

次の例では、2 つのパラメータは EMC Centera データ BLOB のパスと内容の抽出先フォルダを指定します。

```
es "C:¥Centera  
Blobs¥2RGPDMAIG8D51eAMOCBFS25BBK2G415357TU510G996D0BM2P8330.Blob126"  
-o c:¥MyOutputFolder
```

出力フォルダが存在しない場合は、**ExtractSavesets** によって作成されます。

ExtractSavesets のすべてのファイルは、EVSQR_ExtractSavesets_20100715131545

のような、この出力フォルダの下のタイムスタンプ付きのフォルダに出力されます。したがって、この例では、出力の絶対パスは次のとおりです。

C:\¥MyOutputFolder¥EVSVR_ExtractSaveSets_20100715131545¥

サンプルコマンドはオフセットを指定するための `-f` パラメータまたはサイズを指定するための `-s` パラメータを含んでいません。したがって **Blob** ファイルのすべての保存セットを抽出します。

想定される出力

注記されている場合を除き、**ExtractSaveSets** は下記のすべてのファイルとフォルダを出力します。

表 17-21 出力の絶対パスの直下にあるファイルとフォルダ

出力	説明
Log	これはログファイルです。上述の例では、ファイル名は <code>EVSVR_ExtractSaveSets_20100715131545.Log</code> です。 操作がどのように成功したか判断するために常時ログファイルを見直します。ファイルは発生したエラーを示します。 p.137 の「EVSVR ログファイルのメッセージの確認に関する注意事項」 を参照してください。
Extracted SaveSets フォルダ	このフォルダには ExtractSaveSets が入力ファイルから抽出したファイルが含まれています。詳しくは 表 17-22 を参照してください。

表 17-22 Extracted SaveSets フォルダの内容

出力	説明
DVS	指定済みの入力パラメータがあり、追加した保存セットファイルに DVS データが含まれている場合は、コマンドはこのファイルからすべての DVS ファイルを抽出します。各 DVS ファイルの名前の形式は <code>AppendedSaveSetName_IndexNumber.DVS</code> です。次に例を示します。 <code>2RGPDMAIG8D51eAMOCBFS25BBK2G415357TU510G996D0BM2P8330_001.DVS</code>
DocFile	このファイルは抽出された上記の DVS ファイルの圧縮解除された構造化ストレージバージョンです。 Structured Storage Viewer で内容を調べることができます。サンプルファイル名は次のとおりです。 <code>2RGPDMAIG8D51eAMOCBFS25BBK2G415357TU510G996D0BM2P8330_001.DocFile</code>

ListSavesetLocations コマンド

ListSavesetLocations コマンドは、指定した保存セットのすべての部分が Enterprise Vault によって格納されている場所を一覧表示します。

構文

```
ListSavesetLocations EntryId SavesetId [-o OutputFolder]
```

パラメータについて次に説明します。

<i>EntryId</i>	必須のボルトストアエントリ、アーカイブエントリ、またはアーカイブフォルダエントリを識別します。EVSVR は保存セットの場所を判断するためにこれを使います。
<i>SavesetId</i>	必須の保存セット ID またはトランザクション ID を指定します。
<i>OutputFolder</i>	取り込まれたファイルとログファイルを格納するフォルダのパスを指定します。デフォルトでは、これは Enterprise Vault プログラムフォルダ (たとえば、C:\Program Files (x86)\Enterprise Vault) の Reports\EVSVR サブフォルダです。

例

次の例では、パラメータは必須の保存セットのボルトストアのエントリ ID と保存セットのトランザクション ID と、結果を出力するためのフォルダを指定します。

```
ls 1995C3ACBB9472646AB0F3A0FDC7066B91210000testsrv1.domain.local  
713C88D67D80E8046FFF279AE27D46B1 -o c:\MyOutputFolder
```

出力フォルダが存在しない場合は、ListSavesetLocations によって作成されます。

ListSavesetLocations のすべてのファイルは、

EVSVR_ListSavesetLocations_20100715112935 のような、この出力フォルダの下のタイムスタンプ付きのフォルダに出力されます。したがって、この例では、出力の絶対パスは次のとおりです。

```
C:\MyOutputFolder\EVSVR_ListSavesetLocations_20100715112935
```

想定される出力

表 17-23 出力の絶対パスの直下にあるファイル

出力	説明
Log	<p>これはログファイルです。上述の例では、ファイル名は EVSVR_ListSaveSetLocations_20100715112935.Log です。</p> <p>操作がどのように成功したか判断するために常時ログファイルを見直します。ファイルは発生したエラーを示します。</p> <p>p.137 の「EVSVR ログファイルのメッセージの確認に関する注意事項」を参照してください。</p>

EVSVR ログファイルのメッセージの確認に関する注意事項

対話モード操作が終わったら、正常だったかどうかを示すメッセージが表示されます。操作が何らかの理由で失敗したら、ログファイルで詳細を確認してください。

エラーが発生しても操作は成功と見なされる場合には、基礎となる Enterprise Vault コンポーネントがイベントログにメッセージを記録することがあることに注意してください。EVSVR が呼び出すときに Enterprise Vault コードが生成するイベントログメッセージはログファイルにリダイレクトされ、イベントログには表示されません。したがって、ログファイルを確認し、エラーが発生しているかどうかを判断することが重要です。たとえば、操作の全体的な状態が「成功した完了操作」だった場合でも、ファイルは次のようなイベントログ関連のメッセージを含むことがあります。

```
2010-07-14 19:13:00 Event Output: Failed to recall a Saveset from
its Collection.
Reason: Failed to extract the file from the CAB file. The file name
is not in the CAB file index.
```

CAB コレクションを処理する場合の EVSVR パフォーマンスの向上

次の EVSVR 操作が CAB コレクションファイルを処理するときは、CPU 使用率が高くなり、完了に長時間かかることがあります。

- DatabaseLinkages (確認)
- DatabaseLinkages (修復)
- DatabaseReferences (修復)

この問題が発生した場合は、確認または修復する各フィンガープリントデータベースにインデックスを作成することによって著しくパフォーマンスを改善できます。それから、EVSVR 操作を実行した後、インデックスを削除するか、または次に操作を実行するときのために残すことができます。

メモ: フィンガープリントデータベースのインデックスを作成することにより、アーカイブのパフォーマンスがわずかに低下し、データベースのサイズが増加することがあります。ただし、EVSVR を定期的に行う場合、これらは許容可能なデメリットであると考慮できます。

CAB コレクションを処理する場合に EVSVR パフォーマンスを向上させる方法

- 1 SQL Server コンピュータで、SQL Server Management Studio を起動します。
- 2 [SQL Server Management Studio] ウィンドウの左ペインで、目的のフィンガープリントデータベースが表示されるまでツリーを展開します。
- 3 フィンガープリントデータベースをクリックし、次に[新しいクエリー]をクリックします。
- 4 次のいずれかの操作を行います。
 - インデックスを作成するには、次のクエリーを入力し、次に[実行]をクリックします。

```
DECLARE @RC int
DECLARE @Create bit
DECLARE @ByteRangeStart tinyint
DECLARE @ByteRangeEnd tinyint
DECLARE @debug bit
SET @Create = 1
SET @ByteRangeStart = 0
SET @ByteRangeEnd = 255
SET @debug = 0 /* Set to 1 to view debug information */
EXECUTE @RC = [dbo].[Factory_EVSVR_Index_01]
@Create, @ByteRangeStart, @ByteRangeEnd, @debug
```

- 既存のインデックスを削除するには、次のクエリーを入力し、次に[実行]をクリックします。

```
DECLARE @RC int
DECLARE @Create bit
DECLARE @ByteRangeStart tinyint
DECLARE @ByteRangeEnd tinyint
DECLARE @debug bit
SET @Create = 0
SET @ByteRangeStart = 0
```

```
SET @ByteRangeEnd = 255
SET @debug = 0 /* Set to 1 to view debug information */
EXECUTE @RC = [dbo].[Factory_EVSVR_Index_01]
@Create, @ByteRangeStart, @ByteRangeEnd, @debug
```

FSARunNow

この章では以下の項目について説明しています。

- [FSARunNow](#) について
- [FSARunNow](#) の実行
- [FSARunNow](#) の構文
- [FSARunNow](#) の例

FSARunNow について

FSARunNow ユーティリティを使うと、コマンドラインインターフェースを使ってオンデマンドでファイルシステムアーカイブタスクを開始できます。管理コンソールの[今すぐ実行]機能より多くのオプションを提供します。

FSARunNow ユーティリティを使うと次のことを実行できます。

- **初期アーカイブ**。ファイルシステムアーカイブタスクを指定できます。または、**Directory** データベースの適切なエントリ **ID** を引用することによって、特定のファイルサーバーまたはファイルサーバーボリュームからアーカイブできます。
- フォルダアクセス権のファイルサーバーアーカイブの権限の同期を開始してください。
- 必要なバージョン数になるまで古いバージョンのアーカイブファイルを削除します。ファイルシステムアーカイブタスクは、タスクのプロパティの[削除]タブでのバージョンおよび経過日数に基づく削除の設定に従って、削除を実行します。
- **EMC Celerra/VNX** デバイスからアーカイブされたファイルの場合は、プレースホルダが削除されたアーカイブファイルを削除します。

FSARunNow の実行

必要な FSARunNow コマンドを含むバッチファイルを作成し、Windows タスクスケジューラで必要なときにファイルを実行できます。

メモ: コンピュータでユーザーアカウント制御 (UAC) が有効である場合は、管理者権限でこのユーティリティを実行してください。

p.13 の「[管理者権限での Enterprise Vault コマンドラインユーティリティの実行](#)」を参照してください。

FSARunNow を実行する方法

- 1 ボルトサービスアカウントを使って、サーバーにログオンします。

注意: Enterprise Vault サーバーにローカルにログオンする必要があります。リモートでログオンした場合は FSARunNow を実行できません。

- 2 コマンドプロンプトウィンドウを開きます。
- 3 Enterprise Vault プログラムフォルダ (たとえば、C:\Program Files (x86)\Enterprise Vault) に移動します。
- 4 必要なオプションを指定して FSARunNow を実行します。
p.141 の「[FSARunNow の構文](#)」を参照してください。

FSARunNow の構文

次に示すいずれかの形式でコマンドを入力します。

- 指定したファイルシステムアーカイブタスク、ファイルサーバー、ファイルサーバーボリュームのアーカイブを開始する方法。
`FSARunNow Archive TaskName | TaskEntryId | FileServerEntryId [VolumeEntryId] [Report | Normal] [ShortcutsOnly]`
- ファイルサーバーアーカイブ権限とフォルダアクセス権の同期を開始する方法。
`FSARunNow Synchronize TaskName | TaskEntryId | FileServerEntryId`
- 以前のバージョンのアーカイブファイルの削除を開始する方法。
`FSARunNow Prune TaskName | TaskEntryId | FileServerEntryId [Report | Normal]`
- EMC Celerra/VNX デバイスからアーカイブされ、ブレースホルダが削除されたファイルの削除を開始する方法。

```
FSARunNow CelerraDelOnDel TaskName | TaskEntryId |  
FileServerEntryId [Report | Normal]
```

パラメータについては次のとおりです。

TaskName	<p>処理するタスクの名前を指定します。次のように TaskName を判別できます。</p> <ol style="list-style-type: none">1 管理コンソールの左ペインで[Enterprise Vault サーバー]を展開します。2 処理しようとしているタスクを実行しているコンピュータの名前を展開します。3 [タスク]をクリックします。 右ペインに、そのコンピュータ上のタスクが表示されます。 <p>メモ: タスク名にスペースが含まれる場合は引用符で囲みます。</p>
TaskEntryId	<p>処理するタスクの TaskEntryId を指定します。次のように TaskEntryId を判別できます。</p> <ol style="list-style-type: none">1 SQL Server Management Studio を起動します。2 左のツリービューで、[データベース]、[EnterpriseVaultDirectory]の順に選択します。3 ツールバーで、[新しいクエリー]をクリックします。4 [クエリー]ウィンドウで次のように入力します。 <pre>select * from task</pre>5 F5 キーを押してクエリーを実行します。6 処理するタスクの TaskEntryId のクエリー結果をスキャンします。 <p>TaskEntryId を指定するには、適切な接尾辞を持つタスクの ID を使う必要があります。クエリー結果のタスク名には次の接尾辞が含まれます。</p> <ul style="list-style-type: none">■ Archive の場合 - TaskName■ Synchronize の場合 - TaskName_Synchronization■ Prune の場合 - TaskName_Pruning■ CelerraDelOnDel の場合 - TaskName_CelerraDelOnDel <p>たとえば、タスク名が FSA_Task1 の場合に Prune 実行の TaskEntryId を指定するには、FSA_Task1_Pruning に対応する TaskEntryId を使用します。</p>

FileServerEntryId

処理対象のアーカイブを格納するコンピュータの **FileServerEntryId** を指定します。次のように **FileServerEntryId** を判別できます。

- 1 **SQL Server Management Studio** を起動します。
- 2 左のツリービューで、[データベース]、[EnterpriseVaultDirectory]の順に選択します。
- 3 ツールバーで、[新しいクエリー]をクリックします。
- 4 [クエリー]ウィンドウで次のように入力します。

```
select * from fileserverentry
```
- 5 **F5** キーを押してクエリーを実行します。
- 6 処理コンピュータの **FileServerEntryId** のクエリー結果をスキャンします。

VolumeEntryId

処理対象のアーカイブを格納するコンピュータの **VolumeEntryId** を指定します。次のように **VolumeEntryId** を判別できます。

- 1 **SQL Server Management Studio** を起動します。
- 2 左のツリービューで、[データベース]、[EnterpriseVaultDirectory]の順に選択します。
- 3 ツールバーで、[新しいクエリー]をクリックします。
- 4 [クエリー]ウィンドウで次のように入力します。

```
select * from fileservervolumeentry
```
- 5 **F5** キーを押してクエリーを実行します。
- 6 処理コンピュータの **VolumeEntryId** のクエリー結果をスキャンします。

Report	<p>ファイルシステムアーカイブタスクをレポートモードで実行します。各タスクは、標準モードで実行した場合に行う変更の概要レポートを作成しますが、実際には変更を行いません。</p> <p>デフォルトでは、すべての FSARunNow オプションがレポートモードで実行されることに注意してください(ただし、このパラメータを使わない Synchronize オプションは除きます)。</p> <p>ファイルシステムアーカイブタスクは次のフォルダのレポートを生成します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ アーカイブレポート: Enterprise Vault インストールフォルダの Reports\FSA サブフォルダ。 ■ 削除レポートと、アーカイブ済みの Celerra/VNX ファイルの削除のレポート: Enterprise Vault インストールフォルダの Reports サブフォルダ。 <p>これらのレポートについて詳しくは、『ファイルシステムアーカイブの設定』の「ファイルシステムアーカイブタスクのレポートについて」を参照してください。</p>
Normal	<p>ファイルシステムアーカイブタスクを標準モードで実行します。各タスクは要求された処理を実行し、加えられた変更の概要レポートを生成します。</p>
ShortcutsOnly	<p>ショートカットのみを作成するようにアーカイブタスクを制限します。このオプションを使うと、タスクでアーカイブは実行されません。</p>

FSARunNow の例

FSARunNow の実行例を次に示します。

- レポートモードでアーカイブ処理を実行する方法。
FSARunNow Archive "File System Archiving Task1"
- 指定したファイルサーバーの同期実行を実行する方法。
FSARunNow Synchronize
1D6D9206BFDBFB846B2E0F8135A1989331d100002example.server.local
- 指定したファイルサーバーの削除実行をレポートモードで実行する方法。
FSARunNow prune
1AD6297BC643DCC40A924CAB74D0BCDCE141000server.example.net
- ファイルシステムアーカイブタスクを実行して、ブレースホルダが削除されている **Celerra/VNX** 上のアーカイブファイルを削除する方法。
FSARunNow CelerraDelOnDel FSATask1 normal

FSAUndelete

この章では以下の項目について説明しています。

- [FSAUndelete](#) について
- [FSAUndelete](#) の実行
- [FSAUndelete](#) の構文
- [FSAUndelete](#) の例

FSAUndelete について

FSAUndelete は、指定のプレースホルダ、またはファイルサーバーの指定のフォルダにあるすべてのプレースホルダのアーカイブ済みアイテムの永続的な削除をキャンセルします。

FSAUndelete は、通常、次の条件すべてが該当する場合に使用されます。

- 管理コンソールの[サイトプロパティ]の[アーカイブの設定]タブでオプション[ユーザーが削除したアイテムの回復を有効にする]を設定しています。このオプションは「一時削除」の機構を提供します。ユーザーがアイテムを削除すると、**Enterprise Vault** は永続的にアーカイブ済みアイテムを削除する前に、指定の日数の間、アーカイブ済みアイテムを保持します。
- プレースホルダを使い、[プレースホルダが削除されたときにアーカイブファイルを削除]設定でアーカイブポリシーを使います。
- ファイルサーバーにプレースホルダを復元します (たとえばバックアップから)。

このシナリオでは、復元されたプレースホルダと関連付けられるアーカイブファイルのいくつかは永続的に削除される予定であることがあります。復元されたプレースホルダは **Enterprise Vault** が永続的にアーカイブファイルを削除するまでのみ機能します。**FSAUndelete** の使用によって、アーカイブのファイルすべてを復元しなくても、アーカイブファイルの永続的な削除を取り消すことができます。

FSAUndelete は次をするためのオプションを提供します。

- 指定のプレースホルダに対応するアーカイブファイルの削除を取り消します。
- 指定のフォルダのプレースホルダすべてに対応するアーカイブファイルの削除を取り消します。省略可能なオプションとして指定のフォルダのサブフォルダすべてを含むことを選択できます。

FSAUndelete は、削除を取り消したファイルや、孤立したプレースホルダまたは見つからなかった指定のプレースホルダのようなエラーをリストするレポートをコマンドラインで生成します。

FSAUndelete の実行

ファイルサーバーのプレースホルダと関連付けられるアーカイブファイルの永続的な削除を取り消すとき **FSAUndelete** を実行します。

メモ: コンピュータでユーザーアカウント制御 (UAC) が有効である場合は、管理者権限でこのユーティリティを実行してください。

p.13 の「[管理者権限での Enterprise Vault コマンドラインユーティリティの実行](#)」を参照してください。

FSAUndelete を実行する方法

- 1 **FSAUndelete** を実行するコンピュータを特定します。
 - **Windows** ファイルサーバーの場合、次のコンピュータのどちらかで **FSAUndelete** を実行できます。
 - ファイルサーバーボリュームのファイルシステムアーカイブタスクを実行する **Enterprise Vault** サーバー。ボリュームは管理コンソールでファイルサーバーの対象ボリュームとして設定する必要があります。
 - 処理するプレースホルダを含んでいるファイルサーバー。
 - **Windows** 以外のファイルサーバーの場合、ファイルサーバーボリュームのファイルシステムアーカイブタスクを実行する **Enterprise Vault** サーバーで **FSAUndelete** を実行します。ボリュームは管理コンソールでファイルサーバーの対象ボリュームとして設定する必要があります。
- 2 必要に応じて、ボルトサービスアカウント、または次の必要条件を満たすアカウントで **Enterprise Vault** サーバーか **Windows** ファイルサーバーにログオンします。
 - **Windows** ファイルサーバーが削除取り消し操作の対象である場合、**Enterprise Vault** のプレースホルダアプリケーションロールのメンバーであるアカウント。アカウントは **Windows** ファイルサーバーの **Print Operators** グループと **Distributed COM Users** グループ両方のメンバーでもある必要があります。

- **NetApp** ファイルサーバーが削除取り消し操作の対象である場合、**Enterprise Vault** のプレースホルダアプリケーションロールのメンバーであるアカウント。アカウントは、**NetApp** ファイルサーバーの管理者グループのメンバーである必要があります。
- **EMC Celerra** ファイルサーバーが削除取り消し操作の対象である場合、**Enterprise Vault** のプレースホルダアプリケーションロールと **Enterprise Vault** ファイルサーバー管理者ロール両方のメンバーであるアカウント。アカウントは **Celerra** デバイスの **Administrators** グループのメンバーでもある必要があります。

管理コンソール内からの承認マネージャの使用によって **Enterprise Vault** のロールを割り当てることができます。

詳しくは『Symantec Enterprise Vault 管理者ガイド』の「ロールベースの管理」を参照してください。

- 3 コマンドプロンプトウィンドウを開き、**Enterprise Vault** のインストール先フォルダ (C:\Program Files (x86)\Enterprise Vault など) に移動します。
- 4 必要なオプションを使って **FSAUndelete** コマンドを実行します。
p.147 の「**FSAUndelete の構文**」を参照してください。

FSAUndelete の構文

FSAUndelete で次のオプションの 1 つを使います。パスにスペースが含まれる場合は引用符で囲みます。

- 単一のプレースホルダと関連付けられるファイルの削除を取り消す場合
`FSAUndelete placeholder_path`
placeholder_path はプレースホルダのローカルパスまたは **UNC** パスです。
FSAUndelete はワイルドカード文字をサポートしません。
たとえば復元されたバックアップファイルのログの各プレースホルダのアーカイブファイルの削除を取り消すためにスクリプトでこのオプションを使うことができます。
- 指定のフォルダ (サブフォルダは含まない) のすべてのプレースホルダと関連付けられるファイルの削除を取り消す場合
`FSAUndelete folder_path`
folder_path はフォルダのローカルパスまたは **UNC** パスです。
- 指定のフォルダと、再帰的にすべてのサブフォルダのすべてのプレースホルダと関連付けられるファイルの削除を取り消す場合
`FSAUndelete folder_path -r`
folder_path はフォルダのローカルパスまたは **UNC** パスです。

FSAUndelete の例

次の例は Enterprise Vault サーバーから FSAUndelete を実行することを想定します。

- UNC パス ¥¥myserver¥myfiles¥file1 を持つプレースホルダのアーカイブファイルの削除を取り消します。

```
FSAUndelete ¥¥myserver¥myfiles¥file1
```

- UNC パスが ¥¥myserver¥myfiles¥ であるフォルダのプレースホルダのアーカイブファイルの削除を取り消します。しかしサブフォルダを処理しません。

```
FSAUndelete ¥¥myserver¥myfiles¥
```

- UNC パスが ¥¥myserver¥myfiles¥ であるフォルダと、すべてのサブフォルダのすべてのプレースホルダのアーカイブファイルの削除を取り消します。

```
FSAUndelete ¥¥myserver¥myfiles¥ -r
```

次の例はプレースホルダを処理する Windows ファイルサーバーで FSAUndelete を実行することを想定します。従ってプレースホルダとフォルダへのローカルパスを指定できます。

- プレースホルダ C:¥myfiles¥file 9 のアーカイブファイルの削除を取り消します。

```
FSAUndelete "C:¥myfiles¥file 9"
```

- フォルダ C:¥myfiles¥ とそのサブフォルダのプレースホルダすべてのアーカイブファイルの削除を取り消します。

```
FSAUndelete C:¥myfiles¥ -r
```

FSAUtility

この章では以下の項目について説明しています。

- [FSAUtility について](#)
- [FSAUtility の実行](#)
- [EMC Celerra/VNX プレースホルダと FSAUtility の使用について](#)
- [FSAUtility オプション](#)

FSAUtility について

FSAUtility は、次の処理が可能なコマンドラインユーティリティです。

- アーカイブポイントを元のパスに再作成します。
- アーカイブファイルのプレースホルダを元の場所に再作成します。
- プレースホルダを別の場所に移動し、対応するアーカイブ済みファイルを移動します。
- アーカイブ済みのデータを移動せずに移行元パスから移行先パスにプレースホルダを移行します。
- 対応するアイテムがアーカイブ内に存在しない孤立したプレースホルダを削除します。
- すべてのアーカイブファイルか特定のファイルの種類のアークイブファイルを、元の場所か新しい場所に復元します。
- フォルダにあるプレースホルダに対応するアーカイブファイルを呼び戻します。

このユーティリティは、Windows ファイルサーバー、NetApp Filer、EMC Celerra/VNX デバイスのアーカイブポイントとプレースホルダを使って動作します。

Enterprise Vault でアーカイブされたコンテンツを持つファイルサーバーの移行と統合について詳しくは、Symantec のサポート Web サイトの次の記事を参照してください。

<http://www.symantec.com/docs/TECH147519>

FSAUtility の実行

FSAUtility を実行する前に、次の点に注意してください。

- FSAUtility のインスタンスは 1 度に複数実行しないことを推奨します。このユーティリティの複数の並列インスタンスに同じ移動元または移動先を指定すると、問題が発生する場合があります。
- FSAUtility を実行する前にターゲットのファイルサーバーを処理するファイルシステムアーカイブタスクを停止することを推奨します。この処理によって FSAUtility がファイルを処理している間にサーバーで手動アーカイブまたはスケジュール設定されたアーカイブが発生することがなくなるため、パフォーマンスが向上し、一貫しない動作を防ぐことができます。たとえば、ボリュームへのファイルの呼び戻しが進行中の間に Enterprise Vault がそのボリュームをアーカイブすれば、Enterprise Vault は呼び戻されたファイルをプレースホルダに変換します。
- コンピュータでユーザーアカウント制御 (UAC) が有効である場合は、管理者権限でこのユーティリティを実行してください。
p.13 の「[管理者権限での Enterprise Vault コマンドラインユーティリティの実行](#)」を参照してください。
- EMC の制限により、対象のパスが 1024 文字を超えると FSAUtility は Celerra/VNX デバイスでファイルまたはフォルダを処理できなくなります。Enterprise Vault サーバー上のイベントログメッセージは、入力文字列が正しい形式ではなかったことを示します。
- FSAUtility には、Celerra/VNX のプレースホルダを識別する方法が 2 つあります。Celerra/VNX ボリュームのプレースホルダと FSAUtility を使う場合には、Celerra/VNX の設定に適した手順を行ってください。
p.151 の「[EMC Celerra/VNX プレースホルダと FSAUtility の使用について](#)」を参照してください。

FSAUtility を実行する方法

- 1 ボルトサービスアカウントで Enterprise Vault サーバーにログオンします。Windows のファイルサーバーを処理するためにユーティリティを使う場合には、アカウントにはファイルサーバーのローカル管理者の権限が必要です。

注意: Enterprise Vault サーバーにローカルにログオンする必要があります。リモートでログオンした場合は FSAUtility を実行できません。

- 2 コマンドプロンプトウィンドウを開きます。

- 3 Enterprise Vault プログラムフォルダ (たとえば、C:\Program Files (x86)\Enterprise Vault) に移動します。
- 4 必要なオプションを指定して FSAUtility を実行します。
p.156 の「FSAUtility オプション」を参照してください。

EMC Celerra/VNX プレースホルダと FSAUtility の使用について

EMC Celerra/VNX ボリュームのプレースホルダと FSAUtility を使う場合は、このセクションをお読みください。

FSAUtility は、Windows API 呼び出しまたは Celerra/VNX HTTP API 呼び出しを使って EMC Celerra/VNX デバイスのプレースホルダを識別できます。表 20-1 に、FSAUtility がデフォルトで使用する API 呼び出しをそれぞれのプレースホルダ関連のオプションと共に示します。

表 20-1 Celerra/VNX のプレースホルダを検出するためのデフォルトの API 呼び出し

FSAUtility オプション	FSAUtility パラメータ	Celerra/VNX のプレースホルダを検出するためのデフォルトの API 呼び出し
プレースホルダに相当するファイルの一括の呼び出し	FSAUtility -b	Windows API 呼び出し
プレースホルダの再作成	FSAUtility -c	Windows API 呼び出し
プレースホルダと対応するファイルの移動	FSAUtility -m	Windows API 呼び出し
孤立したプレースホルダの削除	FSAUtility -o	Windows API 呼び出し
プレースホルダの移行	FSAUtility -pm	Celerra/VNX API 呼び出し

デフォルトでは -pm パラメータによる FSAUtility が Celerra/VNX API 呼び出しを使用することにご注意ください。このデフォルト設定により、Celerra/VNX の設定に関係なくプレースホルダの移行を常に成功させることが可能です。サポートされている Celerra/VNX 設定で FSAUtility -pm を使う場合は、よりパフォーマンス効率に優れた Windows API 呼び出しを使うようにこのオプションの設定を変更することもできます。その他のプレースホルダ関連パラメータ (-b、-c、-m、-o) では、FSAUtility は効率的な Windows API 呼び出しをデフォルトで使用します。

FSAUtility.exe.config ファイルを編集すれば、FSAUtility が各プレースホルダ関連オプションに使用する API 呼び出しを設定できます。

Celerra/VNX のプレースホルダを識別するために FSAUtility が使用する API 呼び出しの設定

FSAUtility.exe.config ファイルは、Celerra/VNX プレースホルダを識別するためにどの API 呼び出しを FSAUtility が使用するかを制御します。このファイルには、FSAUtility のプレースホルダ関連オプションそれぞれについて、どの API 呼び出しを使用するか指定するためのエントリが含まれています。

付属の FSAUtility.exe.config ファイルではこれらのエントリはすべてコメント化され、FSAUtility は各オプションのデフォルトの API 呼び出しを使用します。つまり、FSAUtility はプレースホルダ移行に Celerra/VNX API 呼び出しを使用し、他のプレースホルダ関連のオプションに Windows API 呼び出しを使用します。

FSAUtility.exe.config を編集して、FSAUtility が各オプションにどの API 呼び出しを使うかを設定できます。

FSAUtility が Celerra/VNX のプレースホルダを識別するのに使用する API 呼び出しを設定する方法

- 1 FSAUtility を実行したい Enterprise Vault サーバーで、C:\Program Files (x86)\Enterprise Vault などの Enterprise Vault インストールフォルダにナビゲートします。
- 2 Windows メモ帳などのテキストエディタで FSAUtility.exe.config ファイルを開きます。
- 3 API 呼び出しを設定したい FSAUtility オプションのファイルのセクションを見つけます。
 - FSAUtility -pm オプションの <PHMigration>。
 - FSAUtility -m オプションの <MovePlaceHolder>。
 - FSAUtility -b オプションの <BulkRecall>。
 - FSAUtility -c オプションの <RecreatePlaceHolder>。
 - FSAUtility -o オプションの <OrphanPlaceHolder>。
- 4 セクションの最初と最後にあるコメント文字を削除します。
- 5 CheckCelerraOfflineAttribute キーの値を編集して、適切な設定にします。
 - 値 0 は、Windows API 呼び出しを使うようにオプションを設定します。
 - 値 1 は、Celerra/VNX API 呼び出しを使うようにオプションを設定します。

任意のオプションについて **CheckCelerraOfflineAttribute** キーが省略またはコメント化された場合には、**FSAUtility** はそのオプションのデフォルトの API 呼び出しを使います。

- 6 API 呼び出しを設定したい各 **FSAUtility** オプションの 3 から 5 までの手順を繰り返します。
- 7 **FSAUtility.exe.config** ファイルに変更を保存します。

FSAUtility.exe.config ファイル設定の例

次の例は様ざまな結果を生成するために編集された **FSAUtility.exe.config** ファイルを示します。

例 1

このファイルでは、デフォルトの **Celerra/VNX** の API 呼び出しではなく **Windows API** 呼び出しを使うように、**PHMigration** オプション (**FSAUtility -pm** 用) が設定されます。他の値は定義されないので、**FSAUtility** はブレースホルダ関連のすべてのオプションに対して **Windows API** 呼び出しを使います。

```
<?xml version="1.0" encoding="utf-8"?>
<configuration>
  <configSections>
    <section name="PHMigration"
      type="System.Configuration.DictionarySectionHandler"/>
    <section name="BulkRecall"
      type="System.Configuration.DictionarySectionHandler"/>
    <section name="MovePlaceHolder"
      type="System.Configuration.DictionarySectionHandler"/>
    <section name="RecreatePlaceHolder"
      type="System.Configuration.DictionarySectionHandler"/>
    <section name="OrphanPlaceHolder"
      type="System.Configuration.DictionarySectionHandler"/>
  </configSections>
  <PHMigration>
    <add key="CheckCelerraOfflineAttribute" value = "0"/>
  </PHMigration>
  <MovePlaceHolder>
    <!--><add key="CheckCelerraOfflineAttribute" value = "0"/>-->
  </MovePlaceHolder>
  <BulkRecall>
    <!--><add key="CheckCelerraOfflineAttribute" value = "0"/>-->
  </BulkRecall>
  <RecreatePlaceHolder>
```

```
<!--><add key="CheckCelerraOfflineAttribute" value = "0"/>-->
</RecreatePlaceHolder>
<OrphanPlaceHolder>
  <!--><add key="CheckCelerraOfflineAttribute" value = "0"/>-->
</OrphanPlaceHolder>
<runtime>
  <generatePublisherEvidence enabled="false"/>
</runtime>
</configuration>
```

例 2

この設定により、「例 1」と同じ結果が得られます。各ブレースホルダ関連のオプションは、Windows API 呼び出しを使うように設定されます。

```
<?xml version="1.0" encoding="utf-8"?>
<configuration>
  <configSections>
    <section name="PHMigration"
      type="System.Configuration.DictionarySectionHandler"/>
    <section name="BulkRecall"
      type="System.Configuration.DictionarySectionHandler"/>
    <section name="MovePlaceHolder"
      type="System.Configuration.DictionarySectionHandler"/>
    <section name="RecreatePlaceHolder"
      type="System.Configuration.DictionarySectionHandler"/>
    <section name="OrphanPlaceHolder"
      type="System.Configuration.DictionarySectionHandler"/>
  </configSections>
  <PHMigration>
    <add key="CheckCelerraOfflineAttribute" value = "0"/>
  </PHMigration>
  <MovePlaceHolder>
    <add key="CheckCelerraOfflineAttribute" value = "0"/>
  </MovePlaceHolder>
  <BulkRecall>
    <add key="CheckCelerraOfflineAttribute" value = "0"/>
  </BulkRecall>
  <RecreatePlaceHolder>
    <add key="CheckCelerraOfflineAttribute" value = "0"/>
  </RecreatePlaceHolder>
  <OrphanPlaceHolder>
    <add key="CheckCelerraOfflineAttribute" value = "0"/>
  </OrphanPlaceHolder>
```

```
<runtime>
  <generatePublisherEvidence enabled="false"/>
</runtime>
</configuration>
```

例 3

この例では、プレースホルダ関連のすべてのオプションは **Celerra/VNX API** 呼び出しを使用します。

```
<?xml version="1.0" encoding="utf-8"?>
<configuration>
  <configSections>
    <section name="PHMigration"
      type="System.Configuration.DictionarySectionHandler"/>
    <section name="BulkRecall"
      type="System.Configuration.DictionarySectionHandler"/>
    <section name="MovePlaceholder"
      type="System.Configuration.DictionarySectionHandler"/>
    <section name="RecreatePlaceholder"
      type="System.Configuration.DictionarySectionHandler"/>
    <section name="OrphanPlaceholder"
      type="System.Configuration.DictionarySectionHandler"/>
  </configSections>
  <PHMigration>
    <add key="CheckCelerraOfflineAttribute" value = "1"/>
  </PHMigration>
  <MovePlaceholder>
    <add key="CheckCelerraOfflineAttribute" value = "1"/>
  </MovePlaceholder>
  <BulkRecall>
    <add key="CheckCelerraOfflineAttribute" value = "1"/>
  </BulkRecall>
  <RecreatePlaceholder>
    <add key="CheckCelerraOfflineAttribute" value = "1"/>
  </RecreatePlaceholder>
  <OrphanPlaceholder>
    <add key="CheckCelerraOfflineAttribute" value = "1"/>
  </OrphanPlaceholder>
  <runtime>
    <generatePublisherEvidence enabled="false"/>
  </runtime>
</configuration>
```

FSAUtility オプション

表 20-2 に FSAUtility で実行できる処理を示します。

表 20-2 FSAUtility オプション

処理	FSAUtility パラメータ	関連情報
アーカイブポイントを元のパスに再作成します。	FSAUtility -a	p.156 の「アーカイブポイントの再作成」を参照してください。
アーカイブファイルのプレースホルダを元の場所に再作成します。	FSAUtility -c	p.157 の「プレースホルダの再作成」を参照してください。
プレースホルダと対応するアーカイブ済みファイルを移動します。移行先フォルダに適用されるアーカイブポイントがアーカイブ先を決定します。	FSAUtility -m	p.159 の「プレースホルダと対応するファイルの移動」を参照してください。
アーカイブ済みのデータを移動せずに移行元パスから移行先パスにプレースホルダを移行します。	FSAUtility -pm	p.161 の「プレースホルダの移行」を参照してください。
対応するアイテムがアーカイブ内に存在しない孤立したプレースホルダを削除します。	FSAUtility -o	p.166 の「孤立したプレースホルダの削除」を参照してください。
すべてのアーカイブファイルか特定のファイルの種類 のアーカイブファイルを、元の場所か新しい場所に復元します。	FSAUtility -t	p.167 の「アーカイブファイルの復元」を参照してください。
フォルダにあるプレースホルダに対応するアーカイブ ファイルを呼び戻します。	FSAUtility -b	p.169 の「プレースホルダに対応するファイルの呼び戻し」を参照してください。
フォルダポイントを修正します。	FSAUtility -fp	Symantec のサポートによって指示された場合だけこのオプションを使います。

アーカイブポイントの再作成

ターゲットボリュームの元のパスのアーカイブポイントを再作成するために `-a` パラメータを指定して FSAUtility を使うことができます。

構文

```
FSAUtility -a -s UNC_path [-l log_level] [-r]
```

ここでは次のとおりです。

- `-s UNC_path` はターゲットボリュームの UNC パスを指定します。

- `-l log_level` は成功した処理と失敗した処理の両方をログに記録する (0) か、失敗した処理のみをログに記録する (1) かを指定します。デフォルトでは、FSAUtility によって、失敗した処理のみがログに記録されます。
- `-r` はレポート専用モードを指定します。標準モードで FSAUtility を実行した場合に行われる処理の概要テキストレポートが生成されます。ただし、実際には処理は行われません。レポートは `EV_FILESYSTEM_UTILITY_REPORT_DateTime.txt` という名前で、フォルダ `installpath¥Reports¥FSAUtility` で生成されます。
通常モードのコマンド (`-r` なしで) を実行する場合、FSAUtility は実行した処理の XML レポートを生成し、`EV_FILESYSTEM_UTILITY_REPORT_DateTime.xml` という名前で保存します。

FSAUtility がアーカイブポイントを作成し直すとき、フォルダパスに関連付けられたアーカイブを判断するためにディレクトリデータベースの関連したレコードを検査します。複数のアーカイブがフォルダパスに関連付けられている場合、FSAUtility は次の処理を実行します。

- 最も古く空ではないアーカイブのアーカイブ ID をアーカイブポイントに割り当てます。
- XML レポートまたはレポート専用モードのテキストのレポートで、フォルダパスに関連付けられた複数のアーカイブのアーカイブの ID を記録します。

例

次のコマンドは、FSAUtility がボリューム `¥¥myserver¥users` に対して再作成するアーカイブポイントをレポートします。

```
FSAUtility -a -s ¥¥myserver¥users -r
```

次のコマンドはボリューム `¥¥myserver¥users` のアーカイブポイントを作成し直し、XML レポートの正常な操作および失敗した操作の両方を記録します。

```
FSAUtility -a -s ¥¥myserver¥users -l 0
```

プレースホルダの再作成

元の場所にアーカイブファイルのプレースホルダを再作成するために `-c` パラメータを指定して FSAUtility を使うことができます。この機能は、ファイルサーバーを元の状態に復元したり、ファイルサーバーを Enterprise Vault アーカイブと同期したりする必要があるときに便利な場合があります。同じファイルの複数のバージョンがアーカイブに存在する場合、このユーティリティは最新バージョンに対してのみプレースホルダを作成します。

メモ: Celerra/VNX のプレースホルダにこのオプションを使う前に、プレースホルダの識別に適した手順を実行するように FSAUtility が設定されていることを確認してください。

p.151 の「EMC Celerra/VNX プレースホルダと FSAUtility の使用について」を参照してください。

構文

```
FSAUtility -c -s UNC_path [-D mm-dd-yyyy] [-f] [-l log_level] [-r]
```

ここでは、次のとおりです。

- `-s UNC_path` は必要なフォルダ、ボリューム、ファイルサーバーへのパスを指定します。
- `-D mm-dd-yyyy` はアイテムがアーカイブされてからプレースホルダの再作成が可能になる日付を指定します。
- `-f` が指定されていると、同じ名前のプレースホルダがすでに存在するとき **FSAUtility** はプレースホルダの再作成を強制実行します。最初に既存のプレースホルダまたはファイルが削除され、その後、新しいプレースホルダまたはファイルが作成されます。
- `-l log_level` は成功した処理と失敗した処理の両方をログに記録する (0) か、失敗した処理のみをログに記録する (1) かを指定します。デフォルトでは、**FSAUtility** によって、失敗した処理のみがログに記録されます。
- `-r` はレポートのモードを指定します。標準モードで **FSAUtility** を実行した場合に行われる処理の概要レポートが生成されます。ただし、実際には処理は行われません。**FSAUtility** によって、`installpath¥Reports¥FSAUtility` フォルダに `EV_FILESYSTEM_UTILITY_REPORT_DateTime.txt` という名前のレポートが生成されます。標準モードで `-c` を実行すれば、**FSAUtility** は `EV_FILESYSTEM_UTILITY_REPORT_DateTime.xml` という名前のレポートを生成します。

例

次のコマンドは、`¥¥myserver¥users` フォルダのプレースホルダを再作成し、成功した処理と失敗した処理の両方を一覧表示するログファイルを生成します。コマンドはレポートモードで実行されます。

```
FSAUtility -c -s ¥¥myserver¥users -l 0 -r
```

次のコマンドは、2005年7月10日以降にアーカイブされた `¥¥myserver¥users¥user1` フォルダにあるファイルのプレースホルダを再作成します。同じ名前のファイルやプレースホルダがすでに存在する場合、これらを新しいプレースホルダで上書きします。

```
FSAUtility -c -f -s ¥¥myserver¥users¥user1 -D 07-10-2005 -l 0
```

メモ

- **FSAUtility** は、「ハードリンク」ファイル (ファイルへのディレクトリ参照) をサポートしていません。ハードリンクファイル用の既存のプレースホルダを再作成できません。再作成操作を実行すると、**FSAUtility** によって、ハードリンクファイルになっているプレースホルダが呼び戻されます。

- FSAUtility でプレースホルダを再作成し、別の場所に移動しようとする、「Internal Error Moving Placeholders: Archive ID null for folder folder_path」というメッセージを受け取る場合があります。このメッセージが表示されないようにするには、アーカイブポイントを再作成してから元のフォルダをアーカイブし、プレースホルダを移動します。

プレースホルダと対応するファイルの移動

プレースホルダと対応するアーカイブファイルを移動するために `-m` パラメータを指定して FSAUtility を使うことができます。移行先フォルダに適用されるアーカイブポイントがアーカイブ先を決定します。アーカイブ先には、別のボルトストアを選択できます。

サブフォルダにアーカイブポイントがなければ、コマンドはソースフォルダのサブフォルダのプレースホルダを移動します。移行先フォルダの下にサブフォルダがない場合は、作成されます。

アーカイブポイントが移行フォルダのパスになければ、コマンドは続行しないで終了します。

コピー先フォルダのアーカイブポイントにアーカイブ ID がないか、無効なアーカイブ ID がある場合、FSAUtility はフォルダパスがアーカイブの ID と関連付けられているかどうかを判断するためにディレクトリデータベースレコードを調べます。

- アーカイブ ID がフォルダパスに関連付けられていない場合は、FSAUtility はアーカイブを作成し、アーカイブポイントにアーカイブ ID を割り当てます。
- 1 つのアーカイブ ID がフォルダパスに関連付けられている場合、FSAUtility はアーカイブポイントにそのアーカイブ ID を割り当てます。
- 複数のアーカイブ ID がフォルダパスに関連付けられている場合、FSAUtility は次の処理を実行します。
 - 最も古い既存のアーカイブのアーカイブ ID をアーカイブポイントに割り当てます。
 - Enterprise Vault イベントログのイベント ID 41484 を使用して警告イベントを生成します。イベントは、フォルダパスの複数のアーカイブのアーカイブ ID をリストし、最も古いアーカイブがアーカイブで使われることを示します。

FSAUtility がアーカイブ ID をアーカイブポイントに割り当てた後は、フォルダパスの複数のアーカイブの存在に関するこれ以上の警告は発行されません。

ソースフォルダにアーカイブポイントがあり、サブフォルダにアーカイブポイントがない場合、ソースフォルダのアーカイブポイントはすべてのプレースホルダが正常に移動されれば削除されます。

メモ: Celerra/VNX のブレースホルダにこのオプションを使う前に、ブレースホルダの識別に適した手順を実行するように FSAUtility が設定されていることを確認してください。

p.151 の「EMC Celerra/VNX ブレースホルダと FSAUtility の使用について」を参照してください。

構文

```
FSAUtility -m -s UNC_path -d UNC_path [-l log_level] [-r]
```

ここでは、次のとおりです。

- `-s UNC_path` はソースフォルダのパスを指定します。
- `-d UNC_path` は対象フォルダのパスを指定します。
- `-l log_level` は成功した処理と失敗した処理の両方をログに記録する (0) か、失敗した処理のみをログに記録する (1) を指定します。デフォルトでは、FSAUtility によって、失敗した処理のみがログに記録されます。
- `-r` はレポートのモードを指定します。標準モードで FSAUtility を実行した場合に行われる処理の概要レポートが生成されます。ただし、実際には処理は行われません。FSAUtility によって、`installpath¥Reports¥FSAUtility` フォルダに `EV_FILESYSTEM_UTILITY_REPORT_DateTime.txt` という名前のレポートが生成されます。
標準モードで `-m` を実行すれば、FSAUtility は `EV_FILESYSTEM_UTILITY_REPORT_DateTime.xml` という名前のレポートを生成します。

例

次のコマンドは、1 番目のフォルダから 2 番目のフォルダにブレースホルダを移動します。それは対応するアーカイブの場所にアーカイブファイルも移動します。ログファイルには失敗した処理のみ示されます。

```
FSAUtility -m -s ¥¥myserver¥users¥user1 -d ¥¥sample¥share¥user1
```

メモ

- ブレースホルダをボリュームのルートフォルダからは移動できませんが、ルートフォルダのサブフォルダからは移動できます。
- FSAUtility は操作が完了した後、移動したブレースホルダの移動元フォルダを削除しません。このフォルダには削除が不適切である、アーカイブされていない別のファイルが含まれている可能性があります。
- ブレースホルダを移動する FSAUtility 操作を完了前に中止した場合は、次回ユーティリティを起動するときに、操作の再開を求めるメッセージが表示されます。

- 対象の場所に適用されるボリュームポリシーまたはフォルダポリシーは、プレースホルダを削除するときに **Enterprise Vault** がアーカイブファイルを削除するかどうかを決定します。『Symantec Enterprise Vault ファイルシステムアーカイブ (FSA) の設定』のプレースホルダ削除時のアーカイブ済みファイルの削除に関する説明を参照してください。
- プレースホルダを移動しようとしたときに移動元ボルトストアまたは移動先ボルトストアがバックアップモードの場合、ユーティリティは処理せずに終了します。
- **FSAUtility** は、「ハードリンク」ファイル (ファイルへのディレクトリ参照) をサポートしていません。ハードリンクファイル用の既存のプレースホルダを移動できません。移動操作を実行すると、**FSAUtility** によって、ハードリンクファイルになっているプレースホルダが移動されます。
- プレースホルダを移動するときに次のサービスが利用できない場合、**FSAUtility** は未処理のプレースホルダを処理しようとしません。
 - **Enterprise Vault** ディレクトリサービス
 - **Enterprise Vault** ファイルプレースホルダサービス
 - **Enterprise Vault Storage Service**
 - **Enterprise Vault** とファイルサーバー間のネットワーク接続
 その代わりに、ユーティリティはエラーメッセージをイベントログ、DTrace ログ、**FSAUtility** ログファイルに記録した後に終了します。

関連項目

p.161 の「[プレースホルダの移行](#)」を参照してください。

プレースホルダの移行

メモ: プレースホルダを移行する前に、ディレクトリデータベース、ボルトストアデータベース、移行元パスの下のフォルダ階層のバックアップがあることを確認してください。宛先パスの下のフォルダ階層がアーカイブファイルを含んでいたら、これもバックアップします。

プレースホルダとアーカイブポイントをソースフォルダ構造から移行先フォルダ構造 (たとえば別のボリュームまたはファイルサーバー上) に移行するには、`-pm` パラメータを指定して **FSAUtility** を使います。

このオプションはプレースホルダとアーカイブポイントを移動しますが、アーカイブのファイルを移動しません。移行されたプレースホルダは元の場所のアーカイブファイルにリンクを保有します。したがって、このオプションは、プレースホルダを移動する場合、**FSAUtility** 移動 (`-m`) オプションより速いソリューションを提供します。アーカイブの移動、ボルトストアの統合またはアーカイブとファイルサーバーの連携を行う場合は `-m` オプションを使います。

このオプションはサブフォルダのプレースホルダを常に再帰的に移行しますが、これはプレースホルダが有効なアーカイブポイントの下に存在する場合です。このオプションは移行先サブフォルダを必要ならば作成します。

プレースホルダの移行を実行する前に、**FSAUtility** は、移行元の場所と移行先の場所のアーカイブポイントの間に競合がないかチェックします。その後、次の処理を記載順に実行します。

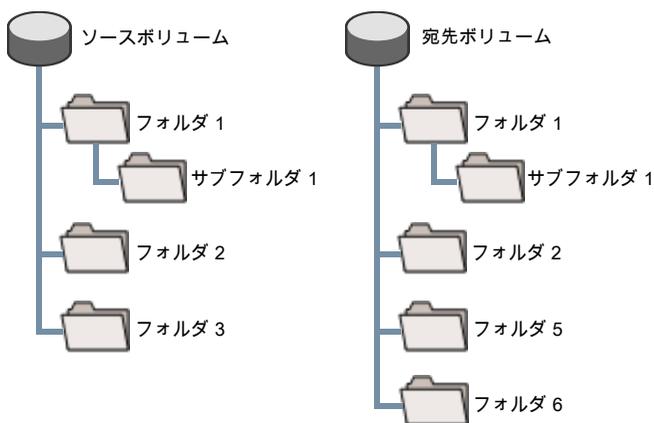
- プレースホルダを移動します。**FSAUtility** は、移行先の場所にプレースホルダを作成した後で移行元の場所のプレースホルダを削除します。移行では、ファイルの所有権と NTFS 権限に関する情報が含まれた、プレースホルダファイルのセキュリティ記述子は保持されます。プレースホルダファイルに関連付けられた代替データストリームもすべて保持されます。
- アーカイブポイントを移行先の場所に移動します。
- 新しいフォルダパスでディレクトリデータベースを更新します。

プレースホルダの移行の次の必要条件に注意してください。

- ソースボリュームと宛先ボリュームの両方を管理コンソールで **FSA** 対象として指定する必要があります。
- 同じ **Enterprise Vault** サーバーがソースボリュームのボルトストアと宛先ボリュームのボルトストアを管理する必要があります。**FSAUtility** は、同じストレージサービスコンピュータが両方のボルトストアを管理することを確認できなければ、説明メッセージを表示して終了します。
- 宛先ボリュームが **NetApp** ファイルサーバーにある場合は、移行先のファイルサーバーの **FPolicy** に登録されている **Enterprise Vault** サーバーから **FSAUtility** コマンドを実行してください。たとえば、`NetAppFiler1¥volumeA` から `NetAppFiler2¥volumeB` にプレースホルダを移行するには、`NetAppFiler2` に登録されている **Enterprise Vault** サーバーから **FSAUtility** を実行する必要があります。
- アーカイブポイントがあるフォルダでソースフォルダ構造から消失しているものがあれば、**FSAUtility** は移行を続行しません。
- ソースフォルダのサブフォルダにプレースホルダを移行できません。

移行元パスのフォルダ階層と一致するフォルダのアーカイブを宛先パスがすでに含んでいたなら、**FSAUtility** が移行を続行しないことに注意してください。この制限はスプリットアーカイブを防ぎます。スプリットアーカイブでは、移行されたプレースホルダを含むファイルが、他のアーカイブファイルの別のボルトストアに存在します。宛先パスには、アーカイブされたことがないパス、または移行元パスと同じフォルダ構造のアーカイブファイルがあるフォルダを含んでいないパスを指定してください。たとえば、[図 20-1](#) に示すソースフォルダ構造と移行先フォルダ構造の例を考慮します。

図 20-1 FSAUtility のプレースホルダの移行:フォルダ構成の例



次のいずれかが該当すれば、FSAUtility は移行を続行しません。

- アーカイブファイルがあるアーカイブポイントがソースボリュームと宛先ボリューム両方のルート階層に存在します。
- アーカイブファイルがあるアーカイブポイントが次のフォルダのいずれかで、両方のフォルダ構造に存在します。
 - フォルダ 1
 - サブフォルダ 1
 - フォルダ 2

FSAUtility は、アーカイブファイルがあるアーカイブポイントの重複がなければプレースホルダを移行できます。たとえば、次のいずれかに該当する場合、移行は行われます。

- 移行先フォルダ構造のフォルダ 5 とフォルダ 6 のみに、アーカイブファイルがあるアーカイブポイントがあります。
- アーカイブファイルがあるアーカイブポイントがソースフォルダ構造のフォルダ 2 にありますが、移行先フォルダ構造のフォルダ 2 にはありません。

FSAUtility はイベントログに次のイベントを記録します。

- The start of a placeholder migration
- Whether a migration completes without errors, or with errors.

また、プレースホルダの移行中に、FSAUtility は適切なメッセージをコンソール上に表示し、DTrace ログ内と

Reports¥FSAUtility¥EV_FILESYSTEM_UTILITY_LOG_DateTime.xml ファイル内のエラーを含む詳細エントリを記録します。

プレースホルダの移行が失敗すれば、宛先パスのファイルはアーカイブしないでください。これを行うと、そのパスのアーカイブ済みデータは複数のアーカイブにわたって分割されることがあります。プレースホルダの移行を再実行して、正常に完了できるかどうかを確認します。

メモ: Celerra/VNX のプレースホルダにこのオプションを使う前に、プレースホルダの識別に適した手順を実行するように FSAUtility が設定されていることを確認してください。

p.151 の「[EMC Celerra/VNX プレースホルダと FSAUtility の使用について](#)」を参照してください。

構文

```
FSAUtility -pm -s UNC_path -d UNC_path [-cs] [-csf] [-f] [-l log_level] [-i]
```

ここでは、次のとおりです。

- `-s UNC_path` はソースフォルダのパスを指定します。パスは、管理コンソールでボリューム対象を追加したときに使った形式でボリュームを指定する必要があります。
- `-d UNC_path` は対象フォルダのパスを指定します。フォルダへのこのパスはすでに存在する必要があります。パスは、管理コンソールでボリューム対象を追加したときに使った形式でボリュームを指定する必要があります。
- `-cs` はフォルダのセキュリティ記述子を移行先の新しいフォルダにコピーします。移行先のフォルダの既存のセキュリティ記述子は上書きされません。このオプションは `-csf` と使うことができません。 `-cs` も `-csf` も指定しない場合、フォルダのセキュリティ記述子はコピーされません。
- `-csf` は移行元のフォルダから移行先のフォルダにフォルダのセキュリティ記述子をコピーします。このとき、移行先のフォルダのセキュリティ記述子が存在している場合は上書きします。このオプションは `-cs` と使うことができません。 `-cs` も `-csf` も指定しない場合、フォルダのセキュリティ記述子はコピーされません。
- `-f` が指定されていると、宛先に同じ名前のプレースホルダまたはファイルがすでに存在するときプレースホルダの移行が強制実行されます。宛先にある既存のプレースホルダまたはファイルが最初に削除され、その後、新しいプレースホルダまたはファイルが作成されます。
- `-l log_level` は成功した処理と失敗した処理の両方をログに記録する (0) か、失敗した処理のみをログに記録する (1) かを指定します。デフォルトでは、FSAUtility によって、失敗した処理のみがログに記録されます。
- `-i` を指定すると、FSAUtility はプレースホルダの移動時に発生するエラーをすべて無視します。具体的なエラーは次のとおりです。
 - ファイルがプレースホルダかどうかを判断できない。

- 権限の問題やディスク領域の不足などの結果として移行先の場所にプレースホルダを作成できない。

- 移行元の場所からプレースホルダを削除できない。

-i パラメータを省略した状態でプレースホルダ移動エラーが発生すると、FSAUtility はそのエラーを記録し、すべてのプレースホルダの移動を試みた後に停止します。アーカイブポイントの移動やディレクトリデータベースの更新には進みません。この場合は、プレースホルダ移動エラーの原因を解決した後に FSAUtility -pm を再実行する必要があることがあります。

-i パラメータを指定した状態でプレースホルダ移動エラーが発生すると、FSAUtility はそのエラーを記録しますが、移行の残りのステップ、つまりアーカイブポイントの移動とディレクトリデータベースの更新を実行します。アーカイブポイントの移行中またはデータベースの更新中に発生するエラーは無視されません。FSAUtility はすべてのエラーをログファイル

Reports¥FSAUtility¥EV_FILESYSTEM_UTILITY_LOG_DateTime.xml に記録し続けます。

-i を指定してプレースホルダ移動エラーが発生した場合、必要に応じて、コマンドが移行を完了した後にこれらのエラーを修正できます。具体的には、次の操作を実行できます。

- 移行元の場所のプレースホルダを削除する。
- -c オプションを使用して、未移行のプレースホルダを移行先の場所で再作成する。

p.157 の「プレースホルダの再作成」を参照してください。

これらの方法を使って未移行のプレースホルダを再作成しても移行元のプレースホルダのセキュリティ記述子は保持されません。また、移行元のプレースホルダに関連付けられていた代替データストリームも再作成されません。

メモ: プレースホルダの移行を初めて実行するときは -i パラメータを省略することを推奨します。移行が失敗し、その原因は一部のプレースホルダを移動するときに発生したエラーであるという報告があった場合、FSAUtility にこれらのエラーを無視させる場合は -i パラメータを使ってコマンドを再実行できます。

例

次のコマンドは最初のフォルダ構造から 2 番目のフォルダ構造にアーカイブポイントと共にプレースホルダを移行します。このコマンドは新しく作成されたフォルダのセキュリティ記述子をソースフォルダからコピーします。同じ名前のファイルやプレースホルダがすでに存在する場合、これらを新しいプレースホルダで上書きします。FSAUtility はプレースホルダを移動するときにエラーを無視しません。

```
FSAUtility -pm -s ¥¥myserver¥users¥user1 -d ¥¥server2¥share¥user1  
-cs -f
```

メモ

- レポートモードで `-pm` を実行できません。
- プレースホルダの移行の後、**FSAUtility** の他のオプションはファイルシステムアーカイブタスクが 1 回以上フォルダを処理するまで宛先フォルダで動作しません。
- 移行操作では、ソースフォルダツリーにカットアンドペーストされたプレースホルダを含むソースフォルダツリーのプレースホルダをすべて移行します。ただし移行が行われる前に、カットアンドペーストされたプレースホルダと関連付けられるアーカイブファイルがソースツリーのアーカイブで利用可能でなければ、その後ファイルはアーカイブにありません。
- ソースフォルダにアーカイブポイントがあり、ソースフォルダと宛先フォルダで名前が異なる場合、プレースホルダの移行後、ファイルシステムアーカイブタスクがボリュームを処理するまでアーカイブの名前は宛先フォルダに一致する名前に変更されません。
- ボルトストアが宛先フォルダと同じ名前のアーカイブをすでに含んでいれば、移行後に、同じ名前の 2 つ目のアーカイブを確認できます。アーカイブの統合はありません。

関連項目

p.159 の「[プレースホルダと対応するファイルの移動](#)」を参照してください。

孤立したプレースホルダの削除

対応するアイテムがアーカイブに存在しない孤立したプレースホルダを削除するために `-o` パラメータを指定して **FSAUtility** を使うことができます。また、ボルトストア全体、ボルトストアパーティション、アーカイブを削除した後に役立つ場合もあります。

メモ: **Celerra/VNX** のプレースホルダにこのオプションを使う前に、プレースホルダの識別に適した手順を実行するように **FSAUtility** が設定されていることを確認してください。

p.151 の「[EMC Celerra/VNX プレースホルダと FSAUtility の使用について](#)」を参照してください。

構文

```
FSAUtility -o -s UNC_path [-l log_level] [-r]
```

それぞれの内容は次のとおりです。

- `-s UNC_path` は必要なフォルダ、ボリューム、ファイルサーバーへのパスを指定します。

- `-l log_level` は成功した処理と失敗した処理の両方をログに記録する (0) か、失敗した処理のみをログに記録する (1) かを指定します。デフォルトでは、FSAUtility によって、失敗した処理のみがログに記録されます。
- `-r` はレポートのモードを指定します。標準モードで FSAUtility を実行した場合に行われる処理の概要レポートが生成されます。ただし、実際には処理は行われません。FSAUtility によって、`installpath¥Reports¥FSAUtility` フォルダに `EV_FILESYSTEM_UTILITY_REPORT_DateTime.txt` という名前のレポートが生成されます。標準モードで `-o` を実行すれば、FSAUtility は `EV_FILESYSTEM_UTILITY_REPORT_DateTime.xml` という名前のレポートを生成します。

例

次のコマンドは、孤立したプレースホルダをファイルサーバー全体から削除します。

```
FSAUtility -o -s ¥¥myserver
```

アーカイブファイルの復元

元の場所か新しい場所にアーカイブファイルの一部またはすべてを復元するために `-t` パラメータを指定して FSAUtility を使うことができます。

ファイルの呼び戻しが呼び戻しの限度を超えないようにするには、Active Directory に Enterprise Vault Backup Operators グループを作成し、復元を実行するアカウントをそのグループに含めます。

デフォルトでは、FSAUtility は非同期モードでファイルを復元します。必要に応じて、ファイルを同期的に復元することを代わりに選択できます。同期復元では、ファイル復元のタイムアウトを設定し、各ファイル復元操作の進行状況を参照できます。ファイルを同期的に復元したり、ファイル復元のタイムアウトを設定するために、Enterprise Vault サーバーで次のレジストリキーに `FileDownloadTimeout` という DWORD エントリを作成してください。

```
HKEY_LOCAL_MACHINE
  ¥SOFTWARE
    ¥Wow6432Node
      ¥KVS
        ¥Enterprise Vault
          ¥FSARestore
```

`FileDownloadTimeout` が 0 に設定されれば、FSAUtility はファイルを非同期的に復元します。0 より大きい値は、ファイルごとの呼び戻しのタイムアウトを分単位で示します。

構文

```
FSAUtility -t -s UNC_path [-D mm-dd-yyyy] -d UNC_path [-e ext_list] [-f] [-l log_level] [-r]
```

ここでは、次のとおりです。

- `-s UNC_path` は必要なフォルダ、ボリューム、ファイルサーバーへのパスを指定します。
- `-D mm-dd-yyyy` はアイテムがアーカイブされてから復元が可能になる日付を指定します。
- `-d UNC_path` は対象フォルダのパスを指定します。
- `[-e ext_list]` は復元するファイルの種類をファイル名拡張子のカンマ区切り一覧として指定します。次に例を示します。
`*.xls,*.doc,*.txt`
デフォルトでは、このユーティリティによってすべての種類のファイルが復元されます。
- `-f` が指定されていると、同じ名前のプレースホルダまたはファイルがすでに存在するとき、**FSAUtility** はファイルの復元を強制実行します。最初に既存のプレースホルダまたはファイルが削除され、その後、ファイルが復元されます。
- `-l log_level` は成功した処理と失敗した処理の両方をログに記録する (0) か、失敗した処理のみをログに記録する (1) かを指定します。デフォルトでは、**FSAUtility** によって、失敗した処理のみがログに記録されます。
- `-r` はレポートのモードを指定します。標準モードで **FSAUtility** を実行した場合に行われる処理の概要レポートが生成されます。ただし、実際には処理は行われません。**FSAUtility** によって、`installpath¥Reports¥FSAUtility` フォルダに `EV_FILESYSTEM_UTILITY_REPORT_DateTime.txt` という名前のレポートが生成されます。
標準モードで `-t` を実行すれば、**FSAUtility** は `EV_FILESYSTEM_UTILITY_REPORT_DateTime.xml` という名前のレポートを生成します。

例

次のコマンドは、フォルダ `¥¥myserver¥users` の **Word** ファイルと **Excel** ファイルを復元します。また、成功した処理と失敗した処理の両方を一覧表示するログファイルも生成します。

```
FSAUtility -t -s ¥¥myserver¥users -e *.doc,*.xls -l 0
```

次のコマンドは、ファイルサーバー全体の **Word** ファイルと **Excel** ファイルを復元します。

```
FSAUtility -t -s ¥¥myserver -e *.doc,*.xls -l 0
```

次のコマンドは、2006 年 9 月 26 日以降にアーカイブされたファイルサーバー全体のすべてのファイルを復元します。

```
FSAUtility -t -s ¥¥myserver -D 09-26-2006
```

次のコマンドは、2002 年 1 月 2 日以降にアーカイブされた ¥¥myserver¥users のファイルを ¥¥newserver¥users に復元します。

```
FSAUtility -t -s ¥¥myserver¥users -d ¥¥newserver¥users -D 01-02-2002  
-l 0
```

メモ

- FSAUtility は、「ハードリンク」ファイル (ファイルへのディレクトリ参照) をサポートしていません。そのファイルの名前が宛先フォルダのハードリンクファイルと同じ場合アーカイブファイルを復元できません。復元操作を実行すると、FSAUtility によって、ハードリンクファイルになっているプレースホルダが呼び戻されます。
- EMC Celerra/VNX デバイスにファイルを呼び戻すとき、FSAUtility はファイルにフォルダの権限のみ適用します。ファイル固有の権限があるプレースホルダがあれば、ファイル権限は失われ、それらを手動で再適用する必要があります。

関連項目

p.169 の「[プレースホルダに対応するファイルの呼び戻し](#)」を参照してください。

プレースホルダに対応するファイルの呼び戻し

フォルダに存在するプレースホルダに対応するファイルを呼び戻すために `-b` パラメータを指定して FSAUtility を使うことができます。この機能は、ファイルが見つかるアーカイブとボリュームに関係なく、指定のソースフォルダのプレースホルダを呼び戻します。それはソースフォルダに別のフォルダからコピーしたプレースホルダとも連携して動作します。

必要であれば、ソースフォルダのサブフォルダからファイルを再帰的に呼び戻すことを選択できます。

メモ: Celerra/VNX のプレースホルダにこのオプションを使う前に、プレースホルダの識別に適した手順を実行するように FSAUtility が設定されていることを確認してください。

p.151 の「[EMC Celerra/VNX プレースホルダと FSAUtility の使用について](#)」を参照してください。

デフォルトでは、FSAUtility は非同期モードでファイルを呼び戻します。必要に応じて、ファイルを同期的に呼び戻すことを代わりに選択できます。同期呼び戻しでは、ファイル呼び戻しのタイムアウトを設定し、各ファイル呼び戻し操作の進行状況を参照できます。ファイルを同期的に呼び戻したり、ファイル呼び戻しのタイムアウトを設定するために、

Enterprise Vault サーバーで次のキーに `FileDownloadTimeOut` という DWORD レジストリエントリを作成してください。

```
HKEY_LOCAL_MACHINE
  ¥SOFTWARE
    ¥Wow6432Node
      ¥KVS
        ¥Enterprise Vault
          ¥FSARestore
```

`FileDownloadTimeOut` が 0 に設定されれば、FSAUtility はファイルを非同期的に呼び戻します。0 より大きい値は、ファイルごとの呼び戻しのタイムアウトを分単位で示します。

構文

```
FSAUtility -b -s UNC_path [-D mm-dd-yyyy] [-e ext_list] [-recurse]
[-r]
```

ここでは、次のとおりです。

- `-s UNC_path` は必要なフォルダ、ボリューム、ファイルサーバーへのパスを指定します。
- `-D mm-dd-yyyy` はアイテムがアーカイブされてから呼び戻しが可能になる日付を指定します。
- `[-e ext_list]` は呼び戻すファイルの種類をファイル名拡張子のカンマ区切り一覧として指定します。次に例を示します。
`*.xls,*.doc,*.txt`
デフォルトでは、このユーティリティによってすべての種類のファイルが呼び戻されます。
- `-recurse` は、サブフォルダのファイルを再帰的に呼び戻します。指定しない場合、ユーティリティは親フォルダのファイルのみ呼び戻します。
- `-r` はレポートのモードを指定します。標準モードで FSAUtility を実行した場合に行われる処理の概要レポートが生成されます。ただし、実際には処理は行われません。FSAUtility によって、`installpath¥Reports¥FSAUtility` フォルダに `EV_FILESYSTEM_UTILITY_REPORT_DateTime.txt` という名前のレポートが生成されます。
標準モードで `-b` を実行すれば、FSAUtility は `EV_FILESYSTEM_UTILITY_REPORT_DateTime.xml` という名前のレポートを生成します。

例

次のコマンドは、フォルダ ¥¥myserver¥users にプレースホルダがある Word ファイルと Excel ファイルを呼び戻します。サブフォルダがある場合はそのファイルも呼び戻します。

```
FSAUtility -b -s ¥¥myserver¥users -e *.doc,*.xls -recurse
```

次のコマンドはフォルダ ¥¥myserver¥users の 2009 年 5 月 26 日後にアーカイブされたプレースホルダがあるすべてのファイルを呼び戻します。それは親フォルダのファイルのみ呼び戻します。

```
FSAUtility -b -s ¥¥myserver¥users -D 05-26-2009
```

メモ

- プレースホルダを呼び戻しする FSAUtility 操作を完了前に中止した場合は、次回ユーティリティを起動するときに、操作の再開を求めるメッセージが表示されます。
- EMC Celerra/VNX デバイスにファイルを呼び戻すとき、FSAUtility はファイルにフォルダの権限のみ適用します。ファイル固有の権限があるプレースホルダがあれば、ファイル権限は失われ、それらを手動で再適用する必要があります。

関連項目

p.167 の「[アーカイブファイルの復元](#)」を参照してください。

NTFS to Centera Migration

この章では以下の項目について説明しています。

- [NTFS to Centera Migration](#) について
- [NTFS to Centera Migration](#) を使った移行ジョブの管理
- [NTFS to Centera Migration](#) を使った移行ジョブの作成
- [NTFS to Centera Migration](#) を使ったアクティブなジョブの削除
- [NTFS to Centera Migration](#) を使った移行後の移行元のファイルの削除
- [NTFS to Centera Migration](#) のログファイル

NTFS to Centera Migration について

NTFS to Centera Migration ユーティリティはコピー元の NTFS パーティションからコピー先の EMC Centera パーティションに Enterprise Vault 保存セットをコピーします。コピー元パーティションとコピー先パーティションは常に同じボルトストアに存在するため、移行を実行しても既存のアーカイブとインデックスに影響しません。コピー元パーティションのファイルは削除されません。

移行を開始するには、「移行ジョブ」を作成します。すべてのジョブが完了するまで連続的に動作します。ストレージサービスを再起動すると、移行ジョブが自動的に再起動します。

NTFS to Centera Migration を使った移行ジョブの管理

移行ジョブを管理するには、コマンドラインユーティリティの `NTFSCenteraMigrator.Exe` を使います。

メモ: コンピュータでユーザーアカウント制御 (UAC) が有効である場合は、管理者権限でこのユーティリティを実行してください。

p.13 の「管理者権限での Enterprise Vault コマンドラインユーティリティの実行」を参照してください。

NTFS to Centera Migration を使って移行ジョブを管理する方法

- 1 コマンドプロンプトウィンドウを開きます。
- 2 Enterprise Vault プログラムフォルダ (たとえば、C:\Program Files (x86)\Enterprise Vault) に移動します。
- 3 次のコマンドを入力します。

```
NTFSCenteraMigrator
```

このコマンドによって、次のオプションが表示されます。

0 = Exit 既存のジョブに影響を与えずに NTFSCenteraMigrator 管理プログラムを閉じます。

1 = List jobs 次のように現在の NTFS to Centera Migrator ジョブを一覧表示します。

```
Job Id: NCM_20031203164814
Storage Service computer: SSCOMPUTER
Vault Store:
Name: MigratorTest
Description: Migrator Test
Source Partition:
Name: MigratorTest Ptn20
Description: Partition of Vault Store
MigratorTest
Destination Partition:
Name: MigratorTest Ptn21
Description: Partition of Vault Store
MigratorTest
Share archived items: Enabled
Start date range: 1999-11-25
End date range: 2003-12-31
Threads: 15
Threads priority: Below Normal
Saveset sharing: Partition property
Log file: <Default>.
```

2 = Create new job 一連のメッセージが表示され、新しい NTFS to Centera Migrator ジョブの詳細を指定できます。

p.174 の「[NTFS to Centera Migration を使った移行ジョブの作成](#)」を参照してください。

3 = Delete existing job 未完了ジョブを削除します。

- 4 必要なオプションを選択します。
- 5 移行処理が完了したときにコピー元のファイルを削除します。

NTFS to Centera Migration を使った移行ジョブの作成

新しい移行ジョブを作成して、新しい NTFS to Centera Migration を開始します。

NTFS to Centera Migration を使って移行ジョブを作成する方法

- 1 NTFSCenteraMigrator を実行します。
- 2 オプション 2 の Create new job を選択します。
- 3 移行元として使うボルトストアの数を入力します。
- 4 移行元パーティションの数を入力します。
- 5 移行先として使う Centera パーティションの数を入力します。
- 6 期間の開始日と終了日を入力するように求めるメッセージが表示されたら、日付を指定せずに Enter キーを押すか、または年月日を入力します。(年を指定するには、2006 などの 4 桁の数字を使います。)いずれの日付も指定しない場合には、パーティションにあるすべての保存セットが移行されます。
- 7 使用するワーカースレッド数を求めるメッセージが表示されたら、1 から 25 までの数値を入力します。デフォルトは 15 です。
 スレッド数はアイテムを Centera に格納する速度に影響します。数が大きくなると、ストレージ速度は上がりますが、ストレージサービスコンピュータのリソースをより多く使います。
- 8 使用するワーカースレッドの優先度を入力します。この優先度は次のいずれかになります。
 - [Below Normal]。Windows のその他のスレッドに優先度が与えられるので、移行処理の優先度はコンピュータで動作するアプリケーションよりも低く設定されます。
 コンピュータで他のタスクが動作していないときにワーカースレッド数を 15 以上に設定し、[Below Normal] を選択すると、高いパフォーマンスが実現されます。

- [Normal]。Windows で移行処理とその他のアプリケーションに同じ優先度が与えられます。
- 9 使用する保存セット共有オプションを入力します。このオプションは次のいずれかになります。
- 0 - Use Partition property。移行先パーティションと同じ設定を使います。
 - Force off。保存セット共有を無効にします。容量を必要とするが、パフォーマンスが上がります。
 - Force on。保存セット共有を有効にします。ストレージが最大化されるが、移行のパフォーマンスは下がります。

- 10 ログファイルの名前と場所を求めるメッセージが表示されたら、ファイルの絶対パスを入力するか、または Enter キーを押してデフォルトの名前と場所を使います。たとえば、パスとして E:\Reports\Migration001.log と入力します。既存のフォルダを指定する必要があります。

デフォルトでは NTFS to Centera Migrator は各ジョブのログファイルを Enterprise Vault の Reports サブフォルダ (たとえば、C:\Program Files (x86)\Enterprise Vault\Reports) に作成します。ログファイル名を指定しない場合に使われる名前は NCM_DateAndTime.log です。DateAndTime はジョブを作成した日時を示します。

p.177 の「[NTFS to Centera Migration のログファイル](#)」を参照してください。

- 11 保存セットファイルが移行元パーティションに存在しない場合に保存セットへのすべての参照を削除するかどうかを選択します。
- 12 保存セットに複数の共有がある場合、保存セットを格納する前に未選択の共有を削除し、保存セットを圧縮するかどうかを選択します。
- 未選択の共有の削除を選択しない場合、ユーティリティにより保存セット全体が Centera Clip に格納され、複数の共有が存在する場合にはその共有も格納されます。そのため、Centera 内の保存セットが大きくなり、占有領域が拡大します。保存セットの格納と取得の際には、必要な共有が選択されます。
- 13 必要なエラー処理オプションを選択します。

Error wait time	<p>エラー発生時にユーティリティで操作が再試行されるまでの待機時間を秒数で指定します。デフォルトは 10 です。</p> <p>以下のエラー状態の場合には、ユーティリティで再試行は実行されないことに注意してください。</p> <ul style="list-style-type: none">■ STORAGE_E_EXTRACT_CAB_HR:CAB ファイルからの保存セットファイルの抽出エラー■ STORAGE_E_SAVESET_DECOMPRESSION:保存セットの圧縮解除エラー■ STORAGE_E_SAVESETNOTVALID:無効な保存セット <p>これらのエラー状態の場合、ユーティリティでの保存セットの処理はすぐに中止されます。ただし、ストレージサービスが再起動されると、保存セットの処理が再試行されます。(このサービスを再起動すると、移行ジョブが再起動されます。)</p>
Error count	<p>ユーティリティで保存セットの処理を再試行する最大回数を指定します。デフォルトは 5 です。</p> <p>ユーティリティが再試行の最大回数を超えて保存セットの処理に失敗した場合、以下の処理のいずれかが実行されます。</p> <ul style="list-style-type: none">■ エラーが復旧不能である可能性が高い場合、ユーティリティは保存セットの処理を中止します。ただし、ストレージサービスが再起動されると、保存セットの処理が再試行されます。■ ネットワークの問題など、エラーが復旧する可能性がある場合、ユーティリティは[Error pause time](以下を参照)に指定されたスレッドを一時停止した後、保存セットの処理を再試行します。
Error pause time	<p>ユーティリティが再試行の最大回数を超えて保存セットの処理に失敗したが、エラーは復旧する可能性がある場合に、保存セット処理を再試行するまでスレッドを一時停止する時間を分で指定します。デフォルトは 5 です。</p>

- 14 ボルトストアを管理するストレージサービスを再起動します。ストレージサービスの再起動時に新しいジョブが開始されます。

NTFS to Centera Migration を使ったアクティブなジョブの削除

NTFS to Centera Migration ユーティリティは、ジョブが完了すると自動的にジョブを削除します。ただし、まだ進行中のジョブも手動で削除できます。

NTFS to Centera Migration を使ってアクティブなジョブを削除する方法

- 1 NTFSCenteraMigrator を起動します。
- 2 オプション 3 の Delete existing job を選択します。
アクティブなジョブが一覧表示されます。
- 3 削除するジョブの数を入力します。
ジョブが削除対象にマーク付けされ、ジョブの一覧に表示されなくなります。
- 4 ボルトストアを管理するストレージサービスを再起動します。

NTFS to Centera Migration を使った移行後の移行元のファイルの削除

NTFSCenteraMigrator では、移行元のファイルは Centera への移行後に削除されません。移行元のフォルダのデータは他のパーティションと共有される場合があるため、参照されているデータは削除しないでください。移行元のファイルは、削除しても支障がない限り削除しないでください。

すべての NTFS パーティションを Centera に移動した場合、移動元のデータは削除できます。

NTFS to Centera Migration を使った移行後に移行元のファイルを削除する方法

- 1 管理コンソールで、[ボルトストアグループ] を展開します。
削除するパーティションが含まれているボルトストアを展開します。
- 2 パーティションを右クリックし、ショートカットメニューで [削除] をクリックします。管理コンソールに、パーティションの削除の確認を求めるメッセージが表示されます。
- 3 [はい] をクリックします。
- 4 管理コンソールでパーティションを削除できる場合は、Windows エクスプローラを使ってパーティションのファイルを削除できます。
管理コンソールでパーティションを削除できない場合は、パーティションのファイルを削除すると支障があります。

NTFS to Centera Migration のログファイル

NTFS to Centera Migration ユーティリティは各ジョブのログファイルを作成します。作成するファイルの名前と場所を求めるメッセージが表示されます。

ジョブの実行中はログファイルがロックされます。

次にログファイルの例を示します。

```
2005-12-02 13:08:53 NTFS to Centera Migrator Log file created for
Job NCM_20031202130732
2005-12-02 13:08:53
2005-12-02 13:08:53 Starting migration from Test Ptn16 to Test Ptn17
in Test
2005-12-02 13:08:53 Savesets in NTFS partition: 368
2005-12-02 13:09:25 Migration stopped
2005-12-02 13:09:25 Savesets migrated: 368, Rate: 42735
Savesets/hour
2005-12-02 13:09:25 Savesets in NTFS partition: 0
2005-12-02 13:09:25 Migration completed - job entry has been deleted
```

OWA 2003 Control Files Tool

この章では以下の項目について説明しています。

- [OWA 2003 Control Files Tool について](#)
- [OWA 2003 Control Files Tool の実行](#)
- [OWA 2003 Control Files Tool の構文](#)

OWA 2003 Control Files Tool について

Enterprise Vault OWA 2003 Extensions をインストールすると、Exchange Server 2003 によってインストールされたファイルのいくつかが修正されます。Microsoft 社から Exchange Server 2003 の Hotfix が発行された場合、OWA 2003 Control Files Tool を使うことで、Enterprise Vault の同じ変更が新しい Hotfix ファイルに適用されます。

OWA 2003 Control Files Tool はデフォルトで最も高いバージョン番号の Exchange Server ファイルを変更しますが、必要に応じて特定の Exchange Server Hotfix のバージョンまたはサービスパックのバージョンを指定できます。

OWA 2003 Control Files Tool は、Enterprise Vault でサポートされる Exchange Server の Hotfix と連動します。Microsoft 社から新しい Hotfix が発行された場合、その Hotfix ファイルを修正するには、新しいバージョンの OWA 2003 Control Files Tool を入手する必要があります。

OWA 2003 Control Files Tool は、EVCControlFilesTool1.wsf という Windows スクリプトファイルとして提供されます。

OWA 2003 Control Files Tool の実行

OWA Control Files Tool を実行する方法

- 1 Exchange Server コンピュータにログオンします。
- 2 コマンドプロンプトウィンドウを開きます。
- 3 Enterprise Vault プログラムフォルダの OWA サブフォルダ (たとえば、C:\Program Files (x86)\Enterprise Vault\OWA) にナビゲートします。
- 4 必要なオプションを指定して EVControlFilesTool.wsf を実行します。
 p.180 の「[OWA 2003 Control Files Tool の構文](#)」を参照してください。

メモ: コンピュータでユーザーアカウント制御 (UAC) が有効である場合は、管理者権限でこのユーティリティを実行してください。

p.13 の「[管理者権限での Enterprise Vault コマンドラインユーティリティの実行](#)」を参照してください。

OWA 2003 Control Files Tool の構文

```
EVControlFilesTool.wsf [/ExchangeVersion:exchangeversion] [/Remove]
```

[表 22-1](#) に EVControlFilesTool.wsf で使うことができるパラメータの説明を示します。

表 22-1 EVControlFilesTool.wsf のパラメータ

引数	説明
ExchangeVersion	修正する Exchange Server ファイルのバージョンを指定します。この指定は、たとえば、フロントエンドサーバー上で複数セットの Microsoft Hotfix ファイルに Enterprise Vault の変更を適用する場合などに必要となります。 指定しない場合、最も高いバージョン番号の Exchange Server ファイルが修正されます。
Remove	修正した Exchange Server ファイルを以前に作成したバックアップバージョンと置き換えます。

OWA 2003 Control Files Tool の例

- Exchange Server 上で最新の Microsoft Hotfix ファイルに Enterprise Vault の変更を適用するには、次のように入力します。

```
EVControlFilesTool.wsf
```

- Exchange Server 上でバージョン 6.5.7226.0 の最新 Microsoft Hotfix ファイルに Enterprise Vault の変更を適用するには、次のように入力します。

```
EVControlFilesTool.wsf /ExchangeVersion:6.5.7226.0
```

Permission Browser

この章では以下の項目について説明しています。

- [Permission Browser](#) について
- [Permission Browser](#) の実行

Permission Browser について

Permission Browser では、Enterprise Vault ディレクトリデータベースにあるアーカイブとアーカイブフォルダのセキュリティ識別子 (SID) とアクセス権を表示できます。

Permission Browser の実行

以下の手順に従って Permission Browser を開き、目的のアーカイブとフォルダを選択します。

Permission Browser を実行する方法

- 1 Windows エクスプローラで、Enterprise Vault プログラムフォルダ (たとえば、C:\Program Files (x86)\Enterprise Vault) を参照します。
- 2 PermissionBrowser.exe をダブルクリックします。
- 3 アクセス権を調べる必要のあるアーカイブの Enterprise Vault ディレクトリデータベースが [ODBC DSN Name] フィールドに表示されていることを確認します。
- 4 現在の Windows のログイン資格情報を使ってデータベースにログオンする場合は [Use NTLM] にチェックマークを付け、SQL ユーザー名とパスワードを送信する場合は、このチェックマークをはずします。
- 5 [Select an archive] ボックスと [Select a folder] ボックスのアイテムをクリックすると、それらのセキュリティ記述子が右側のボックスに表示されます。

Policy Manager (EVPM)

この章では以下の項目について説明しています。

- [Policy Manager](#) について
- [Policy Manager](#) の構文
- [Policy Manager](#) 初期設定ファイルの [Unicode](#) ファイルとしての保存
- [Policy Manager](#) 初期設定ファイルの構文
- [Policy Manager](#) 初期設定ファイルのセクションとキー名
- [Policy Manager](#) 初期設定ファイルの例
- [プロビジョニング API](#) による [Policy Manager](#) スクリプトの実行について

Policy Manager について

[Enterprise Vault Policy Manager](#) を使うと、[Enterprise Vault](#) のアーカイブポリシーに従うように、[Exchange](#) メールボックスとアーカイブをスクリプトで修正、制御できます。管理コンソールを使う場合よりも非常に詳細に、個々のメールボックスに設定を適用することができます。

また、[Policy Manager](#) を使って、[PST](#) ファイルと [NSF](#) ファイルの内容を [Enterprise Vault](#) に移行することもできます。

メモ: [Domino](#) メールファイルまたはアーカイブを修正または制御するために [Policy Manager](#) を使うことができません。

プログラムはコマンドプロンプトウィンドウから実行し、初期設定ファイルの設定をメールボックスまたはアーカイブに適用するか、[PST](#) ファイルと [NSF](#) ファイルの移行を制御します。

適切な権限を利用できるように、ボルトサービスアカウントでログオンして Policy Manager を実行してください。

Domino アーカイブに対する権限を変更するために Policy Manager を使うことができません。

Policy Manager は Enterprise Vault のプログラムフォルダ (たとえば、C:\Program Files (x86)\Enterprise Vault) にインストールされています。ファイル名は EVPM.EXE です。

Policy Manager の構文

```
EVPM [-?] {[ -e Exchange_server] [-m mailbox_alias] | [-d]} [-f input_file]
```

それぞれの内容は次のとおりです。

-?	ユーティティのヘルプ情報を表示します。
-e Exchange_server	Exchange サーバーコンピュータの名前を指定します。 このパラメータを指定して EVPM を実行すると、初期設定ファイル内の Domino に関連する設定が無視されます。 Exchange Server 2010 以降の場合は、Exchange Server コンピュータの完全修飾ドメイン名を指定する必要があります。 Exchange サーバーと Enterprise Vault サーバーが Active Directory の別のフォレストにある場合、完全修飾ドメイン名を入力することが必要な場合があります。
-m mailbox_alias	Enterprise Vault システムメールボックスの名前を指定します。
-d	Domino タスクを実行します。 このパラメータを指定して EVPM を実行すると、初期設定ファイル内の Exchange に関連する設定が無視されます。
-f input_file	初期設定ファイルの名前と場所を指定します。

次に例を示します。

- `EVPM -e ExchSvr1.evexample.local -m EVSvceMbx -f c:\¥ExchSvr1.ini`
このコマンドは、Exchange Server ExchSvr1.evexample.local に対し、Exchange システムメールボックス EVSvceMbx を使って、c:\¥ExchSvr1.ini 内の設定を処理します。
- `EVPM -d -f c:\¥DominoSvr1.ini`
このコマンドは、c:\¥DominoSvr1.ini 内の NSF 移行設定を処理します。

パラメータを指定しないで Policy Manager を実行すると、それぞれのパラメータを確認するメッセージが表示されます。Policy Manager を初めて実行した後は、入力時に前回設定した値がデフォルトとして表示されます。Enter キーを押してデフォルトを受け入れるか、新しい値を入力できます。

メモ: コンピュータでユーザーアカウント制御 (UAC) が有効である場合は、管理者権限でこのユーティリティを実行してください。

p.13 の「[管理者権限での Enterprise Vault コマンドラインユーティリティの実行](#)」を参照してください。

Policy Manager 初期設定ファイルの Unicode ファイルとしての保存

Policy Manager 初期設定ファイルは Unicode ファイルである必要があります。Windows メモ帳を使うと、そのようなファイルを作成できます。

Policy Manager 初期設定ファイルを Unicode ファイルとして保存する方法

- 1 メモ帳の [ファイル]メニューで [名前を付けて保存] をクリックします。
- 2 ファイルの名前を入力します。
- 3 [文字コード] で、一覧から [Unicode] を選択します。
- 4 [保存] をクリックします。

Policy Manager 初期設定ファイルの構文

Policy Manager の初期設定ファイルは標準的な Windows INI ファイルで、セクション、キー名、値が次のように含まれています。

```
[SectionName]
KeyName1=Value1
KeyName2=Value2
...
```

次の点に注意してください。

- セクション名とキー名は大文字と小文字を区別しません。
- キー名に複数の値を設定できる場合は、カンマで値を区切り、すべてを同じ行に記述します。
- 指定する必要があるのは、必須のキー名と設定したい省略可能なキー名のみです。その他のキー名は無視します。

- セミコロン (;) で始まる行はコメントです。その行でセミコロンより前にスペース以外の文字は使えません。
- p.231 の「[Policy Manager 初期設定ファイルの例](#)」を参照してください。

Policy Manager 初期設定ファイルのセクションとキー名

表 24-1 は初期設定ファイルが含む場合があるセクションをリストします。

表 24-1 Policy Manager 初期設定ファイルのセクション

セクション	説明
Directory	ファイルの最初のセクションである必要があります。 p.187 の「 Policy Manager 初期設定ファイルの [Directory] セクション 」を参照してください。
Archive	1 つ以上のアーカイブのプロパティを修正できます。 p.188 の「 Policy Manager 初期設定ファイルの [Archive] セクション 」を参照してください。
ArchivePermissions	1 つまたはすべてのアーカイブの権限を変更できます。 p.190 の「 Policy Manager 初期設定ファイルの [ArchivePermissions] セクション 」を参照してください。
Filter	メールボックス内のフォルダに適用する設定のグループを指定できます。 p.191 の「 Policy Manager 初期設定ファイルの [Filter] セクション 」を参照してください。
Mailbox	1 つ以上のメールボックスの設定を変更できます。 p.197 の「 Policy Manager 初期設定ファイルの [Mailbox] セクション 」を参照してください。
Folder	個々のフォルダまたはすべてのメールボックスのプロパティを修正できます。 p.200 の「 Policy Manager 初期設定ファイルの [Folder] セクション 」を参照してください。
PublicFolder	パブリックフォルダのプロパティを修正できます。 p.205 の「 Policy Manager 初期設定ファイルの [PublicFolder] セクション 」を参照してください。

セクション	説明
PSTdefaults	PST ファイルの内容を Enterprise Vault に移行する場合は必須のセクションです。 p.207 の「Policy Manager 初期設定ファイルの [PSTdefaults] セクション」を参照してください。
PST	PST ファイルの内容を Enterprise Vault に移行できます。 p.212 の「Policy Manager 初期設定ファイルの [PST] セクション」を参照してください。
PSTCheckpoint	Policy Manager はこのセクションを自動的に生成します。 p.218 の「Policy Manager 初期設定ファイルの [PSTCheckpoint] セクション」を参照してください。
NSFDefaults	NSF ファイルの内容を Enterprise Vault に移行する場合は必須のセクションです。 p.219 の「Policy Manager 初期設定ファイルの [NSFDefaults] セクション」を参照してください。
NSF	NSF ファイルの内容を Enterprise Vault に移行する場合は必須のセクションです。 p.224 の「Policy Manager 初期設定ファイルの [NSF] セクション」を参照してください。
NSFCheckPoint	Policy Manager はこのセクションを自動的に生成します。 p.229 の「Policy Manager 初期設定ファイルの [NSFCheckPoint] セクション」を参照してください。

Policy Manager 初期設定ファイルの [Directory] セクション

このセクションは必須で、ファイルの最初のセクションである必要があります。

DirectoryComputerName

必須。Enterprise Vault ディレクトリサービスをホストするコンピュータを指定します。

SiteName

必須。Exchange メールボックススタックと PST 移行の場合は、このキー名で、修正または移行するアーカイブまたは Exchange メールボックスを管理する Enterprise Vault サイトの名前か ID を指定します。

NSF 移行の場合は、このキー名で、NSF ファイルの内容を移行するアーカイブを管理する Enterprise Vault サイトの名前か ID を指定します。

StorageSvcComputerName

省略可能。NSF 移行では、ストレージサービスを実行するサーバーをこのキー名で指定します。指定したコンピュータで、EVPM によって NSF 移行サーバーが実行され、NSF ファイルの有効性が確認されます。このキー名に値を設定しなかった場合は、ストレージサービスが含まれ、Notes クライアントがインストールされた任意の Enterprise Vault サーバーで、EVPM によって NSF 移行サーバーが実行されます。

Policy Manager 初期設定ファイルの [Archive] セクション

1 つ以上のアーカイブのプロパティを修正する場合は、このセクションを含めます。

ArchiveName

必須。処理するアーカイブを指定します。

設定可能な値は次のとおりです。

- アーカイブ名
- アーカイブ ID

そのアーカイブが存在しない場合、Policy Manager によって共有アーカイブが作成されます。(メールボックスアーカイブを作成する場合は、メールボックスを有効にします。)

BillingOwner

必須。課金用に使う Windows アカウントを指定します。

DeleteExpiredItems

省略可能。アイテムの保持期間が期限切れになったときに、Enterprise Vault でアーカイブからそれらを自動的に削除できるようにするかを指定します。指定しない場合、既存のアーカイブは修正されません。

設定可能な値は次のとおりです。

- true (デフォルト、新しいアーカイブの場合のみ)
- false

このキー名を false に、「DeleteProtected」キー名を true に設定することによって、アーカイブをリーガルホールド状態にすることができます。

DeleteProtected

省略可能。ユーザーがアイテムを手動でアーカイブから削除することを許可するかどうかを指定します。これを許可しない場合、アーカイブの移動または削除も実行できなくなります。指定しない場合、既存のアーカイブは修正されません。

設定可能な値は次のとおりです。

- true

- **false** (デフォルト、新しいアーカイブの場合のみ)

このキー名を **true** に、「DeleteExpiredItems」キー名を **false** に設定することによって、アーカイブをリーガルホールド状態にすることができます。

説明

省略可能。ユーザーが検索対象のアーカイブを選択したときに表示される説明を設定します。説明は、管理コンソールでも表示されます。

説明を指定しない場合、既存のアーカイブは変更されず、新しいアーカイブに使われるテキストは「Created by the Policy Manager」です。

IndexingLevel

省略可能。Enterprise Vault がアーカイブに対して作成するインデックスの詳細レベルを指定します。

IndexingLevel を省略すると、サイトのデフォルト設定が新しいアーカイブに使われます。既存のアーカイブは修正されません。

設定可能な値は次のとおりです。

- 簡略
- 完全

IndexAttachmentSnippet

省略可能。検索結果の一覧で添付ファイルのプレビューテキストを表示するかどうかを指定します。このオプションを有効にすると、インデックスのサイズが増えます。

メモ: このオプションは将来のリリース用です。Enterprise Vault 11.0 ではプレビューを表示できません。

設定可能な値は次のとおりです。

- **true**
- **false** (デフォルト)

IndexSnippetLength

省略可能。検索結果の一覧に表示されるプレビューテキストの量 (文字数) を指定します。プレビューの長さを増やすとインデックスのサイズが増加します。

IndexSnippetLength を省略すると、サイトのデフォルト設定が新しいアーカイブに使われます。既存のアーカイブは修正されません。

設定可能な値は次のとおりです。

- **128** (デフォルト)

- 1000

VaultStoreName

必須。アーカイブが存在するか、アーカイブを作成するボルトストアの名前。

Policy Manager 初期設定ファイルの [ArchivePermissions] セクション

1 つまたはすべてのアーカイブの権限を変更する場合は、このセクションを含めます。

ArchiveName

必須。権限設定を適用するアーカイブを指定します。

同じ名前のフォルダが複数あるときに名前を指定すると、Policy Manager では最初に見つかったフォルダのみを修正します。この場合、アーカイブを指定するためにアーカイブ ID を使う必要があります。

設定可能な値は次のとおりです。

- アーカイブ名
- アーカイブ ID
- ALL (権限は指定されたボルトサイト内のすべてのジャーナル、共有、メールボックスのアーカイブに適用される)
- ALL_JOURNAL (権限はすべてのジャーナルアーカイブに適用される)
- ALL_SHARED (権限はすべての共有アーカイブに適用される)
- ALL_MAILBOX (権限はすべてのメールボックスアーカイブに適用される)

DenyAccess

省略可能。指定されたアーカイブへのアクセス権を削除します。DenyAccess を GrantAccess と一緒に指定すると、DenyAccess が使われ、GrantAccess は無視されます。DenyAccess は同じ [ArchivePermissions] セクション内で何回でも指定できます。

設定可能な値は次のとおりです。

- 権限の一覧。その後にカンマを付け、指定したアクセス権が拒否されるグループまたはアカウントのカンマ区切り一覧を続けます。権限は read、write、delete をいくつでも指定でき、その後にカンマを付けます。たとえば、ourdomain ¥smith に対して読み書きアクセス権を拒否するには、次のように指定します。

```
DenyAccess = read write, ourdomain¥smith
```

GrantAccess

省略可能。指定された Windows アカウントに、アーカイブに対する指定されたアクセス権を付与します。

新しい値は既存のアクセス権に追加されます。GrantAccess は同じ [ArchivePermissions] セクション内で何回でも指定できます。

設定可能な値は次のとおりです。

- 権限の一覧。その後にカンマを付け、指定した権限が付与されるグループまたはアカウントのカンマ区切り一覧を続けます。権限は read、write、delete をいくつでも指定でき、その後にカンマを付けます。たとえば、読み書きアクセス権を ourdomain ¥smith に付与するには、次のように指定します。

```
GrantAccess = read write, ourdomain¥smith
```

Zap

省略可能。アーカイブに対するすべての権限を消去します。Zap を指定すると、GrantAccess と DenyAccess は無視されます。

設定可能な値は次のとおりです。

- true
- false (デフォルト)

Policy Manager 初期設定ファイルの [Filter] セクション

メールボックス内のフォルダに適用する設定のグループを指定する場合は、このセクションを含めます。この設定を適用するには、[Folder] セクションでフィルタ名を指定します。

メモ: [Filter] セクションは、初期設定ファイルで [Folder] セクションの前に指定する必要があります。

ALargetItemThresholdPeriod

省略可能。この設定は、[Exchange メールボックスポリシー] ダイアログボックスの [アーカイブルール] タブにある [次より新しいアイテムはアーカイブしない] で選択する数値と同じです。

この設定を使う場合、フィルタを参照する [Folder] セクションで、Name = mailboxroot を指定する必要があります。

ALargetItemThresholdPeriod を指定した場合は、次のすべてについても値を設定する必要があります。

- UseInactivityPeriod (true に設定する必要あり)

- APrioritizeLargeltems
- APrioritizeItemsOver
- ALargeltemThresholdUnits

設定可能な値は次のとおりです。

- 正の整数

ALargeltemThresholdUnits

省略可能。この設定は、[Exchange メールボックスポリシー]ダイアログボックスの[アーカイブルール]タブにある[次より新しいアイテムはアーカイブしない]で設定する単位のエン트리と同じです。

この設定を使う場合、フィルタを参照する [Folder] セクションで、Name = mailboxroot を指定する必要があります。

ALargeltemThresholdUnits を指定した場合は、次のすべてについても値を設定する必要があります。

- UseInactivityPeriod (true に設定する必要あり)
- APrioritizeLargeltems
- APrioritizeItemsOver
- ALargeltemThresholdPeriod

設定可能な値は次のとおりです。

- Days
- Weeks
- Months
- Years

APrioritizeItemsOver

省略可能。この設定は、[Exchange メールボックスポリシー]ダイアログボックスの[アーカイブルール]タブにある[次より大きいアイテムから開始]で選択するサイズと同じです。

この設定を使う場合、フィルタを参照する [Folder] セクションで、Name = mailboxroot を指定する必要があります。

APrioritizeItemsOver を指定した場合は、次のすべてについても値を設定する必要があります。

- UseInactivityPeriod (true に設定する必要あり)
- APrioritizeLargeltems
- ALargeltemThresholdUnits

- **ALargeItemThresholdPeriod**

設定可能な値は次のとおりです。

- 優先度を与えるアイテムのサイズを KB 単位で指定する整数

APrioritizeLargeItems

省略可能。この設定は、[Exchange メールボックスポリシー]ダイアログボックスの[アーカイブルール]タブにある[次より大きいアイテムから開始]オプションと同じです。

この設定を使う場合、フィルタを参照する [Folder] セクションで、Name = mailboxroot を指定する必要があります。

APrioritizeLargeItems を指定した場合は、次のすべてについても値を設定する必要があります。

- UseInactivityPeriod (true に設定する必要あり)
- APrioritizeItemsOver
- ALargeItemThresholdUnits
- ALargeItemThresholdPeriod

設定可能な値は次のとおりです。

- true
- false

CreateShortcut

必須。このフィルタが適用されるフォルダからアーカイブされたアイテムへのショートカットが、Enterprise Vault によって作成されるかどうかを指定します。

設定可能な値は次のとおりです。

- true
- false

DeleteOriginal

必須。このフィルタが適用されるフォルダからアイテムをアーカイブするときに、元のアイテムが Enterprise Vault によって削除されるかどうかを指定します。

設定可能な値は次のとおりです。

- true
- false

InactivityPeriod

省略可能だが、`UseInactivityPeriod` を `true` に設定した場合は必須。`InactivityPeriod` は `UseInactivityPeriod` を指定した場合にのみ有効です。アイテムがアーカイブ対象になるまで未修正のままである期間を設定するために、`InactivityUnits` も指定する必要があります。この設定は、[Exchange メールボックスポリシー] ダイアログボックスの [アーカイブルール] タブにある [次より古いアイテムをアーカイブ] 設定と同じです。

設定可能な値は次のとおりです。

- 0 から 500 までの間の整数

InactivityUnits

省略可能だが、`UseInactivityPeriod` を `true` に設定した場合は必須。`UseInactivityPeriod` を指定した場合にのみ有効です。この設定を使う場合は、アイテムがアーカイブ対象になるまで未修正のままである期間を設定するために、`InactivityPeriod` と一緒に指定する必要があります。この設定は、[Exchange メールボックスポリシー] ダイアログボックスの [アーカイブルール] タブにある [次より古いアイテムをアーカイブ] 設定と同じです。

設定可能な値は次のとおりです。

- Days
- Weeks
- Months
- Years

名前

必須。フィルタを指定します。この名前はこの初期設定ファイル内のみで適用されます。このフィルタセクションを参照するには、初期設定ファイルの [Folder] セクションで名前を指定します。

PercentageQuota

省略可能だが、`UsePercentageQuota` を `true` に設定した場合は必須。この設定は、クォータに基づいたアーカイブを使うときにのみ適用されます。`Enterprise Vault` は、メールボックスの空き容量がこの割合に達するまで、メールボックスからアーカイブします。

この設定を使う場合、フィルタを参照する [Folder] セクションで、`Name = mailboxroot` を指定する必要があります。

`PercentageQuota` はパブリックフォルダに対しては無効です。

設定可能な値は次のとおりです。

- 0 から 99 までの間の整数

QMinimumAgeThresholdPeriod

省略可能。この設定は、[Exchange メールボックスポリシー]ダイアログボックスの[アーカイブルール]タブにある[次より新しいアイテムはアーカイブしない]で選択する値と同じです。

この設定を使う場合、フィルタを参照する [Folder] セクションで、Name = mailboxroot を指定する必要があります。

QMinimumAgeThresholdPeriod を指定した場合は、次のすべてについても値を設定する必要があります。

- UsePercentageQuota (true に設定する必要あり)
- QMinimumAgeThresholdUnits

QMinimumAgeThresholdPeriod は、パブリックフォルダに対しては無効です。

設定可能な値は次のとおりです。

- 整数

QMinimumAgeThresholdUnits

省略可能。この設定は、[Exchange メールボックスポリシー]ダイアログボックスの[アーカイブルール]タブにある[次より新しいアイテムはアーカイブしない]で選択する単位と同じです。

この設定を使う場合、フィルタを参照する [Folder] セクションで、Name = mailboxroot を指定する必要があります。

QMinimumAgeThresholdUnits を指定した場合は、次のすべてについても値を設定する必要があります。

- UsePercentageQuota (true に設定する必要あり)
- QMinimumAgeThresholdPeriod

QMinimumAgeThresholdUnits は、パブリックフォルダに対しては無効です。

設定可能な値は次のとおりです。

- Days
- Weeks
- Months
- Years

QPrioritizeItemsOver

省略可能。この設定は、[Exchange メールボックスポリシー]ダイアログボックスの[アーカイブルール]タブにある[次より大きいアイテムから開始]のサイズエントリと同じです。

この設定を使う場合、フィルタを参照する [Folder] セクションで、Name = mailboxroot を指定する必要があります。

QPrioritizeItemsOver を指定した場合は、次のすべてについても値を設定する必要があります。

- UsePercentageQuota (true に設定する必要あり)
- QPrioritizeLargeItems

QPrioritizeItemsOver は、パブリックフォルダに対しては無効です。

設定可能な値は次のとおりです。

- 優先度を与えるアイテムのサイズを KB 単位で指定する整数

QPrioritizeLargeItems

省略可能。この設定は、[Exchange メールボックスポリシー] ダイアログボックスの [アーカイブルール] タブにある [次より大きいアイテムから開始] チェックボックスと同じです。

この設定を使う場合、フィルタを参照する [Folder] セクションで、Name = mailboxroot を指定する必要があります。

QPrioritizeLargeItems を指定した場合は、次のすべてについても値を設定する必要があります。

- UsePercentageQuota (true に設定する必要あり)
- QPrioritizeItemsOver

QPrioritizeLargeItems は、パブリックフォルダに対しては無効です。

設定可能な値は次のとおりです。

- true
- false

UnreadMail

必須。このフィルタが適用されるフォルダから未読のメールアイテムが、Enterprise Vault によってアーカイブされるかどうかを指定します。

設定可能な値は次のとおりです。

- true
- false

UseInactivityPeriod

必須。ただし、[Folder] セクションの Filtername が SystemDefault または DoNotArchive に設定されている場合は除きます。

UseInactivityPeriod と **UsePercentageQuota** を使う場合、少なくともこれらのいずれかが 1 つを **true** に設定する必要があります。

UseInactivityPeriod は、経過日数を元にしたアーカイブを使うかどうかを指定します。

この設定を使う場合、フィルタを参照する **[Folder]** セクションで、**Name = mailboxroot** を指定する必要があります。

設定可能な値は次のとおりです。

- **true** (経過日数を元にしたアーカイブを使う)
- **false** (経過日数を元にしたアーカイブを使わない)

UsePercentageQuota

省略可能。**UseInactivityPeriod** と **UsePercentageQuota** を使う場合、少なくともこれらのいずれかが 1 つを **true** に設定する必要があります。

UsePercentageQuota は、クォータを元にしたアーカイブを使うかどうかを指定します。

この設定を使う場合、フィルタを参照する **[Folder]** セクションで、**Name = mailboxroot** を指定する必要があります。

UsePercentageQuota を **true** に設定した場合は、**PercentageQuota** の値も設定する必要があります。

UsePercentageQuota はパブリックフォルダに対しては無効です。

設定可能な値は次のとおりです。

- **true** (クォータを元にしたアーカイブを使う)
- **false** (クォータを元にしたアーカイブ化を使わない)

Policy Manager 初期設定ファイルの [Mailbox] セクション

Policy Manager で 1 つ以上のメールボックスの設定を変更する場合は、このセクションを含めます。

DistinguishedName

省略可能。メールボックスを指定します。

Exchange サーバー上にあるシステム以外のすべてのメールボックスに属性を適用するには、**[Mailbox]** セクションを作成し、**DistinguishedName** を **All** に設定します。

1 つの **[Mailbox]** セクションには、複数の **DistinguishedName** キーワード、**LDAPQuery** キーワード、またはこれらの組み合わせを指定できます。

レポートモードで **Exchange** メールボックスタスクを実行すると、すべてのメールボックスの一覧を取得できます。次に識別名をレポートから初期設定ファイルにコピーできます。

必要な識別名の値は、Active Directory メールボックスの legacyExchangeDN プロパティです。次に例を示します。

```
/o=Org1/ou=Admin Group/cn=Recipients/cn=jones
```

また、legacyExchangeDN プロパティは、LDP (ldp.exe) ツールや ADSI (Active Directory Service Interfaces) Edit などの Active Directory エディタを使って表示することもできます。

LDAPquery

省略可能。LDAP 属性を使ってメールボックスを選択できます。この値では、標準の LDAP クエリー構文を使います。

```
LDAPquery = StandardQuery
```

簡単なクエリーは、次のようになります。

```
LDAPquery = (attribute operator value)
```

それぞれの内容は次のとおりです。

- **attribute** は、「department」などの LDAP 属性です。
- **operator** は、有効な LDAP 演算子です。通常この演算子は次のいずれかになります。

&	論理積
	論理和
!	論理否定
=	等価

属性の後に演算子が続く場合は、属性と演算子の間に空白を入れしないでください。たとえば、「company=」は正しいですが、「company =」は誤りです。

文字列値では、ワイルドカードとしてアスタリスク (*) を使えます。たとえば、名字が文字 J から始まるすべてのメールボックスを選択するには、次のように指定します。

```
LDAPquery = sn= j*
```

次の点に注意してください。

- 不適切な LDAP 属性を指定した場合、Policy Manager はメールボックスを見つけれないため、変更されません。
- 次のような有効な属性があります。

```
cn [common name]
sn [surname]
```

```
company
department
displayName
extensionAttribute1
extensionAttribute2
extensionAttribute3
extensionAttribute4
extensionAttribute5
extensionAttribute6
extensionAttribute7
extensionAttribute8
extensionAttribute9
extensionAttribute10
extensionAttribute11
extensionAttribute12
extensionAttribute13
extensionAttribute14
extensionAttribute15
memberof
```

クエリーの例をいくつか次に示します。

- LDAP 属性「department」が「research」に等しいメールボックスを選択するには、次のように指定します。

```
LDAPquery = department= research
```

- LDAP 属性「department」が「research」に等しく、「Extension-Attribute-1」が「10000」に設定されたメールボックスを選択するには、次のように指定します。

```
LDAPquery = (& (department= research) (extensionAttribute1= 10000))
```

- テキサスの組織単位の IT Guys セキュリティグループのユーザーに属するメールボックスを選択するには、次のように指定します。

```
LDAPquery = (memberof= CN=IT Guys,OU=texas,DC=evdemo,DC=local)
```

ProvisioningGroup

省略可能。特定のプロビジョニング対象グループによってプロビジョニングされたメールボックスを選択できます。

たとえば、「VIP」というグループによってプロビジョニングされたすべてのメールボックスを選択するには、次のように指定します。

```
ProvisioningGroup=VIPs
```

メモ: この例では、プロビジョニング対象グループによって実際にプロビジョニングされたメールボックスのみが EVPM によって選択されます。同じグループで他のユーザーが対象となる場合がありますが、優先度が高いグループによってすでにプロビジョニングされているためプロビジョニングされません。また、ProvisioningGroup 設定を使う EVPM スクリプトを実行する前にプロビジョニングタスクを実行して、プロビジョニングが最新の状態であることを確認する必要があります。

ResetArchiveFolderPerm

省略可能。アーカイブフォルダの権限をユーザーのデフォルト権限にリセットします。

PST ファイルの内容をアーカイブに移行するとき、インポートされた PST フォルダには、親フォルダと同じアクセス権限が Enterprise Vault によって割り当てられます。PST ファイル自体のアクセス権は、新規作成されたフォルダには移譲されません。これは、標準の Exchange ポリシーに沿ったものですが、セキュリティの問題が生じる可能性があります。アーカイブエクスプローラなどの機能を使う場合、Exchange メールボックス内の親フォルダへの読み取り権限を持つすべてのユーザーが PST インポートフォルダ内の移行済みアイテムにアクセスできるようになります。この問題は、アーカイブフォルダの権限をリセットして、PST インポートフォルダの内容を無許可のユーザーが表示できないようにすることにより対処できます。

設定可能な値は次のとおりです。

- 1。(すべてのフォルダのアーカイブ権限をユーザーのデフォルト権限にリセットします。)
- 2。(1 の動作に加え、Policy Manager がアーカイブフォルダの権限をリセットするときにメールボックスの同期も実行します。)

Policy Manager 初期設定ファイルの [Folder] セクション

個々のフォルダまたはすべてのメールボックスのプロパティを修正する場合は、このセクションを含めます。

ArchiveName

省略可能。フォルダからのアイテムがアーカイブされるアーカイブを指定します。デフォルトは、メールボックスのルートに設定される値です。

設定可能な値は次のとおりです。

- アーカイブ名またはアーカイブ ID

DisassociateArchiveFromMailbox

省略可能。メールボックスを関連アーカイブから分離します。DisassociateArchiveFromMailbox は Zap とともに使います。

メールボックスに **zap** を実行してアーカイブから分離すると、有効になったときに、そのメールボックスが古いアーカイブに再リンクされるのではなく、メールボックスの新しいアーカイブが **Enterprise Vault** によって作成されます。

DisassociateArchiveFromMailbox は、次の場合のみ有効です。

- **Name=mailboxroot**
- **zap=true**

設定可能な値は次のとおりです。

- **true**
- **false**

有効化

省略可能。メールボックスが有効か無効かを指定します。指定しない場合、メールボックスの設定は変更されないままです。メールボックスのルートフォルダのみに適用できます。

一度有効にしてから無効にしたメールボックスを有効にすると、既存のメールボックスのアーカイブに自動的に再接続されます。

設定可能な値は次のとおりです。

- **true**
- **false**

ExchangePermissions

省略可能。追加、変更、削除するフォルダの権限を指定します。

次のいずれかを指定できます。

- **Author**
- **Contributor**
- **Editor**
- **NoneditingAuthor**
- **Owner**
- **PublishingAuthor**
- **PublishingEditor**
- **Reviewer**

ユーザーを指定する場合は、次のいずれかの形式を使えます。

- [グローバルアドレス一覧](GAL) のユーザーの表示名。たとえば、"**Sue Smith**"。

- メールボックスの識別名。たとえば「/o=Org1/ou=Admin Group/cn=Recipients/cn=smith」。GAL に重複した表示名が存在する可能性がある場合は、この形式を使います。
必要な識別名の値は、Active Directory メールボックスの legacyExchangeDN プロパティです。
p.197 の「Policy Manager 初期設定ファイルの [Mailbox] セクション」を参照してください。

設定可能な値は次のとおりです。

- フォルダへのアクセス権を付与するには、次のいずれかの形式を使います。

```
ExchangePermissions = ADD; UserA:RoleA;UserB:RoleB;...  
ExchangePermissions = +; UserA:RoleA;UserB:RoleB;...
```

UserA は最初のユーザーで、RoleA は追加する権限です。

- 権限を削除するには、次のいずれかの形式を使います。

```
ExchangePermissions = DEL; UserA;UserB;...  
ExchangePermissions = -; UserA;UserB;...
```

UserA は削除する最初のユーザーで、UserB は削除する 2 番目のユーザーです。

- フォルダへのアクセス権がすでに認可されたユーザーの権限を置き換えるには、次のように指定します。

```
ExchangePermissions = UserA:RoleA;UserB:RoleB;...
```

UserA は最初のユーザーで、RoleA は追加または修正する権限です。

Filtername

省略可能。いずれかの標準フィルタの名前、または初期設定ファイルで定義済みのフィルタの名前を指定します。フィルタでは、Policy Manager によってメールボックスに適用される設定を定義します。

設定可能な値は次のとおりです。

- SystemDefault (デフォルト。管理コンソールで定義したデフォルトの Enterprise Vault サイト設定を使います。)
- DoNotArchive (フィルタが適用されたフォルダからアーカイブしません。)
- フィルタの名前 (初期設定ファイル内で定義されたフィルタ)
- 親 (親フォルダの設定を使います。)

MailboxDN

省略可能。メールボックスを指定し、[Folder] セクションが指定されたメールボックスのみに適用されるように制限します。

必要な識別名の値は、Active Directory メールボックスの legacyExchangeDN プロパティです。

名前

必須。指定したフォルダ階層が存在しない場合、Policy Manager によってその階層が作成され、指定したプロパティが設定されます。

設定可能な値は次のとおりです。

- mailboxroot (ルートフォルダを指定)。
- フォルダパス。Outlook によって作成される次の特別なフォルダにパスを指定する必要はありません: Inbox、Outbox、SentItems、DeletedItems、Drafts、Calendar、Contacts、Journal、Notes、Tasks。これらを指定する場合は、先頭のバックスラッシュは付けずにフォルダ名を指定します。これらの名前はすべての言語で使えます。たとえば、日本語システムで「Inbox」と指定できます。

次に例を示します。

- ルートフォルダにフォルダ xyz を作成するには、次のように指定します。

```
Name = ¥xyz
```

- [削除済みアイテム]フォルダを指定するには、次のように指定します。

```
Name = DeletedItems
```

NonDeletable

省略可能。Outlook と OWA ユーザーがフォルダとそのすべてのサブフォルダを削除、移動、コピーできるかどうかを指定します。

設定可能な値は次のとおりです。

- true
- false

注意: この設定の既知の問題については、Symantec Enterprise サポート Web サイトの記事 [TECH50334](#) と [TECH55275](#) を参照してください。

OverrideArchiveLocks

省略可能。管理コンソールのすべてのロック設定を上書きします。この設定は、[Mailbox Actions] プロパティで管理コンソールが [Force Users To Use Site Settings For Archiving] に設定されている場合でも、フォルダの設定が修正します。

メモ: デフォルトは、Policy Manager がすべてのロック設定を使います。ロック設定を上書きするには、`OverrideArchiveLocks` を含め、この値を `true` に設定してください。

設定可能な値は次のとおりです。

- `true`
- `false` (デフォルト)

RetentionCategory

省略可能。フォルダからアーカイブするときに使う保持カテゴリを指定します。指定しない場合、サイトのデフォルトの保持カテゴリが使われます。

SiteName

省略可能。メールボックスのルートフォルダのみに適用できます。

Suspended

省略可能。メールボックスが中断されるかどうかを指定します。指定しない場合、デフォルトの `false` が適用されます。メールボックスのルートフォルダのみに適用できます。

設定可能な値は次のとおりです。

- `true`
- `false` (デフォルト)

URL

省略可能。ユーザーが Outlook でフォルダを開いたときに表示される Web ページの URL を指定します。たとえば、この機能を使って Enterprise Vault 検索へのリンクがあるフォルダを作成できます。

VaultStoreName

省略可能。新しいアーカイブを作成するときに使うボルトストアを指定します。メールボックスが有効または無効になったことがある場合、`VaultStoreName` は無視されます。

`VaultStoreName` を指定しない場合、Policy Manager ではデフォルトのボルトストアが使われます。

`VaultStoreName` は、次の場合にのみ有効です。

- `Name=mailboxroot`
- `Enabled=true`
- `ArchiveName` が指定されていない
- メールボックスが有効になったことがない

設定可能な値は次のとおりです。

- 使用するボルトストアの名前または ID

Zap

省略可能だが、`DisassociateArchiveFromMailbox` を `true` に設定した場合は必須。すべての `Enterprise Vault` プロパティをフォルダから削除します。この設定をメールボックスのルートに適用すると、メールボックスはアーカイブが有効になったことがないよう認識されます。`Zap` を指定すると、その他のすべての `[Folder]` キー名を上書きします。

設定可能な値は次のとおりです。

- `true`
- `false` (デフォルト)

Policy Manager 初期設定ファイルの `[PublicFolder]` セクション

パブリックフォルダのプロパティを修正する場合は、このセクションを含めるこのセクションは省略可能です。

ApplyToSubfolders

省略可能。`Policy Manager` に対して、`Exchange` パブリックフォルダタスクがそれらのパブリックフォルダの処理に関係なく、`Name` で指定したフォルダの配下にあるすべてのサブフォルダを修正するように指示します。

ExchangePermissions

省略可能。追加、変更、削除するフォルダの権限を指定します。

次のいずれかを指定できます。

- `Author`
- `Contributor`
- `Editor`
- `NoneditingAuthor`
- `Owner`
- `PublishingAuthor`
- `PublishingEditor`
- `Reviewer`

ユーザーを指定する場合は、次のいずれかの形式を使えます。

- `[グローバルアドレス一覧](GAL)` のユーザーの表示名。たとえば、`"Sue Smith"`。
- メールボックスの識別名。必要な識別名の値は、`Active Directory` メールボックスの `legacyExchangeDN` プロパティです。たとえば `/o=Org1/ou=Admin`

Group/cn=Recipients/cn=smith」。GAL に重複した表示名が存在する可能性がある場合は、この形式を使います。

設定可能な値は次のとおりです。

- フォルダへのアクセス権を付与するには、次のいずれかの形式を使います。

```
ExchangePermissions = ADD; UserA:RoleA;UserB:RoleB;...  
ExchangePermissions = +; UserA:RoleA;UserB:RoleB;...
```

UserA は最初のユーザーで、RoleA は追加する権限です。

- 権限を削除するには、次のいずれかの形式を使います。

```
ExchangePermissions = DEL; UserA;UserB;...  
ExchangePermissions = -; UserA;UserB;...
```

UserA は削除する最初のユーザーで、UserB は削除する 2 番目のユーザーです。

- フォルダへのアクセス権がすでに認可されたユーザーの権限を置き換えるには、次のように指定します。

```
ExchangePermissions = UserA:RoleA;UserB:RoleB;...
```

UserA は最初のユーザーで、RoleA は追加または修正する権限です。

p.231 の「[Policy Manager 初期設定ファイルの例](#)」を参照してください。

Filtername

省略可能。いずれかの標準フィルタの名前、または初期設定ファイルで定義済みのフィルタの名前を指定します。フィルタでは、Policy Manager によってパブリックフォルダに適用される設定を定義します。

設定可能な値は次のとおりです。

- **SystemDefault** (デフォルト。管理者コンソールで定義したデフォルトのパブリックフォルダ設定を使います。)
- **DoNotArchive** (フィルタが適用されたフォルダからアーカイブしません。)
- フィルタの名前 (初期設定ファイル内で定義されたフィルタ)

OverrideArchiveLocks

省略可能。管理コンソールのすべてのロック設定を上書きします。デフォルトは、Policy Manager がすべてのロック設定を使います。ほとんどの場合はロック設定を上書きする必要があるので、OverrideArchiveLocks を指定し、値を true に設定することになります。

設定可能な値は次のとおりです。

- true
- false (デフォルト)

名前

必須。

RetentionCategory

必須。フォルダに適用する保持カテゴリを指定します。保持カテゴリはすでに存在する必要があります。

Policy Manager 初期設定ファイルの [PSTdefaults] セクション

このセクションは、Policy Manager を使って PST ファイルの内容を Enterprise Vault に移行する場合は必須です。

このセクションは、すべての PST 移行に適用されるデフォルト設定を指定します。個々の PST ファイルについて、それぞれの [PST] セクションで適切な設定を指定することにより、これらのデフォルト設定を上書きできます。

ArchiveNonExpiredCallItems

省略可能。Policy Manager で、期限の切れていないカレンダーアイテムを移行するかどうかを制御します。期限が切れていないカレンダーアイテムを移行するように選択した場合、ユーザーはそれらのアイテムを修正する前に復元する必要があります。

設定可能な値は次のとおりです。

- True
- False (デフォルト)

CancelMbxAutoArchive

省略可能。対象となるメールボックス内のすべてのフォルダに対する Outlook の [古いアイテムの整理] を無効にするかどうかを制御します。Outlook による PST ファイルへのアイテムの自動アーカイブ処理が停止します。

- true
- false (デフォルト)

CompactPST

省略可能。PST ファイルの内容が正常に移行された後で、PST ファイルを圧縮するかどうかを制御します。

移行の最後でこの PST 圧縮機能を使う場合、圧縮を実行するための空き容量を提供するために、追加のディスク容量が必要になる場合があります。最も大きい PST ファイルのサイズと、その 5% 程度を合計したサイズがあると安全です。

設定可能な値は次のとおりです。

- true

- `false` (デフォルト)

ConcurrentMigrations

省略可能。同時 PST 移行の最大数を指定します。この設定は、`MigrationMode` が `Process` に設定された場合にのみ有効です。

設定可能な値は次のとおりです。

- 1 から 25 までの範囲の整数。デフォルトは 10 です。

DeletePST

省略可能。PST ファイルの内容が正常に移行された後で、PST ファイルを削除するかどうかを制御します。

設定可能な値は次のとおりです。

- `true`
- `false` (デフォルト)

IncludeDeletedItems

省略可能。PST Deleted Items フォルダが移行されるかどうかを制御します。

設定可能な値は次のとおりです。

- `true`
- `false` (デフォルト)

MailboxFolder

省略可能。移行されたアイテムへのショートカットが配置される、トップレベルのメールボックスフォルダを指定します。フォルダが存在しない場合は、**Policy Manager** によって作成されます。PST 移行によって、このフォルダの配下に元のフォルダ構造が複製され、適切なフォルダにショートカットが配置されます。

[PST] セクションと [PSTDefaults] セクションのどちらでも指定されなかった場合、元のフォルダ構造がメールボックスのトップレベルに再作成されます。

設定可能な値は次のとおりです。

- フォルダ名。PST items など。

MergePSTFolders

省略可能。対象となるメールボックスで移行されたフォルダの配置について制御します。`true` に設定した場合、同じユーザーについて複数の PST ファイルを移行すると、同じ名前のフォルダがマージされます。

`false` に設定した場合、必要に応じてフォルダ名に番号が付き、フォルダは別々のままになります。たとえば、同じレベルにある 2 つのフォルダの名前が「MyFolder」の場合、「MyFolder」と「MyFolder 1」が作成されます。

設定可能な値は次のとおりです。

- `true` (デフォルト)
- `false`

次に例を示します。

`MergePSTFolders` を `false` に設定した場合、表示名が「Personal Folders」である 3 つの PST ファイルを移行し、それぞれにトップレベルのフォルダ「Inbox」と「Sent Items」があるとする、次のような構造になります。

```
PST Migration (specified by MailboxFolder)
  Personal Folders
    Inbox
    Sent Items
  Personal Folders 1
    Inbox
    Sent Items
  Personal Folders 2
    Inbox
    Sent Items
```

MigrationMode

必須。実行するモードを指定します。

オプションは次のとおりです。

- レポートモード。Policy Manager は、一覧表示された各 PST ファイルをチェックし、ファイルの内容を移行できるかどうか判断します。
Policy Manager は、新しい初期設定ファイルを作成し、一覧表示された PST ファイルに問題があればそれを示します (ファイルにアクセスできない、パスワード保護されているなど)。
新しい初期設定ファイルには、元のファイルと同じ名前に重複のないように番号が追加されます。たとえば、元のスクリプトが `PSTMigration.ini` であれば、新しいスクリプトは `PSTMigration_1.ini` のようになります。
Policy Manager は、元の初期設定ファイルと同じ名前で作成されたファイルの種類が `.log` であるログファイルも作成します。たとえば、元のスクリプトが `PSTMigration.ini` であれば、ログは `PSTMigration.log` のようになります。
- 処理モード。Policy Manager は、PST ファイルを処理し、その内容を適切なアーカイブに移行します。Policy Manager は、ファイルの内容を移行して、初期設定ファイルと同じ名前で作成されたファイルの種類が `.log` であるログファイルに書き込みます。

移行処理に失敗した PST ファイルがある場合、Policy Manager は新しい初期設定ファイルに書き込みます。この初期設定ファイルを使って、失敗したファイルを処理できます。処理に成功したファイルは、新しい初期設定ファイルではコメント化されます。

設定可能な値は次のとおりです。

- Report
- Process

PSTLanguage

Outlook 97 から Outlook 2002 までの PST ファイルには必須です。Outlook 2003 以降の PST ファイルには不要です。PST ファイルの作成時に使った Windows コードページを指定します。言語は、この [PSTdefaults] セクションで指定するか、個々の PST ファイルについては [PST] セクションで指定する必要があります。

使用した言語が Western European でない場合は、次の点に注意してください。

- 誤ったコードページを使うと、Exchange Server の制限により、フォルダ名が破損する可能性があります。ただし、フォルダ内のアイテムには問題はありません。
 - フォルダ名が破損すると、次の問題が発生する可能性があります。
 - ユーザーがアイテムを元のフォルダに復元することを選択した場合は、破損したフォルダ名が使われます。
 - アイテムを検索するユーザーが元の場所を入力する場合は、破損したフォルダ名を入力する必要があります。
- これらの問題を避けるため、PST ファイルの作成時に使った言語を指定してください。
- ここで指定する言語は、PST ファイルの内容をアーカイブしているストレージサービスコンピュータで利用できる必要があります。

設定可能な値は次のとおりです。

- Arabic
- Baltic
- Central European
- Cyrillic
- Greek
- Hebrew
- Japanese
- Korean
- Simplified Chinese
- Thai

- Traditional Chinese
- Turkish
- Vietnamese
- Western European (デフォルト)

ServerComputerName

省略可能。ストレージサービスを実行しているコンピュータを指定します。

ServerComputerName を省略すると、**Policy Manager** を実行しているコンピュータの名前が使われます。

設定可能な値は次のとおりです。

- コンピュータを識別する値。LanMan 名、DNS 名、IP アドレスなど。

次に例を示します。

- LanMan: SERVER2
- DNS: server2.Symantec.com
- IP アドレス: 18.94.12.3

SetPSTHidden

省略可能。PST ファイルの内容が正常に移行された後で、PST ファイルを非表示にするかどうかを制御します。隠しファイルを表示しないようにデスクトップを設定した場合、正常に移行した PST ファイルを非表示にします。このオプションは、PST 移行ウィザードとの互換性のために用意されていて、スクリプト化された移行ではほとんど使われません。

設定可能な値は次のとおりです。

- true
- false (デフォルト)

SetPSTReadOnly

省略可能。PST ファイルの内容が正常に移行された後で、PST ファイルを読み取り専用にするかどうかを制御します。これによって、ユーザーは Outlook でファイルを開けなくなります。

設定可能な値は次のとおりです。

- true
- false (デフォルト)

ShortcutMode

省略可能。PST 移行モードを定義します。これによって、移行の最後に Policy Manager が PST の内容を扱う方法が決まります。

設定可能な値は次のとおりです。

- **PSTShortcuts** (デフォルト)。移行されたアイテムへのショートカットを作成し、ショートカットを PST ファイル内に残します。
- **MailboxShortcuts**。移行されたアイテムへのショートカットを作成し、指定された Exchange メールボックスにショートカットを配置します。また、アーカイブから除外されたすべてのアイテムをメールボックスにコピーします。
- **NoShortcuts**。移行されたアイテムへのショートカットは作成しません。アーカイブから除外されたすべてのアイテムは、PST ファイル内に残ります。

Policy Manager 初期設定ファイルの [PST] セクション

PST ファイルの内容を Enterprise Vault に移行する場合は、このセクションを含めます。

このセクションで指定する設定は、[PSTdefaults] セクションで定義したデフォルト設定を上書きします。

ArchiveName

省略可能。PST ファイル内のアイテムの移行先アーカイブの名前またはアーカイブ ID を指定します。

次の点に注意してください。

- 使用する適切なアーカイブを Policy Manager が自動で判断するように設定できます。この場合、ArchiveName を指定する必要はありません。
- Policy Manager は、一致する名前を持つ最初のアーカイブを使います。重複した名前を持つアーカイブが存在する場合、結果は予期しないものになる可能性があります。この問題を回避するには、アーカイブ ID を使います。アーカイブ ID は、管理コンソールでアーカイブのプロパティにある[詳細]タブからコピーできます。

設定可能な値は次のとおりです。

- 処理されるアーカイブの名前
- 処理されるアーカイブのアーカイブ ID

ArchiveNonExpiredCallItems

省略可能。Policy Manager で、期限の切れていないカレンダーアイテムを移行するかどうかを制御します。期限が切れていないカレンダーアイテムを移行するように選択した場合、ユーザーはそれらのアイテムを修正する前に復元する必要があります。

設定可能な値は次のとおりです。

- True
- False (デフォルト)

CancelMbxAutoArchive

省略可能。対象となるメールボックス内のすべてのフォルダに対する Outlook の [古いアイテムの整理] を無効にするかどうかを制御します。Outlook による PST ファイルへのアイテムの自動アーカイブ処理が停止します。

- true
- false (デフォルト)

CompactPST

省略可能。PST ファイルの内容が正常に移行された後で、PST ファイルを圧縮するかどうかを制御します。

移行の最後でこの PST 圧縮機能を使う場合、圧縮を実行するための空き容量を提供するために、追加のディスク容量が必要になる場合があります。一般にこの容量は、最も大きい PST ファイルと、その 5% 程度を合計したサイズです。

設定可能な値は次のとおりです。

- true
- false (デフォルト)

DeletePST

省略可能。PST ファイルの内容が正常に移行された後で、PST ファイルを削除するかどうかを制御します。

設定可能な値は次のとおりです。

- true
- false (デフォルト)

DoNotProcess

省略可能。Policy Manager が PST ファイルを処理するときこのファイルは無視するかどうかを指定します。レポートモードでは、この設定が無視され、一覧表示された各 PST ファイルの状態がチェックされます。

Policy Manager がレポートモードの実行後に作成する新しい初期設定ファイルでは、エラーが発生した [PST] セクションにエントリ DoNotProcess = True が含まれます。

設定可能な値は次のとおりです。

- true
- false (デフォルト)

FileName

省略可能。処理する PST ファイルへのパスを指定します。

次に例を示します。

```
¥¥central¥share¥test1.pst  
e:¥PSTfiles¥test2.pst
```

IncludeDeletedItems

省略可能。PST Deleted Items フォルダが移行されるかどうかを制御します。
設定可能な値は次のとおりです。

- true
- false (デフォルト)

JobStatus

省略可能。使用しないこと。Policy Manager を処理モードで実行すると JobStatus が挿入されます。JobStatus は、ファイルが正常に処理されたかどうかを示します。

設定可能な値は次のとおりです。

- **Processed**。ファイルは正常に処理されました。[PST] セクションは、再処理されないようにコメント化されます。
- **Unprocessed**。このファイルの処理を開始できませんでした。
- **Incomplete**。すべての処理が停止したエラー (停電など) が発生したときに、このファイルを処理中でした。
- **Partially_Processed**。PST ファイルの一部のアイテムを処理できませんでした。これらのすべてのアイテムは、PST ファイルの PST Migration Failed Items フォルダ内にあります。これらのアイテムは移行できません。
- **Failed**。何からの理由で、ファイルを処理できませんでした。たとえば、ストレージサービスが実行されていないか、ユーザーがファイルを開いている可能性があります。

MailboxDN

省略可能。移行されたアイテムへのショートカットを配置するメールボックスの識別名を指定します。必要な識別名の値は、Active Directory メールボックスの legacyExchangeDN プロパティです。

多くの MailboxDN 値を簡単に判断するには、レポートモードで [Exchange メールボックスタスク] を実行します。レポートモードを使ってアーカイブ化をテストする手順については、管理コンソールのヘルプファイルを参照してください。出力ファイルには、Exchange Server コンピュータ上の各メールボックスの MailboxDN が含まれます。

設定可能な値は次のとおりです。

- 識別名。たとえば次のとおりです。

```
/o=acme/ou=developer/cn=Recipients/cn=smithj
```

MailboxFolder

省略可能。移行されたアイテムへのショートカットが配置される、トップレベルのメールボックスフォルダを指定します。フォルダが存在しない場合は、**Policy Manager** によって作成されます。**PST** 移行によって、このフォルダの配下に元のフォルダ構造が複製され、適切なフォルダにショートカットが配置されます。

[PST] セクションと [PSTDefaults] セクションのどちらでも指定されなかった場合、元のフォルダ構造がメールボックスのトップレベルに再作成されます。

設定可能な値は次のとおりです。

- フォルダ名。PST items など。

MergePSTFolders

省略可能。対象となるメールボックスで移行されたフォルダの配置について制御します。**true** に設定した場合、同じユーザーについて複数の **PST** ファイルを移行すると、同じ名前のフォルダがマージされます。

false に設定した場合、必要に応じてフォルダ名に番号が付き、フォルダは別々のままになります。たとえば、同じレベルにある 2 つのフォルダの名前が「MyFolder」の場合、「MyFolder」と「MyFolder 1」が作成されます。

設定可能な値は次のとおりです。

- **true** (デフォルト)
- **false**

次に例を示します。

MergePSTFolders を **false** に設定した場合、表示名が「Personal Folders」である 3 つの **PST** ファイルを移行し、それぞれにトップレベルのフォルダ「Inbox」と「Sent Items」があるとすると、次のような構造になります。

```
PST Migration (specified by MailboxFolder)
  Personal Folders
    Inbox
    Sent Items
  Personal Folders 1
    Inbox
    Sent Items
  Personal Folders 2
    Inbox
    Sent Items
```

PSTLanguage

Outlook 97 から Outlook 2002 までの **PST** ファイルには必須です。Outlook 2003 以降の **PST** ファイルには不要です。**PST** ファイルの作成時に使った Windows コードペー

ジを指定します。言語は、この [PSTdefaults] セクションで指定するか、個々の PST ファイルについては [PST] セクションで指定する必要があります。

使用した言語が **Western European** でない場合は、次の点に注意してください。

- 誤ったコードページを使うと、**Exchange Server** の制限により、フォルダ名が破損する可能性があります。ただし、フォルダ内のアイテムには問題はありません。
- フォルダ名が破損すると、次の問題が発生する可能性があります。
 - ユーザーがアイテムを元のフォルダに復元することを選択した場合は、破損したフォルダ名が使われます。
 - アイテムを検索するユーザーが元の場所を入力する場合は、破損したフォルダ名を入力する必要があります。
 これらの問題を避けるため、PST ファイルの作成時に使った言語を指定してください。
- ここで指定する言語は、PST ファイルの内容をアーカイブしているストレージサービスコンピュータで利用できる必要があります。

設定可能な値は次のとおりです。

- | | |
|--------------------|----------------------------|
| ■ Arabic | ■ Korean |
| ■ Baltic | ■ Simplified Chinese |
| ■ Central European | ■ Thai |
| ■ Cyrillic | ■ Traditional Chinese |
| ■ Greek | ■ Turkish |
| ■ Hebrew | ■ Vietnamese |
| ■ Japanese | ■ Western European (デフォルト) |

RetentionCategory

省略可能。移行された PST アイテムに適用する保持カテゴリの名前または ID を指定します。

RetentionCategory は省略可能ですが、**Policy Manager** がいずれかの場所から保持カテゴリを取得できる必要があります。

Policy Manager は、次の場所で見つかった最初の保持カテゴリを使います。

- [PST] セクションで指定された、ファイルの **RetentionCategory** 設定。
- **MailboxDN** を [PST] セクションで指定した場合は、そのメールボックスのデフォルトの保持カテゴリ。
- **ArchiveName** を [PST] セクションで指定した場合は、そのアーカイブに関連付けられたメールボックスのデフォルトの保持カテゴリ。

設定可能な値は次のとおりです。

- 保持カテゴリ名

- 保持カテゴリ ID

ServerComputerName

省略可能。ストレージサービスを実行しているコンピュータを指定します。

ServerComputerName を省略すると、**Policy Manager** を実行しているコンピュータの名前が使われます。

設定可能な値は次のとおりです。

コンピュータを識別する値。LanMan 名、DNS 名、IP アドレスなど。

次に例を示します。

- LanMan:SERVER2
- DNS:server2.Symantec.com
- IP アドレス: 18.94.12.3

ShortcutMode

省略可能。PST 移行モードを定義します。これによって、移行の最後に **Policy Manager** が PST の内容を扱う方法が決まります。

設定可能な値は次のとおりです。

PSTShortcuts (デフォルト)	移行されたアイテムへのショートカットを作成し、ショートカットを PST ファイル内に残します。
MailboxShortcuts	移行されたアイテムへのショートカットを作成し、指定された Exchange メールボックスにショートカットを配置します。また、アーカイブから除外されたすべてのアイテムをメールボックスにコピーします。
NoShortcuts	移行されたアイテムへのショートカットは作成しません。アーカイブから除外されたすべてのアイテムは、PST ファイル内に残ります。

SetPSTHidden

省略可能。PST ファイルの内容が正常に移行された後で、PST ファイルを非表示にするかどうかを制御します。隠しファイルを表示しないようにデスクトップを設定した場合、正常に移行した PST ファイルを非表示にします。このオプションは、PST 移行ウィザードとの互換性のために用意されていて、スクリプト化された移行ではほとんど使われません。

設定可能な値は次のとおりです。

- true
- false (デフォルト)

SetPSTReadOnly

省略可能。PST ファイルの内容が正常に移行された後で、PST ファイルを読み取り専用にするかどうかを制御します。これによって、ユーザーは Outlook でファイルを開けなくなります。

設定可能な値は次のとおりです。

- true
- false (デフォルト)

Policy Manager 初期設定ファイルの [PSTcheckpoint] セクション

このセクションは指定しないでください。Policy Manager によって自動で生成されます。

Created

Policy Manager によって生成された新しい初期設定ファイルの作成日時が示されます。

Generation

再起動シーケンス番号を示す数値が示されます。この数値は、初期設定ファイルを実行するたびに増加します。また、初期設定ファイルの名前に追加されて、新しい初期設定ファイルの名前になります。

たとえば、元の初期設定ファイルが `migrate-these.ini` であるとしします。このファイルを使って Policy Manager を実行すると、あらゆる問題の詳細が格納された新しいファイル `migrate-these_1.ini` が生成されます。この新しいファイルで示された問題を修正したら、前と同様に実行できます。

送信元

元の Policy Manager 初期設定ファイルのパスとファイル名を指定します。

PSTFailedCount

この初期設定ファイルに一覧表示され、移行できない PST ファイルの総数を示します。また、これらの各移行対象ファイルの `JobStatus` エントリが `Failed` に設定されます。

PSTIncompleteCount

処理モードの実行によって生成されます。Policy Manager を中断したときに処理中だった PST ファイルの総数を示します。この数値は、1 を超えることはありません。

また、これらの各移行対象ファイルの `JobStatus` エントリが `Incomplete` に設定されます。

PSTNotReadyCount

レポートモードの実行によって生成されます。この PST ファイルの問題によって処理が行われませんでした。Policy Manager によって、[PST] セクションに `DONOTPROCESS = TRUE` が追加されます。

PSTPartialCount

処理モードの実行によって生成されます。移行できないアイテムが 1 つ以上含まれる PST ファイルの数を示します。これらのすべてのアイテムは、PST ファイルの `PST Migration Failed Items` フォルダ内にあります。

また、これらの各移行対象ファイルの `JobStatus` エントリが `Partially_Processed` に設定されます。

PSTProcessedCount

処理モードの実行によって生成されます。スクリプトを前回実行したときに正常に移行された PST ファイルの数を示します。これらのファイルは、再起動スクリプトに一覧表示されたままですが、そのセクションはコメント化されます。

また、これらの各移行対象ファイルの `JobStatus` エントリが `Processed` に設定されます。

PSTUnprocessedCount

処理モードの実行によって生成されます。このファイルに一覧表示されていて、前回の実行時に無視された PST ファイルの数を示します。

また、これらの各移行対象ファイルの `JobStatus` エントリが `Unprocessed` に設定されます。

PSTWarningCount

レポートモードの実行によって生成されます。マーク付けされた設定が初期設定ファイルで上書きされている、マーク付けされた PST ファイルの数を示します。これらのファイルは、「`Report_Status: Warning`」で検索すると見つかります。

Policy Manager 初期設定ファイルの [NSFDefaults] セクション

このセクションは、Policy Manager を使って NSF ファイルの内容を Enterprise Vault に移行する場合は必須です。

このセクションを使って、NSF 移行に適用されるデフォルト設定を指定します。初期設定ファイルの [NSF] セクションで、個々の NSF ファイルに対応するこれらのデフォルト設定を上書きできます。

p.224 の「Policy Manager 初期設定ファイルの [NSF] セクション」を参照してください。

[NSFDefaults] セクションでオプションのキー名の値を指定しない場合は、Policy Manager によって、デフォルト設定として「デフォルト」とマーク付けされている値が使われます。

ArchiveNonExpiredCallItems

省略可能。Policy Manager で、NSF ファイル内の期限が切れていないカレンダーアイテムを移行するかどうかを制御します。期限が切れていないカレンダーアイテムを移行するように選択した場合、ユーザーはそれらのアイテムを修正する前に復元する必要があります。

設定可能な値は次のとおりです。

- True
- False (デフォルト)

CompactNSF

省略可能。正常な移行の後に NSF ファイルを圧縮するかどうかを制御します。

設定可能な値は次のとおりです。

- True (デフォルト)
- False

ConcurrentMigrations

省略可能。同時 NSF 移行の最大数を設定します。この設定は、MigrationMode が Process に設定された場合にのみ有効です。

設定可能な値は次のとおりです。

- 1 (デフォルト) から 5 までの範囲の整数

DeleteNSF

省略可能。正常な移行の後に NSF ファイルを削除するかどうかを制御します。

設定可能な値は次のとおりです。

- True
- False (デフォルト)

IgnoreInsufficientMailFileAccess

省略可能。デフォルトでは、対応するメールファイルの ACL に設定された十分なアクセス権が Domino アーカイブユーザーにない場合、NSF ファイルは EVPM によって処理されません。このデフォルトの動作を上書きするには、このキー名を True に設定します。

設定可能な値は次のとおりです。

- True
- False (デフォルト)

IgnoreNoManagerAccess

省略可能。デフォルトでは、対応するメールファイルの ACL に設定されたマネージャアクセス権が Domino アーカイブユーザーにない場合、NSF ファイルは EVPM によって処理されません。このデフォルトの動作を上書きするには、このキー名を True に設定します。

設定可能な値は次のとおりです。

- True
- False (デフォルト)

IgnoreNonExistentMailFile

省略可能。デフォルトでは、関連付けされたメールファイルを使用できない NSF ファイルの内容は EVPM によって移行されません。このデフォルトの動作を上書きするには、このキー名を True に設定します。

設定可能な値は次のとおりです。

- True
- False (デフォルト)

IgnoreNonStandardTemplate

省略可能。デフォルトでは、標準以外のテンプレートに基づく NSF ファイルは EVPM によって移行されません。標準テンプレートのリストは、すべてのストレージサーバー上の次のレジストリキーにある DominoMailTemplates というレジストリ文字列値によって決まります。

```
HKEY_LOCAL_MACHINE
  ¥SOFTWARE
    ¥Wow6432Node
      ¥KVS
        ¥Enterprise Vault
          ¥Agents
```

このデフォルトの動作を上書きして、標準以外のテンプレートに基づく NSF ファイルの内容を移行するには、このキー名を True に設定します。

設定可能な値は次のとおりです。

- True
- False (デフォルト)

IncludeTrash

省略可能。Policy Manager で、NSF ファイルのごみ箱フォルダから削除済みアイテムを移行するかどうかを制御します。

設定可能な値は次のとおりです。

- True
- False (デフォルト)

MailFileFolder

省略可能。移行対象フォルダの名前を設定します。このフォルダがまだ存在していない場合は、Policy Manager によってこのフォルダが、それぞれのユーザーのメールファイルの[フォルダ]ビューの下に作成されます。その後、Policy Manager によってショートカットと移行済みの内容がこのフォルダに配置されます。

設定可能な値は次のとおりです。

- フォルダ名。[NSF items]など。フォルダ名を指定しない場合は、Policy Manager によって、デフォルト名の Notes Archive が使われます。

MergeNSFFolders

省略可能。複数の NSF ファイルを持っているユーザーの場合は、NSF ファイルのフォルダ構造をマージするか、ユーザーのメールファイルに個別に維持するかが MergeNSFFolders によって制御されます。

設定可能な値は次のとおりです。

- True (デフォルト)。複数の NSF ファイルに含まれているフォルダ構造をマージします。たとえば、1 人のユーザーに属する 2 つの NSF ファイルの両方に、Personal というフォルダが含まれているとします。Policy Manager によって、これらのフォルダの内容のショートカットが、ユーザーのメールファイルの中の、マージされた Personal フォルダに配置されます。
- False。複数の NSF ファイルからのフォルダ構造を個別に維持します。ユーザーのメールファイルでは、それぞれの NSF ファイル用に新しいフォルダが作成されて、その内容のショートカットがフォルダに配置されます。

MigrationMode

必須。Policy Manager をレポートモードと処理モードのどちらかで実行するかを制御します。

設定可能な値は次のとおりです。

- Report。Policy Manager は、初期設定ファイルの [NSF] セクションに一覧表示された各 NSF ファイルをチェックし、ファイルの内容を移行できるかどうかを判断します。Policy Manager は、移行の準備が整っていないすべてのファイルが含まれている新しい初期設定ファイルを作成します。新しい初期設定ファイルでは、移行できない NSF ファイルの [NSF] セクションに、エントリ DoNotProcess=True が追加されています。この設定により、Policy Manager は、次回、処理モードで実行されるときにファイルの処理を試行できなくなります。

新しい初期設定ファイルには、元のファイルと同じ名前に重複のないように番号が追加されます。たとえば、元のファイルが `NSFMigration.ini` であれば、新しいファイルは `NSFMigration_1.ini` のようになります。

- **Process. Policy Manager** は、**[NSF]** セクションに一覧表示された **NSF** ファイルからアイテムを移行して、概略レポートと詳細レポートを生成します。**Policy Manager** は、新しい初期設定ファイルの書き込みも実行します。ファイルの移行を妨げていた問題を修正した後は、新しいファイルを使って、失敗したファイルを移行できます。各 **NSF** ファイルには、新しい初期設定ファイル内の **[NSF]** セクションに追加された **JobStatus** エントリがあります。たとえば、正常に移行されたファイルは、**JobStatus=Processed** が **[NSF]** セクションに追加されています。**Policy Manager** は、新しい初期設定ファイルを使って次の移行を実行するときに、これらのファイルの移行を試行しません。

新しい初期設定ファイルには、元のファイルと同じ名前に重複のないように番号が追加されます。たとえば、元のファイルが `NSFMigration.ini` であれば、新しいファイルは `NSFMigration_1.ini` のようになります。

RetentionCategory

必須。移行時にアイテムに適用されるデフォルトの保持カテゴリの名前を指定します。

設定可能な値は次のとおりです。

- 保持カテゴリ名
- 保持カテゴリ ID

SetNSFHidden

省略可能。正常な移行の後に **Policy Manager** で隠し属性を **NSF** ファイルに設定するかどうかを制御します。このオプションは、**NSF** 移行ウィザードとの互換性のために用意されていて、スクリプト化された移行ではほとんど使われません。

設定可能な値は次のとおりです。

- True
- False (デフォルト)

SetNSFReadOnly

省略可能。正常な移行の後に **Policy Manager** で読み取り専用属性を **NSF** ファイルに設定するかどうかを制御します。この設定により、ユーザーは移行後に新しいアイテムを **NSF** ファイルに追加できなくなります。

設定可能な値は次のとおりです。

- True
- False (デフォルト)

ShortcutMode

省略可能。移行後に Policy Manager でどのように NSF ファイルの内容を操作するかを制御します。

設定可能な値は次のとおりです。

- **MailFileShortcuts** (デフォルト)。移行されたアイテムへのショートカットを作成し、ショートカットをユーザーのメールファイルに配置します。
- **NSFShortcuts**。移行されたアイテムへのショートカットを作成し、ショートカットを NSF ファイル内に残します。
- **NoShortcuts**。移行されたアイテムへのショートカットは作成しません。アーカイブから除外されたすべてのアイテムは、NSF ファイル内に残ります。

Policy Manager 初期設定ファイルの [NSF] セクション

初期設定ファイルには、移行する NSF ファイルごとに 1 つの [NSF] セクションが含まれている必要があります。それぞれの [NSF] セクションには、少なくとも NSF ファイルの名前と場所を指定するための **FileName** 設定が含まれている必要があります。[NSF] セクションでさらに移行の設定を行って、[NSFDefaults] セクションで指定されているデフォルト設定を上書きすることもできます。

p.219 の「[Policy Manager 初期設定ファイルの \[NSFDefaults\] セクション](#)」を参照してください。

ArchiveName

省略可能。現在の NSF ファイルからのアイテムの移行先アーカイブの名前または ID を指定します。

メモ: [NSF] セクションでは、**ArchiveName** または **UserCN** を設定できます。その両方を設定することはできません。**UserCN** の設定の詳細を参照してください。

このキー名はオプションです。これは、Policy Manager では、自動的にアーカイブと NSF ファイルの一致を実行できるためです。ただし、一致する名前を持つ最初のアーカイブが常に使われます。重複した名前のアーカイブがあると、アイテムが間違っただけのアーカイブに移行される可能性があります。この問題を避けるため、**ArchiveName** を使って、各 NSF ファイルのアーカイブの ID を指定します。

アーカイブの ID は、管理コンソールのアーカイブのプロパティページの [詳細] タブにあります。

設定可能な値は次のとおりです。

- 対象アーカイブの ID
- 対象アーカイブの名前

ArchiveNonExpiredCallItems

省略可能。Policy Manager で、現在の NSF ファイルから期限の切れていないカレンダーアイテムを移行するかどうかを制御します。期限が切れていないカレンダーアイテムを移行するように選択した場合、ユーザーはそれらのアイテムを修正する前に復元する必要があります。

設定可能な値は次のとおりです。

- True
- False

CompactNSF

省略可能。正常な移行の後に現在の NSF ファイルを圧縮するかどうかを制御します。設定可能な値は次のとおりです。

- True
- False

DeleteNSF

省略可能。正常な移行の後に現在の NSF ファイルを削除するかどうかを制御します。設定可能な値は次のとおりです。

- True
- False

DoNotProcess

省略可能。Policy Manager をレポートモードで実行すると (MigrationMode=Report)、新しい初期設定ファイルの書き込みが実行されます。新しいファイルでは、エラーが検出された NSF ファイルに対して、DoNotProcess が True に設定されます。この設定により、Policy Manager では、新しい初期設定ファイルを使って、処理モード (MigrationMode=Process) で再実行するときに NSF ファイルを処理できなくなります。

Policy Manager は、レポートモードで実行されるときにこの設定を無視します。

設定可能な値は次のとおりです。

- True
- False (デフォルト)

FileName

必須。それぞれの NSF ファイルのパスとファイル名を指定します。

メモ: NSF ファイルの場所を指定するには、UNC パスを使う必要があります。NSF ファイルを処理する NSF 移行サーバーは、EVPM を実行するコンピュータとは異なるコンピュータ上にある場合があります。また、NSF 移行サーバーは、EVPM 実行時のユーザーコンテキストと異なるユーザーコンテキストで実行される可能性があります。どちらの場合も、UNC 絶対パスを使うことによっては、NSF 移行サーバーは確実にファイルにアクセスできます。

次に例を示します。

- `¥¥Server1¥home¥JohnDoe¥quarter1.nsf`
- `E:¥data¥backup.nsf`

IgnoreInsufficientMailFileAccess

省略可能。デフォルトでは、対応するメールファイルの ACL に設定された十分なアクセス権が Domino アーカイブユーザーにない場合、NSF ファイルは EVPM によって処理されません。現在の NSF ファイルのこのデフォルトの動作を上書きするには、このキー名を **True** に設定します。

設定可能な値は次のとおりです。

- **True**
- **False** (デフォルト)

IgnoreNoManagerAccess

省略可能。デフォルトでは、対応するメールファイルの ACL に設定されたマネージャアクセス権が Domino アーカイブユーザーにない場合、NSF ファイルは EVPM によって処理されません。現在の NSF ファイルのこのデフォルトの動作を上書きするには、このキー名を **True** に設定します。

設定可能な値は次のとおりです。

- **True**
- **False** (デフォルト)

IgnoreNonExistentMailFile

省略可能。デフォルトでは、関連付けされたメールファイルを使用できない NSF ファイルの内容は EVPM によって移行されません。現在の NSF ファイルのこのデフォルトの動作を上書きするには、このキー名を **True** に設定します。

設定可能な値は次のとおりです。

- **True**
- **False** (デフォルト)

IgnoreNonStandardTemplate

省略可能。デフォルトでは、標準以外のテンプレートに基づく NSF ファイルは EVPM によって移行されません。標準テンプレートのリストは、すべてのストレージサーバー上の次のレジストリキーにある `DominoMailTemplates` というレジストリ文字列値によって決まります。

```
HKEY_LOCAL_MACHINE
  ¥SOFTWARE
    ¥Wow6432Node
      ¥KVS
        ¥Enterprise Vault
          ¥Agents
```

現在の NSF ファイルが標準以外のテンプレートに基づいている場合にこのデフォルトの動作を無効にして現在の NSF ファイルの内容を移行するには、このキー名を `True` に設定します。

設定可能な値は次のとおりです。

- `True`
- `False` (デフォルト)

IncludeTrash

省略可能。Policy Manager で、現在の NSF ファイルのごみ箱フォルダから削除済みアイテムを移行するかどうかを制御します。

設定可能な値は次のとおりです。

- `True`
- `False`

JobStatus

Policy Manager は、処理モードでの実行時に `JobStatus` を初期設定ファイルの各 [NSF] セクションに書き込みます。この値は、前回の処理の実行後の各 NSF ファイルの状態を示します。`MigrationMode` の詳細も参照してください。

設定可能な値は次のとおりです。

- `Failed`。NSF ファイルの移行に失敗しました。
- `Partially_Processed`。NSF ファイルには、Policy Manager で移行できなかったアイテムが含まれています。
- `Processed`。Policy Manager によって NSF ファイルが正しく移行されました。
- `Unprocessed`。Policy Manager によって NSF ファイルが無視されました。

MailFileFolder

省略可能。移行対象フォルダの名前を設定します。このフォルダがまだ存在していない場合は、**Policy Manager** によってこのフォルダが、ユーザーのメールファイルの[フォルダ]ビューの下に作成されます。その後、**Policy Manager** によってショートカットと移行済みの内容がこのフォルダに配置されます。

設定可能な値は次のとおりです。

- フォルダ名。[NSF items]など。フォルダ名を指定しない場合は、初期設定ファイルの [NSFDefaults] セクション内の設定によって決定されるデフォルトの名前が **Policy Manager** によって使われます。

MergeNSFFolders

省略可能。複数の **NSF** ファイルを持っているユーザーの場合は、ファイルに含まれているフォルダ構造をマージするか、ユーザーのメールファイルに個別に維持するかが **MergeNSFFolders** によって制御されます。

設定可能な値は次のとおりです。

- **True**。複数の **NSF** ファイルに含まれているフォルダ構造をマージします。たとえば、1人のユーザーに属する2つの **NSF** ファイルの両方に、**Personal** というフォルダが含まれているとします。これらのフォルダの内容のショートカットが、ユーザーのメールファイルのマージされた **Personal** フォルダに配置されます。
- **False**。複数の **NSF** ファイルからのフォルダ構造を個別に維持します。ユーザーのメールファイルの[フォルダ]ビューの下に、**NSF** ファイルごとに新しいフォルダが作成されます。これらの **NSF** ファイルの内容のショートカットは、対応するフォルダに配置されます。

RetentionCategory

省略可能。移行時に現在の **NSF** ファイルからアイテムに適用される保持カテゴリの名前を指定します。

設定可能な値は次のとおりです。

- 保持カテゴリ名
- 保持カテゴリ ID

SetNSFHidden

省略可能。正常な移行の後に **Policy Manager** で隠し属性を現在の **NSF** ファイルに設定するかどうかを制御します。このオプションは、**NSF** 移行ウィザードとの互換性のために用意されていて、スクリプト化された移行ではほとんど使われません。

設定可能な値は次のとおりです。

- **True**
- **False**

SetNSFReadOnly

省略可能。正常な移行の後に **Policy Manager** で読み取り専用属性を現在の **NSF** ファイルに設定するかどうかを制御します。この設定により、ユーザーは移行後に新しいアイテムを **NSF** ファイルに追加できなくなります。

設定可能な値は次のとおりです。

- True
- False

ShortcutMode

省略可能。移行後に **Policy Manager** でどのように現在の **NSF** ファイルの内容を操作するかを制御します。

設定可能な値は次のとおりです。

- **MailFileShortcuts**。移行されたアイテムへのショートカットを作成し、ショートカットをユーザーのメールファイルに配置します。また、アーカイブから除外されたすべてのアイテムをメールファイルにコピーします。
- **NSFShortcuts**。移行されたアイテムへのショートカットを作成し、ショートカットを **NSF** ファイル内に残します。
- **NoShortcuts**。移行されたアイテムへのショートカットは作成しません。アーカイブから除外されたすべてのアイテムは、**NSF** ファイル内に残ります。

UserCN

省略可能。アーカイブとメールファイルが現在の **NSF** ファイルの移行対象になるユーザーの正規名 (CN) を指定します。

メモ: **[NSF]** セクションでは、**ArchiveName** または **UserCN** を設定できます。その両方を設定することはできません。**ArchiveName** の詳細も参照してください。

設定可能な値は次のとおりです。

- ユーザーの個人レコードに含まれる正規形式のユーザー名。たとえば、ユーザー **John Doe/Acme** の場合、正規名の形式は **cn=John Doe/o=Acme** になります。

Policy Manager 初期設定ファイルの **[NSFCheckPoint]** セクション

このセクションは指定しないでください。**Policy Manager** によって自動で生成されます。

Policy Manager では、新しい初期設定ファイルの書き込み時に **[NSFCheckPoint]** セクションを作成します。このセクションには、新しい初期設定ファイルに関する情報と、ファイルを作成した **Policy Manager** の実行に関する統計が含まれています。

Policy Manager によって新しい初期設定ファイルに書き込まれる値は、[NSFDefaults] セクションにある MigrationMode の設定によって異なる場合があります。

Created

新しい初期設定ファイルの作成日時が示されます。

Generation

Policy Manager が生成した新しい初期設定ファイルの名前に追加された数値を示します。この数値は、Policy Manager を実行するたびに増加します。

送信元

元の初期設定ファイルのパスとファイル名を示します。

NSFFailedCount

この値は、Policy Manager を処理モードで実行するときに生成されます。

この初期設定ファイルに一覧表示され、移行できない NSF ファイルの総数を示します。移行できない NSF ファイルごとに、新しい初期設定ファイルの関連の [NSF] セクションに、JobStatus = Failed が Policy Manager によって書き込まれます。

NSFNotReadyCount

この値は、Policy Manager をレポートモードで実行するときに生成されます。

この初期設定ファイルに一覧表示され、準備が整っていない NSF ファイルの数を示します。準備が整っていない NSF ファイルごとに、新しい初期設定ファイルの関連の [NSF] セクションに、DoNotProcess = True が Policy Manager によって書き込まれます。

NSFPartialCount

この値は、Policy Manager を処理モードで実行するときに生成されます。

初期設定ファイルに一覧表示され、移行できない 1 つ以上のアイテムが含まれている NSF ファイルの数を示します。これらのすべてのアイテムは、NSF ファイルの NSF Migration Failed Items フォルダ内にあります。Policy Manager を中断した場合は、中断が発生したときに処理されていた NSF ファイルの数も NSFPartialCount に含まれます。

部分的に処理された NSF ファイルごとに、新しい初期設定ファイルの関連の [NSF] セクションに、JobStatus = Partially_Processed が Policy Manager によって書き込まれます。

NSFProcessedCount

この値は、Policy Manager を処理モードで実行するときに生成されます。

初期設定ファイルに一覧表示され、前の Policy Manager の実行時に正しく移行された NSF ファイルの数を示します。これらのファイルは初期設定ファイルにまだリストされてい

ます。ただし、処理された NSF ファイルごとに、新しい初期設定ファイルの関連の [NSF] セクションに、**JobStatus = Processed** が **Policy Manager** によって書き込まれます。この設定により、**Policy Manager** では、新しい初期設定ファイルを使うときに、これらのファイルを再度処理できなくなります。

NSFUnprocessedCount

この値は、**Policy Manager** を処理モードで実行するときに生成されます。

このファイルに一覧表示されていて、前回の **Policy Manager** の実行時に無視された NSF ファイルの数を示します。**Policy Manager** は、次の設定の場合に NSF ファイルを無視します。

- **JobStatus = Processed**
- **DoNotProcess = True**

DoNotProcess が **True** に設定されているため無視された NSF ファイルごとに、新しい初期設定ファイルの関連の [NSF] セクションに、**JobStatus = Unprocessed** が **Policy Manager** によって書き込まれます。

Policy Manager 初期設定ファイルの例

次のセクションでは、初期設定ファイルの内容例を示します。

Policy Manager 初期設定ファイルの例 1

この初期設定ファイルは、次の処理を行います。

- メールボックスを有効にします。
- メールボックスのデフォルトのアーカイブを作成します。
- システムのデフォルトのフィルタと保持カテゴリをメールボックスに適用します。

```
[Directory]
DirectoryComputerName= myserver
SiteName = MattSite
[Mailbox]
DistinguishedName = /o=Org1/ou=Admin Group/cn=Recipients/cn=jones
[Folder]
Name = mailboxroot
Enabled = true
```

Policy Manager 初期設定ファイルの例 2

この初期設定ファイルは、次の処理を行います。

- 1 カ月より古いすべてのアイテムをアーカイブするフィルタを定義します。
- すべてのメールボックスに **Personal Archive** フォルダを作成し、このフォルダにフィルタを適用します。
- **Personal** 保持カテゴリを新しい **Personal Archive** フォルダに適用します。

```
[Directory]
directorycomputername = myserver
sitename = MattSite
[Filter]
name = filter1
CreateShortcut = true
DeleteOriginal = true
unreadMAIL = false
UseInactivityPeriod = true
InactivityUnits = months
InactivityPeriod = 1
[Mailbox]
distinguishedname = all
[Folder]
name = ¥personal archive
filtername = filter1
retentioncategory = personal
```

Policy Manager 初期設定ファイルの例 3

この初期設定ファイルは、次の処理を行います。

- 3 週間より古いすべての読み込みアイテムをアーカイブするフィルタを定義します。
- 「**shared finance archive**」という名前のアーカイブを課金用アカウント **smithj**、説明「**Shared archive for all finance users**」で作成します。
- グループ **enterprise¥financeusers** のすべてのメンバーに対して、新しいアーカイブへの書き込みアクセス権を付与します。
- 部門 **finance** のすべてのユーザーを有効にし、各メールボックスのルートと **Business** 保持カテゴリでシステムのデフォルトのフィルタを設定します。
- フォルダ **finance archive folder** を作成し、新しく作成したアーカイブと **Business** 保持カテゴリをこのフォルダに適用します。

```
[Directory]
directorycomputername = myserver
sitename = MattSite
[Filter]
name = filter1
```

```
CreateShortcut = true
DeleteOriginal = true
unreadMAIL = false
UseInactivityPeriod = true
InactivityUnits = weeks
InactivityPeriod = 3
[Archive]
ArchiveName = Shared Finance Archive
description = Shared archive for all finance users
billingOwner = enterprise¥smithj
[ArchivePermissions]
ArchiveName = Shared Finance Archive
GrantAccess = write, enterprise¥financeusers
[Mailbox]
ldapquery = (department= finance)
[Folder]
name = mailboxroot
enabled = true
suspended = false
filtername = systemdefault
RetentionCategory = business
[Folder]
name = ¥Finance Archive Folder
filtername = filter1
retentioncategory = Business
ArchiveName = Shared Finance Archive
```

Policy Manager 初期設定ファイルの例 4: PST 移行

この初期設定ファイルは、次の処理を行います。

- すべての PST ファイルに適用されるデフォルトの PST 移行設定を定義します。これらの設定は、初期設定ファイルのどの [PST] セクションでも上書きされません。
- 内容が Enterprise Vault に移行される 3 つの PST ファイルを一覧表示します。すべての PST ファイルがそれぞれの所有者によって開かれて、マーク付けされているため、移行先メールボックスは指定されません。

デフォルト設定により、Policy Manager は次の処理を行います。

- PST ファイルのすべての内容 ([Deleted Items]フォルダ内にあるアイテムを含む)を適切なメールボックスに移行します。
- 所有するメールボックスに、移行されたアイテムへのショートカットを配置します。すべてのショートカットはフォルダ PST Migrations に格納されます。
- 移行に成功したら、PST ファイルを圧縮し、読み取り専用にします。

- Outlook の [古いアイテムの整理] を取り消します。Outlook による PST ファイルへのアイテムの自動アーカイブ処理が停止します。

```
[Directory]
directorycomputername = myserver
sitename = vs1
[PSTdefaults]
;
; Default option settings applicable to all PST migrations
;
PSTLanguage=Western European
servercomputername = myserver.kvsinc.com
MailboxFolder = PST Migrations
MigrationMode = PROCESS
IncludeDeletedItems = true
SetPSTHidden = false
SetPSTReadOnly = true
CompactPST = true
DeletePST = false
CancelMbxAutoArchive = true
;
; Individual PST migration settings
;
[PST]
fileName = %%myserver%share%test1.pst
[PST]
fileName = %%myserver%share%test2.pst
[PST]
fileName = %%myserver%share%test3.pst
```

Policy Manager 初期設定ファイルの例 5: NSF 移行

この初期設定ファイルの [NSFDefaults] セクションは、次の処理を行います。

- 処理モードを有効にします
- 2 つの同時移行を実行できるようにします
- **Business** をデフォルトの保持カテゴリとして設定します
- ごみ箱アイテムの移行を有効にします
- 正常な移行の後に NSF ファイル上の読み取り専用属性を設定するように指定します

後続の [NSF] セクションでは、個々の NSF ファイルの場所と名前を指定します。これらの設定の一部によって、デフォルト移行設定が上書きされる場合があります。

```
[Directory]
DirectoryComputerName = DominoServer
sitename = EV1

; Default option settings applicable to all NSF migrations

[NSFDefaults]
MigrationMode = Process
ConcurrentMigrations = 2
RetentionCategory = Business
IncludeTrash = True
SetNSFReadOnly = True

; Individual NSF migration settings

[NSF]
FileName = %%FileServer%e$%Users%UserA%Archive.nsf
DeleteNSF = True
IncludeTrash = False

[NSF]
FileName = %%FileServer%e$%Users%UserB%Q1.nsf
ArchiveName = User B/Symantec
SetNSFReadOnly = False

[NSF]
FileName = %%FileServer%e$%Users%UserC%Personal.nsf
UserCN = CN=John Doe/O=Symantec
RetentionCategory = Personal
```

Policy Manager 初期設定ファイルの例 6: フォルダの権限

この初期設定ファイルは、次の処理を行います。

- 初期設定の権限を新しいフォルダに適用します。
- フォルダの既存のユーザー権限を修正します。
- フォルダから既存のユーザー権限を削除します。
- パブリックフォルダに一部の権限を適用します。

```
[DIRECTORY]
DIRECTORYCOMPUTERNAME = OURSERVER
SITENAME = CC_Site1
[mailbox]
```

```

DISTINGUISHEDNAME = /O=ACME/OU=DEVELOPER/CN=RECIPIENTS/CN=SUES
;
;-----
; 1. Apply initial permissions to a new folder
;
[Folder]
Name = ¥New Folder
MailboxDN = /O=ACME/OU=DEVELOPER/CN=RECIPIENTS/CN=SUES
;
; User specified as Mailbox DN
;
ExchangePermissions
=/O=ACME/OU=DEVELOPER/CN=RECIPIENTS/CN=SUES:OWNER
;
; Add additional user specified by GAL user name
;
ExchangePermissions = Charles Parker:Contributor; John Gillespie:
Reviewer
;-----
; 2. Modify existing user permissions on an existing folder
;
[Folder]
Name = ¥Existing Folder
MailboxDN = /O=ACME/OU=DEVELOPER/CN=RECIPIENTS/CN=SUES
;
; Modify existing user
;
ExchangePermissions = +; John Gillespie:Editor
;-----
; 3. Remove existing user permissions on an existing folder
;
[Folder]
Name = ¥Existing Folder
MailboxDN = /O=ACME/OU=DEVELOPER/CN=RECIPIENTS/CN=SUES
;
; Remove existing users
;
ExchangePermissions = -; Charles Parker; John Gillespie
;-----;
; 4. Apply permissions to public folder
;
[PUBLICFOLDER]
Name = ¥Our Public Folder

```

```
ExchangePermissions =Charles Parker:reviewer  
APPLYTOSUBFOLDERS = false
```

プロビジョニング API による Policy Manager スクリプトの実行について

アプリケーションサービスプロバイダ (ASP) では、プロビジョニング API を使うことにより、新規カスタマーのメールボックスを自動的に有効または無効にできるようになります。たとえば、ユーザーがサイトにサインオンすると、ユーザーのメールボックスが自動的に有効になる Web ページを設定できます。

Policy Manager スクリプト用のプロビジョニング API のスクリプトのプロパティ

API では、スクリプト可能なオブジェクトを使ってメールボックスを有効または無効にします。次のプロパティをオブジェクトで設定することにより、メールボックスを有効または無効にすることができます。

必須プロパティ

- Directory
- SiteId
- ExchangeServer
- SystemMailbox (このメールボックスは必ず存在すること)

次のプロパティのいずれか 1 つが必須です。これらは相互に排他的であるため、一方を設定すると他方がクリアされます。

- MailboxDN (Active Directory メールボックスの legacyExchangeDN プロパティを指定する必要があります)
- LDAPQuery (複数のメールボックスを同時に有効または無効化にします)

次の省略可能なプロパティを設定しない場合、スクリプトではデフォルト設定が使われません。

- VaultStore
- RetentionCategory
- IndexingService
- Timeout (スクリプトの実行が異常終了するまでの時間)

このプロパティの標準セットを指定することにより、コードからスクリプトが生成、実行されます。

メールボックスを有効または無効にするためのメソッドがオブジェクト上で利用できます。これらのメソッドでは、上記の設定を使って、単一のメールボックス、または DN や LDAP クエリーに適合するメールボックスのセットを有効または無効にするスクリプトを生成します。

プロビジョニング API の Policy Manager スクリプトの例

```
¥'  
' Enable a mailbox  
,  
  
Dim Enabler  
Set Enabler = CreateObject("EnterpriseVault.ExchangeArchivePoint")  
Enabler.Directory = "MACHINE1"  
Enabler.Site = "site1" '(Entry Id or Site Name)  
Enabler.ExchangeServer = "DITTO" '(Entry Id or Exchange Name)  
Enabler.SystemMailbox = "EnterpriseVault-DITTO"  
Enabler.MailboxDN = "/o=Eng2000/ou=First Administrative  
Group/cn=Recipients/cn=Bruiser"  
Enabler.VaultStore = "VaultStoreMain" '(Entry Id or Vault Store  
Name)  
Enabler.RetentionCategory = "Business" '(Entry Id or Retention  
Category Name)  
Enabler.IndexingService = "MACHINE1"  
Enabler.Enable  
  
,  
' Disable a mailbox  
,  
  
Dim Enabler  
Set Enabler = CreateObject("EnterpriseVault.ExchangeArchivePoint")  
Enabler.Directory = "MACHINE1"  
Enabler.Site = "site1" '(Entry Id or Site Name)  
Enabler.ExchangeServer = "DITTO" '(Entry Id or Exchange Name)  
Enabler.SystemMailbox = "EnterpriseVault-DITTO"  
Enabler.MailboxDN = "/o=Eng2000/ou=First Administrative  
Group/cn=Recipients/cn=Bruiser"  
Enabler.Disable
```

スクリプトの実行後、読み取り専用プロパティ **ReportText** と **LastScript** が利用可能になり、スクリプトに関する情報を戻すことができるようになります。

Policy Manager スクリプト用のプロビジョニング API の詳細設定

基本的なスクリプトオブジェクトでは、基本的な設定を使ってユーザーがメールボックスを有効または無効にするような単純なケースに対応します。詳細な設定では、フォルダごとの設定が可能となります。

Policy Manager スクリプト用のプロビジョニング API の詳細設定の SetScript メソッド

SetScript メソッドを使うことにより、テキスト文字列またはファイルとしてテンプレートを提供できるようになります。API では、このテンプレートを使い、オブジェクト上のプロパティセットと、以下のメソッドに渡された配列の値を組み合わせることによって、テンプレート内の値を置き換えます。

```
SetScriptText(Text, ArrayOfParameters)
SetScriptFile(Filename, ArrayOfParameters)
```

SetScript メソッドにより、カスタム文字列やファイルを渡し、テンプレートとして使うことが可能となります。必要に応じてパラメータの配列を使うと、置換のリストをテンプレートで使うことができます。

Policy Manager 用のプロビジョニング API の詳細設定のスクリプト例

```
Script1.ini
[Directory]
DirectoryComputerName= #DIRECTORY#
SiteName = #SITE#
[Mailbox]
DistinguishedName = #MAILBOX#
[Folder]
Name = mailboxroot
Enabled = #1#
```

#DIRECTORY#、#SITE#、#MAILBOX# という固有の値は、オブジェクトで設定した Directory、Site、MailboxDN プロパティセットで自動的に置き換えられます。

表 24-2 固有の値

固有の値	オブジェクトプロパティ名
#DIRECTORY#	Directory
#INDEXINGSERVICE#	IndexingService
#LDAPQUERY#	LDAPQuery

固有の値	オブジェクトプロパティ名
#MAILBOX#	MailboxDN
#RETENTIONCATEGORY#	RetentionCategory
#SITE#	Site
#VAULTSTORE#	VaultStore

値 #1# は、SetScriptFile または SetScriptText メソッドに渡された ArrayOfParameters 配列の最初のアイテムで置き換えられます。さらに別のアイテムが配列に追加された場合、値 #2#、#3# など置き換えられます。

Policy Manager 用のプロビジョニング API の詳細設定を使ったスクリプトファイルによるメールボックスの有効化の例

```
Dim ArrayOfParameters(0)
ArrayOfParameters(0) = "true"

Dim Enabler
Set Enabler = CreateObject("EnterpriseVault.ExchangeArchivePoint")

Enabler.Directory = "MACHINE1"
Enabler.Site = "site1" '(Entry Id or Site Name)
Enabler.ExchangeServer = "DITTO" '(Entry Id or Exchange Name)
Enabler.SystemMailbox = "EnterpriseVault-DITTO"
Enabler.MailboxDN = "/o=Eng2000/ou=First Administrative
Group/cn=Recipients/cn=Bruiser"
Enabler.SetScriptFile ("C:\MyScripts\Script1.ini", ArrayOfParameters)

Enabler.ExecuteScript ' runs the EVP script against the script1.ini
file after making the substitutions in the strings.
```

Policy Manager スクリプト用のプロビジョニング API のインターフェースメソッド

すべてのメソッドを次に示します。

Policy Manager スクリプト用のプロビジョニング API インターフェースの Disable メソッド

Disable メソッドは引数を必要としません。このメソッドを呼び出す前に、Directory、SiteId、ExchangeServer、SystemMailbox、MailboxDN/LDAPQuery プロパティを設定する必要があります。

```
HRESULT Disable()
```

Policy Manager スクリプト用のプロビジョニング API インターフェースの Enable メソッド

Enable メソッドは引数を必要としません。このメソッドを呼び出す前に、Directory、SiteId、ExchangeServer、SystemMailbox、MailboxDN/LDAPQuery プロパティを設定する必要があります。

```
HRESULT Enable()
```

Policy Manager スクリプト用のプロビジョニング API インターフェースの ExecuteScript メソッド

ExecuteScript メソッドは引数を必要としません。その代わりに、SetScriptFile メソッドまたは SetScriptText メソッドで指定されたテキストまたはファイルを使って、そのスクリプトを実行します。このメソッドを呼び出す前に、Directory、SiteId、ExchangeServer、SystemMailbox、MailboxDN/LDAPQuery プロパティを設定する必要があります。

```
HRESULT ExecuteScript()
```

Policy Manager スクリプト用のプロビジョニング API インターフェースの SetScriptFile メソッド

SetScriptFile メソッドは、実行する Policy Manager スクリプトのファイル名を指定します。

```
HRESULT SetScriptFile(BSTR newVal, VARIANT vArrayOfParams)
```

表 24-3 SetScriptFile メソッドの引数

引数	説明
newVal	実行する Policy Manager スクリプトのファイル名を含む文字列。
VARIANT vArrayOfParams	置換の実行に使う VARIANT の配列。

Policy Manager スクリプト用のプロビジョニング API インターフェースの SetScriptText メソッド

SetScriptText メソッドは、実行する Policy Manager スクリプトを指定します。

```
HRESULT SetScriptText(BSTR newVal, VARIANT vArrayOfParams)
```

表 24-4 SetScriptText メソッドの引数

引数	説明
newVal	実行する Policy Manager スクリプトを含む文字列。
VARIANT vArrayOfParams	置換の実行に使う VARIANT の配列。

Policy Manager スクリプト用のプロビジョニング API のエラー処理

オブジェクトプロパティの設定時、プロパティが無効な場合には HRESULT エラーが戻されます。EnableScript、DisableScript、ExecuteScript の呼び出し時に Policy Manager からエラーが戻された場合には、プロビジョニング API による問題追跡に役立つ 2 つのプロパティを利用できます。

これらのプロパティは以下のとおりです。

ReportText 前回実行したときのレポートテキストを戻します。

LastScript 前回実行したときのスクリプトを戻します。

表 24-5 に、API から戻されるエラーの標準セットを示します。

表 24-5 プロビジョニング API のエラーコード

エラーコード	エラーの種類	メッセージテキスト
0xC004C000	PROV_DIRECTORY_INVALID	The Directory Service name is invalid or the Directory Service is not running.
0xC004C001	PROV_MUST_SET_DIRECTORY_FIRST	The Directory property must be set first.
0xC004C002L	PROV_COULD_NOT_CREATE_DIRECTORYCONNECTION	Could not create the Enterprise Vault Directory Connection object.
0xC004C003	PROV_ENTRYID_INVALID	The Entry Id is not valid.
0xC004C004	PROV_INVALID_TABLE_ID	Invalid table ID.

エラーコード	エラーの種類	メッセージテキスト
0xC004C005	PROV_ERROR_INSERTING_PARAMETERS	An error occurred replacing the script parameters.
0xC004C006	PROV_INVALID_ARG_PARAMETER	One of the arguments supplied in the arguments array could not be converted to a string.
0xC004C007	PROV_MUST_SET_SITE_FIRST	The Site property must be set before this property.
0xC004C008	PROV_NAME_INVALID	Invalid property value.
0xC004C009	PROV_INDEXING_SVC_NOT_FOUND	The Indexing Service could not be found.
0xC004C00A	PROV_NOT_ENOUGH_PROPERTIES_SET	The following properties must be set before Enable/Disable can be called: %n%nDirectory, Site, ExchangeServer, SystemMailbox, (MailboxDN or LDAPQuery).
0xC004C00B	PROV_FAILED_CREATE_STDIN_PIPE	Failed to create a StdIn pipe.
0xC004C00C	PROV_FAILED_CREATE_STDOUTERR_PIPE	Failed to create the StdOut pipe.
0xC004C00D	PROV_FAILED_DUPLICATE_HANDLE	Failed to duplicate the std handle.
0xC004C00E	PROV_FAILED_CLOSE_TEMP_HANDLE	Failed to close the temporary handle.
0xC004C00F	PROV_NO_PASSWORD_FOR_USER	The password for the Logon details was not set.
0xC004C010	PROV_CREATE_PROCESS_FAILED	Failed to create the policy manager process.
0xC004C011	PROV_CREATE_PROCESS_AS_USER_FAILED	Failed to create the policy manager process under the specified account.
0xC004C012	PROV_LOGON_USER_FAILED	Could not log the user on for the policy manager process.

エラーコード	エラーの種類	メッセージテキスト
0xC004C013	PROV_WAIT_SINGLE_OBJECT_FAILED	Failed to wait for the process to complete.
0xC004C014	PROV_GETEXITPROCESS_FAILED	Could not get the exit code from the policy manager process.
0xC004C015	PROV_FAILED_GET_TEMP_PATH	Could not get the temp file path.
0xC004C016	PROV_FAILED_GET_TEMP_FILE_NAME	Could not get the temp file name.
0xC004C017	PROV_FAILED_CREATE_INI_FILE	Could not create the provisioning initialization file.
0xC004C018	PROV_WRITE_WRITE_INI_FILE	Could not write the provisioning initialization file.
0xC004C019	PROV_FAILED_CLOSE_INI_FILE	Could not close the provisioning initialization file.
0xC004C01A	PROV_FAILED_COCREATE_POLICYINVOKER	Failed to connect to the Admin Service.
0xC004C01B	PROV_PARAMS_NOT_ARRAY	The second argument must be an array.
0xC004C01C	PROV_SCRIPT_FILE_NOT_FOUND	The Script file could not be found.
0xC004C01D	PROV_INPUT_FILE_NOT_UNICODE	Script file is not unicode.
0xC004C01E	PROV_FAILED_OPEN_REGISTRY	Could not open the Enterprise Vault Registry Key.
0xC004C01F	PROV_FAILED_READ_REGISTRY	Could not read the Installation directory from the registry.
0xC004C020	PROV_FAILED_EXECUTE	The script returned errors, check the report for details.
0xC004C021	PROV_SCRIPT_TIMED_OUT	The script timed out.
0xC004C022	PROV_FAILED_READ_LOGON_DETAILS	Failed to read the Logon Details.

ResetEVClient

この章では以下の項目について説明しています。

- [ResetEVClient](#) について
- [ResetEVClient](#) の構文

ResetEVClient について

ResetEVClient ユーティリティは **Enterprise Vault Outlook** アドインで起きる多くの問題を解決します。解決するために、ユーティリティは次の処理を行います。

- **Outlook** のデータファイル `extend.dat`、`frmcache.dat`、`frmdata64.dat`、`outcmd.dat` を削除します。次の表に、これらのファイルの機能を示します。

<code>extend.dat</code>	Outlook 2007 以前の製品に機能拡張用レジストリエントリを格納します。
<code>frmcache.dat</code>	Outlook 2003 、 Outlook 2007 、および 32 ビット版の Outlook 2010 以降用のフォームを格納します。
<code>frmdata64.dat</code>	64 ビット版の Outlook 2010 以降用のフォームを格納します。
<code>outcmd.dat</code>	Outlook 2007 以前用のツールバーオプションに対する変更を格納します。

Outlook が動作している場合、ユーティリティはこれらのファイルを削除できません。

- ユーザーのインターネット一時ファイルのフォルダを空にします。このフォルダを空にすることにより、**Enterprise Vault Web** アプリケーションを使ってアーカイブ済みアイテムを表示できないという問題が解決する場合があります。
- **Enterprise Vault** クライアント DLL `desktopclientcache.dll` と `valkyrie.dll` を再登録します。

- 仮想ボルト情報を mapisvc.inf に追加します。mapisvc.inf が存在しない場合は、ResetEVClient によって作成されます。
- Outlook で無効にするようにフラグが付けられたアドインの一覧をレジストリでチェックします。この一覧に Enterprise Vault クライアント DLL valkyrie.dll が含まれている場合は、ResetEVClient によって一覧から削除されます。

ResetEVClient は、Enterprise Vault コマンドラインユーティリティは常に管理者権限で実行する必要があるというルール of の例外です。ResetEVClient で次の操作を実行するには、Outlook アドインに問題があるユーザーとして ResetEVClient を開始する必要があります。

- 正しい .dat ファイルを削除する
- ユーザーのインターネット一時ファイルのフォルダを空にする

この後 ResetEVClient は必要に応じて、残りの処理を実行する前に、管理者権限のあるアカウントのユーザー名とパスワードの入力を求めるメッセージを表示します。現在のユーザーに管理者権限がある場合、またはコンピュータで UAC (ユーザーアカウント制御) が有効になっていない場合、ResetEVClient は資格の入力を求めるメッセージを表示しません。

ResetEVClient の構文

ResetEVClient

Vault Store Usage Reporter

この章では以下の項目について説明しています。

- [Vault Store Usage Reporter](#) について
- [Vault Store Usage Reporter](#) の起動
- [Vault Store Usage Reporter](#) のショートカットリンクの設定
- [Vault Store Usage Reporter](#) によって表示される使用状況の概略について
- IIS 認証方法が [Vault Store Usage Reporter](#) のために正しく設定されていることの確認

Vault Store Usage Reporter について

[Vault Store Usage Reporter](#) はボルトストアの現在の使用状況に関するレポートを取得するブラウザベースのアプリケーションです。選択したボルトストアについて、アーカイブまたは課金用アカウント別に使用状況を判別できます。

Web ブラウザを使って、レポートを表示したり、分析ツールでの使用に適したタブ区切りファイルとしてダウンロードしたりできます。ボルトストアのサイズとシステムのパフォーマンスによってはレポートの生成に時間がかかることがあります。

Vault Store Usage Reporter の起動

Web ブラウザまたは Enterprise Vault 管理コンソールで [Vault Store Usage Reporter](#) を起動できます。

Web ブラウザで Vault Store Usage Reporter を起動する方法

- 1 Enterprise Vault の管理者としてログオンします。
課金用アカウントの詳細を確認する場合、使用アカウントには Windows ドメイン内の権限も必要です。
- 2 Web ブラウザを開きます。
- 3 次のように Vault Store Usage Reporter アドレスを入力します。

```
http://server/EnterpriseVault/usage.asp
```

次に例を示します。

```
http://vaultserver.company.com/EnterpriseVault/usage.asp
```

管理コンソールで Vault Store Usage Reporter を起動する方法

- ◆ 管理コンソールの左ペインで[ボルトストアグループ]コンテナまたはボルトストアを右クリックして、[レポート]をクリックします。

メモ: Enterprise Vault Reporting を設定した場合、Vault Store Usage Reporter はボルトストアのショートカットメニューからのみ利用できます。

Vault Store Usage Reporter のショートカットリンクの設定

Vault Store Usage Reporter のリンクを管理コンソールの左ペインに追加すると、コンソールから使用状況レポートにすばやくアクセスできます。

Vault Store Usage Reporter のショートカットリンクを設定する方法

- 1 管理コンソールを開きます。
- 2 [ファイル]メニューで[スナップインの追加と削除]をクリックします。
- 3 [スナップインの追加と削除]ダイアログボックスの[スタンドアロン]タブで[追加]をクリックします。
- 4 利用可能なスタンドアロンスナップインの一覧で[Web アドレスへのリンク]を選択し、[追加]をクリックします。
- 5 Web アドレスへのリンクウィザードの 1 ページ目で Vault Store Usage Reporter のアドレスを入力し、[次へ]をクリックします。アドレスは次のとおりです。

```
http://server/EnterpriseVault/usage.asp
```

- 6 「Usage Reporter」など、新しいリンクの名前を入力して[完了]をクリックします。
- 7 [閉じる]をクリックして、[スタンドアロンスナップインの追加]ダイアログボックスを閉じます。
- 8 [OK]をクリックして、[スナップインの追加と削除]ダイアログボックスを閉じます。
 管理コンソールの左ペインに新しいリンクが表示されます。

Vault Store Usage Reporter によって表示される使用状況の概略について

表 26-1 に、使用状況の概略で表示される情報を示します。

表 26-1 使用状況レポートの列

列	説明
Vault Store	ボルトストアの識別名。ボルトストアの名前をクリックすると、詳しいレポートが表示されます。
Save Report By	タブ区切りファイルにレポートを保存するときに使うリンク。アーカイブ名または課金用アカウントでデータをソートできます。
Active Archives	アーカイブ済みアイテムを含むボルトストアのアーカイブ数を表示します。
Total Items	各ボルトストアのアーカイブ済みアイテムの合計数を表示します。
Total Size (MB)	アーカイブに格納されるすべてのアイテムの、アーカイブ前の合計サイズを表示します。
Awaiting Backup	バックアップを作成していないボルトストアのアーカイブ済みアイテム数を表示します。このエントリは、バックアップまたはレプリケーション後までセーフコピーを保存するようにボルトストアが設定されている場合のみ適用されます。
SQL Server	ボルトストアをホストする SQL Server の識別名。

また、次の追加情報がレポートに記載されます。

- ボルトストアの合計数
- すべてのボルトストアのアクティブなアーカイブの合計数
- すべてのボルトストアのアイテムの合計数
- すべてのボルトストアのアイテムの合計サイズ
- ボルトストアのアーカイブの平均サイズ
- バックアップ待ちのアイテムの合計数

IIS 認証方法が Vault Store Usage Reporter のために正しく設定されていることの確認

Vault Store Usage Reporter を実行するときに[アクセス拒否]のメッセージが表示された場合は、IIS 認証方法が正しく設定されているかどうかを確認します。

IIS の Vault Store Usage Reporter の認証方法を確認する方法

- 1 IIS (インターネットインフォメーションサービス) マネージャを開きます。
- 2 [EnterpriseVault] 仮想ディレクトリが表示されるまで左ペインのツリーを展開します。
- 3 左側のペインの[EnterpriseVault] 仮想ディレクトリをクリックします。
- 4 [コンテンツビュー]に切り替え、[EnterpriseVault] 仮想ディレクトリの内容を表示します。
- 5 listvaults.asp ファイルと usage.asp ファイルについて、次の手順を表示順に実行します。
 - [コンテンツビュー]で必要なファイルをクリックします。
 - [機能ビュー]へ切り替えます。
 - [機能ビュー]で、[認証]をダブルクリックします。
 - [基本認証]のみが有効であることを確認してください。
認証方法を無効にする必要がある場合は、それを右クリックし、次に[無効にする]を選択してください。
- 6 両方のファイルの認証方法を調べ、変更したら、IIS を再起動します。

A

- ArchivePoints 11
 - 構文 17
- ArchivePoints ユーティリティ 17
 - コマンド例 21
- Audit Viewer 11、22
 - 検索結果のコピー 24
 - 設定の変更 24
 - レポートの実行 22

C

- Centera
 - NTFS to Centera migration 172
- CenteraPing 11、31
 - 構文 31

D

- Domino Archive Exporter 12、33
 - 構文 33
 - 例 35
- Domino Profile Document Tool 12、36
 - 構文 36
 - 例 37
- Domino の保持計画 38
 - XML ファイル 38
 - 定義 39
- Domino の保持計画ツール 12、38
 - 権限 39
 - 構文 42
- Domino の保持フォルダ 38
- DTrace 12、44
 - 開始と停止 45
 - コマンド 45
 - トラブルシューティングすること 49
 - ログ 49

E

- Enterprise Vault ユーティリティ 11
 - 実行 13
- EVDominoExchangeMigration 12

- EVDominoExchangeMigration ツール 51
 - Binary Tree 53
 - Quest Notes Migrator for Exchange 53
 - クライアントの必要条件 52
 - 構文 55
 - 実行 55
 - 制限事項 57
 - ファイアウォールの必要条件 52
 - 他の移行ソフトウェア 54
 - ログファイル 56

- EVDominoRetentionPlans.exe 38

- EVDuplicateCleaner
 - 実行 60
 - 実行後の破損したショートカットの修正 61
 - 紹介 58
 - 設定 58

- EVEARemovalUtility 12

- 概要 63

- EVFSASetRightsAndPermissions 12、70

- EVrights 12、72

- 構文 72

- EVservice 12、75

- 一覧ファイルの形式 77

- インストール 76

- 構文 76

- EVSPShortcutManager 79

- 構文 80

- 例 82

- EVSVR 12

- CAB コレクションを処理する場合のパフォーマンスの向上 137

- checkpointing 96

- CIFSとNTFSのパーティションでの操作の実行 86

- DumpSaveset コマンド 127

- DumpSISPart コマンド 131

- ExtractSavesets コマンド 133

- ListSavesetLocations コマンド 136

- StorageQueue レポート 103

- アプリケーションの状態 89

- およびcheckpointing 85、95、124

- 概要 83

- 確認操作 104

確認操作の選択 108
 確認操作[ArchiveObjects]の確認レベル 107
 可能性のあるデータ損失 116
 起動 87
 コマンド 87
 修復操作 110
 修復操作の選択 117
 修復手順 119
 出力ログファイル 123～124
 操作の実行 96
 操作ファイルの作成 89
 操作ファイルの編集 95
 対話モード 126
 [ディレクトリ]レポート 98
 パーティションデータレポート 100
 フィンガープリントデータベースのレポート 99
 [ボルトストア]レポート 103
 レポート操作 97
 ログファイルメッセージの確認 124、137

F

FSARunNow 12、140
 構文 141
 実行 141
 例 144
FSAUndelete 12、145
 構文 147
 実行 146
 例 148
FSAUtility 13、149
 EMC Celerra/VNX のブレースホルダ 151
 アーカイブファイルの復元 167
 アーカイブポイントの再作成 156
 オプションの一覧 156
 孤立したブレースホルダの削除 166
 実行 150
 前提条件 150
 ファイルの呼び戻し 169
 ブレースホルダの移行 161
 ブレースホルダの移動 159
 ブレースホルダの再作成 157

N

NTFSCenteraMigrator ユーティリティ
 移行元のファイルの削除 177
 ジョブの管理 172
 ジョブの削除 176
 ジョブの作成 174

ログファイル 177

NTFS to Centera Migration 13、172

O

OWA 2003 Control Files Tool 13、179
 構文 180
 実行 180
 例 180

P

Permission Browser 13、182
 実行 182
Policy Manager 13、183
 構文 184
 初期設定ファイルの[ArchivePermissions]セクション 190
 初期設定ファイルの [Archive] セクション 188
 初期設定ファイルの [Directory] セクション 187
 初期設定ファイルの [Filter] セクション 191
 初期設定ファイルの [Folder] セクション 200
 初期設定ファイルの [Mailbox] セクション 197
 初期設定ファイルの [NSFCheckPoint]セクション 229
 初期設定ファイルの [NSFDefaults] セクション 219
 初期設定ファイルの [NSF] セクション 224
 初期設定ファイルの [PSTcheckpoint]セクション 218
 初期設定ファイルの [PSTdefaults] セクション 207
 初期設定ファイルの [PST] セクション 212
 初期設定ファイルの [PublicFolder] セクション 205
 初期設定ファイルのキー名 186
 初期設定ファイルの形式 185
 初期設定ファイルの形式の構文 185
 初期設定ファイルのセクション 186
 初期設定ファイルの例 231～235
 プロビジョニング API インターフェースの Disable メソッド 241
 プロビジョニング API インターフェースの Enable メソッド 241
 プロビジョニング API インターフェースの ExecuteScript メソッド 241
 プロビジョニング API インターフェースの SetScriptFile メソッド 241
 プロビジョニング API インターフェースの SetScriptText メソッド 242
 プロビジョニング API の SetScript 239
 プロビジョニング API のインターフェースメソッド 240
 プロビジョニング API の詳細設定 239
 プロビジョニング API のスクリプトのプロパティ 237

プロビジョニング API のスクリプト例 238~239
プロビジョニング API のメールボックス有効化スクリ
プトの例 240

や

ユーティリティ 11
実行 13

R

ResetEVClient 13、245
構文 246

V

Vault Store Usage Reporter 13

X

XML ファイル
Domino の保持計画用 38

あ

アーカイブポイント
編集 17

か

拡張属性
削除 63

さ

セキュリティ識別子 (SID) 182

た

重複した保存セット、削除 58
トラブルシューティング
トレーシング 48

は

ファイルシステムアーカイブ
FSAUtility 149
ファイルサーバーの移行と統合 149
プレースホルダ
削除の取り消し 145
プレースホルダの削除の取り消し 145
保存セット、重複を削除 58
ポリシーマネージャ
準備のAPI 237
準備のAPIのエラー処理 242